
ユグドラシルの樹の下で

paiちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユグドラシルの樹の下で

【Nコード】

N7642Y

【作者名】

paiちゃん

【あらすじ】

俺の姉貴は1歳違いで隣に住んでいる。本当の兄弟じゃないけど、生まれたときから世話になってるらしい。そんな姉貴には密かな願いがあったようだ。異世界で暮らしたいって、そんな願いに俺は巻き込まれてしまった。さらには、異世界には危険が一杯って・・・なんでそんなの持って来るんだよ。っていうか、何処で手に入れた！・・・まあ、異世界なら仕方ないかなって俺も流されてるし・・・とりあえず姉貴と2人でなんとかこの世界で暮らしていかないと・・・こんな決心で異世界暮らしを始める男の子の物語です。

俺の姉貴

小さな焚き火の前に座った俺に、姉貴は「はい！」ってカップを差出した。

夜の森は静かで、何の物音も聞こえない。

時折、薪のはぜる音がパチパチと小さく聞こえる。

隣で、カップのコーヒーをフーフー息を吹きかけながら飲んでいる姉貴を見ると、俺の視線を感じたのか、此方を見て微笑んでいる。全く余裕があると言うか、無頓着と言おうか・・・

そもそも、こんな所で焚き火をしている原因となつたのも姉貴のせいだと思ってしまう。

昨日の夕方、家に来たかと思つたら、「明日は、キノコ狩りだよ！」と言つて帰つていった。

それからが大変だった。

とりあえずザックを取出し中身をぶちまけて再度詰め直す。

エマジエンシーキット、緊急薬品、非常食、携帯調理用の鍋と食器、シエラカップに固形燃料・・・

さらに、マルチプライヤー、ナイフ、軍用水筒、そして着替え1式と予備の圧縮下着1式だ。

これだけ詰め込むとパンパンにザックが膨らむが、まだ、ポケットがある。そこに、お菓子を入れると準備完了だ。

玄関にGブーツを出しておき、部屋に戻ると、枕元に着ていく物を準備する。

ジーンズにGシャツ、トレーナーそれに厚手のソックスを畳んで置く。

最後に押入れの奥から、山菜採取用の鎌を取出す。

樫の杖だ。上部はネジが切っており、其処に鎌をねじ込むが、何と鎌は鍛造品、鎌と言うより鳶口を削って刃を付けたような形状だ

が、山菜取り用と言ついい訳ではしょうがない。

次の日、朝6時に起きて朝食のパンをコーヒード流し込み玄関先で待つことしばし、トコトコと姉貴が同じような服装で現れた。

同じような服装には理由がある。

俺の服は、下着に至るまで姉貴の趣味で、姉貴が購入したものだ。

「はい。これをお願いね！」ってお金を渡す俺の母にも問題はあ
るのだが・・・

背負ったザックは俺よりも大型だ。

と言うことは、今回もとんでもない物を持って来たという事だ。

とんでもない物とは、組立て式の大型コンポジットクロスボー
ある。

「野犬は嫌い！」って言ってたが、あれで撃ったら野犬程度では
貫通するぞ！全く・・・

2人で小さな町並みを抜け、裏山の山道を登って行く。

キノコが近場にあるはずが無い。近場のキノコは老人の楽しみ。

俺達は更に上の山中を目指す。

途中の展望台で休憩を取ると、更に山道を登って行く。

道は次第に細くなり、終には獣道となる。それでも先に進む。軍
用コンパスと地図があれば現状位置の確定は可能だ。この手の訓練
は小学生時代からのオリエンテーリング大会で十分訓練を積んでい
る。

「あつた！」

姉貴が籠を振り回してはしゃいでいる。

見ると、大きな山栗の木がある。下には沢山のイガグリが落ちて
いた。

早速、イガグリをブーツで器用に剥きながら山栗をゲットする。数十個拾ったところで、再び獣道を進む。そして、日当たりの良い斜面で本命のキノコを取ることにした。キノコは日当たりが良い場所には生えない。そんな場所の何時も木の陰になっっているような場所に生えてくるのだ。10個程取ったところで、姉貴の籠を覗く。沢山あるのだが・・・毒キノコが殆どだ。丁寧に鑑別して毒キノコを除いたところに俺が取ってきたキノコを入れる。

時計を見ると、昼を過ぎてている。

姉貴が作った大きなオニギリを木陰で並んで食べる。

そして、さあ帰ろうかという時に、異変に気がついた。

太陽が雲に隠れ、山の下の方から霧がかかって来た。

急いで荷物を担いで山を下りる。しかし、道は獣道・・・何時しか異なる方角に進んでいることに気がついた。

昨夜の天気予報では今日は晴れのはずだ。朝からの日差しが原因であれば、さほど時をかけずに霧は晴れるはず。風が出れば更に早まる。

歩き続けて少し開けた場所を見つけたので、此処で休むことにする。

帰りが遅くなっても、姉貴と一緒にならば両親は心配しない。姉貴の家でもそうだ。ここは、動かずに霧が晴れるのを待つのが得策と考える。

霧は、時を経ても晴れる様子が無い。かえって濃密さが増している。

小さな焚き火を作ると、姉貴が簡単な夕食を作りはじめた。

姉貴は実の姉ではない。隣に住む矢上家の娘だ。俺と1歳程上になるが、俺が生まれた時から世話になったようだ。

俺の発した初めての言葉が「オネーター」だったらしい。ある意味、姉貴のオモチャ同然ではあったようだが、俺が歩き始めると常に付きまとい、面倒を見てくれたらしい。

矢上家は姉貴とお爺さんの2人暮らしで、お爺さんは合気道の道場を自宅で開いている。物心が付くか否かの頃から、姉貴と稽古をしていたようだ。

中学生になると直ぐに黒袴の資格を得て、今は年少組の指導までするようになった。

姉貴はさらに上を行って、中学生の指導をしている。さすがに、高校生以上の組については師範が指導しているが、このまま稽古を続けると卒業と同時に師範の資格を得ることが出来そう。

道場では、亜流ではあるが杖術として、4尺の杖を使った攻撃方法がある。これも、半ば強制的にお爺ちゃんに仕込まれた。

姉貴は高校生になると、合気道部ではなくバイトに勤しんだ。俺が高校に入ると半ば強引に付き合わされた。コンビニのバイトである。

バイトの給料は、全て変な装備に費やされた。日本の法規制を全く無視した調達網を姉貴は知っているらしい・・・道場に通っている変な外人にコネがあるみたいだ。

おかげで、海外の特殊部隊装備品が手に入ったが、こんな日本ですどするの？っていうような物ばかり・・・刃渡り40cmのグールナイフなんて押入れに入れとくしかないが、今日は、ザックに収まっている。

こんな、怪しい2人だが、町の警察官には結構受けがいい。

それは、コンビニのバイトで強盗を2件撃退しているからだ。しかし2件とも警察以外に救急車が必要となった。

最初の強盗は、姉貴が投げ飛ばした先にあるガラスドアを破ってガラスによる腹部裂傷・・・もう少して失血死だったらしい。

2度目は、俺の床モップによる攻撃で、鎖骨損傷、肋骨骨折となった次第である。

両方とも、正当防衛で処理されたが、やり過ぎないように嚴重注意を受けた上で、感謝状を頂いた。

今朝も、この格好で巡回の警察官と会ったが、姉貴の「キノコ取りに行くの！」に「気を付けて行けよ。野犬に注意してな！」という事で、済んでいる。

しかし、この霧は異常だ。夜になりさらに濃密さが増している。小さな焚き火に照らされた数mの空間のみが存在しているようにも感じる。

肩に重みを感じる。どうやら姉貴はエマジエンシートに包まって眠り込んだらしい。いつの間にか、姉貴を小さく感じるようになったが、それでも姉貴は170cmはある。俺が、180cm迄背が伸びたからなのか・・・

ガサ・・・ガサ・・・と何かが近づく音がする。

殺気は感じないが用心の為に、杖を直ぐ脇に寄せた。

茂みからガサリという音と共に現れたのは、小さな老人の姿をしていた。

しかし、老人が身に纏っているのは、着古した着物のようなものである。古木の杖について焚き火に近づくと、俺の対面の地べたに座る。

ジツとしている姿は苔生した石仏のようだ。

害がなさそうなのでほっておくことにした。触らぬ神に祟りは無

いって言っし。

「我を敬う者の子孫たる娘の願いを聞くことにした。．．お前の意思は知らねど、同行させる。お前達に与えるものは3つ、老いと病を防ぎ、言葉の理解、それに若干の体力向上．．娘の願い通り慎ましく生きよ．．」

一方的に話を終えると、立ち上がり霧の中に消えていく。
白昼夢？にしては、現実的だ。現に、老人の座った場所は草が倒れている。

ということとは、この霧は先ほどの老人の仕業とも考えられる。
俺達を迷わせ、此処へ導き、引導を渡す．．．ってことか。
ともあれ、明けない夜はない。明日にはこの霧も晴れるだろう。

霧が晴れて

どうやら朝になったようだ。

霧の明るさが増してきたが、見通しの悪さは、昨日のとおり周囲数m程度の見通し距離だ。

昨夜の怪異は幻だったのだろうか・・時間が経てば経つほどに、現実味が無くなってきている。

「おはよう！」

姉貴の能天気な声が、静寂の中ではやけに大きく聞こえる。

「おはよう。姉さん・・未だ霧が晴れないからしばらくは動けないよ。」

「そうだね。」って言いながら、ザックの中をぐそぐそと漁っている。

やがて、昨日のオニギリの残りを取出して、焚き火の隅に放り込んだ。俺のザックからはトレッキング用の鍋を取出し水筒の水を入れて熾火にかける。

そんな姉貴を見ながら、昨夜の老人の話をしていると、突然姉貴は俺に振り返った。

「少しその話は当ってるかも・・矢上家の古い名前はヤマガミと言うのよ。・・（この辺の山岳信仰を一体化した山神の神官だった）と、お爺ちゃんが言ってたのを覚えてるわ。」

姉貴はそう言いながら焚き火から、オニギリを取出し、ホイルを剥くと鍋に放り込んで、お味噌をニューっとチューブから取出すと鍋に入れてかき回している。

少しづつ霧が薄らいできた。もう、周囲10m以上は確認できる。回りを見てる内に、小さな苔生した祠を見つけた。

何となく、昨夜の老人の姿にも見える。そういえば、老人の消えた方向は祠の方向と同じだ。

「はい！」って姉貴が、雑炊モドキをカップに入れて渡してくれる。

薄ら寒い状態で食べる熱い雑炊はとりあえず体を温めてくれる。

「アキト・・・食べながらで良いから、聞いてくれる？」

俺は、先割れスプーンを口に入れながら頷いた。

「昨夜ね、変な夢を見たの・・・変よね。私は寝ていなかたもの。」

「いや、十分にお休みでした。と姉貴には言えないのが辛い。」

9

「老人が・・・ぼろぼろの着物みたいなものを着た小さな老人が出てきて、言ったのよ・・・望みを叶えてあげる。って、それじゃあって事で、老いず、病にかからず、どんな言葉も理解できるようにって、言ったんだけど・・・どうやって確かめたらいいと思う？」

ちよつと待て、今の話ってさっき俺が話したこととリンクしてるじゃないか・・・待てよ・・・もっと重要なことがあったような・・・そうだ、「同行させる」だ。これってどこかに誰かと行くという時に使う言葉だぞ。

「・・・あの・・・姉さん・・・ひょっとして（どこかに行きたい。）って考えたことあるの？」

「あら！・・・良く知ってるわね。・・・偶に思うのよ。（自分達の

力だけで暮らしてみたい。」ってね。」

何気に2人称であることが気にはなつたが、ここはスルーしよう。朝日のせいか霧が更に晴れていく、もう100m程度先まで見通せる状態にまで回復した。

焚き火を頼りに野宿した場所は、20m程の小さな広場だった。先ほどの祠を祭った址なのだろう。踏み固められているためか木々がこの場所には生えないようだ。

周辺の木々は緑に覆われ・・・？
ちよつと待て！・・・今は秋だぞ！

・・・確かに生い茂っている。季節的には初夏の様相だ。
俺達が来た獣道を探すが何処にも見当たらない。いくら獣道と言っても痕跡すら無くなるはずはない。

懸命に探すか、広場の周囲にはやはり痕跡は無かった。
霧は薄れてはいるが未だ遠くの山並みまでは見えてこない。現在位置を特定して、下山する方角を探すとするか。

ようやく、遠くの山並みが薄く霧を通して見えるようになった。
しかし・・・ここは何処だ？

全く見覚えの無い山並みが聳えている。一番高い山は富士山のようにも見える。

「如何したの。アキト？」

呆然と立ち尽くす俺を見上げて、姉貴が訝しげに声をかけた。

「俺達の裏山じゃない！」

俺の声に、姉貴も立ち上がると周辺の山並みを見る。

「・・・何処だろね？」

実に気の抜ける問いではあるが、2人とも見覚えの無い場所だとすれば、此処は何処なのだろう。

「ギョエー・・・」

おかしな声で鳴く鳥が俺達の上を飛んでいく。
雉のように見えなくもないが・・・雉はあんなに空高く飛び回るこ
とは無い。

「アキト・・・ひよつとして、だけど・・・此処は、私達と違う世界
かも・・・」

それは、俺も考えていた・・・しかし、それを言ったら姉貴が不安
になるかもと、言えない言葉ではあったが・・・姉貴もそう考えるな
ら、此処は、間違いなく異世界ってことになる。

ガサガサ・・・と音がして向かい側の藪からちいさな動物が姿を現
した。

しきりに小さな頭を動かすと俺達に気付いたのか、藪の中に飛び
込んでいった。

「見た！」

姉貴は、驚いた顔で俺を見る。

さっきの動物は、よく見る野うさぎのようだったが、長い耳の変
わりに角が頭の両側から生えていたのだ。ウサギとは違う動物かも
しれないが、角の長さで生えてる位置がウサギの耳のように見えた。
・
・

「見た！・・・でも、見たこと無い・・・」

あんなのがいたら、パンダ以上の珍種だ。しかも俺の町の裏山に
いるなんて聞いたことも無い。

やはり、姉貴の言うように・・・此処は異世界。・・・そして、俺は

姉貴の望みのままに異世界に同行してしまった・・・ということになるのだろうか。

姉貴がザックの中からクロスボウを取出して組立て始める。肩当のついた台座の左右にカーボン繊維で作られた弓を取付け、先端の滑車に弦を張っていく。

ショルダーバックのような矢筒を首から肩に通して持つと、最後にバックの中から、短刀を取出してベルトに差す。

「ほらほら・・・アキトも準備をする！」

姉貴の行動をあっけに取られて見ていたが、その声で我に返った。ザックの中からグルカナ이프を取出し、ジーンズのベルトを緩めてナイフケースを腰の後ろになるようにベルトにしっかりと取付けた。

姉貴を見ると、山菜鎌の鎌を取外して、クナイを柄の先端に取付けている。

ホントに何処まで武器マニアなんだか・・・

「最後はこれね！」

姉貴がザックの中から包みを2つ取出す。

そして大きいほうの包みを俺に差出した。

大きめの赤いバンダナに包まれた物はずしりとした重量がある。バンダナを解いて、現れた物は・・・

「美月姉さん・・・これは、何処で手に入れたのでしょうか？」

現れた物は拳銃だった。しかも、M29の改造品・・・

俗に熊でも一発で倒せるって言う、マグナム44リボルバーだ。

しかも、バレルは7インチ・ガン・スミス特注品と見た。

「バイト、3ヶ月分よ。凄いでしょ。私のはこれね。」

そう言っつて膝のバンドナを解くと、現れたのはM36の4インチモデル・やはり特注品だ。

「美月姉さん・日本では、これを持ってないような気がするんだけど・何処で手に入れたの？」

「アレックさんに頼んだら、簡単に買ってきてくれたわよ。」

あの外人・只者ではないと思っていたが・やはり外交官だったのか。

(南の島で泳ごう!) っつて誘われて行った先がグアム・安宿宿泊かと思つたら、海軍基地の兵舎に泊めてもらった。

そして、昼はひたすら射撃訓練。夜になってようやく泳ぐことができた。

おかげで、南の島に4日も滞在したのに日焼けせずに帰って来れた。

それを、昨年から何度となく繰り返していた・

ちよつと、待て・そうすると姉貴は此処に来る前から、この日が来ることを知っていた事になる。

装備が増えた事で全体のバランスを取るために、サスペンダーがついた装備ベルトを取出して武器の取付け位置を変更する。

装備ベルトにM29のホルスターを取付ける。グルカナイフは柄が肩位置に来るようにサスペンダーの肩当後方に固定した。最後に、44マグナム実包が6個づつ入った2つのポーチをホルスターの両側に付ければ、今度こそ準備終了だ。

「姉さん・・・ひょっとしてだけど・・・此処に来ることが解つたの？」

姉貴は、ベルトにレスキュー用の大型ポーチを取付けていたが、俺の問いにこちらを見た。

「・・・解つてたわ。・・・あの老人は今まで、何度も現れた・・・どうやら、この世界を去るみたいで、縁者の私の願いをずっと聞いてくれた・・・私達だけで家のしがらみも無く暮らしたい・・・そしたら、叶えてやるうって・・・」

「・・・姉さんだけじゃ不安だし・・・しかたないか。」

他人だけど・・・生まれたときから一緒に居る姉貴と別れるのは願ひ下げだ。

姉貴に交際を申し込んだ相手には何時も言っている。

「俺を越えたら認めてやる！」

おかげで、姉貴が高校へ入学して以来、毎月のようにヤサ男をボロボロにしている。

今の俺がこうしているのも姉貴のおかげだし・・・ある意味、姉を超えた感情も少しはあるような気がしないでもない・・・

「アキトならそう言つと思つてたわ。・・・じゃあ、出かけましょう！」

姉貴は、もう残り火だけになった焚き火を足で踏み潰すと、ザックを肩に藪の中へ進んで行く。

俺も、急いでザックを取上げ姉貴の後について行った。

知らない世界

道の無い山中を歩くのは容易ではない。

見知らぬ山なら尚更だ。

山裾と思われる方向に藪を払いながら進んで行く。

俺の前に道は無い。俺の後ろには道はある。という状態だ。

途中の沢で、小休止を取る。冷たい水で顔を洗うと頭までスツキリする。

残り少なくなった水筒に水を補給して、再び下山を始めた。

急斜面の山肌を何度か下りる内に、傾斜を殆ど感じない場所まで来た。

深い森の中を歩いている感じた。

時折、ギャーっという変な声で鳴く鳥達が頭上を飛び交い、何度か猪のような獣（大きな牙が左右に2本づつはえていた）を遠くに見かけた。

「だいぶ、歩きやすくなったね。」

「うん。でも、この森・何処まで続くんだろ？」

「歩いてれば、その内出られるわよ。コンパス見ながら同じ方向に進んでるんだから。」

山や森で遭難する原因の一つに方向を見失うことが上げられる。

岩や立木を迂回する内に、方向が判らなくなるのだ。俺達は常に一方向、南に向かって進んでいる。

時計の時刻で昼を知り、岩の上で携帯食料を食べる。

固形燃料でお湯を沸かし、コーヒーを作って姉貴と分けて飲む。

「・・・ご免ね。」

「誤る事なんかないよ。良く俺を選んでくれたって感謝したいくらいだし・・・姉さんとは・・・離れたくないし・・・」

いきなり、俺は姉貴に抱きつかれた・・・しかし、此処は岩の上、此処でそんな風に抱きつかれると・・・物理の法則は正しいもので・・・ドシン！と下の藪に2人とも落っこちてしまった。

「・・・ご免ね！」

赤い顔で、とっさに体を入替えて下敷きになった俺から体を離していく。

とりあえず俺は立上がり、店開きした装備をザックに押込み、森の中をまた歩き出す。

今度は姉貴が先頭だ。

姉貴の長い丈のGシャツの背にはザックとクロスボーが乗っている。

あのザックには、分解したクロスボーと2丁のハンドガンそれに弾薬ポーチが入っていたはずだが、それを取り除いた状態であるのにザックはまだ膨らんでいる・・・謎だ。

森の巨木を避けるように姉貴が先導する。

たまに、手元を見るのは、コンパスで方向の確認をするためだろう。

1時間程度歩いていると、前方が少しづつ開けてきた。

立木も細くなり、間隔も次第にまばらになったが、逆に藪が深まったような気がする。

そして、突然に前方が開けた。
草原に出たのだ。

低い段丘がずっと南に続いている。

東と西の景色も森と草原であり、振りかえれば2000m級の山並みが連なり、その奥には、富士山のようにも見える一際高い山が鎮座している。

人家は確認できない。広い視野の中に畑らしきものも存在せず、煙も見えない・・・

「・・・姉さん・・・何も無いみたいだけど・・・」

「・・・そうでもないみたいよ・・・立木に薪取りした痕跡があるわ。」

姉貴は、いつの間にか取出した小型双眼鏡で広い草原を監視していた。

手渡してくれた双眼鏡で確認すると、確かに鋭利な刃物で枝を切取った跡が見える。

200m程東のその場所に俺達は向かうことにした。

草原の草は見た事が無い草だったが、草丈が20cm程であり、歩くのには余り支障にはならず、数分で問題の立木までたどり着いた。

確かに、誰かが意図的に枝を切取っている。

周囲を見ると、森の中に踏み固められた小道が続いており、所々の立木に薪取りの跡が見える。

「誰かいるみたいね・・・」

姉貴の呟きに俺は首を縦に振る。

異世界の住人・・・俺達と同じような姿なのだろうか・・・それとも、目が3つとか、手の代わりに触手が付いてるとか・・・

「たぶん、私達と同じような姿だと思うよ、ほら！」

姉貴の指差した地面には靴の跡があった。

靴跡は、足の大きさが15cm程であり、30cm程度の間隔で交互に続いている。2足歩行をする者で、靴を文化として持っていることが判る。

でも、この大きさだと子供ぐらいじゃないか・・・ガリバー旅行記が頭の中に過ぎる・・・
子供位の背丈が標準なら俺達は十分に巨人だ。

さらに草原を注意深く見ると、東に向かって草が踏まれている場所があった。

森は小道を形成していたが、草原では草の勢いが強く、小道までには至らないみたいだ。

姉貴は先に行きたかったようだが、草原に獣がいなくても限らない。
い。

薪の心配が無い森の傍らで今夜も野宿することにした。

2人並んで焚火を見つめる。

携帯食料をコーヒードリッパーで流し込むと、後は明日まで交代しながら焚火の番をすることになる。

「姉さん・・・ちょっと、気になることがあるんだけど・・・聞いていい？」

「なあーにかな！」

「姉さんのザック・・・いろんな物を出してもまだ膨らんでるのは

何故かな・・・って？」

「それはね・・・このザックが魔法のザックだからなの！・・・10倍入っても、重さは15分の1・・・いいでしょ。」

「それと、先に言っておくけどアキトの銃とポーチも魔法がかかっているわ。だから壊れることはないわ。弾も1日で6発補充されるし・・・」

「あまり撃てないってことだね・・・解った。」

だったら、おれのザックもそうしてくれ！と言いたいところだけど我慢するの男の子だって言い聞かされてる。

銃が壊れずに使えることは嬉しい限りだ。1日で撃てる数は最大で18発。しかし次の日は6発になる。M29の威力を考えると大型の獣が対象となる。とりあえず逃げることにすれば、それほど使用する機会は無いだろう。

「はい！」

姉貴が薄い銀色のケースを俺に渡してくれた。

横に小さな突起がある。

突起を押すと、ケースが開き・・・中に5本のタバコが入っていた。

「内緒にしてるみたいだけど・・・知ってるのよ・・・沢山は入ってないけど、1日にその本数なら許してあげるから。」

ちょっと気まずい思いではあったが、「ありがと！」と返事をし、早速1本を取出して、焚火から枝を取って火を付ける。

ぷかーっつと煙を吐出すのを面白そうに見ていた姉貴は、ザックから小さな袋を取出すとキャンディを1つ口に入れた。

「気分転換を図ってくれるものは必要だねー。」

知らない世界に姉貴と2人で、誰にも会わず2日を過ごしていたことで、確かに少しナーバスになっていたかも知れない。

少し前向きになる必要がありそうだ。

明日は、草原の道らしきものを辿り、人家を見つけよう。薪取りをする以上、火を使う者であるはずだし、切口を見た限りでは金属を加工する技術を持っていることが判る。

原始人ではなく、少しは文明を持った者に合えるかもしれない。そして、俺達を受入れてくれるなら、何の問題もない。

何時の間にか姉貴が寝入っている。

肩に掛かる重みも近頃は気にならない。満天の星空に小さな2つの月が見えている。

どちらも半月だが、寄添うように空に浮かぶ月は俺達2人のようだ。

後、月が30度程移動したら姉貴と交代してもらおう・・・と思い、この世界で2本目になるタバコに火を付けた。

ミアとの出会い

次の朝、草原に残された草の僅かな踏跡を手がかりに東に向かった。

草原の短い草丈のおかげで見通しは良いが、相変わらず人家等は見つからなかった。

突然、先を進んでいた姉貴が立止まると腰を落とし、俺に片手で腰を落とすように合図した。

四つん這いのような姿勢で姉貴に近づくと、双眼鏡を渡され、指先で確認方向を示される。

レンズが捉えたものは・・・犬のような獣の数頭の群れであった。しかも、鋭く長い牙を持っている。

種類はかなり違うけれど、サーベルタイガーの犬バージョンって感じだ。

「此方が、風下みたいだね。まだ、気付いていない・・・」

「大きさは、近所の太郎ぐらいだと思っただけど・・・獰猛みたいよ。」

太郎は近所の老犬だ。確かシェパードの雑種とか聞いたことがある。

今となっては怖くないが、小学生の時は怖くて前を通れずに、姉貴の後に隠れて通っていた。

ここは、触らぬ神に祟り無しという言葉通りに・・・ゆっくりと姿勢を低くして進むことにした。

しばらく、四つん這いで進んでいると、草がきれた場所に出る。

道のようだ。

少しづつ立上がり辺りを見渡す。

誰もいないし・・・さっきの犬モドキも姿を消している。

道の北方向は森に続いており、南方向は草原に続いている。

俺達が辿ってきた踏跡も、どうやらこの道から分かれていたようだ。

「こっちだね。」

姉貴は再び草原に向かって歩き出した。

慌てて姉貴の後を追う。

草原を歩くより歩きよい・・・確かにこれは道だ。森を離れないように緩やかなカーブを描いて東に続いており、尾根を一つ迂回するようにも感じられる。

「キヤーーーー！」

突然、かん高い悲鳴が聞こえてきた。

姉貴がその声に反応して駆け出した。

俺も慌てて後に続いて走り出す。

声からすると、小さな女の子のようだが・・・

やがて、森の木立を背にした男が犬モドキの群れに襲われているのが見えた。

姉貴がM36を引き抜き空に向かって撃つ。

パン・・・パン・・・と銃声が響くと、犬モドキの群れがこちらに向かってきた。

「来るわよ・・・準備して！」

姉貴の声に、杖を構える。

グアアーっと叫び声を上げて襲ってきた1匹を杖で横なぎに打ちつける。

バギっと、てごたえを感じたからには肋骨をへし折っていると思う。

次の1匹は脳天に杖を振り下ろして頭蓋骨を叩き割った。

3匹目は遠巻きに唸るだけで襲ってはこない。

姉貴も手製の槍で2匹を殺ったようだ。槍先からまだ血が滴っている。

しばらく睨み合いが続いたが、ガオン！っと1匹が吼えると、群れは草原に走っていった。

俺達は恐る恐る、木の根元に倒れている男のところに進んで行く。

首に手を当て脈を確認する。脈はなく胸の上下もない・

体のあちこちに出血が見られる・失血死か・

おれの仕草を見ている姉貴に首を振る。

始めて見るこの世界の住人だ。

姿形は俺達と変わらない。手の指も5本つつ付いている。

服装は・綿ではなく、麻のような手触りの上下を着ており、皮

製の簡単な上着を着ている。靴は・これも手作りらしい皮のブー

ツを履いていた。

「私達と同じだね・少し安心だわ。」

「でも、文化程度は低そうだよ。・服飾はこんなだし・」

持物を探すと鉈のような短い剣と背負籠それに男が振るっていた

木の棒が転がっていた。

籠の中には、数種類の草と薪の束が入っている。

どうやら、薬草か何かを採取に来て犬モドキに襲われたらしい。
男の遺体をどうしたものか考えていると、傍の立木から小枝が降
ってきた。

ん？って立木を見上げた時、

「キヤー！」

叫びと同時に茂みに何かが降ってきた。

姉貴が槍を構えて恐る恐る茂みに近づいていく。

「アキト！・・・見て、見て・・・かわいいよ！！」

姉貴が茂みから目を離さずに片手でおいでおいでをしている。
なに？ってな感じで、茂みに近づき覗き込むと・・・

女の子だった。10歳前後の女の子だが・・・
頭の髪の毛からピヨコンって耳が・・・ネコ？

ワンピースみたいな簡単な皮服のお尻からは50cm程度の尻尾
が生えている。

小学生ぐらいの背丈だけど、肌は俺達と同じだが髪の毛が青みを
帯びた白だし、耳と尻尾は白色の短毛で覆われている。

木から落ちたショックで目を回してるみたいだけど・・・

姉貴がギューって抱きしめてるから・・・呼吸困難になってるみた
いだ。

顔色がだんだんと青ざめてる。

「姉さん・・・離さないと死んじゃうかも・・・」

俺の声に、ハッ！と気が着いたみたいで、膝に寝かせたが・・・尻
尾をナデナデしている。

俺は、女の子の体を触りながら負傷の程度を確認する。
特に、骨折等はしておらず、木から落ちたときの衝撃で一時的に
気を失っただけらしい。

女の子が姉貴の膝で動き始めた。

「ムウウン・・・ハッ！・・・痛ッ！！」

目をパチツって開くと、素早く身を起こそうとしたが、どうやら
痛みのせいでそのまま横になる。

「・・・もう一人は亡くなったけど・・・襲ってた獣はいなくなっ
たわ・・・もう大丈夫！」

「・・・ところで、貴方は誰？」

姉貴が女の子の背中を撫でながら言うと、

「・・・ミア・・・そうニヤの・・・ご主人様は・・・死んだの・・・」

淡々とした答えだった。

どうやら、女の子は奴隷だったようだ。

主人に命じられて野山の薬草を採取していたが、今日に限って高
額で取引される薬草が森で豊作だと聞き、一緒についてきたらしい。
主人を失った奴隷がどうなるかは解らないとのことなので、彼女
が住む村についていくことにした。

さつさとミアは蔓で編んだ籠の中に、男の持物を入れると近く
の犬モドキをジッと見つめている。

犬モドキを指差して俺に聞いてきた。

「・・・ガトル要らニヤイの？」

「・・・要らない。食べられるとも思えないし・・・」

どうやら、犬モドキはガトルというらしい・・・

すると、ミアは籠から短剣を取出すと、短剣でガトルの犬歯を取出した。

右の犬歯を取出すと、次のガトルにかかる。

俺もグルカナイフを握って残り2匹の犬歯を取ってミアに渡した。

「ありがと・・・これ、交換できるの。」

ミアは無造作に籠にポイって入れると、その籠を担ぐ。

「行こう・・・」

姉貴がミアの手を握って一緒に歩き始める。俺もその後を追った。

山裾の集落

森伝いに尾根を1つ回ると、遠くに集落が見えてきた。どうやらあれがミアの暮らす村みたいだ。

見えても、つくまでの道のりは遠い、途中で軽く食事を取る。

始めて見る携帯食料にミアは興味津々・・おいしいって言いながら俺の分まで食べてしまった。

そんなことで、集落についたときには、だいぶ日も傾き始めたころだった。

集落は、簡単なログハウス風の掘っ立て小屋が10軒程度集まって、その周囲を簡単な柵で取り囲んでいる。

踏み固められた小道は、集落の柵の切れ目に続いており、そこには門番らしき人が槍を持って立っていた。

俺達が門番の傍まで行くと、門番は槍を俺達に突き出した。

「止め！ミアは良いとして、お前らは？・・それより、サミエルは一緒じゃないのか？」

「ご主人様は死んだ。ガトルの群れに襲われた。この人達がガトルを追い払ったけど間に合わなかった。」

「そうか、草原のガトルは脅威だからな。お前は直ぐに木に登れども、あいつはそうはいかんか。だから、今朝も止めたのに。すると、こちらはハンターなのか、ミアを助けてくれて感謝する。何もないところだが、ゆっくりしてってくれ。」

門番は勝手に判断して俺達を集落に入れてくれた。

ミアの後をついて集落の中を歩くと、少し大きめの家があった。どうやら長老の家らしい。

姉貴が丸太を半割りにしたような板で作られた扉を開ける。

「あのう・・・誰か居ませんか？」

「誰じゃ。」

部屋の奥まった所に布を下げて部屋を作ったようなところから、かなりのお年寄りが顔を出した。

「貴方が、この村の長老ですか？」

「いかにも、そうじゃ。はて？・・・お前さん達に会うのは初めてじゃな。なんぞ理由でもあるのかの？」

姉貴は、ガトルの一件を話し始めた。

サミエルの死には、少し驚いたようだが、ミアの今後について話始めると、何故ここを尋ねたか合点がいったようだ。

「先ず、ミアは奴隷ではない。サミエルが何処から連れて来たが、奴隷の証である額の刺青はないし、消した後もない。衣食住を保障するとか言いおって奴隷のように働かせておったが、あまり融通は利かなかったの・・・村人からの噂も良いことは聞けなかった。昨日の旅人から森で高額な薬草を沢山見たと聞いて出かけおったのじゃな・・・欲に正直な男だった。」

「すると、ミアは？」

「自由じゃよ。この村に暮らすもよし、村を出てもよし。出来るなら、これも縁と思って面倒を見て欲しいがな・・・」

「でも、私達兄弟は、生活手段がありません。仕事のアてがあるといいのですが。」

姉貴が少し困った顔を見せて言った。

長老はその言葉に驚いたようだ。

「何と、ガトルを倒せる者が！…それなら、ハンターとなるが
良いじゃろう。この村では出来ぬが下の村は大きい、ハンター・ギ
ルドがあるはずじゃ。今夜はこの村に泊り、明日出かけるがよかる
う。」

丁寧に姉貴は長老に礼を言つと、俺達は家を出た。

こつちこつちつと姉貴の手を引くミアと連れ立って小さな家に
入る。

どうやら、ミア達が住んでいる家のようだ。家主はもういない
けど…

家の中は狭く、10畳位の真ん中に石で囲っただけの炉があるの
で、傍の薪で早速火を点ける。

パチパチと燃え上がる火で部屋の中がよく見えるようになった。

端にベッドと木箱。その反対側に藁が敷いてある。

炉の反対側には木桶と古びた鍋。そして数個の木の椀・其れだ
けだった。

「ミアちゃんは何処で寝てたの？」

姉貴がミアを覗き込むように尋ねると、端の藁を指差す。

どうやら、藁に包まって寝てたらしい。姉貴はため息をつくと、
ベッドの脇の木箱を開けた。

中には…酒瓶と男物の粗末な衣類、それに小さな皮袋があった。
皮袋を開けると、1枚の銀貨と大ききの異なる10枚程度の銅貨
が出てきた。

あの男の蓄えらしい…とすると、これはミアのものだ。

「待ってて…ちよつと出かけてくる。」

そう言つと、籠を背にミアが家を出て行った。

「貧乏なのか、幼児虐待なのかよく解らないけど、このままではいけないわ。私達で引き取るけど良いわね？」

「ああ、一人暮らしはかわいそうだ。でも、俺達だって此処で暮らしていけるか解らないよ！」

「その点は大丈夫。長老が言ってたでしょ。ハンターになれって明日、下の村に行きましょう。」

そんな会話をしながら、姉貴は自分のザツクの中をこそこそと何かを探し始めた。

取出したのは裁縫セット・何でも持って来てるような気がする。そして、木箱の中にあつた男物の衣服を切り裂いて何かを作り始める。

暇になつた俺は、ザツクからポットを取出し、水筒の水を入れて炉の脇に置いた。これでコーヒーが飲める。

「ただいま・・・」

ミアアが帰ってきた。

姉貴が（お帰り！）って返事をする。

姉貴の所にトコトコと歩いていくと（はい！）って右手を出す。

姉貴は怪訝な顔をして右手を出すと、銀貨1枚と大小の銅貨数枚がその手にのつた。

「如何したの・・・これ？」

「さっきの牙と薬草を売ってきたの。」

「このお金つてどれ位の価値があるの？」

「銅貨10枚でご飯が食べられるってご主人様が言ってた・・・銀貨は銅貨100枚分、そしてこの大きなほうは銅貨10枚分だよ。」

「どうやら、貨幣単位は10進法らしい。10倍毎に異なる貨幣があるみたいだ。」

「銅貨10枚でご飯が食べられるということは、だいたい1枚が10円程度になるのかな。」

「ザックからアルファ米を取出してお湯が煮立った鍋に入れる。乾し肉と乾燥野菜をいれて塩で味を調整・・・簡単だけど、雑炊の出来上がり！」

「お椀にすくうと、3人でおいしく頂いた。」

夕食が終わると、3人でこれからの事をもう一度確認することにした。

「まず、これからの暮らしを如何するかだ。」

「長老は、ガトルを倒せるなら下の村に行って、ハンターになればいいって言うていた。ガルドの牙はミアの話だと、銅貨25枚程度で売却できるらしい・・・という事は、」

「1日で、ガルドを4匹仕留めれば食事は出来るということだ。」

「寝る場所については、最初は野宿・・・不安はあるがガルド程度なら心配ない。」

「後は、ギルドでの依頼にどのようなものがあるかということだが、別に上を望む訳ではないので、暮らせる分に留めればそれも問題は無いだろう。姉貴を見ると、膝にミアを寝かしつけて針仕事をしている。」

「姉さん。何を作ってるの？」

「この子ねえ・・・下着すらないのよ。とりあえず上着は今の皮服でいいとして、下に着るシャツとパンツを作ってるの。出来れば、アキトには靴を作ってほしいけど・・・無理かなあ。」

「ウウン。とりあえず作ってみるけど、期待しないでね。」

早速、ザックからノートを取り出し、ページを1枚を破る。鉛筆を持って、寝ているミアの足から靴？を脱がせると、足の裏に紙を合わせて鉛筆でなぞり足の型紙を作った。

次に木箱を漁ると、鹿皮のような上着を見つけた。痛んではいたが、着る訳ではない。

木箱の蓋を利用して型紙より少し大きめに靴底を4枚切取る。

次に、靴の表だが・・自分の靴の構造を見ながらおおよその形で同じ形になるように2枚切取った。

「姉さん。クナイ貸してくれる？」

俺の注文に、姉貴は靴のケースに差してあるクナイをぽんと投げてくれた。

クナイを使って皮ひもを4本切取る。

靴底2枚と靴の表の下側を丁寧にクナイで穴開けを行う。そして、両者を皮ひもで縫い合わせると、簡単なモカシンブーツだ。履いた後で靴の表に開けた調節用の紐を閉じれば出来上がり。我ながらよく出来た。

ほら！って姉貴に見せようとしたが、既に姉貴は夢の中。

火の番のついでに、バックも作ってみる。これは、1枚の皮を3分の1程折って両側とベルトを通す場所を、穴開けの後に紐で閉じていけばいいので簡単だ。

時計を見ると12時を回っている。

炉に薪を放り込み、俺も寝ることにした。

ハンターになるために

次の朝、コーヒーの香りで目が覚めた。

コーヒーを入れたシエラカップを（はい！）って姉貴から渡される。

苦い味が、ぼんやりとしていた俺の頭を覚醒させる。

俺が寝ている内に、出かける準備は終わったようだ。

ミアは昨日と違って、足首までのパンツと長袖のシャツを薄い皮のワンピースの下に着ている。昨夜、姉貴が縫っていた成果だと思ふ。

足に履いているモカシンモドキは、俺が作ったものだ。とりあえず作ったものにしては、我ながらよく出来ていると思う。

腰には、紐をつけたバックを肩から提げている。あまり出来はよくないが、物を入れるには問題ないはずだ。

そして、背には・サミエルが持っていた短剣を背負っている。

ジツと見ていた俺に気付いたミアは、

「ありがとう。お兄ちゃん。」

と言って、姉貴の後ろに隠れた。

ずっと、年下の兄弟が欲しかったが此処に来てようやく適ったわけだ。

嬉しくなってしまう、ミアの頭をガシガシって撫でたら、姉貴に山菜鎌の柄でポコンって叩かれた。

「虐めちゃだめでしょ！」

メッ！って顔をしている。

触らぬ・何とかで、こんな時は話題を変えるに限る。

「もう、出かけるの？」

「そうよ。丸1日掛かるみたいだから、急いで準備してね。」

準備と言っても・・特にない。

昨夜借りたクナイを姉貴に返しておく。ザックを担ぎ、山菜鎌を持って準備完了だ。

携帯食料をコーヒで流し込むと、ポットの残り湯を炉に注いで火を消す。

家を出て、先ずは長老の家に行く。

まだ、日も出ていない早朝だが、長老は家の前に佇んでいた。

「出かけるんかいの。この時間に発てば、夕暮れには着くはずじゃ。南の道を真っ直ぐに行くんじゃぞ。・・それと、ミアをよるしくな。・・」

「はい。では行ってきます。」

姉貴はそう言って、集落の南に向いた道を歩き出した。

出口の柵にはまだ番人もいなかったが、柵をずらして出た後は柵を基に戻しておいた。

道と言っても、丁度荷車が通れる程度の踏み固めた道だ。

周りは畑が広がっており、名前の知らない野菜類が育っている。そんな畑の中をウネリながら緩やかな下り道が続いていた。

姉貴はミアと手をつなぎながら俺の前を歩いている。ミアの長い尻尾が歩くたびに左右に振れるのが、何となくかわいらしい。気が着くと、揺れる尻尾に合わせて何時しかハミングしていた。

「ご機嫌ね！・・・この先の草原は、ガトルがたまに出るらしいから、気を付けてね。」

「ああ大丈夫。後ろは任せて・・・」

俺のハミングに気が付いたのか、姉貴が振り返って注意してくれた。

改めて周囲を見渡すと、道の傾斜に合わせた段々畑の造りが進むにつれて雑になってきている。村の傍と比べると歴然としている。村から、南に向かって少しづつ畑を切り開いてきたような感じだ。

道の途中に大きな岩があった。数本の立木も生えている。

岩の傍には焚火の跡があることから、長老の言っていた村への休憩所として利用されていたようだ。

時刻も丁度昼近く。ずいぶんと歩いてきたようだが、下り坂のせいかそんなに疲れてはいない。

姉貴の（食事しよう！）の一言で、この岩で休憩になった。

枯枝を集めて、焚火の跡を利用して火を焚いた。

ザックを探して、食料がないことを姉貴に告げると、ザックから紙包みを取り出して渡してくれた。

中には、アルファ米とチューブ入りの味噌汁の素、それにビーフジャーキーみたいな乾燥肉だ。3人で食べても2日程は持つ量だけど・・・あのザックの機能から、これだけでは無いと思う。

不思議そうに姉貴の顔を見ると、

「今は、これだけね。1月分位の食料は持ち込んできたけど、これから何があるか分からないから、少しは節約しないと・・・」

言い聞かせられてしまった。

確かに、そうだけど、たまには腹いっぱい肉を食べたい・・・

そんな中、「あれ！」ってミアが持っていた先割れスプーンで草原を指した。もう一方の手にはシェラカップがあったのでスプーンを使つたみたいだ。

「何？」って姉貴は小型双眼鏡でミアの指した方を見ていたが、「アキト。肉が走ってくるわ。準備して！」

ようやく、俺にも様子が見えてきた。

猪モドキの小さいのが数匹のガトルに追われている。

姉貴がクロスボーを準備しているとところを見ると、猪モドキを殺るつもりみたいだ。となれば、俺はガトルを退治して猪モドキを我が物にするのが役目。

猪モドキが岩の傍を横切ると同時に山菜鎌を振り上げて追いかけてきたガトルに飛び掛った。

着地と同時に1匹の背中を叩いて撲殺し、身を起こしながら手近かなガトルを鎌に引っ掛けて投げ飛ばした。

動きを止めると飛び掛つて来るのは犬の習性なので、走りながら次の獲物の頭を殴る。さらに、吼えているガトルを横殴りに首筋を払って首を折ってやった。

辺りを見渡して、他にガトルがないことを確認する。

ふうつと息を吐いていると、ミアが岩から下りてきて猪モドキの走っていった方へ走り出した。姉貴も後に続いている。

確か、右の牙だったよな。自分に確認しながらガトルの牙を頂戴する。貴重な換金部位だ。

姉貴の方に歩いていくと、猪モドキの血抜きをしている最中だっ

た。

臓物を抜き、首と足の静脈を切って立木に吊るしている。

「いい所に来たね。あの枝を切って簡単な橇を作って欲しいんだけど・・・」

「いいよ。ちょっと待つてね。」

姉貴の指差した木の枝をグルカナイフで叩き切り、Yの字になるように余分な枝を切取る。

そして、血抜きが済んだ猪モドキを橇に縛りつける。こうすれば、2本の枝が橇になり長手の枝を持って引き摺って行く事ができる。

猪モドキをよく見ると、額に小さな角が一角獣のように出ている。ミアが短剣でガンガン叩くと基からポキンって取れた。

大事にバツクに仕舞ったことから、猪モドキの換金部位は角だったんだと気が付いた。

それから焼く時間後、俺は平原の下り坂をズルズルと猪モドキを引き摺って歩いている。

先に行く2人は軽快に、何を話しているのか時々笑い合いながら歩いているが、今の俺はそんな気楽さは微塵もない。

たまに、遠くから俺を見るガトルがいるからだ。せっかく手に入れた肉を奴らに奪われないように、最大限の警戒を取りながら歩いている。

だいぶ日が傾いてきた頃、ようやく遠くに村が見えてきた。

ミアの村とは、断然大きさが違う。百軒を越えると思われる村の家々は、丈夫そうな丸太の柵で全体が囲われており、門すらも見える。どうやらこの道は、あの門に続いているらしい。

近づくにつれ、大きさが実感できる。

門も上部に櫓が付けられている。丸太を裂いたような雑な板で作られた両開きの扉は、片方だけでも荷馬車が通れる程の横幅だ。皮鎧を葺つい顔の男が、2m程の槍を持って、門番をしている。

ズルズルと猪モドキを引き摺って門をくぐろうとした俺達の前にいきなり門番が立ち塞がった。

「待て、見かけん奴だな・・何処から来た？」

「上の村から来ました。長老がガルトを倒せるぐらいなら、下の村へ行ってハンターに成れって。」

姉貴が丁寧 answers。

「上の村・・ああ、あの集落か。確かにここにはギルドがある。

イネガルの子供を途中で手に入れるぐらいなら、立派にハンターになれるぞ。よし、通れ！」

門番はそう言って道を開けてくれた。

「ありがとうございます。ついでに聞いて良いですか？・・ギルドの場所と、このイネガルですか、これを買ってくれる所を教えてください。」

「ギルドは、此処を真つ直ぐ言った先の十字路にある。盾の看板が目印だ。肉屋は途中の左側にある。骨付き肉の看板だから直ぐに判るはずだ。」

「ありがとうございます。」

門番に礼を言って早速肉屋にイネガルという猪モドキを売りに行く。

なるほど・・骨付き肉が看板だ。

肉屋で銀貨1枚でイネガルを売る。但し、後ろ足1本分はその場でこちらの取り分とした。それでも、皮と肉で結構な儲けを肉屋は

期待できるみたいだ。

村のギルド

イネガルの後ろ足を粗雑な紙で包んだ荷物を担いでいると、何か獲物が小さくなったようで、ちょっとがっかりした気分になってきた。

でも、これなら直ぐにでも調理することができると思うと、そんな気分も吹き飛んでしまう。何しろ、久しぶりの肉だ・・・肉だよ・・・お肉様なのだ。

後ろでそんなことを考えているとは知らない2人は門番に教えてもらった十字路で盾の看板を探し始めた。

「あ！・・・あれだね。」

姉貴達が十字路を斜め横断して大きな建物に入っていく。

入口らしき所で俺を手招きしているから遅れると煩いので、急いで姉貴の所に向かった。

2階建ての大きな建物がギルドだった。木造ではあるが、俺の家より遥かにでかい。

入口の両開きの扉を開けて中に入ると、正面にカウンターがあり何人かのお姉さんがいる。ちょっと銀行にも似ている気がしないでもない。

カウンターの真ん中にお姉さんに狙いを定めて歩き出す。

「あのう、此处でハンターになれると上の村の長老に聞いたんですが・・・」

姉貴が恐る恐る用件をきりだした。

「はい！ 成れますよ。・・・成りますか？」

「成ります！」

「え〜つと・・・新規登録ですね。それでは、この用紙に必要な事項を記入して下さい!」

何か、軽いノリのお姉さんだが、どうやらハンター登録が出来るらしい。

姉貴に渡された用紙を後ろから覗いて見ると・・・読めない。

ギリシア文字とクサビ形文字が融合したような文字が小さく並んでいる。

「何これ? こんな文字見たことないぞ!」

「アキトも読めないの?」

姉貴はミリアに用紙を見せてみたが、ミリアも首を振るだけだった。

「あのう・・・読めないし、書けません。代筆お願いできますか?」

「はい。大丈夫ですよ。・・・此处ではなんですから、奥にどうぞ!」

そう言っただカウンターの間にある扉から、中に案内された。

小さな会議室みたいな部屋で、お姉さんの質問に答える形で俺達のプロフィールが用紙に書き込まれていく。

「お名前は?」

「私がミズキ・ヤガミ。こっちが、アキト。この子はミリア。」

「御出身は?」

「ニホンだけど・・・」

「何処から歩いてきました?」

「上の村から・・・」

「出身は、アクトラスっ!」

「得意な武器はなんですか？」

「私は、弓。アキトが剣かな？ ミーアは・・・」

「あたしは、これでいい。」

「短剣ですね。分かりました。」

「魔法は使えますか？」

「そんなのあるの？」

「魔法は使えないっ！」

「亡くなられた場合の連絡先は？」

「いません。」

「死亡時はギルドに付託っ！」

というような問答で用紙が埋められ、最後にお姉さんは直径5cm程の水晶玉を取り出した。

「個人の技量を計測します。一人ずつ持ってみてください。」

先ずは姉貴が右手で持つ・・・一瞬、ピカって光った。

「はい、いいですよ。では次の方。」

次は俺が持ち、光ったことを確認して、ミーアに渡す。

ミーアが持つ水晶玉が光ると、お姉さんは水晶玉を回収した。

「これで、全て完了です。あとは・・・そうだ！ 皆さん一緒に仕事をするんですね？」

「ええ、そうしたいと思っていますが？」

「それでしたら、チーム名を登録しておくと便利です。チーム

でないと受けられない依頼もありますから。」

「それでしたら・・・【ヨイマチ】にします。」

「はい。分かりました。」

お姉さんは3枚の用紙を書き上げると、改めて俺達を見た。

「次は、ギルド組織の注意事項です。一応簡単に説明します。分からない時や、困った時は、その都度説明しますから、カウンターで尋ねて下さい・・・」

お姉さんが話してくれた注意事項は次のような内容だった。

ギルドのホールにある依頼掲示板で仕事を探すことが出来る。

依頼掲示板に張り出されている用紙にはハンターレベルが記載されており、現在のレベルの1つ上までの依頼を受けることができる。依頼完了の報酬は依頼が完遂されたことを示すものを持参する必要がある。これとは別に獣等の換金部位を持ち帰った時は、その金額が報酬に加算される。

依頼遂行上の負傷等は事故負担。

依頼遂行に係る衣食住は事故負担。

武器、防具等の費用は事故負担。

装備等の一時預かり等である。

「ということは、ここに来る途中で手に入れた、これなんかも換金できます?」

姉貴はそう言って、ミアアのバックから、角と牙を取り出した。

「え!・・・出来ますよ。これは預からせて貰います。ホールで待っていて下さい。」

俺達は部屋を出るとホールに移動した。

確かにホール両側に依頼掲示板があり、粗末な紙に書かれた依頼用紙が一面に貼り付けられている。

「読めないのが難点ね。何とかしなくちゃ。」

姉貴が用紙を見ながら呟いた。

確かに、ハンターに成れても依頼書きが読めないのでは話の外だ。

「皆さん。いらして下さい。」

ホールにお姉さんの明るい声が響く。

ぞろぞろとカウンターに行くと、お姉さんがカウンター越しに3枚のカードを渡してくれた。

「これが、ミズキさん。これがアクトさん。最後はミアちゃんのです。」

これが、RPG等でお馴染のギルドカードってやつか・

名刺サイズの金属片。読めないから内容は分からないけど、いろんな項目に刻印が押されている。そして、下の部分に穴が2個開いていた。

姉貴のも同じように2個開いている。でも、ミアのは1個だった。

「皆さんのカードは、初心者ですので、赤のカードとなります。」

下の穴は戦闘レベルに相当します。さっきの水晶球で調べたもので、公平な分類ですよ。俗に、赤2つと言われるレベルです。・・それと、換金ですが・・130レクですので、銀貨1枚と銅貨3枚です。

「ありがとうございます。ところで、良い宿がありましたら紹介してください。」

さりげなく、姉貴がお勧めの宿を聞いている。

そして、現在歩いている先がギルドのお姉さんお勧めの宿（フィーネの宿）なんだけど、この距離って村はずれだよ。だいたい歩いてきたぞ！

「此処だと思っただけど・・・今晚は！」

小さな2階建ての家は、ギルドからだいぶ離れたところに立っていた。目印は、家の左に立つ大きな杉の木。

俺達が扉を開けて中に入ると、カウンターのおばさんにジロ！って睨まれた。俺達、お客さんだよな。

「今晚は。あのう、泊めて頂けますか？」

「よく、こんな外れの宿を見つけたねえ。」

「ギルドのお姉さんに紹介して貰いました。」

「サンデイの紹介かい。いいよ。泊めたげる。1人20レクだけど何泊だい？」

「余り持ち合わせていないので・・・2泊お願いします。それと、此処で食事はできますか？」

「朝は、1人5レク、夜は8レクで食事を出すよ。」

「3人分お願いします。それと、これを焼いてくれますか？」

俺は、担いできたイネガルの片足をカウンターに置いた。

おばさんはしばらく肉を眺めていたが、

「焼くだけなら、サービスでいいよ。所で余った肉だが・・・」

「差し上げます！」

「いいのかい。すまないね。さて、これが部屋の鍵だ。4人部屋だが問題ないだろ、食事は直ぐに作るからとりあえず部屋に荷物を置いてきな。」

姉貴は銀貨と銅貨を混ぜて支払うと、鍵を受け取った。

おばさんが指差す階段を上ると、通路の両側に部屋がある。

4つある一番奥の部屋が俺達の部屋だ。部屋番号はあるのだが・俺達には読めない。鍵についていた札の記号と同じ記号を探してどうにか部屋を確定できた。

部屋は2段式のベッドが2つと椅子4つのテーブルが1つ。片側の扉を開けると小さな木の風呂桶がある。トイレが無い所を見ると・外にあるのかな？

ベッド脇には木箱があり、簡単な鍵も付いている。

とりあえず木箱にザックを入れて、夕食を取る為に下へ降りるところにした。

俺達が階段を降りる音に気が付いたのか、

「そのこのテーブルで待つといて。もう直ぐ出来るから。」

カウンターからおばさんが声をかけてくれた。

確かに、カウンターの反対側にテーブルがある。

5セットあるテーブルには2組の先客がいた。どうやら、食堂と宿の兼業をしているらしい。

彼らから離れたテーブルに着いてしばらく待つと、夕食が出てきた。

野菜中心のスープと固めの黒パン。そして、イネガルの焼肉だ。

他の客をチラって覗くと、焼肉無しで同じような献立だ。

「オイ！俺達には無えのかよ？」

客の一人が俺達の焼肉を目ざとく見つけて、おばさんに食いついている。

「生憎だねえ。彼女達が仕留めたイネガルの現物持込さ。明日はその肉でシチューを作るから楽しみにしてな」

「くそー、現物持込かよ。俺達にはまだイネガルは無理だぞー！
！」
「しかし、見たところ大分若いようだが、良く仕留められたものだな。」

「大方、横取りしたんじゃねえのかい。俺達だって、イネガルは年に何度も仕留められねえ。」

席を立って怒鳴りつけようとした俺を姉貴は服の裾をつかんで押し留めた。

「言わせておけばいいのよ。横取りには違いなし・・・」

2組の先客は、話している内にだんだんとヒートアップしてきたようだ。ひよっとして酒でも飲んでるのかな？

1人が俺達のテーブルに来るなり、俺に質問を投げかけた。

「実際はどうなんだ。殺ったのか？ それとも横取りか？」

「ガトルに追いかけていた若いイネガルを殺ったのは私です。追いかけていたガトルを始末したのは、こっちのアキトです・・・
確かに横取りですね・・・」

それを聞いた先客達も驚いている。

「ガトルに追われたイネガルの速さは伊達じゃねえ。それに、獲物を横取りされたガトルの執念深さはよく知っている。おめえらよくもまあ、無事だったものだ。ところで、おめえらのハンターレベルは幾つなんだ？」

「さつき、ハンターになったばかりです。」

姉貴はそう言って、ポケットからギルドカードをテーブルに置いた。

「赤2つ・・・いいか。今回はうまく行った。だが次もうまく行くとは限らねえ。身の丈にあった仕事を探すんだ。・・・いいな!」

先客達も頷いている。

乱暴者のように見えた先客達も同じハンターのようにだ。俺達を心配してくれているようで少し嬉しかった。

最初の依頼はキノコ狩り

食事の後、俺達の部屋に戻ったら、姉貴がザックをぐそぐそと何かを探している。

そして取り出したのは、海兵隊仕様の上下の迷彩服だ。更に、1本の刀まで出してきた。

「明日からこれにきなさい。それと季節が違うようだから上着は要らないかも・ポンチョを持っていけば大丈夫ね。」

姉貴に従って、服を脱ぎTシャツ1枚になる。迷彩のパンツにベルトを通してはくと、肩パット付きのサスペンダーの背中に取り付けたグルカナイフのケースと交差するように斜めに日本刀を取り付ける。

「姉さん・これって、忍者刀？」

「そうよ。欲しがってたでしょ。お爺さんの部屋にあったから入れてきちゃった。」

テへって舌を出して言わないでください。

確かに欲しかった品だ。反りのある日本刀と違い、反りが殆ど無い・どちらかと言うと直刀に近いが、実戦では斬るより突く方が効果的だ。しかも、鞘は薄金造り・木に鋼を巻きつけ漆で塗装している。さらに石突は金属製で先端を研いでいる。鞘も武器として利用できるのだ。

黒塗りの柄を手にとって抜いてみる・刀身も漆黑、刀身は約70cm十分な得物だ。

取り出しやすいように、四角い鍔が肩から少し出るようにしておく。

小袋に携帯食料と食器等を入れて、ポンチョに巻き込む。それを

サスペンダーの腰部についている専用ベルトで横に固定する。こうすれば、M29がきれいに隠れて見えなくなる。

GI水筒は右腰に着け、GIブーツを履きなおして、迷彩柄のキヤップを被れば・・・何処の戦場に行くのかと思いたくなるような出で立ちだ。

そして、姉貴が最後に渡してくれたものは指先が空いた皮手袋、それに・・・

「姉さん。これは無いでしょ。幾らなんでも・・・これは！」

「何が有るか分からないでしょ。用心の為よ。持ってなさい！」

驚くなかれパイナップル型の手榴弾だ。

とりあえずサスペンダーの右胸のスリングに通して、マジックテープでしっかりと抑えておく。

俺の方が一段落したところで、姉貴の装備を見てみると、服装が迷彩柄になった位でそれほど変化は無いようだ。

しかし、上着を脱いでTシャツにサスペンダーは、姉貴の大きな胸が更に強調される。あまり見ないようにしよう・・・。

ミアちゃんの方も、変化が無い。違いは姉貴が出したベルトを切詰めてワンピースの腰に俺の作ったバックを取り付け、ポンチョ代わりに俺の上着を丸めて横付けしたぐらいだ。

「さて、準備は出来たわね。明日ギルドに出かけてハンター業を開始します。・・・ザックは必要なもの意外はギルドに預けるから、最後によく装備を確認してね。」

何時の間にか沸いていた木風呂に入り、久しぶりにベッドで眠る。

ベッドで寝るのが久しぶりなせいか、夢も見ずに夜が明けた。

次の日、ミアちゃんの呻き声で目が覚めた。

隣のベッドでミアちゃんが姉貴の足の下でもがいている。

早速助け出して、姉貴を起こすと何でもないような顔でおはようの挨拶だ。

半分寝ぼけている姉貴を無理やり着替えさせて裏の井戸へ顔を洗いに連れて行く。

朝食は黒パンに野菜と薄切りの肉を挟んだサンドイッチみたいなものだった。

きれいに平らげ、お茶を飲んでいるとおばさんが紙包みを持ってきた。

「これは肉のお礼だけど、今日からハンターをするんだろ。・・
いいかい。昨夜のハンターも言ってたけど、無理はするんじゃないよ。」

「心配かけてすみません。大丈夫ですよ。無理はしません。」

姉貴が、おばさんに微笑んで答えている。でも、俺は誤魔化されな
いぞ。(絶対に無茶しますよ。)っていう顔だもの。

家並みから外れている宿屋からギルドへの道は結構な距離だ。

身一つで依頼がこなせるように装備を整えているので、ザックは
一時的にギルドに預かってもらうために持参してきた。

朝早いせいか、村の大通り?には余り人がいない。たまに家の前
をほつぎで掃除しているおばさんやお爺さんを見かけるとおはよう

!と挨拶するが、その度に丁寧に挨拶を返されるので疲れてしまう。

・・まあ、挨拶は礼儀の始まりって言うし、悪いことではないけれ
ど・・

「おはようございます！」って、元気な声で姉貴がギルドに入っていく。俺も遅れないように後に続いた。

つかつかとカウンターの・・・昨日出会ったお姉さんのところに歩いて行く。

「おはようございます。このザックを2つ預かってください。それと私達にお勧めの依頼を紹介してください！」

ニコリとしながらそう言った。・・・いいのかな？

カウンターのお姉さんも、びっくりしてたようだが、ああ！と手を打って納得したようだ。

要するに、俺達は字が読めない。依頼板の依頼用紙の内容も判らない。だったら聞けばいい。という訳だ。

「困りましたね。・・・所で持ち合わせがありますか？ ガイドを雇うのも良い方法だと思うんですけど。」

「「ガイド？」」

「はい。黒カードの人達が一時的にボランティアでハンターのガイドをしてるんです。それなりの経験もありますし、何と云ってもその人に合った依頼を選別してくれますよ。それと、荷物の預かり料は依頼期間中1個5Lになります。」

姉貴の頭に？が2、3個浮かんでるのが見える。

「ガイドの料金ってどうなりますか？」

「レベルによっても違いますけど・・・「ヨウマチ」さんなら黒レベルの初めでいいと思います。それでしたら20Lが前金そして完了報酬の1〜2割程度ですね。」

意外と安い。さすがボランティア。と思うほどの料金だ。手荷物

預かりも駅のコインロッカー程度の値段だ。

「お願いします。今日からお願いできますか？」

姉貴はポーチの中の布袋からお金を渡した。

「ちよつと待って下さいね。・・大丈夫です。今、呼んで来ますね。」

お姉さんはそう言うのとカウンターから離れ、奥の階段を上っていった。

しばらく待つと、お姉さんと一緒にミアちゃんと同じようなネコ耳のお姉さんが下りて来た。カウンターの扉を開けて俺達のところに来てくれる。

「彼女がガイドのミケランさんです。黒1つですからお役に立つと思いますよ。」

彼女をそう言うって紹介するとカウンターに帰っていった。

「ガイドのミケランにゃ。・・先ず皆のレベルが知りたいにゃ。」

ミケランさんをよく見るとミアと少し違っていた。

きれいな顔は丸顔で白いピンとしたひげがほっぺから何本か出ているし、シャツから出ている腕も短い毛に覆われている。

でも、使い古された皮の鎧と腰に下げた片手剣がにとてもよく似合ってる。

「これが私のカードです。アキトとミアちゃんも出さない！ミケランさんは、俺達が出したカードをしばらく見ていた。

「これだと、採取系の依頼がいいかもにゃ。」

そう言うって俺達のカードを返してくれた。

「こっちはにゃ。」

俺達はミケランさんに連れられて依頼板の一角に行った。

「この辺りが、皆のレベルに合った採取依頼にゃ。何かしたいことはあるかにゃ？」

「え〜と・・・初めてだから、簡単で高額になるのがいいんだけど。」

「ん〜と・・・この辺かにゃ。アリット茸の採取にゃ。東の森にあるはずにゃ。」

「アリットにやらミアも判るよ。村の森にもあったもの。」

ミケランさんは「賢いにゃ！」ってミアちゃんの頭を撫でている。

姉貴は俺を見て小さく頷いた。どうやら、アリット茸採取を引き受けるみたいだ。

まあ、キノコ狩りだし・・・ミアちゃんも知ってるみたいだから危険もなさそうだ。

「じゃあ、それにします。この後、どうするんですか？」

「これをカウンターに持っていくにゃ。」

ミケランさんは依頼板から用紙をひっぺがしてカウンターのお姉さんの所に持って言った。

「これにするにゃ。」

どれどれとお姉さんは用紙を見ていたが、「はい。判りました。」って言うと、大きな判子を用紙にペタンと押した。

「確かに依頼の受領確認を致しました。アリットは1本6Lで引き取ります。10本以上が完了条件になります。期限は3日ですの

で注意して下さい。」

そう言って、姉貴に用紙を渡してくれた。
早速出かけることにする。

「「では、行ってきます！」」

俺達はカウンターのお姉さんに元気よく挨拶してギルドを出発した。振り返るとお姉さんが小さく手を振っている。

「ところで、準備したほうがいいものってありますか？」

姉貴が、ミアちゃんの手をつないで先頭を歩くミケランさんに恨めしそうに聞いている。ミアちゃんと手を繋ぎたかったのか？

「そうだにゃ・・籠があると便利かもにゃ。後は、お弁当だにゃ。」

ミケランさんの意見を取入れ、途中の雑貨屋で小さな籠（それでもミアちゃんが背負うと大きく見える）と、乾燥させた肉を購入した。

村の中の十字路を東に曲がって進むと村を囲んだ柵の門に出た。

「ミケランじゃないか。今日も薬草の採取か？」

「今日は、ガイドにゃ。東の森でアリツトの採取にゃ。」

どうやら門番さんと顔見知りらしい。「気を付けて行けよ！」の励ましに送られて俺達は東の森へ続く道を歩き出した。

逃げ回るキノコ

村から東への道は、荷馬車が通れる程の道だ。

道の両側は広い畑だ。キャベツみたいな丸まった野菜が育っている。まだ、黒い土が見えているところは、これから植えるか、もう種をまいたか・・そんなところだろう。

お百姓さんが何人か畑に出ているのが見える。明るい農村って感じのところだ。

しばらく歩いていくと、十字路に出た。

「農家の荷馬車が畑に行くための道にや。私達は真っ直ぐ行くにや。」

ミケランさんが説明してくれたけど、結構立派な道に見える。意外と農道って街道よりも村の人達には重要なのかも知れない。

「東の森は、泉の森とも言われてるにや。・・もう直ぐ、ほら！・

・この小川は森の北のほうにある泉から流れてくるにや。」

「そうなんです。きれいな小川ですね。」

いつの間にか姉貴はミアちゃんのもう片方の手を繋いで、3人並んで歩いている。

ミアちゃんの前の上で2人で会話してるんだけど・・ちょっと、ミアちゃんが歩きにくそうに見えるのは気のせいだろうか・・

道の両側の畑がなくなると道幅は急に細くなった。小道って感じだ。

荒地を開墾しているお百姓さんがいるけど、道から離れているので挨拶は無しだ。

荒地が草原になるとようやく東の森が見えてきた。

森は南北に大きく広がっている。所々森が盛り上げているように見えることから、起伏も結構あるみたいだ。

小道が森に入る手前に、10m四方程度の広場があった。火を焚いた跡があり、少し大きめの石が5個、焚火跡を取り囲んでいる。

「ここで、お昼にするにゃ！」

ミケランさんの一言で、昼食の準備だ。

姉貴は装備を外すと、丸めたポンチヨを解いて中から紙包みを取り出した。

「アキト。お茶をお願いね！」

俺もポンチヨからポットと食器を取り出し、固形燃料でお湯を沸かし始めた。

ミケランさんは森に入って行き、棒を2本持って帰ってきた。一体何に使うんだ？

皆が揃ったので、姉貴は紙包みから黒パンを取出して1個ずつ配り始める。俺も、お茶をシエラカップに半分づつ入れて皆に配った。

「美味しいにゃ。このお茶も珍しいけど、皆で食べると美味しいにゃ。」

ミケランさんは黒パンをモゴモゴ齧りながらお茶を飲んでいる。

「ところで、アリットって森の奥深い所にあるんですか？」

「そうでもないにゃ。・・・この時間だと、森の広場で日光浴してると思っにゃ。」

ん？・・・日光浴してる・・・茸ってどちらかと言うと強い光は嫌うはずじゃ・・・いや、それよりも、この時間って、どういこと？

「採るのは大変なんですか？」
姉貴も疑問を持ったようだ。でも、少し観点がずれてるような気がするけど・・・

「のろまな人には一生無理にや。私達、猫族には簡単にや。ミーアちゃんも大丈夫にや。・・・アキトは素早いかにや？」

「判断基準が判りませんが・・・ガトルは倒せましたよ。」

「なら大丈夫にや。」

2人の会話を聞いてたら余計判らなくなつたぞ・・・何で茸を採るのに素早い必要があるんだ？

「あのお・・・特別な採り方をしないといけないんですか？」

2人の会話に入り込んだ俺に、ミケランさんは振り向いた。

「特別って訳ではないにや。・・・取つたこと無いのかにや？」

「ありません。アリットって茸も今日初めて聞きました。」

「教えるにや。先ず、アリットを取り囲むにや。そして一斉に襲うにや。アリットは吃驚して逃げるから、追い掛け回しながら棒で叩くにや。」

「アリットって動けるんですか？」

姉貴が吃驚して質問した。

「素早いにや。でも、私達猫族の動きはもつと素早いにや。」

さすが異世界、とんでもない茸がいたもんだ。でも、なんだか想像すると楽しくなる。姉貴が草原で「まてー！」って言いながら棒を振り回して茸を追いかけてる姿を想像して思わず「プツ・・・」とふきだした。チラツと姉貴を見ると俺を見て片手を口に当てて笑っているようだ・・・ウムー・・・同じ事を思い浮かべたのだろうか・・・

「そろそろ出発にや。」
ミケランさんの合図で、俺達は装備を元に戻して腰を上げる。
森に入るなり、ミケランさんは腰に差した片手剣で藪を切り始めた。

「アリットを棒で叩くのは意外と加減が難しいにや。棒の先に粗朶をこんな風に縛り付けて、これで叩くにや。」

実演してくれるのはいいんだけど・・・ミケランさん、それではまるで箒です。

それでも、俺は見よう見まねで姉貴と俺と、ミアちゃんの箒を作り上げた。

箒を持って森に行く俺達を他人が見たら何と思うだろう・・・
俺のやる気はどんどん落ちてきているが、こんな事で大丈夫なのか？

鬱蒼と茂る森の中は大分暗い。それでも、ミケランさんはほとんど先を歩いて行く。森に変な動物はいないのだろうかと少し心配になるが、確か、黒1つ・・・俺達よりも遙か上のハンターだ。それなりの注意はしているのだろう。

突然、ミケランさんの足が止まった。

「この先にや・・・ここから右に折れるけど、音を立てないよう
に注意するにや。」

小声で俺達に注意するミケランさんに小さく頷いて了承する。

そろりそろりと小道を離れて森の中を進むと、先の方が少し明るくなる。

さらに進むと、木々が何故か生えていない小さな広場が見えてきた。

そしてよく見ると・・・エリンギみたいな茸が集団で日光浴をしている。大きさも少し大きめのエリンギだ。・・・しかし、ホントにあれが動くのか？

「いいかにや。・・・私が奥。アキトが右。ミヅキが左でミアちゃんはこのにや。私が飛び出したら、一斉に襲うにや。」

小さな声でそう言つと、吃驚するような速さで森の中を移動して行つた。

流石、猫族というだけのことはある。あれだけ早く動いても物音1つしない。

俺達もミアちゃんをこの場に残して移動を開始する。俺達は人間なのでゆっくりと進んで行く。

右に回りこんで木立の間から広場を見ると、まだ気付かれてはいないようだ。

向かい側の木立から箒の先がチラチラ覗く。姉貴も位置に着いたみたいだ。後は、ミケランさんの合図を待つのみ・・・

突然、右手の藪の中から、「ミャー！」って箒を振りかざしたミケランさんが飛び出した。

アリット達は驚いてこっちに逃げてくる。ピョんピョんっと跳ねるような動きはかなり素早い。

俺達も木立や藪から箒を振りかざしてアリットに向かう。

俺に驚いて急に方向を変えようとしたところを箒でピシャリ！・・・これで、1匹？いや1個かな？

更に追いかけて逃げ惑うアリットを箒で叩く。

これって、採取？なのかなって素朴な疑問はあるんだけど・・・今は、ただ追いかけて叩くのみに専念する。

広場に逃げ回るアリットがいなくなつたところで終了だ。戦果を確認すると、10個以上はあるようだ。

1個づつミケナイさんが確認してミーアちゃんの背負つた籠に入れている。

「これは、ダメにや。・こつちは大丈夫にや。・」

どんな判断基準で選別してるか気になってミケランさんの傍に歩いて行く。

「アキト、大至急穴を掘るにや。」

仕事を仰せつかつてしまった。

「はい！」って姉貴がレスキューバックから折畳みスコップを取出す。

受け取つて、とりあえず穴を掘り始めたが・レスキューバックもザックと同じような機能があるらしい・でないと、これだけであのバックは一杯になるはずだ。

直径50cm、深さ1m程の穴を掘ると、ミーアちゃんがさつき撥ねたアリットを運んでくる。姉貴も両手に持つてきた。

「早く埋めるにや！」

少し焦つた感じのミケランさんに従つて、手早く穴に廃棄アリットを放り込む。

続いて土を被せて、トントンと足で踏み固めた。

「急いで此処から離れるにや！」

ミーアちゃんを抱えると、凄い勢いで広場を走りぬける。

俺達も訳が解らなかつたが、ミケランさんが走つていった方向に急ぐことにした。

いったい何処まで走つたのか解らないほどだ。

辛うじて、まだ元に戻らない雑木の倒された跡を手がかりに俺達は走っている。

「あそこにいるみたい！」

姉貴が前方を指差した。なんか2人でやっつてるみたいだが・・
ようやく2人の所まで行くと、そこは小さな小川が流れていた。
籠の底に水辺の大きな葉っぱを敷いて、その上にさっき仕留めた
アリットを水で洗って入れていた。

「随分丁寧にするんですね。やはり、商品だからですか？」

姉貴が、ようやく水洗いが済んでほっとした表情のミケランさんに聞くと、

「違うにゃ。・・アリットはクルキュルの大好物にゃ。アリットに少しでも傷があると嗅ぎ付けて来るにゃ。」

籠に入れたアリットの上にも何枚かの大きな葉っぱを乗せながらミケランさんが説明してくれた。

え！・・それって、食物連鎖みたいな話かな？・・だとすると、あんなにすばしいアリットが好物のクルキュルって何だ？

「使えるアリットは7個にゃ。あとの3個は、明日の朝少し下の砂地で仕留めるにゃ。」

元氣よく立ち上がると、ガッツポーズでミケランさんが宣言した。
そうと決まれば、早速野宿の準備・・どれ、薪でも取りに行こう！

それはもうニワトリとは言えない

東の森の小川畔・・俺達が野宿している場所だ。

パチパチという焚火の音が以外に大きく聞こえる。

後ろには大きな木があり、焚火の向こう側は小川が結構な水量で流れており、何となく安心できる。さらには、猫族のミケランさんがいるし危険が迫ってきたら注意してくれるだろう・・何と云っても、黒1つだ。俺達よりずっと上のハンターだし・・

「ところで、クルキュルって何なんですか？・・危険な獣なんですか？」

食後のお茶をまったりと飲んでいた姉貴がミケランさんに質問する。

「獣ではないにや。こんな形の鳥だにや。」

そう言っつて、地べたに燃えカスの薪で簡単な絵を描いてくれた。

「こんな形にや。頭に鶏冠があつて、ちよつと小太り、それで飛ぶのは下手にや。」

「でも、足には、蹴爪があつてとても危険にや。」

ミケランさんつて画才があるみたいだ。直ぐにそれが何なのか判つてしまった。

どう見ても、どう聞いても、ニワトリだ。

確かに小さい子には危険だろうが、俺でも簡単に捕まえられるぞ。

しかし、ミケランさんが脱兎の勢いで此処まで来たことを考えると・

・ニワトリよりも動きが素早いって事なのかもしれない。それなら、少し危険かも・・

「動きがミケランさん並に素早いつてことですか？」
姉貴も同じように考えてたみたいだ。

「そうにや。この森に100匹位いるかもしれないにや。でもずつと奥に住んでるからアリット採りしてアリットに傷をつけない限り心配ないにや。」

「傷がついたアリットは埋めといたから、もう大丈夫にや。・・・
焚火の番は先にアキトとするにや。もう寝たほうがいいにや。」

そんな訳で、ミケランさんと焚火の番をすることになった。
ミケランさんをよく見ると、頭と耳の色が違っている。頭は茶色、
方耳は白、もう片方は黒だ。・・ひょっとして先祖は三毛猫？

ぼんやりと焚火を見ていると、ミケランさんが片手剣のケースの脇からパイプを取り出した。姉貴のお爺さんが使っていたキセルみたいな長さがある。

焚火の燃えさしを使ってパイプに火を点け、スパアって煙を吐き出した。

ネコってタバコが好きなのかな？って素朴な疑問はあるけど、自分も持っている事を思い出し、銀のケースから1本取り出して、同じようにタバコに火を点けた。

「あにや。アキトもやるのかにや。・・私らネコ族が一緒なら問題にやいけど、匂いが解らなくなるにや。」

「ミケランさんはなんでいいんですか？」

「カンがいいからにや。ミーアちゃんもいいはずにや。」

ネコの第6感ってやつかな？ ということは、現時点で危機はないってことだよな。・・

「少し、聞いてもいいですか？」

「言ってみるにゃ。解ることは答えるにゃ。」

そんな訳で、この世界の疑問をいろいろぶつけてみた。

そして解ったことは、

この世界がジェイナスと呼ばれていること。そして、小さな王国がいっぱいあること。都市や町もあるらしい。

暮らしているのは、人間だけでなく、獣人族、エルフ族、ドワーフ族等がいて、混血も盛んであること。ミケナイさんは猫種の獣人族だが、ミーアちゃんは人間とのハーフらしい。

魔法が存在しており、ハンターは数種の魔法を持っていること。ミケナイさんも持つてるらしいが教えてくれなかった。

魔法は、神殿の神官に料金を支払うことによって得ることができるとだ。あの村には神殿が無いとのことだった。でも、移動神官と呼ばれる人が辺境の村を巡回しているから、その人に対価を払うことによって魔法を使えるようになるって言われた。

ハンターの生活は結構厳しいものがあるらしい。

ミケランさんも、2度程パーティーメンバーを亡くしているとのことだ。「高望みはダメにゃ。」って言われてしまった。

ハンターとして一人前として扱われるのは黒のカードを持った時からだそうだ。それまでは、半人前として簡単な採取をこなすことを進められた。

「でも、連れにガイドがいるときは別にゃ。星2つ程なら上の依頼を受けても大丈夫にゃ。」

しかし、アリット採取は赤2つ。もつと上があったのでは？という疑問に対しては、この依頼のリスクを判断したとのこと。

例のクルキユルである。赤2つでは対処出来ないってミケランさんのご宣託だった。

最終的に、簡単な依頼を数多くこなし、経験を積めってことでミ

ケランさんのアドバイスは終了した。

でも、経験を積んでも、危険な獣は判断出来ないような気がするけど・・・

そんな話をして時間を潰し、4時間経ったところで姉貴を起こして眠りに着いた。

ユサユサと体を動かされて強制的に睡眠を破られる。

どうやら、ミアちゃんが体を揺すっていたらしい。周りを見ると未だ薄暗く、夜明けには未だ程遠い時間のようだ。昨日の昼に適当に合わせた時間では、朝の4時・・・いくらなんでも朝ではない。

「どうしたの?」

「にゃんかいるの!」

ミアちゃんがそう言っつて、指差したほうには姉貴が双眼鏡で何やら監視している。

急いで姉貴のところに行くと、姉貴は双眼鏡を俺に渡して前方を指差した。

姉貴の指差した先に動くものが見える。双眼鏡でよく見ると・・・どう見ても、ニワトリ、それも名古屋コーチンみたいな薄茶色の羽色だ。思わず涎が出てしまう。

さて、どうやって捕まえようかと考えてるときに、そのことに気がついた。

どう考えても、周囲の木々とニワトリの縮尺が合わないのだ。

慌てて、距離計を連動させて確認する。距離80でこの目盛だと・・・

「何だ!あの(モゴモゴ・・・)」

姉貴に手で口をふさがれた。

何と、あのニワトリの大きさはダチョウクラスの大きさがある。

ミケランさんが逃げるわけだ。あの大きさなら蹴爪の長さだけでも短剣クラス、へたな攻撃を加えたら怒らせて一撃である世行きとなる。

姉貴を見ると、クロスボーに足をかけて両手で弦を引いている。殺る気満々のようだ。ショルダーの矢筒からボルトを一本抜き取って、クロスボーの滑走レールにセットして俺に頷いた。準備完了ってことだよな。

ようやくミーアちゃんに起こされたミケランさんは前方のニワトリを見て、

「クルキュルにやー！」って言ったかと思うと、ミーアちゃんを捕まえて近くの大木に登ってしまった。

見た目そんなに恐ろしいとは思わないけど・・・

俺とミケランさんの叫びでニワトリはこっちに気付いたみたいで、こちらを睨んで警戒しているようだ。

姉貴が俺の脇で、クロスボーの照準器を覗き込んでいる。

先端が鉄の円錐で出来た、直径1.5cmのボルトを秒速200m以上のスピードで打ち込むことができる。一体何を対象に作っただか解らなかったが、こんな事態も姉貴は想定していたんだろうか・・・

ニワトリはこちらを敵と認識したみたいで、こっちを睨みながら少しづつ近づいてくる。

パシュッ！と短い音がした。

ニワトリの胸にボルトが吸い込まれ、一瞬ではあったがニワトリがのけ反った。

当たった場所から鮮血が噴出している。

でも、それだけだった。近づくスピードが速まり、首筋の羽は逆

立っている。完全に攻撃モード全開の状態だ。

「早く、木に登るにゃ。」

頭上からミケランさんの声がするが、今からでは遅すぎる。登ったところで、あの大きさのニワトリなら10m近くは飛び上がれそうだ。

走ってくるニワトリを直前でかわして姉貴は槍を打ち込み、俺はグルカナ이프を叩き付けた。

その結果は、驚くことに跳ね返ったのだ。まるで、柔らかいゴムを攻撃したみたいだ。

ニワトリが前方でUターンをすると、再度俺達に向かって走ってくる。

「姉さん、隠れて！」

姉貴は直ぐに木の陰に隠れると、M36をホルスターから取出し狙いを付ける。

俺も、ナイフを投げ出すと、M29を取出して両手で構える。

バァン！

44マグの威力は凄まじい、狙い違わずニワトリの頭を吹き飛ばした。

それでも、ニワトリは走って俺の脇を通りすぎると後ろの立木にぶつかって倒れた。

しばらくの間、足が走っているように動いていたが、やがて緩やかにになり、そして止った。

どうにか、ニワトリを退治できたらしい。ミケナイさんもミーアちゃんと一緒に木の上からスルスルと下りて来た。

「倒したかにゃ。・・・とんでもない武器だにゃ。」

「あのう・・・使った武器については黙って貰えませんか？」

「いいにや。でも倒したことは報告するにや。」

ミケランさんの答えに満足して、M29をホルスターに戻す。

倒したニワトリの様子を姉貴と見に行っただけど、ホントに大きい。これだけで焼き鳥何人分つと考えると気が遠くなる。

攻撃が利かない理由も直ぐに判った。羽毛が何重にも重なっているのだ。これなら防弾チョッキ並みの防護が出来るだろう。

それでも、刺突には少し弱みたいで姉貴の放ったボルトは胸に深く突き刺さっていた。それでも動きに変化が無かったのだ。

まったくもってとんでもないニワトリだ。

「血抜きをするにや。足を縛って木に吊るすにや。」

ミケランさんの指示通りに木に吊るす。結構重い・・・ミーアちゃんより重いぞ！

「とりあえず終了にや。ご飯を食べてアリットを採るにや。」

いつの間にか辺りは大分明るくなっている。

ギニョーギニョーって変な声で鳥も鳴き出した。

「はい。今準備しまーす！」

俺は焚火の傍に戻ると、早速鍋に水を入れてお湯を沸かし始めた。

アリット採取終了

俺達は、リゾットモドキを美味しそうに食べながらミケランさんの講評を聞いている。

「クルキユルは、黒カードの連中が狩る獲物にや。それでもいっぱい人数を集めてするにや。ロープを一杯張った所に誘き寄せて、木の上から矢を射掛けるにや。少し弱ったところを槍で刺すのがやり方にや。」

どうやら、一人前の認証を受けた連中が10人以上必要とするらしい。俺達みたいな低レベルのハンターが狩ったらまずいのかも知れない。

「私達が殺したら拙かったのでしょうか？」

「そんなこと無いにや。たまに運が良くて狩れるものもいるにや。でも、反対の場合が殆どにや。」

それって、反対に狩られたって事なんだろうなきつと・・・

俺がM29のような高速重量弾であるマグナム44を発射できる拳銃を持ってたからよかつたものの、姉貴のM36だと38スぺシャル弾だから危なかつたかもしれない。つくづく規格外なニワトリ・いやクルキユルだと思う。

食事が済むと、ミケランさんの指示に従って、川下に移動する。クルキユルを木から下ろして担いでいくのは、やはり俺に役割が回ってきた。ニワトリモドキだからやはり食べられるみたいだ。

「ここがいいにや。」

そこには川岸に小さな砂地が広がっていた。

「昨日と同じにや。もう直ぐアリットが水を飲みに来るにや。隠れて襲い掛かれれば大漁にや。」

もう、何も言う気はない。アリット採取は小動物の狩りなのだと自分に言い聞かせる。

「ミヅキとアキトは川の上と下で待ち伏せにや。私とミアちゃんはこの木の上で待ち伏せにや。棒は持ったかにや？・合図は私がするにや。」

俺は担いできたクルキユルを茂みに隠すと、下流に行つて藪の中に隠れた。上流側の藪には姉貴はいるようだ。箒が揺れている。

しばらく身を潜めていると、アリット達がやってきた。

ピヨコン、ピヨコンって小さく撥ねるように列を作つて森の奥から次々とやってくる。

ペンギンが列を作つて歩いているみたいに見える。損得抜きで見るとならば、きつと微笑ましい光景なんだろうなって思える程だ。

川岸の砂地に着くと、アリット達は動かなくなった。これがミケランさんの言う水を飲むってことだな。

「ミギヤー！」って叫び声を上げながらミケランさんが木から降りて箒でアリットを攻撃する。ミアちゃんも一緒だ。

「ウオオー！」って俺も叫びを上げて、こっちに逃げてくるアリットを叩く。

「オリヤー！」って声ができることから姉貴も頑張つてるに違いない。

5分にも満たない時間でアリット採取は終了した。とにかく逃げ足が速い。ピヨピヨってあつという間にいなくなつてしまった。姉貴の差し出す折畳スコップで急いで穴を掘る。その間に3人で選別と水洗いをしているようだ。

昨日と同じぐらいの穴を掘ると、早速3人が傷物アリットを運んできた。

「採り方が解ったみたいじゃ。8個は使えるじゃ。」
これで15個、ミツシヨンコンプリートって事になる。

傷物を素早く穴に埋めて、足早に森を後にする。でも俺はクルキユルを担いでいるし、ミアちゃんもアリットの入った籠を背負っている。おのずと歩く速度は遅くなるわけで、昨日お昼を食べた焚火跡に着いた時には、お昼を大分過ぎていた。

お昼は簡単に、お茶と干肉それに硬く焼き上げたビスケットのよ
うなパンだった。

雑貨屋で手に入れた、この世界の携帯食料だが、とても硬い。ミアちゃんがりんごがボリボリ齧つてるところを見ると、みんな歯が丈夫な
んだらうなって思ってしまう。

食事が終わると、またクルキユルを担いで歩き出す。籠は姉貴が
今度は担いでいるけど、俺の代わりに担いでくれる人はいなかった。

村に着いた時にはもう夕暮れ時、「ただいま！」って門番に挨拶
したけど、俺の担いでいる獲物を見て吃驚していた。声も出ないく
らいに・・・

肉屋に行つて、クルキユルを引き取つて貰う。

姉貴は、少し肉を分けてくれって言つてたけど、肉屋さんは大き
な肉の入った包みと蹴爪を渡してくれた。そしてクルキユルの値段
は、何と銀貨2枚と大きい銅貨5枚。250Lを渡してくれた。

「クルキユルは美味しいじゃ。そして羽根も防具の材料になるに
ゃ。」

ミケランさんが吃驚してお金を受け取った俺達に説明してくれた。ギルドに行くと、昨日のお姉さんにカウンター越しに終了を報告する。

はい！ってアリットをカウンターに乗せると、ご苦労様って言いながらアリットを調べて90Lを渡してくれた。

「爪も出すにゃ！」

ミケランさんの指示で、ミアちゃんはバツクからクルキュルの蹴爪を出した。

「殺ったのですか？」

お姉さんは吃驚したみたいだ。

「運が良かったみたいです。ミケランさんもいましたし・・・」

「出来るなら2度としないでくださいね。クルキュル討伐は黒5つ以上でやっとなんですから。」

そう言いながらも、はい！って銀貨1枚を渡してくれた。

さらに水晶玉を取出すと、カードの提示を求められた。

皆のカードを姉貴がまとめて出すと、一人ずつ前と同じように水晶玉を握っていく。

「はい。カードをお返しします。ミツキさんとアクトくんは星が1個つつ増えましたよ。ミアちゃんとミケランさんはそのままです。」

「じゅあ、これで終わりにゃ。また一緒に出来るといいにゃ。」
そう言っって離れようとするミケランさんを慌てて姉貴が止めた。

「待って下さい。報酬の分配が未だですよ。・・・えーと、全部で440Lですから、ミケランさんの取り分は110Lでいいですね。」

「それだと多すぎるにゃ。今までだって1割位だったにゃ。」

「一緒にアリット採取したチームじゃないですか。山分けです。」
そう言って姉貴はミケランさんに銀貨と銅貨大を1個づつ渡した。
「ありがとにや。また一緒に行こうにや。」
ミケランさんが俺達に手を振ってギルドの階段を登っていく。確かに、今回に依頼はミケランさんがいなければ出来なかったに違いない。でも、アリット採取をしなければ危険な目にも逢わなかったような気がしないでもない。

「ところで、相談なんですけど・・・文字の読み書きを教えてくださいませんか？」

「チツチャイ子供相手ならあるんですが、ミヅキさん達にはちょっと・・・」

「そうですね・・・」
姉貴も字が読めない事の重要性に改めて気付いたようだ。でも、教えて貰える処が無いとなると・・・どうやって覚える？

お姉さんから2人のザツクを受取り宿に戻ると、おばさんに怒られた。

曰く、「宿代を払って泊まらないとは何事だ！」ってことだ。確かに急に決めたからね。

機嫌を取るべく、これを皆で食べましょって出したクルキュルの肉で一騒ぎ。

「こんなの10年早い！」って、それほどクルキュルは恐ろしい相手らしい。

それでも、その晩に1階の食堂でハンター達に振舞われた焼き鳥は美味かった。

その夜、姉貴と話合って、やはり文字が読めないことが問題だと思見が一致した。

「明日も、ガイドが雇えるわ。クルキユルで大分稼いだからね。其の時に依頼用紙で文字の読み方を教えて貰おうと思うの。」

「いいんじゃない。あしたもミケランさんだともっといいけど。」

「そうね。いろいろ知ってるし、文字も読めるけど・・・最後に「にゃ。」って付けるのが可笑しくて・・・」

「ミーアちゃんも「ね」が「にゃ」になるよ。猫族の特徴かもね。」

そんなことを話していると夜も更けてきた。いろいろあつたけど、ハンターって結構楽しいかも！

薬草採取と魚釣り

次の朝、宿のおばさんの有難いお小言とお弁当の包みを頂いて宿を出た。

おばさん曰く、「いいかい。小さなことからコツコツと・・・が基本だよ。」と、どっかで聞いたようなフレーズではあったが、その言葉に間違いはないと昨日の件で十分理解したつもりだ。

そんな訳で先ず雑貨屋に向かった。

採取がメインになればミリアちゃん以外に採取品を入れる籠も必要だ。それに薬草等によつては草の根ごと採取するものもあるはず。たぶん専用の何かがあるだろうってことでギルドに行く前に立ち寄ることになった。

「おはようございます」って雑貨屋に入るとおじさんがカウンタ―でパイプを煙らせている。

「薬草採取なんかを使う道具はありますか？」

「あるよ・・・これを皆使ってるな。ケース込みで15Lだ。」

そう言つて棚から取出したのは、長さ20cm位の金属のナイフみたいなものだった。

ナイフと違う点は、片面が湾曲してスコップみたいだし、横幅も7cmはある。でも先端は尖っているし、両側も軽く研いである。このままナイフとしても使えそうだ。

「では、これを3本と、小さな籠を1個ください。」

姉貴は、代金を支払つと俺に品物を受け取らせる。おじさんは、おまけだと言つて小さな砥石も付けてくれた。

籠に姉貴と俺のザックを入れて肩に掛ける。ミリアちゃんは背負

えるけど俺には籠が小さくて背負うのは無理だ。

ギルドに行くと、姉貴が早速ガイドの依頼をすることにした。

「すみません。またガイドをお願いしたいんですが・・・」

「はい。ちよつと待って下さいね。・・・え〜つと、キャサリンさんがいますね。待ってて下さい。」

お姉さんはそう言っただけで階段を上って行き、しばらくすると若い女の子を連れて下りてきた。

「彼女がキャサリンさんです。黒1つですが、魔法も使えますよ。」

「キャサリンです。水の魔法が使えますよ。」

「よろしくお願いします。私は、ミヅキ。そっちがアキト。そして、ミアちゃんです。」

「それで、今日はどんな依頼を行うんでしょうか？」

キャサリンさんはそう言っただけで首をチヨコンって横に傾ける。仕草的には、可愛いかも知れないけど・・・どう見ても姉貴よりは上だ。そんな仕草は卒業しないといけないような気がする。

「前はアリット採取でしたから、出来れば簡単な採取系の仕事をしたいです。文字が読めないので選んで欲しいんです。」

「解りました。では掲示板に行きましょう！」

俺達はキャサリンさんに引きつられて掲示板の所に行くと、彼女は掲示板の下の方を探し始めた。

「薬草採取がありますね。依頼数は多いんですが、この季節なら何とかなと思いますよ。」

「どんな内容ですか？」

「え〜と、採取依頼。対象は薬草のサフロン30本以上、毒消し草のデルトン10本以上。報酬はサフロン：2L、デルトン：3L

です。」

「それは、何処に生えてるんですか？」

「日当たりの良い小川の土手等に生えてますよ。現物は現地で私が教えましょう。」

「では、それにします。．．もし時間があれば依頼書の読み方を教えてください。」

「いいですよ。では、出発しましょう！」

姉貴はキャサリンさんから依頼書を受取ると、俺の籠からザックを取り出しカウンターに持っていった。

カウンターでガイド料を払い、依頼書にハンコを押して貰うと、前のようにザックを預ける。これで、準備完了だ。

早速ギルドを出ると、村の門番さんに挨拶して、泉の森に向う。

姉貴は早速キャサリンさんに依頼書に書いてある文字の読み方を教わっているようだ。アリット採取の依頼書も取出して、キャサリンさんと話し込んでる。

俺とミーアちゃんの籠持ち組は、姉貴達の後ろをのんびり手を繋ぎながら歩いている。たまに振り返って俺を見る姉貴の目がちよつと怖い気がするのはいのせいだろうか．．

しばらく歩いていると十字路に出た。小川はこの先のはずだ。

木橋の架かっている小川に出ると、橋を渡って今度は川下に歩いていく。

「畑近くの薬草は農家の人の収入源ですからね。離れたところで採取です。」

そんなものかと思いつつも、皆でキャサリンさんに付いて行く。

村を出て2時間近く歩いただろうか、キャサリンさんが「ここで

「す。」って言って止まった所は、小川までならかな傾斜地が続く場所だった。

キャサリンさんは、土手の草むらを少し探して、2本の草を俺達の所に持ってきた。

「この、ギザギザ葉っぱで長いのが、サフロンです。そしてこの丸い葉っぱで短いのがデルトンです。」

俺的にはヨモギみたいなのがサフロンで、タンポポみたいなのがデルトンって覚えることにした。

「採取依頼ですから、根の近くで採取する必要があります。採取用のナイフはありますか？」

「これですね！」って姉貴は俺が降ろした籠から、スコップみたいなナイフ・・・（これからはスコップナイフと呼ぼう）を取出した。

「ありますね。持ってない時は皆さんのナイフや短剣をつかうことになると思います。」

「じゃあ、始めましょう。」って、皆で一斉に薬草採取を始めた。タンポポ、タンポポ・ヨモギ、ヨモギ・ヨモギ・・・って呟いてたら、「何の呪文ですか？」ってキャサリンさんに聞かれてしまった。

とりあえず、「早く見つかる、おまじないです。」って答えただけで、遠くで姉貴が笑ってた。

昼近くになったので、採取作業をひと段落して昼食を取ることにした。

近場で薪が取れないので、固形燃料でお湯を沸かす。

ポットのお湯が沸く様子を見て、「へえ、こんな便利なものがあるんですね。」ってキャサリンさんが感心してた。

シエラカップにお茶を入れて皆に配ると、姉貴が宿のおばさんに

作ってもらったお弁当を配る。お弁当の中身は・・・野菜と薄く切ったハムを挟んだ黒パンだ。

モシャモシャと食べていると、ピチヨン！って音がした。

「お魚がはねた！」

ミーアちゃんが水面を指差した。

「どんな魚なんだろうね。」って姉貴がミーアちゃんに微笑んでる。

「たぶん、リリックだと思います。この小川に結構いるんですよ。食べても美味しいですし・・・」

そう聞いては黙っていられない。

早速周囲を探す・・・あった。たまたたって走って行き雑木の真直ぐな奴を1本切取ると、枝を払って即席の釣竿を作る。

腰のポーチからサバイバルセットを取出すと釣針と糸を出す。糸を釣竿に結び、糸の途中に適当な小枝で浮きを作る。糸の先に釣針を結べば出来上がり！

釣針にハムの欠片を付けるとポチャンと水面に投げ込んだ。

後は、待つだけだ・・・

「お兄ちゃん、今ピコピコってなってたよ。」

「ミーアちゃん。まだ、待つんだ・・・」

皆が俺の後で水面の浮きを見詰めてる。

そして、浮きがグリーンって水中に沈んだ時、竿を持つ手を軽く返す。この動作だけで釣竿の先端は2m近く上がり、ガツチリと魚を釣針に掛けることが出来る。

たつまち、グン、グリーンっと釣竿を引き込まれる。結構な大物だ。適当にいなして魚を水面まで上げ、空気を吸わせる。これでおとなしくなるのだ。

岸边に近づけて、一気に取込む。陸に揚がった魚はバタバタ跳ねていたが、やがて動かなくなった。

「これって、マスだよな？」

「マスじゃなくて、リリックです。美味しいですよ。長持ちするように表面を炙るんですが・・・」

今度は、姉貴が素早く岸边で辺りの枯草を焚きはじめた。釣竿を作るときに払った小枝に内臓を抜いたリリックを差して炙り始める。

「次は？」って要求してるし・・・

でも、直ぐに次が来た！ 同じように取込むと姉貴に渡す。

今度は、内臓の抜き方をミーアちゃんに教えているようだ。串の刺し方まで教えてる。

ミーアちゃんが焚火の端にリリックを刺した時、更なる獲物を釣り上げた。

「ホントにお上手ですね。皆さん苦労して取っているんですよ。」

「釣をしらないんですか？」

「似たようなことはしてるんですが、さっき見たような曲がった針は初めて見ました。」

ひよつとして、直針つてやつ？ 真直ぐな針の真中を糸で結んで釣るって話は聞いたことがあるけど・・・

そんな事を考えながらも、次々と釣り上げる。それをミーアちゃんがせつせと炙っていく。

さて、こんなものとミーアちゃんの方を見ると小さな焚火の周りに15匹位魚が炙られている。

姉貴の方は・・・キャサリンさんと俺達が採ってきた薬草を分類し

ている。

「サフロンが40本、デブリンが25本ですね。採取完了ですが、戻りますか？」

キャサリンさんの完了確認で、姉貴が小さくガッツポーズをしている。ホントに子供っぽいんだから。

「アキトの方はどうなってるの？」

「大体、15位獲れたよ。売ればもつといいんだけど・・・」

「売れますよ。確か上のほうにそんな依頼がありました。誰かが依頼を受けていれば、食堂で買取ってくれます。」

まだ明るい内にギルドに帰ると、早速依頼完了の確認を受ける。

ついでにリリック獲りの確認をしたところ、依頼用紙を持ってくればいいとのことなので、早速掲示板からキャサリンさんが用紙を剥がしてきた。

「リリックは10匹以上で1匹5Lですね。」

数を確認すると15匹・・・10匹で依頼を完了し、3匹は持ち帰り、後の2匹は・・・

「あにゃー。アキト達にゃ。今日は、キャサリンと行ったにゃ。

私は飲みすぎて今日は休みにゃ・・・」

「これ、今夜キャサリンさんと食べてください。」

俺が2匹のリリックを差し出すとミケランさんの目が輝いた。

「リリック・・・リリックにゃ・・・リリックにゃ。」

万歳してる・・・今度は踊りだした・・・俺の両手を持ってぶんぶんしてるし・・・そんなに美味しいのか？

姉貴がお姉さんに頂いた報酬は、205L。

「キャサリンさん。今日はご苦労様でした。」そう言って、52Lを姉貴はキャサリンさんに渡した。

「ガイドの報酬は1割です。こんなに頂けません。リリックまで貰ってますし・・・」

「今日は1日、私達のパーティーの一員でしたから、報酬は山分けです。」

どうもありがとって、キャサリンさんはまだ浮かれているミケランさんを連れてギルドを出て行った。

また明日って、お姉さんに挨拶して宿に戻ると早速宿のおばさんにリリックを料理して貰った。

さらに盛られたリリックの香草焼き・・・絶品だ。

ミアちゃんが「こんな美味しいの初めて！」って言うてるし、姉貴もあまり好きではない魚料理を残らず平らげた。

ミケランさんが踊りだす訳だ。

ミケランさんの頼み事

食事が済んで部屋に帰ると、姉貴がにっこり笑って依頼書をオシリのレスキューバツクから取り出した。

「キヤサリンさんのおかげで、文字の読み方が段々解ってきたわ。」
「文字って言っても、ギリシア文字と楔形文字の合体型だろ。辞書も無いのに無理だと思ってたけど・・・」

「そうでもないのよ。先ずこの依頼書だけ・・・」
姉貴はザツクからノートとボールペンを取り出す。そして、ノートの文字を書き始めた。

「この文書には、これだけの種類の文字が使われてるわ。そして今日の依頼書の文字を追加すると・・・これだけなの。全部で30種類。アルファベットより多いかも知れないけど、濁音、半濁音、伸ばす、詰めるの文字が独立して存在することに注意すれば、殆どローマ字読みが出来るのよ。」

「ちよっと待って、それだとこの世界は日本語が母体になってることになるよ・・・確かに、日本語で会話が通じてるけど・・・」

「あまり気にしないことね。今は読む糸口が出来た事を喜ぶべきだと思うけど。」

「それと、数字はこの楔形文字ね。1から9までの文字はこうなってるわ。それで、ゼロの概念が此処にはあるのよ。1の文字の横にこの文字を付けると、10になるし、更に横に同じ文字を付ければ100になるの。」

「10進法をつかつてるのか・暦も出来たら解るといいね。」
「その辺はおいおいと教えて貰うわ。ところで明日なんだけど、ハンター業はお休みして、ミアちゃんの服を買おうと思うんだけど、いいかな？」

姉貴はザックにノート類を仕舞うと、姉貴のベッドで早々とお休み中のミアちゃんを見ている。

確かに、ミアちゃんの服は碌なもんじゃない。シャツだって、靴だってそうだ。

本来、採取みたいな依頼はそれ程高額収入にはならないはずだが、運がいいのか悪いのか、そこそこの収入を得ている。

ここは、ちゃんとした服装をそろえてやったほうがいいに決まってる。

「俺は、いいと思うな。明日の朝、宿のおばさんに仕立て屋さんを聞いてみたら？」

「そうだね。じゃあ、おやすみなさい。」・・・「おやすみ！」

次の朝、俺達は部屋の扉をドンドンって叩く音で眼が覚めた。部屋のカーテンの隙間からはまだ朝日が差し込んでいないし、腕時計は6時を指してる。

誰だこんなに早く・・・と思いながらも、服装を整えて姉貴達の方も終わった事を確認して、扉の横に歩いて行く。

姉貴達が扉の正面からずれた事も確認する。

「こんなに早くから、何方ですか？」

「ミケランにゃ。開けて欲しいにゃ。」

俺は採取鎌を手に取ると、ゆっくりと扉の鍵を開けた。

ボタンって扉が開くとミケランさんが入ってきた。どうやら1人のようだ。

「聞いて欲しいにや。ギルドに大量のリリック獲りの依頼が入ったにや。手伝って欲しいにや。」

急いで話すミケランさんの迫力に負けて、手伝う事を約束しちやっただけど・・・

今日は、ミアちゃんの服を買う日って決めてただけど・・・どうしよう！

「ミケランさんは1人なの？」

「キャサリンが一緒にや。」

姉貴はちよつと考えて、俺を指差した。

「アキトとミケランさんは先行。私とキャサリンさんはミアちゃんの服を買ってから行くわ。」

「それと、ちよつと待っててね。」

姉貴はザックを漁りだした。ここに入れといたんだけど・・・等と言っているが何が出てくるのかな？

「はい！」って渡されたものは、俺の愛用の釣竿だ。4.5mのカーボンロッド振り出し式だ。仕舞えば50cm位に短くなる。

万能竿だけど先調子で山女から鮎まで何でも狙えるのがウリだったんだけど。何で姉貴のザックに入ってるんだ！

続けて、「これもね。」って渡されたのが小型のタックルボックス。当然、俺のだ。確かに竿だけじゃどうしようもないけど・・・

とりあえず、ポンチョに竿を差し込んで、ミケランさんと出かけることにした。

1階の食堂に下りると、キャサリンさんがお茶を飲んでいた。

「ごめんなさいね。昨日捕ったりリリックを町の商人が聞きつけてギルドに依頼したみたいなの。20匹で2000L破格の報酬だわ。」

「確かに美味しい魚でした。」

「それに猫系の獣人は、あれに目がないのよ。ミケランが一生懸命なのは、また自分が食べたいからなのよ。」

「そんなこと無いにゃ。・・駆け出しハンターにいい依頼を紹介したいだけにゃ。」

ミケランさん必死の弁明ですが、信じる人は誰もいない。

それでもキャサリンさんはミケランさんの話を聞いてあげてる。優しい人なんだなって思ってしまう。

台所から姉貴が出てきた。俺の所に来ると、「餌はこれでいいでしょ。」ってハムの切れ端がたくさん入った紙袋を渡してくれた。

「お弁当は、後で3人で届けるから、頑張つてらっしゃい！」

姉貴とキャサリンさんに送られて、俺とミケランさんは小川へと向う。

まだ朝早い時間だけれど、森へ向う小道は畑に行く農家の荷車や高額依頼料に目が眩んだハンター達が歩いている。

「早く行かないとみんな捕られちゃうにゃ。」

ミケランさんがそんな事を言っただけを急がせるが、皆はどうやって捕るんだろう？

キャサリンさんはそんなに釣れないって言ってたけど、何か秘策でもあるのだろうか？

「ところで、ミケランさんはどうやって、リリックを獲るの？」

「私は獲らないにや。アキトが獲るのを見張ってるにや。」

自信を持って答えられてしまった。でも、こうもハンターが多いとトラブルが起きる可能性も有るのだらう。そう考えれば、黒1つのミケランさんは頼もしい用心棒と言える。

小川に架かる橋を渡って川下に歩いて行く。

「この辺で昨日はリリックを獲ったんだ。ほら、焚火の跡があるでしょ。」

ミケランさんに教えたけど、そこにはもう何組かのハンターが釣をしていた。

釣と言っても竿を使わずに、針に餌を付けて、糸の途中に石をつけた奴を川に投げ込むやり方だ。そんなんで釣れるのかと不思議思う。

更に川下へ行くと、ちょっとした木立の蔭が淵になっている場所があった。

小川の水の色がその辺りだけ紺色に変わっている。ウム・・・いいポイントだ。

「ミケランさん。ここで釣るよ。ホントに見てるだけなの？」

「そうにや。私が見張ってるから安心して獲ってにや。」

ポンチヨから釣竿の袋を取出して、腰のポーチからタックルボックスを取り出す。・・・たぶんこれでいいはず・・・と虹鱒用の仕掛けを引張り出して、竿に糸を結ぶ。

タックルボックスは邪魔になるのでポーチに戻す。

竿を伸ばしながら、糸巻きから糸を手繰りだす。全部出し終えると、丁度釣針の位置が手元にくる長さだ。

適当に浮き下を調整して、釣針にハムの欠片を刺す。

そして、水の色が変わる辺りにポチャンっと投入する。

直ぐに浮きがスーっと引き込まれる。サッと手首を返すと腕にグググーっと引きが伝わる。

竿の弾力で魚を弱らせて手元に寄せると一気に引き抜く。・・・
匹ゲット！

「凄いにゃ。もう一匹目にゃ。」

ミケランさんは嬉々としてリリースの内臓をナイフで取ると、茅みたいな長い茎に魚を突き刺して次を期待している。

餌を付け直し投げ入れると直ぐに当りが来る。

次々と釣り上げ、ミケランさんに渡していく。それをミケランさんが片っ端からナイフで処理していく。何か流れ作業みたいだ。

「しかし、見ていてあきねえな！」

うん？振り向くと、知らない壮年の男がパイプを煙らせながら、俺達の作業を見ていた。

「何時からいたんにゃ。見てもあげないにゃ。」

ミケランさんが早速抗議をしているが、相手は無視してるみたいだ。

「さつきからだが、そんな獲り方は始めて見るな。」

ちよっと一休みしたかった所なので、一旦竿を下ろした。

背中のグルカナイフを抜くと、雑木を払って薪を取る。男が座ってる辺りが平らなので、薪を重ねて焚火を作った。

早速、ミケランさんがリリースを串刺しにて遠火で炙り始めた。

ポンチョからポットを出すと、水筒の水を入れて焚火の傍に置く。

「コップは持っていますか？」
俺の質問に「ああ、持ってる。」と答えると、男は焚火に寄ってきた。

銀のケースからタバコを1本取ると焚火の薪で火を点ける。
適度な労働の後の一服は格別だ。・・美味い。ミケランさんも一服してる。

「その煙草も変わってるな。パイプ無しで使えるのか・・」
男は興味深々だ。

「始めまして。俺はハンター初心者のアキトと言うものです。あちらのミケランさんの指導を受けています。」

「おお・・ご丁寧に。俺は、グレイ。黒2つのハンターだ。ギルドに行く今日は小川が面白いと言うので来て見たが、なるほど来たかいが有った。」

ミケランさんは黒2つの言葉に安心したようだ。ハンター同士の争いはご法度。殺してもすればギルドが国中に討伐隊を組織するって聞いたことがある。

「もし良かったら、アキトのナイフを見せてくれないか？」

「これですか？」

俺はグルカナイフをグレイさんに手渡した。
握りを確かめ、振った時のバランスを見て、最後に刃先をじっくりと見ている。

「これは、凄いな・・俺もナイフを使うがこんなナイフは初めてだ。是非これを作ったドワーフを教えて欲しいものだ。」

男はそう言う。「ありがとう」って俺にナイフを返してくれた。

「これは、ドワーフではなく人が鍛えたものです。でも、その人にもう逢う事は出来ません。」

「そうか、亡くなったか・・・しかし、人の身でそれ程の鍛造が出来るものがあるという事は、世界は広いということか・・・」

グレイさんは残念そうに言った。

「これでも食べて諦めるにや。」

ミケランさんが串焼きのリリックを1本グレイさんに手渡した。

俺にも1本くれたけど・・・これって依頼品だよねって、ミケランさんも1本食べてるし・・・

釣りの見物人

「え！ パトロール？」

グレイさんは、串焼きにしたリリックを俺が入れたお茶を飲みながら話してくれたことを要約するとそんな感じだ。

リリックの高額買取で村のハンター達が一斉にリリック獲りに出かけたらしい。大勢のハンターが集まるとちよつとした事で争いが起きる可能性が十分にある。

いくらハンター内の掟が、相互不干渉であつてもちよつとした喧嘩までご法度であつては息が詰まる。しかし、ハンターは常に武器を携帯しているから死人が出るような喧嘩になる前に仲裁してやる必要があるとの事だ。

「村のハンターで黒の上位者3名が見回ってるってことだな。全く迷惑な話だが、リリックは食えるし、珍しい物も見ることが出来た。俺的には満足している。」

「ハンターについて少し教えていただけませんか？ なったばかりで解らないことばかりなんです。」

「ああ、いいとも。」

そんな事で新たに解ったことは、黒レベルのハンターは毎年3回は、低料金でギルドの求めに応じなければならぬという事。これは、ミケランさん達のガイドやグレイさんのパトロール等がそれに当たるという事だ。

でも、技量的に低い黒レベルと、高い技量を持つ銀レベルには該当しないようだ。最も、銀レベルは王国に数人とのことだから、いろいろと忙しいのだろう。

更に、ギルドの緊急要請という全レベルハンターの一斉招集があ

る。これは、魔物の襲来等が発生した場合等に王国の軍隊に一時的に編入されるもので、毎年何処かの国で行われているとの事だ。召集期間中の食事と住居は提供されるし、召集期間に応じた報酬も支払われるとのことだが、その戦いで命を落とす若者も多いとの事だ。

「脅かす訳じゃないが、赤5つまではこの村にいたことだ。人口が多ければ多いほど魔物襲来の可能性が高まる。獣討伐を数回引受けて自分の力量を確認しておけ。」

「アキトはガトルや、イネガルこの間は、クルキユルも倒したにや。」

ミケランさん・・・この場でそれを話すのはどうかと思いますが・・・

「ホントに赤3つなのかな？俺でもクルキユルは願ひ下げだぞ！」

「運が良かっただけです。ミケランさんもしましたし・・・」

「ちょっと、付き合え！」

俺の弁明も空しく、 그레이さんは俺を立たせると、自分の装備を外しはじめた。

「どうした。ちょっとした小手試しをしたいんだが・・・武器は無しだぞ。」

ぼうつと立っている俺に 그레이さんはそう言って催促する。

仕方なく装備ベルトのバックルを外して、サスペンダー毎脱ぐように装備を外した。

軽く屈伸をして準備運動を終了させる。

焚火から離れて 그레이さんが立っている。スタスタとその前に行き、軽くお辞儀をした。

그레이さんを前にすると、やはり凄い威圧感だ。

身長は俺より少し高い位だが、筋骨隆々として格闘技の選手みたいに見える。

2 m程の距離を取って、左手を低く前に出し、右手を後方上に、そして体を低く構える。

「始めて見る構えだが、それでいいの。．．行くぞ！」

言った時にはもう俺に向って素早く足を踏み出して顔面に上から拳が向ってきた。

左手で、外側に撥ね退けるように回避すると同時に相手の手首を握る、体を半回転させると同時に左手を捻りながら右手でグレイさんの肩を軽く押し上げると．．グレイさんの体が前のめりに回転して地面に叩きつけられた。

「何をしたんだ。魔法か？」

「グレイさんが自分で自分を投げたんですよ。腕を折られないように体が反応したんです。」

「そうか．．詠唱も無しに魔法は使えんしな．．行くぞ！」

今度は回し蹴りで俺の脇腹を狙ってきた。海兵隊のマーシャルアーツみただけ、この手の攻撃方法は簡単に対処できる。

半歩下がって体を半回転させると相手の後が取れる。更に半回転させて同じように回し蹴りでグレイさんの後頭部を狙う。

グレイさんは分かっていたように両腕を交差させて俺の蹴りを防いだが、それは俺も予想していた。

一気に体を落とすと、両腕で体を支え両足でグレイさんの膝を蹴り抜く。

「ウガア！」って叫んで俺のほうに倒れてくるところを体を転がして下敷きになることを防いだ。

と、其処へ、ドドオーン！！と爆炎が轟いた。

慌てて、 그레이さんは飛び起き俺と共に辺りを見回す。

「コラー！ 何やってるの2人とも。喧嘩はダメでしょ！！」
デカイ声が遠くから聞え、何人かの人影も見える。走ってくるその姿が大きくなると・・・姉貴達だった。

やって来たのは4人。姉貴達とエルフの女性だった。

「はじめまして。マチルダです。」

と言った後は、 그레이さんへの口撃だ。まるでおれの母さん並に威力がある。みるみる 그레이さんが頂垂れ始めた。

「あのう・・・喧嘩してた訳じゃないんですけど・・・」
俺が弁明しようとしても、「この際だから言い聞かせてるんです。」の一言で、更なるお叱りを 그레이さんに浴びせている。

とりあえずほっといて、姉貴達に近づいた。ミアちゃんが姉貴に隠れている。

「ほらほら、ちゃんとお披露目しないと・・・」

姉貴が後のミアちゃんを押し出す。

うん。可愛い・・・薄茶色の綿のシャツとパンツ。上着はなめし皮のワンピースだが、皮の縫目を全て一つ一つ縛って垂らしているからインディアンの少女のようだ。足には短いブーツを履いている。

腰のベルトには俺製作のバッグとスコップナイフのケースが腰の後になるように取り付けてある。

「可愛いよ。ミアちゃんは何を着ても似合うね。」

そう言ったら、顔を赤くして素早く姉貴の後に隠れてしまった。

キャサリンさんはミケランの傍で状況確認をしているようだ。

どうやらメンバーが揃ったみたいなので、水筒の水をポットに注ぎ足してお湯を沸かし始まる。

「あのう・・・お昼と一緒に食べませんか？」

姉貴が取込み中のマチルダさんに声を掛ける。

「すみません。内のグレイは直ぐにこうなるんです・・・」

「ありがとう、頂くよ。」

2人も焚火の傍にやってきた。グレイさんは少し足を引き摺っている。それを見たキャサリンさんが急いでグレイさんに近づいた。グレイさんの引き摺っていた足に右手を当てると何やら呟いている。

「サフロ！」

最後に言った言葉と同時に右手が光ったかと思うと、キャサリンさんが立ち上がった。

「癒しの魔法を掛けましたが、どうですか？」

グレイさんは真直ぐ立ったり、ピョンっと跳ねたりして足を確認している。

「大丈夫だ。ありがとう、助かった。」

「私からも、礼を言います。まさかこんな所に水の魔法の使い手がいるとは思いませんでした。」

お弁当は何時もの黒パンサンドにお茶だけど、後から来た人達にはリリックの串焼きが1本づつ追加だ。俺達は先に頂いたんだけど、ミケランさんは羨ましそうに姉貴達を見ていた。

「ところで、どれ位釣れたの？」

「これだけにや。20匹以上あるにや。」

キャサリンさんの質問にミケランさんが自分の事のように報告する。

「凄いですね。橋の下の方で獲ってる人達はまだ数匹ですよ。」
マチルダさんが驚いている。

「そうだろう。だから俺もここで見てたんだ。」

「見てるだけならそうしなさい。何で自分より格上のハンターと手合わせなんかするんですか。」

「でも、アキトは赤3つだぞ。おれの方が格上だ。」
自信を持って答えるグレイさんにマチルダさんは驚いたようだ。

「たぶんグレイさんよりも技量が上の方でも、素手の攻撃は防がれると思います。私達が習得した武術は相手の攻撃を利用した攻撃ですから、強ければ強い程反撃力が上昇します。」

「最初に投げ飛ばされたあれか？ 確かに何時投げられたか分からなかったが。そういえばアキトは俺が自分で身を投げたと言っていたが。」

「その通りです。私達には不自然な形を自ら本に戻す自然な動きが備わっています。ですから相手に不自然な体制を強いれば・・・」

「自分で転がるのか・・・とんでもない武術だな。言われてみればその通りだと納得するが。」

「でも、欠点が1つ。自ら攻撃できない。ですから、さっきの技も防衛手段に特化した技なんです。」

姉貴とグレイさんの会話でマチルダさんの疑念も少し薄らいだよ
うだ。

少し変わった護身術とでも思ったみたいだけど、合気道の本質は
そうではない。そこは姉貴も言う事はなさそうだ。

昼食を終えると、また俺は竿を握り、リリックを釣り始める。

たちまち数匹を釣り上げると、マチルダさんが驚いて見ていた。

「お昼をどうもありがと。まさか、ここでリリックを食べられるとは思わなかったわ。」

マチルダさん達は俺達に丁寧に礼を言って、小川の上下に分かれて歩き始めた。

今回のリリック獲りの監視が目的だと言っていたし、本来の任務に戻ったようだ。

しばらく釣り続けたが、入れ食い状態なのでたちまち焚火の周りはリリックで一杯になった。

竿を収めて片付けを始める。

「沢山獲れたにや。」

ミケランさんが喜んでる。それをキャサリンさんが苦笑いしながら見てる。

姉貴が背負ってきた籠に、岸边に生えていた大きな葉っぱを敷いて戦利品包む。これなら、周りから注目されずに済みそうだ。

小川を上流に辿って橋の方に歩いていくと、ハンター達が小川の傍にいっぱい集まっている。

人は多いのだが、釣れてるところを一度も見ずに橋についた。やはり、リリック釣りはこの世界では難しい依頼なのだろうか。

そんな事を考えながら帰路についた。

ギルドに収めたりリックは30匹。俺達の人数分は差し引いてだ。それでも、2匹程余計に貰ったミケランさんは大喜びだ。

カウンターのお姉さんから貰った銀貨3枚をミケランさんは姉貴に差し出したが、姉貴は1枚だけ貰って、残りをミケランさんに渡した。

「こんなに貰えないにや。獲ったのはアキトにや。」

「だから、1枚貰いました。今回の依頼はミケランさんが教えてくれたものだし、リリックを処理したのはミケランさんですよ。」

宿に帰るとおばさんにリリックを渡し、1匹だけミアちゃんに料理して貰った。2匹貰えると知ったおばさんの喜びもミケランさん並だ。

聞けば、若い頃に食べたのが最後だと言っし・・俺達漁師になっ
たほうが良いのかもと思ってしまっし。

畑を荒らす白い奴

ハンターの就寝時間は結構早い。

これは一日中、出歩いていることから結構疲れるためだ。それに、ギルドでの依頼は早い者勝ちなので、早起きして依頼を受ける者が多いためだと思う。

「依頼を受けてから朝飯が普通だな。」ってグレイさんも言っていた。

郷に行つては郷に従えの言葉を実践しようと思つたと早々とベットには入つたが、今までの生活習慣を急に変えることはできず、しばらくは姉貴と話をすることになる。

今夜はグレイさんに教えて貰つた一斉召集と魔族の話をした。

「そうなの。一斉召集についてはギルドでの話に無かつたわね。明日聞いてみましょう。それと魔族だつて、どんなのかな？」

「赤らつまではこの村に居ろつて言われた。人が多いほど可能性が高いそうだよ。」

「まだ3つだから、しばらくこの村にお邪魔することになるわね。」

「いや、ミアちゃんが1つだから、まだまだ居る事になると思ふけど・・・」

「ミアちゃんつて武器は使えないのかしら？」

「あの部落ですつと薬草採取で暮して、危険が迫れば木に登つてみたいだし、使えないと思ふよ。」

「でも、何時かは使う事になると思ふの。ミケランさんに相談してみようか。同じ猫族みたいだから。」

「そうだね・・・じゃあおやすみなさい。」

そんな訳で早速次の日はギルドに押しかけ、ガイドを依頼する。

「昨日はありがとにゃ。」って言いながらやってきたミケランさんに早速相談を持ちかける。

「そうにゃ・・・猫族は素早いにゃ。だからこれを使う人が多いにゃ。」

そう言って、腰の片手剣を叩く。

やはり、片手剣か・・・でも、ミアちゃんには重そうだけど・・・

「最初からミケランさんみたいないな剣じゃないとダメですか？」

「いろんな種類があるにゃ。でもアキトみたいなのは見たことないにゃ。」

「150L位で買えますか？」

「そこそこの物が買えるにゃ。武器屋に行ってみるにゃ。」

皆でぞろぞろと武器屋に行く事になった。もつともたいした距離ではない。ギルドの通りの向かい側なのだ。

「おはようございます。」って入ってみると、有るわ有るわ、陳列棚いっぱいにあるんな武器がそろえてある。

カウンターの奥から男が出てきた。

「おはよう。誰の武器だね。」

「この子の武器が欲しいんですが、片手剣で軽そうなのはありますか？予算は150Lなんですけど・・・」

「それなら、この辺だな。」

そう言って、武器屋のおじさんは3本の片手剣を棚から下ろしてカウンターに並べた。

それぞれが特徴的だ。両刃の直刀、片刃の直刀、少し反りのある片刃。

持ってみると、バランスが良いのか以外に軽く感じる。

さて、ミケランさんの持つてるものは・・・とミケランさんを見ると、俺の視線に気が付いたようだ。

「私のは、これにや。」って腰の片手剣を抜いた。店が狭いので直ぐに戻したけど、少し反りのある剣だった。

「猫族の人には、これが人気だね。」

おじさんも、反りのある片手剣を一押しする。

ここは同族のミケランさんに倣って、武器屋お勧めの剣を購入する事にすべきだと思って姉貴を見ると、顔に片手を当てて考えてる。

「何か不満なの？」と姉貴に聞いてみた。

「これだと、ミアちゃんのベルトに下げる形でしょ。まだ小さいから歩く時邪魔になるし、イザという時に走って逃げるのができないと思って・・・」

「ははは・・・そんなことを考えてたのかい。そこまで考えてくれる者が一緒だと嫌ちゃんも安心できる。その答えは簡単だ。ケースの下の方に金属のリングがあるだろう。それを利用すると、こんなふうに背中に背負う事が出来るんだ。」

武器屋のおじさんは近くの引き出しから革紐を取り出し、ケースへの取付けを見せてくれた。

「それでは、この剣をお願いします。」

姉貴の返事に「分かった。」と言って、ミアちゃんの背中に取り付けてくれた。

よく見ると、革紐ではなくベルトだ。小さな肩当ても付いている。最後にケースのリングに革紐をつけて腰のベルトに結び付ける。

「よし、なかなか似合うぞ。それ程重い剣ではないが、走ってずり落ちないように腰のベルトに紐で結んでおいたぞ。」

「ありがとうございます。」って姉貴は代金を支払う・・・ぴつたり150Lみたいだな。あれ、RPGだと値切るのが基本のような気がするけど・・・

ミーアちゃんが片手剣を背負った姿を満足そうに姉貴達は見てい
る。

「ミーアちゃんの装備が出来たところで、簡単な討伐依頼をした
いんですが。ミケランさん、また選んで貰えませんか？」

「分かったにや。ギルドに行くにや。」

ギルドの掲示板をミケランさんが見ている。最も、赤レベルの討
伐依頼なんてあまり無いみたいだ。

「これが良いかにや。」

ミケランさんは掲示板の下の方から1枚の依頼書を外した。

「カルネル退治にや。畑のカルネルを退治して欲しい。報酬は5
0Lにや。」

「あのおう・カルネルってなんですか？」

まだ、俺達には名前で姿が分からない。アリットみたいなことに
ならないとも限らないから、姉貴の質問は当然だ。

「カルネルは植物にや。カルネって言う植物が魔気で変異したの
がカルネルにや。大きさはミーアちゃんより頭1つ小さいけど、動
き回って攻撃するにや。」

どんな植物だそれ！って感じだけど、依頼書には赤丸が3つ付い
ている。赤3つで丁度いい依頼ってことだから、ミーアちゃんにギ
リギリ対処出来るレベルだ。

俺達で弱らせ、ミーアちゃんで止め。・・どちらかと言うとレベ
ルアップの裏技みたいな対処方法のような気がする。

早速、カウンターのお姉さんにハンコを押して貰うと、ザックを
預けて4人で指定された畑に出かける。

畑の位置は泉の森へ行く小道を歩いて途中の十字路を北に向った
所だった。

今回、姉貴はクロスボーを預けてきた。身軽に手作りの短槍と短

刀・・・俺は短刀とは認めない、あれは小刀だ。）が目につくけど、丸めたポンチヨの下にはM36があるはず。

山に向って段々畑が広がっている。道は緩やかなのぼり坂だ。

いくら緩やかでも長時間歩くと結構キツイ、少し汗ばんできたのは気候のせいばかりではないはずだ。

「ここにや。ほら、あそこにいるにや。」

ミケランさんが立止まって、畑の森の方角を指差す。

姉貴は双眼鏡を取出すとその方角を見て、一瞬吃驚したようだったが、俺に双眼鏡を渡して見るように促した。

そして、双眼鏡で見たものは・・・

大根だ！大根が群れている。白くて細長く、頭には緑の葉っぱも付いている。でも、小さいながらも目と口があるようだ。そして二本の足？ですばしこく動いている。腕は体に比べて長細く、手は無い。畑の畝に栽培されたハウレン草みたいな野菜を腕で丸め取って食べている。歯もあるみたいだ・・・

「カルネルは素早く動いて噛付くにや。それに、腕が伸びて絡みつくから注意するにや。」

「でも、その前に一休みするにや。」

ミケランさんはそう言って、畑の畦に腰を下ろし、水筒の水を飲んでいる。

俺達も同じように一休み。

「作戦を立てるにや。畑の上からアキト。下から私。真中がミツキとミーアちゃんにや。」

「3方向から退治していくにや。畑を出て森のほうに逃げ出した

ら私が素早く森側に回り込むにや。その時はミツキが私の場所に急いで移動するにや。」

一箇所に追込んで最終的には包囲殲滅するって事だよな。・・ミアちゃんも1方向を最終局面で担当することになるけど、範囲が狭いなら、俺達が協力出来るから問題ないだろう。

「アキトと私が移動し終えたら合図するにや。そしたらミアちゃんと前進するにや。」

ミケランさんに俺達は揃って頷くと、俺は畑の上の方に急いだ。大根達をほぼ真下側に移動すると姉貴に向って手を振った。畑の下側でミケランさんが手を振っているのが小さく見える。

姉貴達がカルネルに向って進んでいく。ミアちゃんは剣を抜いているみたいだ。日に当たってキラキラ光っている。

俺も、採取鎌を持って下に下りていく。見た目ダイコンだし、強く叩けば砕けるんじゃないかな。

「ウニヤー！」って叫びを上げてミケランさんがカルネルを両断した。そして、次のカルネルもぶった切っている。

俺も、「オオリヤー！」って手近なカルネルをぶつ叩く。ゴリ！って鈍い手ごたえがあってカルネルが数辺に割れる。

先の鍛造鎌による衝撃で面白いようにカルネルを破壊できる。

姉貴の方を見ると、槍では両断できないみたいだけど、傷を負わせてふらついているカルネルをミアちゃんが剣で両断している。

ミケランさんが森の方に移動を始めた。それにあわせて姉貴が右に回りこみ始める。

俺は素早く左側のカルネル達を倒すと、前進しながらミアちゃんの方に少しづつ移動する。

カルネルの数は多いけれど、一方的な殺戮に近い。それでも、ミ

「アちゃんはチョコチョコと移動しながら懸命に剣でカルネルの胴体を輪切りにしている。

やはりハンターなりたてには丁度良い討伐だなんて考えながら、包囲陣を狭めていく。

そして、最後のカルネルを「エイ！」ってミアちゃんが倒した所で、ミアちゃんの始めての討伐は完了した。皆で倒したカルネルは数十匹を越えている。

姉貴と良かったねって喜んでいると、ミケランさんが俺達を叱責した。

「油断しちゃダメにや。．．これだけの数が揃ってれば、カルネラがいてもおかしくないにや。」

そして、周囲を窺っている。
カルネラって何？って聞こうとしたところに、畑の土をドバツ、ドバツって割りながら、白い触手がウネウネと5本現れた。俺達を取り囲んでいる。

「カルネラの触手にや。触手を攻撃して本体を出すにや。．．アキト、叩いてもダメにや。」

ミケランさんが言った時にはもう俺は触手の1つに採取鎌を叩き付けていた。

ブヨンって手ごたえがして採取鎌が弾かれる。

鎌を投出し、グルカナイフを左手に持ち、改めて触手に斬りつけると、スパツって両断出来た。

地面に落ちた触手がウネウネってしばらく動いている．．ちよつとグロい。

半分の長さになった触手を更に半分にする。俺の身長程に短くなつた時、ズズズウーって畑が割れて本体が現れた。

直径1.5m、高さ4m程の大きさだ。形はカルネルと同じだが、

俺を見てる眼光は鋭く、直径1m程の口には鮫みたいな歯がびっしりだ。

「カルネラは赤5でも苦勞するにや。少しづつ切り刻むにや。」
ミケランさんの指示で触手で叩かれないように本体を少しづつ刻んでいく。

ダイコンのぶつ切りを作っているような感じだが、結構短くなった触手をブンブン振り回すので、ヒットエンドランが俺達の攻撃方法だ。

触手が有って1人の状況では確かにカルネラは脅威だろう。でも、触手を無くした状態では素早く動く事も出来ず、噛付き攻撃だけになることから、4方向からの攻撃で十分対処できる。

最後は殆どタコ殴り状態であったがどうにか倒すことが出来た。

動かなくなつたカルネラの頭部の葉っぱの下辺りをミケランさんが剣で何度も突き刺して何かを探っている。

「ここにや！」と言つたかと思うと、剣で抉るように何かを取り出した。

「カルネラになると魔気が結晶化するにや。大概是頭辺りにあるにや。」

そう言つて姉貴に小石程の球体を渡した。

「これって？」

「魔石にや。濁つた赤・品位が低いにや。けど換金できるにや。」

「魔石は、高い品位になると透き通つた紫になるらしい。でも、低レベルの魔物だとこんな物らしい。」

「カルネルやカルネラつて魔物なんですか？」

「そうにや。植物や獣が魔気を吸い込んで魔物になるにや。人もなるときがあるにや。」

魔物は生態系から逸脱した突然変異種と考えればいいのか？
そうすると、かなり突拍子もない能力を持つものもいることになる。これはあらかじめ調査する必要があるかも知れない。

畑はめっちゃめっちゃになったが、依頼書には畑の事に触れてないからこれでいいのだとミケランさんが説明してくれた。

「カルネルを土に埋めれば良い肥料になるにや。後は農家の仕事にや。」

なんて言っている。

でも、依頼書の依頼内容は良く読む必要があるそうだ。ハンターは依頼書の通りの仕事をする。何か契約社会の縮図を見ているようだ。

ギルドで依頼終了の報告をした後で、魔石の換金を頼むと100Lになった。都合150L。ミケランさんに40Lを分けて、ミアちゃんのデビューは無事終了した。

初めての一斉召集

朝からカウンターのお姉さんと俺達は、ギルドの小さな部屋で今までの疑問点を纏めて聞いている。

依頼を受けるためにギルドに行ったが、俺達のガイド役になっていたミケランさんは村を離れていた。そういえばガイドを何回かするの黒レベルの仕事みたいな事を言っていた。

そんな訳で、ハンターとしての疑問点に答えてくれる人がいなかったたので、カウンターのお姉さんに相談した所、ここで聞きますつて連れてこられた。

俺達が聞きたい事は、3つある。1つはギルドの一斉召集。2つ目は、魔獣とはなにか。そして、俺達が知らないその他のハンターに関わる事項だ。

「先ず、一斉召集ですが、町村のギルドの求めに応じて、その町村にいるハンター達が同じ依頼を受けることを言います。多くは魔獣等により町村が襲われる恐れが高い場合召集します。ハンターレベルが赤5つ以上に者が対象となり、それ以下のレベルについては自由参加なので、貴方達はまだ召集範囲ではありません。召集が発令された場合に参加しない場合は罰則として一定期間ハンターの資格を停止されます。近年での召集例は2年前にエントラムズ公国のカレイム村で起こりました。魔獣襲来により召集されたハンターは13名。内4名が死亡しています。このマケトマム村では村創立以来起こっていません。でも、ある程度レベルが上がって、旅立つ者には今の話をしています。」

「次の、魔獣ですが、大気中の魔気を吸収して体が異常に発達した獣や植物を一括して魔獣と呼びます。魔獣の上位に位置するものは、取り込んだ魔気を結晶体に変化させることがあります。この間

のカルネラが持っていた球体です。これは魔法の補助効果を持つていることからギルドで買取ります。色は赤から紫まで変化に富んでおり透明度の高いものほど高額です。」

「最後に・・・そうですね。ギルドカードを持つハンターは税金の義務がない。それに、ギルドカードは身分証としての機能持っているので、他国へ移動する際にも無審査で出入りできること位でしょうか。」

ハンターになって直ぐには関係ない話のようだ。これらの話はハンター内では暗黙の了解事項であり、面と向って質問されたのは初めてらしい。

確かにハンターギルドのシステムを小さい頃から見聞きしていれば当然の事かも知れないが、俺達に知る術はない。こうして聞いて確認するしか方法がない。

「話を変えますが、依頼書に書かれた採取対象や、討伐対象等を詳しく知るにはどうしたらいいですか。・・・ガイドを雇うのが一番なんです。何時も雇うわけには・・・」

姉貴が少し俯いて小さな声で聞いている。少し同情を誘ってるみたいだけど・・・

「凶鑑を購入しますか？ ある程度の知識は得られると思います。」

「凶鑑なんてあるんですか？」

俺達は吃驚した。それなら何で早く教えてくれなかったんだ。

「でも、売れたのは去年1冊だけだったんです。王都の子供向けに編集したので、町村の子供達なら誰でも知っていますし・・・」

「買います！おいくらですか？」

「ちょっと待ってください。」ってお姉さんは部屋を出て行った。姉貴と顔を見合わせ、ため息をつく。何で今頃って感じた。

しばらくすると、ちよと黄ばんだB5サイズの本を持ってきた。

「これが凶鑑です。王都の魔道師が複製したものです。が原本と全く同じです。」

頁を捲ってみると、カルネルがあった。人間を片側に、カルネ、カルネル、カルネラと大きさが変わるのが一目でわかる。内容も、魔獣でカルネラが魔石を持つ事まで書いてあるし、触手注意と但し書きまできちんと記載されている。

その他の頁でも似たような構成で非常に解りやすい。

「あのう・・・お値段は？」

「売れ残りなんで、半額の100Lでどうでしょうか。」

姉貴は即決で支払いを済ませると、腰のレスキューバックに収納した。

「今の所は他に疑問はありませんが、解らなくなったらまた教えてください。」

「分かりました。朝晩はハンターの方達で忙しいんですが、日中なら時間もありませんから。」

「それでは、失礼します。」

姉貴の隣で爆睡中のミアアちゃんを起こしてギルドを後にした。

「ミアアちゃん。ミアアちゃんが持つてる短剣貰っていいかな？」

「もう使わにゃいから良いけど・・・にゃんにするの？」

「お姉さんの武器を改造したいの！」

また何か考えたみたいだっって目を姉貴に向けると、

「アキト、この槍をクナイから短剣に変えてくれない？」って言われてしまった。

この間のカルネラ戦ではクナイの刃長が短いんで苦労してたみたいだから、槍先を短剣に変えるということか？短剣なら刃長は30cm近いからクナイよりはマシになる。

「いいよ。宿に帰ってから改造してあげる。」

宿に戻ると、「今日は依頼を受けないのかい？」っておばさんに言われたけど、苦笑いでごまかした。

「無理しないで、簡単な物を選んだよ。無ければ待てばいいさ。」「って言われてしまった。どうやら仕事にあぶれたと思われたらしい。」

部屋に戻ると、姉貴はさっきの凶鑑を取出して読書開始！しばらくは反応無しだろう。

俺は、ミアちゃんから短剣を受取ると、握りを分解してみた。

短剣は薄い鉄板を加工したもので、握りの部分は刃先から伸びた鉄板を両側から木片で挟み、きつく紐を巻いた物だった。鉄板なら加工は簡単だ。姉貴手作りの槍からクナイを外し、木の切り込みに短剣の柄の鉄板を装着すればOKだ。

短剣を見ると、手入れを殆どしていないようで錆が目立つ。雑貨屋さんに貰った砥石で槍にする前に刃先を綺麗に研ぎ直した。

全体の錆を落とし、刃先も一応研ぎ直したところで、柄の先に短剣取り付けた。抜止めの金具は少し短かったが短剣の柄に使っていた物を流用する。最後に革紐できつく巻きつけて縛れば出来上がりだ。

最後に、短剣のケースのベルト取付け部分を切り落として槍の穂先ガードにした。

「姉さん出来たよ！」

こつちを向いた姉貴にはい！って渡すと、どれどれって手に持ってバランスを確かめる。

「予想通り。これ結構使えると思うよ。」
満足しているみたいで一安心。

「ところで、図鑑の方はどうなの？」

「うん。結構面白い。それに何と巻末に地図と生息分布図まであるのよ。これで見ると・・・この辺の凶暴なのはクルキュルとガトルそれにイネガルってところかしら。」

「じゃあ、明日は討伐を試してみる？」

そんな話をしていると、階段をドタドタと駆け上がってくる音がして、俺達の部屋の扉をドンドンと誰かが叩く。

ミケランさん？って姉貴と顔を見合わせたが、彼女はもう村にはいない。

用心深く、扉の鍵を開けると、弾かれたように扉が開いた。

「アキトはいるか？」

キヨロキヨロと部屋を見回す男は・・・ 그레이さんだ。

「ここにいますけど・・・」

後から声をかける。驚いたように俺をみた 그레이さんにはゆとりがない。

「ギルドの一斉召集があった。お前は赤3つ、一斉召集に参加する義務はないが人手が足りん。付き合ってくれ！」

「かまいませんが、何があつたんですか？」

「ガトルの襲来だ。魔獣ではない。確かガトルを倒したって話だな。」

姉貴が俺を向いて頷いた。なら話は簡単。

「手伝います。姉貴も十分戦えますが、ミーアちゃんは・・・」

「ギルドの娘に頼んでおく。それでいいな！・・・ギルドで待つてるぞー！」

グレイさんはドタドタと階段を駆け下りていった。

急いで装備を身に着ける。どの位続くか分からないのでミーアちゃんのバックにザックに残ってたお菓子を詰め込んでおく。非常食の代用だ。

俺達もギルドに急いだ。村中慌しい、扉を打ち付ける者、屋根に登って弓を用意する者等様々に準備をしているようだ。

ギルドの扉を開けると10名程度のハンターがホールで待っていた。

カウンターのお姉さんにミーアちゃんを頼み、姉貴とハンター達の中に入る。

しばらく待つと、ギルドの2階から壮年の男が現れた。

「皆揃ったか。この村で初めての一斉召集だ。相手はガトルだが数が多い、200以上は確実だ。生憎、村のハンターで黒は4人だ、赤5以上は6人。しかし有難いことに赤5以下の者も参集してくれた。魔獣ではなくガトルなのがせめてもの救いだ。」

「村の出入り口は2箇所。俺が東で、西はグレイだ。グレイ、半数を連れて西へ行け。人選は任せる！」

「俺がグレイだ。マチルダ、サラミス、サニー、それにアキトとミツキは俺と来い。行くぞー！」

俺達6人はグレイさんを先頭に西の門に急いだ。

程なくして門に着くと、2人の門番が門を閉じ、村内に移動式の

柵を設置している所だった。路地には荷車や籠等が軒先まで積み重ねられ、通行出来ないようにしている。

門の内側のちよつとした広場に俺達は集まると配置の打合せをする。

「俺とアキトは前列だ。マチルダはあの屋根に上り魔法で援護。サラミスは両手剣か・俺達の後だ。サニーとミツキは弓だな、あの屋根で援護だ。」

グレイさんはテキパキと俺達の場所を指示した。

「質問はあるか？」

「俺は赤7つだ。マチルダさんが黒なのは知っている。そのアキトは俺より上なのか？」

「良い質問だ。アキトは赤3つ。お前より4つ下だ。だが、赤7つと肩を並べるよりは俺はアキトを選ぶ。少なくとも俺より強い！」

「他に無ければ準備しろ。そこで待機だ。」

俺は地面に腰を下ろすと、銀ケースからタバコを取出し、1本を口に咥える。100円ライターで火を点けると、プカーって煙を吐き出した。

グレイさんもパイプを取り出したが、火種が無くて困っている。とことこと歩いていき、ライターで点けてあげた。

「すまん。」

「いえいえ、誘って頂いて光栄です。」

屋根の上の姉貴を見ると、しきりに俺を指差して自分の胸を指差している。・・・これを使えってことか！

とりあえず手を上げて答えると、姉貴は頷き返した。

待つのは苦手だが男3人で一服しながら雑談するのもいいもんだ。こんなのかつちに来てから始めてかも知れない。

「ホントに強いのか？」

「クルキユルも倒したそうぞ。」

サラミスは俺より少し年長みたいだ。グレイさんの話を聞いて吃驚している。

「あれは、姉さんがボルトを撃って弱らせてくれたからですよ。」

「あの太い矢か！でも1本ぐらいでは対して動きは鈍らん。あまり謙遜するな。」

「でもゴツイ弓だな。弦が3本も有るし、訳の分からんものも沢山付いてる。」

「3本に見えますが1本ですよ。あのカラクリで弦を引く力を半分になっているんです。普通サイズのガトルならボルトが貫通しますよ。」

「とんでもない威力だな。しかし速射できるのか？」

「それが難点なんです。でもイザとなれば姉貴は俺より強いですよ。」

「それで、あの短い槍を持つてるのか・・・」

「きたぞ！！」

門の櫓で様子を見ていた門番が外を指差して叫んだ。何時の間にか背中に矢を背負って手には弓を持っている。

もう1人は弓を引き絞って狙いをつけている。低い唸り声も聞えてきた。

押し寄せるガトル

俺達は、柵のような扉から数m程度はなれて扉越しにガトルの群れを睨む。

しきりに唸り声を上げながらこっちを窺っているようだ。

パシ！つと弓の弦が鳴ると、ガトルの群れが蠢く。櫓の高さは5m程で、ガトルの群れに放つ矢は適当に放つてもガトルに当る。

連続して放たれる矢に何匹か傷ついたのだろう。ガトルが血の匂いでますます興奮してきたように思える。

「いいか。扉をこじ開けて来る奴を殺る。群れが入る直前にサラミスはマチルダの援護に向かえ。階段を上ってくるガトルを食い止める。俺と、アキトはあそこの小屋の屋根でガトルを誘う。いいな！！」

「了解！」

グレイさんの檄に即答で俺達は答える。後ろを見ると、俺達が走ってきた道は荷車や梯子等で高くバリケードが築かれている。

なるほど、ここで俺達が囿になって村の家並みに行かせないという訳だ。

軽く屈伸をして緊張を解す。得物は、とりあえずこの採取鎌でいいだろう。何ていっても4匹をこれで叩き殺してるし・・・

群れが、扉の直ぐ前まで押し寄せてきた。扉の柵を齧り始めている。グレイさんが右手で片手剣を抜いて構える。後ろのサラミスはとつくに長剣を抜いて地面に軽く突いて両手を沿え待ち構えている。俺も、左手で柄を掴み2、3回軽く鎌を回した後、先端を下にして低く構えた。

ガトルルウ・・

一匹のガトルが門と扉の隙間を無理やり通ってグレイさんに向かって行く。

グレイさんは動かない・・そしてガトルが飛びつく寸前に体を半回転させてガトルの背中に剣を叩きつける。ギャ！っという叫びがガトルの最後だった。

次々に扉上部の隙間からガトルが村に飛び込んでくる。

俺のに向かってきたガトルに走りこんで鎌の背側を叩きつける。更に、体を回転させて次のガトルの頭を叩く。ガツ！っ骨が碎ける感触が伝わってきた。

サラミスの向かおうとするガトルに「ウオオ！！」って叫んで牽制し、こちらに注意を向ける。隙を見せたガトルはサラミスの長剣で両断された。

グレイさんは一所に留まり、襲ってくるガトルを最小の動きで剣を振るっているが、サラミスは長剣を振っていた為か、長剣を振った後の隙がだんだんと長くなってきた。

「サラミス、先に後退しろ！」

グレイさんがサラミスに向かって叫んだ。やはり疲労を見て取ったのだろう。

「まだいけます！」

サラミスが怒鳴り返す。

「これからが正念場だ。ここで怪我をさせるわけにはいかん。後退しろ！」

2度の後退指示に、顔を赤くしながら長剣を担いでマチルダさんのいる屋根へ続く階段を駆け上がっていく。

その後を一匹のガトルが追いかけるが、その背中にスタツ！っとなんて放った矢が突き立ち、ガトルはその場で転倒した。

扉の上部を結わえ付けていた革紐が数箇所切れている。おかげでガトルは容易に村に進入出来るようになってきた。下のほうの革

紐が切れるのも時間の問題のような気がしてきた。

次々と襲ってくるガトルを殴り殺す。グレイさんの周りもガトルの死体が随分と溜まってきた。

櫓の門番達は矢を使い果たしたようで、槍で扉を破ろうとしているガトルを牽制している。

そしてついにその時が訪れた。扉の丸太を繋いでいた革紐が4箇所切れて2本程が脱落したのだ。

今まで以上の数のガトルが俺達に押し寄せてきた。

「アキト、小屋の上だ!!」

グレイさんが俺に向って叫ぶと同時にマチルダさん達がいる家の前にある小さな小屋に走り出す。

俺も何匹かを撲殺しながら小屋に急ぐ。

ドドオーン!

音に驚いた俺が見たものは、爆炎に吹飛ばすガトル達だった。あれは、見たことがある。グレイさんと手合わせしてた時に起こった爆炎と同じだ。ということは、マチルダさんが俺を援護してくれたんだ。

ようやく小屋の屋根にたどり着き、広場に向き直った時には、ガトルが群れをなして村の門を突破してるのが見えた。

「いいか。俺達は困だ。俺達の前に集まったガトルをマチルダが吹き飛ばす。無理に殺ろうとするな!」

「分かってます。」

あまり疲れを感じない。少し、ハイに成っているようだ。

小屋の屋根までの高さは2m程でガトルが飛び掛ろうとしても一旦前足を屋根に付かねばならない。其処をグレイさんが剣で、俺は

鎌の柄で攻撃する。

ある程度密集した所へ、マチルダさんが俺達を巻き込まないように魔法で攻撃する。何と言うのか分からないが、手榴弾の小型版って感じの魔法だ。

マチルダさんのいる家の屋根に行く階段の上には、サラミスが長剣を振るって階段を駆け上がってくるガトルを確実に仕留めているようだ。

姉貴の方は、階段の上に姉貴が手製の槍で待ち構えている。姉貴の方に向うガトルが少ないのか、姉貴だけで十分みたいだ。

そして、サニーさんが俺達の死角を突いてくるガトルを弓で狙撃してくれる。30mは離れているのに、必殺の腕前だ。

連続で俺達の周囲に爆炎が広がる。周囲には焼け焦げたガトルの亡骸が所狭しと広がっているが、一向にガトルが減る気配がない。

しかし、日が落ち始めようとした時、ついに終わりが見えた。

門を越えるガトルがもういないのだ。まだ俺達は沢山のガトルに取り囲まれているが、これを殺ればこの戦いは終了する。

一匹づつ確実に仕留める。もう援護の魔法も来ないし、サニーさんの矢も飛んでこない。

魔法にも使用制限があるのだろう。そして、サニーさんは矢が尽きたんだと思う。俺の周囲には矢を受けて倒れたガトルが20は越えている。

そして、グレイさんが一匹のガトルの首を刎ねた時、俺達の周りに動くガトルはいなかった。

「オオイ！・・・外はどうだ！！」　グレイさんが櫓の門番に村の外の様子を聞いている。

「もう、いねえぞー!!」 門番は槍を振りあげながら答えてくれた。

やっと、終わったみたいだ。俺は、その場に膝を着いた。

「まだだ。門の修理を終えてから一休みしよう。」

そう言っつて、グレイさんは屋根から飛び降りて、門の方に歩いて行く。

俺も大急ぎで後を追う。直ぐ後からはサラミスが走ってきた。

姉貴を見ると、サニーさんと矢の回収をしている。短いのは、姉貴のボルトみたいだ。

門の扉は大分痛んでいた。でも、元々丸太を柵みたいに組んで革紐で結んだものだから、修理にそれ程苦労しない。

「倒したガトルの牙は参加者全員で均等割りだ。レベルに関係はないから心配するな。」

グレイさんが俺達を見てそう言った。

ガトルの始末は村の男衆がやるんだそうだ。女衆はこの後の宴会準備に忙しいらしい。

若い男が村の奥から駆けて来た。道を塞ぐバリケードをよじ登って此方に声をかける。

「怪我はありませんか！ 東は何とかなりました。私が連絡員として残りますから、ギルドで休憩してください。」

「ありがとう!」

グレイさんはそう答えると、マチルダさんと姉貴達を先に戻らせる。

「俺達はもう少しだ。後1本横木を結べばこの扉は元に戻る。」
俺達はグレイさんに頷くと作業を継続する。

門番も1人が降りてきて、扉の外の矢を回収している。門番も結構な数を矢で倒してるみたいだ。

扉の修理を終えると、若い男を広場に残して、俺達はギルドに向う。バリケードは結構高く積まれていて乗り越えるのに苦労した。結構疲れが体に来ていたみたいだ。

グレイさんはそれほど疲れを見せていないが、サラミスは足を引き摺っている。やはり経験の差なのかなと重いながら俺も重い足取りでギルドに向った。

ギルドの扉を開けると熱狂の渦だった。皆がこの村始まって依頼の最初のギルド一斉召集によるガトル襲来を乗り越えたことを喜んでいる。

それに、少し酒も入っているようだ。姉貴が赤い顔をして「ハイ！」って渡してくれた木のコップに注がれた物をゴクリって飲むと、それはアルコール分の少ない発泡酒だった。

「皆、飲んでるか！ どうか切り抜けた、感謝する。しかし、東の門では残念ながら、2人の重傷者を出してしまった。幸い、水魔法の使い手がいたので命は助かったが、2月は休業だろう。しかし、その間の面倒はギルドが保障してくれる。路頭に迷う事はないはずだ。西の門は負傷者無し。驚く限りだ。」

今回の仕切りをこなした男が報告する。その顔もやり終えたことに笑みが浮んでいる。

「今ギルドで、倒したガトルの集計が出た。221匹だ。牙の換金は4425Lになる。今回の参加者は14名。1人310Lで残りは負傷者に付加する。いいな！」

「ちよつと待て、確か西に6名、東に7名のはずだ。後の1名は何だ！」

「そこにいる嬢ちゃんだ。俺達のガードを通り抜けたガトルが1匹、扉の開いていたギルドを襲った。危なく職員が殺られるところを嬢ちゃんが刺し殺してくれた。今回の分配資格は十分だ。」

それを聞いた俺は吃驚したが、姉貴はよしよしってミアちゃん
の頭を撫でている。

意外とミアちゃんって、冷静で度胸がある。俺達はギルドのお
姉さんに報酬を貰い、宿に帰ることにした。

泉の森の調査

宿に戻るとおばさんが歓待してくれた。

近所のおばさんや若い娘さん達も手伝って豪勢な食事が整えられ、酒の壺があちこちのテーブルに置いてある。

同じ宿に泊っているハンターやこの宿の飯を食べに来るハンターがもう席に座って飲んだり食べたりしている。

「遅かったじゃないか。あんた達は此処だよ。」

おばさんが階段に近い席に案内してくれた。

宿は村内の家並みから離れているのに、随分と人が集まっている。一旦部屋に戻り、装備を外したかったが席に早速運ばれてきた料理と木のコップを渡されてそのまま皆と騒ぐことになった。

俺達が召集に参加していたことが分かると、次々にお酒が注がれ始めた。

元々そんなに飲めないことから、たちまち顔を赤くしてテーブルに突っ伏すはめになる。姉貴の方は、顔を赤くはしているが次々とお酒を飲んでいる。酒豪みたいだって思いながら料理を恨めしそうに眺める。

「ご苦労だったな。」

2人の男が俺達のテーブルに着いた。

少し顔を上げて眺めると、グレイさんとギルドで采配をしていた人物だ。

「俺は、カンザス。黒6つだ。グレイから話は聞いた。グレイ並みに動いて赤3つとは驚いた。明日、ギルドでレベルの確認をしとけ、上がっているはずだ。・・ここからは相談だ。明日、ガトルが何故押寄せる羽目になったか調査をしたい。同行できるか？」

「それって、危険はありますか？それと、どの位の期間を考えています？」

姉貴が尋ねる。俺達だけなら問題ないかも知れないけど、ミアちゃんを考えると少し不安もある。

「3日程度を考えている。やってきた方向から泉の森の東側までを調査したい。参加者は俺達とマチルダ、サニー、それにサラミスが名乗りを上げた。単独でクルキユルを倒せるものはいないが、このメンバーでなら数匹は倒せる。危険性は低いと考える。」

「ミアちゃんは私達のチームです。参加しても問題ありませんか？」

「今回もガトルを1匹倒している。猫族の敏捷性は折り紙つきだ。問題無い。」

「じゃあ、参加します。」

「明日の朝ギルドで待つ。野宿と食料の準備をしておけ。」って俺達に言うと2人は足早に宿を出て行った。

姉貴は席を立つとおばさんのところに行き何やらお願いしている。おばさんが頷くところを見ると簡単なお願いだっただろう。席に戻ってくると、俺の腕を持って無理やり立たされた。

「明日の準備をするから部屋に戻るわ。歩けるの？」

俺は大丈夫だ。ただ床が揺れてるだけだ。って言ったら、ミアちゃんが支えてくれた。

何とか階段を上り、装備を外すとベッドにダイビングする。もう動けそうに無い。

そんな俺を見て、たいいさなタメ息をついて姉貴は準備を始めた。俺のポンチョを広げ携帯食料入れた袋を食器類と一緒に丸め込んでいる。

自分のザックから迷彩シートを取出して自分のポンチョを包み、

ミーアちゃんには水筒代わりにペットボトルをバックに入れてる。水と食料それに雨対策さえ出来ていれば何とかなるだろう。武器は・・とりあえずみんなもっていくことになるだろう。それに3日歩くことを考えると、アリット採取に使った棒もミーアちゃんの杖代わりに丁度いい。

ユサユサと体が揺すられる。

あれ？って感じで目を開けるとミーアちゃんが俺を揺すっている。何時の間にか寝たりたみたいだ。

「おはよう！」って体を起こすと、「姉さんはもう、食べてるよ！」って教えてくれた。

慌ててベッドから跳ね起きて、装備を身に着け、ザックを肩に階段を下りると、黒パンを齧っていた姉貴と目があった。

「おはよう。俺の分も貰っというて！」

そう言っって、宿の裏手にある井戸に行き顔を洗う。

まだ、少し頭が痛い。しかし、今日はカンザスさんの約束もあるし、寝ている訳にはいかない。

もう一度冷たい水で顔を洗って、宿のホールに戻った。

「黒パンとスープ。それに濃いお茶を貰っというたわ。大丈夫なの？」

「大丈夫！まだ少し頭が痛いけど直に治るさ。」

黒パンを頬張る俺を見て、少し安心したようだ。

あっという間に平らげた。そういえば、昨夜は何も食べなかった。

「歩きながら、何か食べてたほうがいいよ。まだ、お菓子が残ってたでしょ。」

少し足りないって表情をしていたようだ。腰のポーチにザックにあったお菓子の残りを少し入れる。ついでにミアちゃんにあげようとしたら、まだ入ってるってバッグの中を見せてくれた。

俺達がそんなことをしている間に、姉貴がおばさんからお弁当を受取ってきた。

「3日程度帰れない。」っておばさんには昨夜の内に伝えたそう
だ。

「お茶を飲んだら、出発だよ。」

残ったお茶を一気に飲んで立ち上がる。濃いお茶は苦かったが、おかげで頭はすっきりだ。

スタスタと歩いて宿の扉を開ける。

「行こう！」って姉貴とミアちゃんを促して、ギルドに向った。

「早かったな。先ずはカウンターでレベルを確認しておけ！」
ギルドで俺達を迎えたのはテーブル席のカンザスさんだ。傍らでサニーさんがお茶を飲んでいる。

早速、カウンターの姉さんにレベルの確認を依頼する。ついでにザックも預けておく。

そして水晶球の結果は、俺と姉貴が赤4つ。ミアちゃんが赤3つだ。昨夜の結果が反映されたのかな・・

カンザスさんのいるテーブルに戻って皆の来るのを待つ。

「どうだった。少しは上ったろう。」

「はい。全員1つ上ってました。」

「全員が揃うまでに、まだ間がある。不足のものがあるなら今の内に買っておけ。」

「とりあえず、食料と水それに野宿の準備はしましたが、期間が

長い場合に他に必要な物はありますか？」

「そうね。私達のそれ以外と言つと・・・薬草と傷薬それに毒消草かしら。ほら、これよ！」

サニーさんが俺達の前に小さなポーチを取り出す。

革ケースの綴蓋を開くと中に竹みたいな筒が数本並んでいる。

「蓋の上が丸いのが薬草、四角なのが傷薬そして尖がつてるのが毒消草ね。こうして入れておけば暗がりでも必要な物が判るでしょ。」

「何処で、手に入られますか？」

「雑貨屋さんで手に入るわよ。まだ持っていないなら、今の内に買つてきなさい。」

姉貴はミリアちゃんとギルドを飛び出してつた。

「薬草は、疲れをとる。傷薬は傷の治りを早くする。毒消草は文字通りの物だ。蛇や虫には毒を持つものもある。長期と言わず、日帰りでも準備はしておいたほうが良い。」

「近場とはいえ備えは必要ってことですか。」

「そうだ。今まで知らなかったことに、こっちは驚いてるがな。」

怪我もしなかったし・・・って言って誤魔化すけど、納得してはいないみたいだ。

ギルドの扉が開くと、グレイさんとマチルダさんが入ってきた。

軽く片手を上げて挨拶がわりだ。俺達のテーブルに他から椅子を持ってきて座る。

「アキトだけか？」

「薬草等を買に行きました。サニーさんに教えて貰ったんです。」

「確かに、今度は用意したほうが良いな。森には結構イヤな奴がいるからな。」

「こらこら、今から脅してどうするの。」
マチルダさんがグレイさんの頭を杖でボカリ！って叩いてる。
結構いい仲間みたいだ。

「ただいま！」って声と共に扉が開き、姉貴達が帰ってきた。

「はい。アキトの分だよ！」

そう言っただけで先程と同じような、小さなポーチを渡してくれた。早速ベルトに挟んでおく。

「後はサラミスだけだな。」

グレイさんがメンバーを見渡して言った時、バタンと大きな音を立てて扉が開いた。

「遅くなりました。」

ハア、ハアって息を切らせながらサラミスが長剣と大きな袋を背負って現れた。

「揃ったようだな。昨夜伝えた通り、ガトル来襲の調査だ。原因を調べに泉の森の東側まで行くことになる。では、出かけよう。」
俺達は席を立つと、カンザスさんの後を追うようにギルドを出た。

「先頭は俺とグレイが交替で立つ。最後尾はアキトだ。中は適当で良いが、お嬢ちゃんもミツキと一緒に行動しろ良いな。」

カンザスさんが短い指示を出す。

俺達は前後に少し距離をとりながら、泉の森に向って歩き出した。もちろん俺は最後尾だ。パトロールの最後尾って後の確認で良かったんだよな・・

海兵隊のムキムキ兄貴達にそんなことを教えて貰ったような気がする。

泉の森の岩屋

村の東の門を抜け、泉の森に向かう一本道を8人でテクテク歩いてる。

たまに、道の左右に広がる畑に残されたガトルの足跡を確認しているけど、確かに方向的には泉の森の方向、東から真っ直ぐに来ている。

何時もなら畑に向かう農家の荷車にでも乗っけてもらうのに、ってサラミスがブツブツ言ってるけど俺達はまだ乗せて貰った事がない。時間帯が違うのか・・・

十字路を過ぎ、橋を渡ると泉の森が見えてきた。

アリット採取の時と同じように、森の手前にある広場に差しかかるとグレイさんが片手を上げて俺達の歩みを止めた。

「少し早いけど、此処で昼食だ。」

俺達は焚火跡に輪になって昼食を取る。と言っても、黒パンを齧り、水を飲む程度なんだけど・・・

「畑に残された足跡から判断すると、どうも小川の下流部を渡ったようだ。橋を渡ってからは道の右側にだけ足跡が残されている。

泉の森の深遠部は上流側だから、クルキユル等には出くわせないと思うが、道を外れて進むからこれからは注意しろよ。」

カンザスさんの言葉に俺達は頷く。

黒パンを食べ終えて少し休憩したら出発だ。今度はカンザスさんが先頭を歩く。

道を右に逸れて、下流に歩きガトルが小川を渡った場所を探す。

リリック釣りをした反対側を通り過ぎしばらく行くと、その場所が分った。

小川が広い浅瀬になっており流れもそれほど速くない。大型犬並みの体形を持つガトルなら流されること無く川を渡れるだろう。岸

辺には浅瀬に向かって沢山の足跡が残されていた。

「此処から森に入る。後ろは任せたぞ、アキト！」

カンザスさんにそう言われて少し緊張しながら列の最後に付いて行く。

森の中は鬱蒼とした木々が前方の見通しを悪くしている。それに結構藪が多い。足を取られないように注意しながら前を歩く姉貴に続く。

藪をよく見ると、枝や葉が折れているものが多い。カンザスさんはこの跡を辿って進んでいるみたいだ。

不意に姉貴の歩みが止まり、皆姿勢を低くしている。慌てて俺も同じように姿勢を低くする。

「何かいるみたいだよ。」って姉貴が小声で教えてくれた。

前のほうにいるマチルダさんが俺達のほうに向かって、（こつち！）って指先で方向を示す。

その方向をよく見ると、鹿のような獣が数頭ばかり草を食べている。

しばらく待っていても、鹿は動かない。

俺達は姿勢を低くしたまま、静かに移動を開始した。

姿勢を低く保ったまま進むのは苦勞するし、疲れる。その上俺は後ろの注意もしなければならぬ。やっと皆が立ち上がって歩き始めた時は、ちよつと止まって背筋を伸ばした。

また俺達の歩みが止まる。

「今度は休憩だつて。」姉貴が小声で教えてくれた。

皆で一塊になって座り込んでいるところにカンザスさんがやってきた。

「俺と、サニーで野宿場所を偵察してくる。後はグレイに任せるから彼に従って進め。いいな！」

俺達が頷くのを見て、2人は前方の繁みに消えていった。

「この森には何箇所か野宿に適した場所があるんだ。彼らは一歩近くの場所を見にいったのさ。もう直ぐ着くから、あと少しの辛抱だ。」

そう言っただけで立ち上がるグレイさんに続いて俺達も腰を上げる。人数が少なくなつたためか、今度は最後尾の俺にも、先頭のグレイさんが見える。

しばらく、ゆっくりした足取りで進んでいたが、グレイさんの手による指示で歩みを止めて、姿勢を低くする。

ガサガサと藪を押しよけて現れたのは、カンザスさん達だった。グレイさんと短い遣り取りの後で列の中に入ると、再び俺達は森を進む。

いつの間にか周囲の藪にガトルの通過したが跡が見当たらない。それでも、グレイさんは前方に歩いているし、カンザスさんも黙認している。

更に進むとその理由が解った。前方が開け、ちょっとした草原になつている。そして、その真ん中には大きな石を組み合わせた石室みたいなものが建つていた。見た感じ、石舞台みたいだ。

「あれって古墳の石室みたいだね。」
姉貴も同じように感じたんだろう。俺に振り返ると、小さな声で言つた。

「今日は此処で野宿だ。獣に備えて焚火をする。グレイ、サラミス、アキト。薪を集めて来い。」
姉貴に採取鎌を預けて、グルカナイフを抜く。枝打ちには結構これが役立つ。

始めて見る俺のナイフの形状に驚いた者もいたが、気にせず森に入って立木の枯枝を落としはじめた。

生木も少しは混じつてゐるが気にしない。適当に薪の束を2つ作る

と、ナイフを仕舞って薪を担いだ。

「こんなもんで良いですか？」

岩屋の前にある焚火跡の傍に薪の束を降ろす。

カンザスさんも近場で探したらしく、薪が置いてある。

「ああ、いいだろう。・・火を点ける。中からマチルダを呼んできてくれ。」

「火なら、これで・・」

俺は枯草を丸めると、ポケットから100円ライターを取出して、カチツ！って火を点けた。

吃驚したカンザスさんだったが、長剣のケースに付けたパイプを取出して一服し始めた。

カンザスさんの隣で焚火の番をしていると、 그레이さんとサラミスが大きな薪の束を担いで帰ってきた。

一番大きな束を岩屋の前に置いて柵代わりにするみたいだ。

「さて、夕食の準備だ。」

カンザスさんの一言で、マチルダさん、サニーさんと姉貴が鍋を持ってきた。サラミスが慌てて自分の袋を開けて調理用品を取出す。マチルダさん達の鍋は鉄製で1リットル程度の鍋だが、俺達のは容量的には同じだけどチタン製だ。少し黄色を帯びた銀色の鍋を皆が見てる。

「鍋まで俺達とは違うのか。・・そんな金属始めてみたぞ。」

サラミスが自分の鍋を火に掛けながら言った。

「気にしないで下さい。私達の国では皆使っていましたから。」

姉貴は微笑んで言うけど・・そんな話は始めて聞いたぞ。キャンプでもしない限り使わないと思うけど・・

お湯が沸くと、アルファ米をシェラカップに1杯入れて、乾燥野

菜とビーフジャーキーを適当に切って入れる。再沸騰したらチューブの味噌を加えて出来上がりだ。

皆の料理が終わるまで、遠火で鍋を暖めておく。

マチルダさん達はお湯が沸くと、少し萎びた野菜を入れて乾燥肉を入れている。味付けは塩のみだ。

サニーさんとサラミスは萎びた野菜の代わりに、何か雑草みたいなのを入れてたけど・・

煮立ってきたらそれでお終い。木の深皿に柄の付いたお玉みたいなので掬って、硬そうな黒パンを添える。

俺達の夕飯は汁の多い雑炊モドキだ。シエラカップ3つに分けて俺と姉貴それにミーアちゃん食べる。

「それ、泥水みたいだけど・・美味いのか？」

サラミスが聞いてきたので、少し分けてあげたけど、食べた途端彼の顔が顔が驚きの表情に変わった。

「お前達、何時もこんなのを食べてるのか？」

姉貴と俺は顔を見合わせると、ウンと頷いた。

「村に帰ったら、造り方を教えてくれ。この味は塩だけじゃないよな。」

「基本は塩と磨り潰した豆を発酵させたものかな。あと少し薬草みたいなのが入ってるけど・・」

豆を発酵させるなんて・・そんなことをサラミスは呟いてたけど、この世界では味噌なんて無いんだらうなあ・・

「俺は、その大型ナイフの方が気になるぞ。見せてくれないか？」

カンザスさんにグルカナイフをケースから引抜きぬいて手渡す。

ジツとナイフ見ていたが、立ち上がると片手で少し振り回す。

納得して座り直すと今度は鍛造された刀身を自分のナイフで小さく

叩いて音を確認している。

「これを作った鍛冶屋を紹介してくれ！」

俺にナイフ渡した後、カンザスさんが言った。

「ダメだ。俺も頼んだが、亡くなったそうだ。」

「残念だ。・・実に残念だ。」

「そんなに凄いの？」

「ああ・・音が違う。俺の長剣よりも遥かに錬成されている。」

サニーさんがカンザスさんに聞いている。どうやら、カンザスさんとサニーさんはチームを組んでいるみたいだ。それに、 그레이さんとマチルダさんも確か同じだったような気がする。ひょっとして、フリーなのはサラミスだけ？

「私は、ミツキの弓の方が凄いと思うわ。昨日だって、ガルド3匹を1本で仕留めたのよ。凄い貫通力だわ。」

「あの弦が3本ある弓か？」

「ええ・・でも、弦は1本って言ってたわ。それに使う矢は私の3分の1の長さも無くて太いのよ。殆ど即死だわ。」

そんな話をしながら食事を終わると、ポットを火にかけてお茶を飲む。

俺達はタバコやパイプを啜え、姉貴達は姉貴がキャンディーを分けていた。

「さて、今夜は此処で野宿となる。男が4人で女が4人。男は2人づつ、女は4人で焚火の番をする。女達が最初だ。その後はグレイとアキト。最後は俺とサラミスだ。番をする時は、岩屋と焚火の間に入れ。薪はこれだけある。夜は焚火を小さくしないように、いいいな！」

俺達は早速カンザスの指示に従って食器類を片付けると、岩屋の

中に入って寝ることにした。

カンザスさんが小さなランタンを入口近くの岩棚に置くと岩屋の中が急に明るくなる。

装備ベルトを一旦外し、ポンチョを引き出す。ポンチョを広げると、中に入れていた食器類を一纏めにシートに包む。そして、装備ベルトを再度身に付け、ポンチョを毛布代わりに体に巻きつけて横になった。

傍らのサラミスは大きな袋から薄い毛布を引っ張りだすとそれに包まった。

カンザスさんとグレイさんは肩のバッグを下ろし、その中から厚手の布を取り出して包まる。

あんなのがあるんだ。と思いつながら何時の間にか寝入ったようだ。

巨大アリの襲撃

ユサユサって体を揺り動かして、寝入っていた俺を起こしたのは、何時も通りのミアアちゃんだった。ミアアちゃんの仕事になってきているよな気がするけど、朝普通に起きるんだったら、ちゃんと自分で起きれるぞ。

「交替の時間だよ。って言った。」

姉貴に頼まれたようだ。

「ありがとう！」

ミアアちゃんの頭をごしごしって撫でると、タタターって逃げられた。

体を起こして、装備を確認する。ポンチョは姉貴達が使うと思い、食器の入った包みと共に置いておく。

ファーってあくびをして、両手を大きく回して眠気を取りながら、岩屋の外に出た。

夜の森は真っ暗で、広場の上には星空が広がっている。森の木立に仲良く2つの月が引っ掛かっているように見える。

「姉さん。替われるよ。」

「それじゃ。後はお願い。ミアアちゃん、寝るよ。」

俺が交替出来ることを確認すると、姉貴はミアアちゃんを連れて岩屋に入っていった。

姉貴とすれ違いに 그레이さんが大きなあくびをしながら岩やから出てきた。

「アキトはもう交替してるのか。早いな！」

「 그레이が中々起きないからでしょ！」

後から岩屋を出てきたマチルダさんに怒られてる。

これで、次のメンバーが揃ったことから、先に焚火の番をしていた女性陣は岩屋に入ってお休みとなる。

薪の束をバラしてその上に座ると、周囲を一通り見渡した。広場は焚火で明るく照らされているが、森の中は真っ暗な闇に包まれている。

ふと、焚火の左手に薪が積まれているのが目に入った。

「ああ、それは襲撃された時に燃やす焚火だ。ちょっとした柵代わりだな。」

怪訝そうに薪を見ている俺に、 그레이さんが教えてくれた。

「野宿者を襲う獣は多いんですか？」

「時期にもよるな。俺達を襲うとすれば肉食の奴らだ。森に獲物が多い時期はあまり気にする必要はない。しかし、冬とその後には気を付けた方がいい。それと、森に異変がある時だ。今回もこれに近いかも知れん。獣達の気が立っているから肉食獣以外の獣も俺達を襲う可能性がある。」

그레이さんがパイプを煙らせながら教えてくれた。そんな話を聞かされると、今にも森から獣が飛び出してくるような気がしてくる。しきりに辺りを見回していると、 그레이さんが笑いだした。

「そんなに心配するな。ほれ！あそこに目が光ってるだろう。あれはキヤナルと言って夜行性の小さな草食獣だ。他の獣が来れば直ぐ逃げ出す程臆病な奴だ。あいつが近くににいる限り肉食獣は近くにいない。」

「そうなんですか。」

그레이さんの指差す方には、確かに藪の中から小さく光るものが見える。動物の目は光を反射するんだなって始めて知った。

그레이さんに付き合っって何本かのタバコを吸いながら世間話をしていると、森の東側の木立に引っ掛かっているように見えた月が中

天近くにまで達している。

大分時間が経ったようだ。そろそろカンザスさん達と交替する時間かなとグレイさんの方を見ると、姿勢を変えずに目だけで周囲を観察している。

「少し、おかしくなってきたぞ。何時でも反撃できるようにしておけ。ゆっくりとだぞ！」

何か異変を感じ取ったようだ。ついさっきまで俺達を見ていたキヤナルもいなくなっている。

傍らの採取鎌をゆっくりと掴むと、グレイさんに頷いた。グレイさんはいつの間にか小さな玉を持っている。右手に持って、玉に付いた紐の先にある輪を指に掛けていた。

「何が出るか解らないが、とりあえずこの爆裂弾で牽制する。マチルダの【メルト】より威力は低いが、結構な音だ。全員が目覚ますだろう。俺は右、アキトは左だ。焚火より前が出るな。それと少し薪を追加しろ、ゆっくりだぞ！」

俺は右手で数本の薪を取ると、焚火に投げ込んだ。

焚火の火勢が上がり周りが少し明るくなる。

すると、森の闇の中にうっすらと光るものが見えた。だんだんと光るものが増えてきたとき、それが何かの目であることは解ったが、動物にしては少し大きすぎる。

「おいおい・・・こんな所にいるのかよ。アキト、あれはタグの目だ！」

「タグって何ですか？」

「タグも知らないのかよ。森の向こうの草原地帯に大きなタグ塚を作って生息している昆虫だ。飛べないし、毒も無い。だが奴らの牙は何でも切り裂き群れで行動する。」

「戦闘で注意する点は？」

「奴らの表皮は硬い。お前のぶん殴り攻撃はたぶん利かん。目と腹部の表皮にある境目が唯一の弱点だ。」

だんだんと大きな目が広場に近づいているように思える。俺は、さらに焚火へ薪を投げ入れた。

そして、森の中から最初のタグが現れた。

それは、巨大なアリだった。大きさは2mぐらいで口元には短剣状の牙がカチカチと俺達を威嚇するように噛み合い音を立てている。

たちまち数匹が後に続いて森を出てくる。更に後続がいるようだ。グレイさんは爆裂弾をタグの群れに座ったままで投げ入れた。

ドオン！

爆裂弾が爆発して群れの中に火柱が立ち上がる。2匹が巻き添えになり炎に身をもたえさせている。

「来るぞ！」

俺達は立ち上がると、打合せ通りに焚火の左右に分かれて武器を構える。

俺は採取鎌だ。グレイさんの忠告は受けたが、目を鎌で攻撃すれば何とかなると思っっている。

音に驚いて皆が次々と岩屋を出てくる。

目の前のタグに驚いているようだが、カンザスさんが直ぐに配置を告げる。

「サラミスはミツキと一緒にアキトへ行け。マチルダは此処で魔法攻撃。俺とサニーはグレイ側だ。お嬢ちゃん焚火を絶やさないようにしろ。」

マチルダさんはタグへ攻撃する前に、【メル】っと呟き、俺の前

に積んだ薪に火を点けた。

「大きいアリさんだねえ。」

暢気な声の姉貴だが、しっかりとクロスボウの先にある金属の輪に足を掛けて両手で弦を引いている。

「サニーさんとはんでもない威力だと言ってたが、タグ相手に使えるのか？」

「たぶん大丈夫だと思うよ。」

サラミスの疑問にそう答えると、俺はタグの群れを眺める。

ドドオン！、ドドオン！

マチルダさんの【メルト】が続けざまにタグの群れを襲う。確かに爆裂弾より威力は上だ。たちまち数匹のタグが火炎に包まれる。

焚火の右側にタグが集中する。左側の俺達の方はマチルダさんが点火してくれた焚火のお蔭で侵入してこない。タグって火を恐れるのかも知れない。

カンザスさんとグレイさんで襲い掛かるタグの足止めをしている。片手剣と長剣でタグに立ち向かっているが、表皮が相当硬いせい、折ることは出来ても切り取るまでには至っていない。それでも前足を折られたタグは顎の牙だけの攻撃を仕掛けているが、2人は容易にかわしているようだ。

其処に、サニーさんの放つ矢がタグの複眼に突き立つ。

軽く突き立つ矢では利かないみたいだ。動きに変化が現れない。

しかし、次の矢は半分近くもタグの複眼に深く刺さると、タグは体を痙攣させたかと思うと、その場に倒れ落ちた。

目が急所って言うてたのは、目の奥にタグの脳幹があり、それを狙えってことだと理解した。

突然、俺達の前に一匹のタグが前足を振り上げて襲ってきた。

咄嗟に鎌のような前足の一撃を体を回して避けると、その勢いを利用して複眼に鎌先を叩きこんだ。

ズブツ！っという鈍い手応えで、鎌先が複眼の奥深くまで入り込む。

すると、タグは後ろ足だけで棒立ちになり体を痙攣させてドタツ！っと倒れた。

採取鎌はタグの立上がる時にズルツと抜くことが出来たが、あまり言い感触ではない。

ちらりと姉貴を見ると、 그레이さんが相手をしているタグを狙っている。

パシュツ！っと発射されたボルトはタグの複眼を貫通して別のタグの腹部に突き立った。タグの最後を見ずに姉貴は次の発射準備をしている。近くのミーアちゃんはせつせと焚火に薪を追加していた。

俺の後ろの方では、マチルダさんが【メル】と呟きながら火炎弾をタグにぶつけている。タグの群れがバラけてしまったため、個別の攻撃に切替えたいだ。

「アキト！」

サラミスの叫びが上がる。タグの前足を一本長剣で折り取ったようだが、別のタグが攻撃に加わったらしい。

慌てて、手傷を負ったタグに走りより飛び上がって複眼に鎌先を叩きこむ。

急いで鎌先を抜き取り、サラミスの援護に回る。タグの注意をこちらに向けさせ、サラミスの接近を気付かせないようにすると、タグの隙をついてサラミスが飛掛かり複眼に長剣を突刺した。

「ダメだ。支えきれん！！」

그레이さんの方に数匹が同時に攻撃を仕掛けたようだ。マチルダさんが急いで火炎弾を放とうとするが 그레이さん達とタグがあまりにも接近しすぎて躊躇している。

「アキト！」

余りの光景にボーっとなっていたようだ。姉貴の声で、我に返ると

腰のホルスターからM29を引き抜き両手でしっかりと構える。

ドオン！、ドオン！、ドオン！・・・

1発、1発確実にタグの頭を狙ってトリガを引く。シングルアクションだから1発毎に撃鉄を親指で起さなければならぬのが難点だ。

44マグの弾頭はタグの頭に大きな穴を開けて貫通した。まるで内部で爆発したようにも見える。

6発の弾丸を発砲すると弾倉をスライドさせて薬莖を抜き取り、素早く弾丸ポーチから予備の弾丸を補給する。弾倉を持って銃に確実に弾倉を戻す。

そして、再度構えて発砲しようとしたが、もうそこには動き回るタグはいなかった。

親指で撃鉄を少し引き、デコッキング動作をゆっくりと行い内蔵された安全装置を作動させる。そして、素早く銃を腰のホルスターに納めた。

「今のは、何だ！」

サラミスが詰め寄ってくる。

「俺の切り札さ。クルキュルもこれで倒した。」

「俺にも出来るか？」

「出来るかも知れないけど、1回だけだ。そして2度と剣を握れなくなるぞ。」

剣を握れなくなるってことが響いたらしい。その後の追求は無くなった。

どうやら襲撃を撃退できたらしい。皆で焚火で沸かしたお茶を飲みながら、休息を取った。

タグが原因らしい

タグの襲撃を退けた後、焚火の番をカンザスさんとサラミスに交替して俺達は岩屋で一眠りってことになったけど、興奮がなかなか冷めないのか明け方まで起きていたような気がする。

でも、またしてもミアちゃんに起されたことから考えると、少しは睡眠をとったみたいだ。

どうやら最後まで寝ていたみたいだ。岩屋の中にはもう誰もいない。

顔をゴシゴシ擦りながら岩屋を出ると、昨夜の惨状が広がっていた。

「ほら、これ飲んで、これ食べて・・・」

姉貴が、呆然と辺りを見渡していた俺にシエラカップを渡してくれた。

グビツって飲んだら・・・濃いコーヒーだった。しかも砂糖もミルクも入ってない。

思わず「苦が！」って呻いたが、頭はすっきりだ。

皆が囲んでいる焚火の姉貴の隣に座ると、ミアちゃんが硬そうな黒パンを1個くれた。

「ありがと！」って齧ると、ビスケットみたいな感じでたべることが出来る。でも、粉が結構こぼれる・・・

「皆そろったな・・・今日は、タグの方向を逆に辿るつもりだ。

早朝、グレイが先行偵察した話だと、ガトルの来襲方向と同じということだ。昼前には森を抜けることが出来ると思うが、タグがいないとも限らん。昨日と同じで先行は俺とグレイで交互に替わる。後

はアキトで問題なからう。」

今にも出発しそうなので、俺は慌てて黒パンを飲み込むと濃いコーヒーで流し込んだ。

立ち上がるうとする、グレイさんに裾を引っ張られて戻された。

「まあ、待て。タバコでも吸って休息しておけ。」

俺がケースからタバコを取出すと、姉貴がコーヒーを追加してくれた。

「草原の調査は状況次第だ。俺としては、ガトルとタグの方向が判れば今回の調査は終了と考えている。」

「原因まで調べないんですか？」

「泉の森に原因は無い。それも立派な調査だ。草原地帯の調査は俺達の手に余る。銀レベルが欲しい。」

銀レベルって上級者クラスってことだよな。黒レベルでは、まして赤レベルがいるこのパーティでは無理ってカンザスさんは言うてるみたいだ。

自分達の能力を過大評価しない。石橋を叩いて渡るってのがリーダーには必用なのかも。そうするとカンザスさんって良いリーダーってことになる。

「さて、出かけよう。荷物を纏めて、焚火には土を被せておけ！食器類を纏めてシートに包み、ポンチョに丸め込んで、装備ベルトに付いてる専用ベルトで横にしっかり固定する。杖代わりの採取鎌を持てば俺の準備は出来上がり。」

姉貴も同じように装備ベルトを身に付け、サスペンダーの具合をみていた。ミアちゃんはさっさと焚火に土をかけて火を消すと、片手剣のベルトを肩にかけて終了だ。姉貴がミアちゃんの斜めに背負った剣のベルトをずれないように調整している。

「タグも換金部位があるんだって。全部纏めてカンザスさんが持つてるわ。彼のバックは私と同じように、魔道具で5倍程度の収納力があるんだって。」

「タダ働きのかなって思ってたけど、良かったね。」
でも、姉貴と同じようなものがあるんだったら俺も欲しいぞ。

俺達は1列になって先頭のグレイさんの後を付いて行く。

最後尾は俺で、俺の前は姉貴ではなくサラミスだ。最後尾の俺に合わせて一緒に歩いてくれている。

周囲を互いに警戒しながら、小さな声で世間話をしてると、森を進む退屈さも紛れる。

サラミスは単独で赤7つまでレベルを上げたようだ。14歳から始めて4年間で此処まで上げたということは随分と頑張ったに違いない。

薬草採取で得た金でガイドを雇って討伐をした時に、ガイドが使っていたのが長剣だったそうで、それ以来長剣を使ってるそうだ。確かに、長剣はハンターとして見た目がいいもんな。でも、振った後に隙が出やすいのが難点なんだけど・・・これはサラミスも同意した。

もう少し、金が出来たら町に出かけて誰かに教授して貰うんだと言ってるけど、もう遅いような気がする。

一旦、自分なりの戦いが出来ると、その癖を直すのは大変な努力がいる。

偶に、繁みがガサガサって音がして小動物が逃げていく。あれって、グレイさんが言ってたキャナルなのかも知れない。

不意に歩みが止まる。俺は直ぐに腰を落とすと周囲を見渡した。

・特に何も無い。

「休憩だつて。でも、直ぐに出発するから、荷物は降ろさないようにって言われたわ。」

姉貴が俺と、サラミスにクッキーを一枚つつ配りながら言った。

サラミスはクッキーの甘さに吃驚してみたいけど、疲れには甘味が良いんだよね。

前列が立ち上がるのを見て俺達も立ち上がって先へ進んでいく。

タグは大型の昆虫だが、森を進むときの痕跡は極僅かなものだった。偶に、藪の枝が折れている程度で、ガトルのほうがずっと痕跡を残してる。

先頭に交互に立つ2人は、この僅かな痕跡を追っているんだろうが、俺にはまだ無理な気がする。

そして、段々と前が明るくなって、木立も疎らになり、繁みも少なくなってきた。

列もバラけて、散開したような形で前に進んでいる。

さらに進むと、突然前方が開けた。疎らに低木はあるが、森の形はなしていない。その向うにはずっと草原が続いている。

草原の方向に進み、もうこれ以上先には低木すらない。という所で休息を取る。

「サラミスとアキトで森に戻り枯れ枝を集める。カラカラに乾いてるヤツだけだ。サニーはお嬢ちゃんを連れて先方の確認。グレイは、タグとガトルの痕跡を調査する。」

早速、森に戻ると枯れ枝を集めた。昼食のお湯を沸かすだけだろ
うから、そんなには必要ない。直ぐに両手出抱えられるだけの枝を集め、サラミスと皆の所に戻った。

「草原は遊牧民の縄張りだ。煙が出ないように昼食の準備をしと

け。」

カンザスさんの指示で焚火を始めた。確かに乾いてる小枝を燃やすと煙は余り出ない。

水筒の水をポットに入れて焚火の横に置く。マチルダさん、カンザスさん、サラミスも小さなポットや小鍋を焚火の周りに置いた。

グレイさんが戻ってきた。

「タグもガトルも草原方向から来たようだ。この場所から南に行つたところに両方の足跡が土に付いている。」

「タグに追われて暴走した・・・と考えられるか・・・」

確かに、ガトルよりタグの方が強そうだし、襲われたら普通逃げるだろう。

でも、どうして急にガトルを襲いだしたのかが気になるところだ。それなら、過去に何回かガトルの暴走があつたろうけど、ギルドのお姉さんは緊急招集は過去発生していない。って言っていた。

お湯が沸いて少し経つた頃、サニーさんとミアちゃんが帰ってきた。

「草原の先にタグの巣穴の1つが有りました。出入り口も数箇所見つかりました。どうやら、今回の暴走はタグが原因ですね。」

「タグの巣別れが原因か・・・今までこんな近くまで巣穴を作つたことは聞いた事も無いが、巣穴の攻撃は俺達の仕事ではない。」

サニーさんの報告でカンザスさんは少し納得したみたいだ。あとで、図鑑を調べてみよう。

サニーさんがミアちゃんの頭をナデナデしながら「偉いよねー」って言っている。

何でも、巣穴周辺の監視をしているタグの接近を感知して逸早く撤退できたそうだ。ネコって勘が良いって聞いてたけど本当なんだなと思ってしまう話だ。

「食べながら、聞いてくれ。・・とりあえずは調査は終了した。森に少なくともガトルはいないようだ。これから帰ることになるが、泉の森の南側を通ることになる。野宿箇所は小川の近くだから、昨晩のようなタグの襲撃は無いとは思うが、用心にこしたことはない。」

カンザスさんの言葉をお茶で焼き固めた黒パンを流し込みながら聞く。

「草原地帯での長居は無用だ。食べたなら直ぐに出発するぞ。」

俺は頷きながら、喉に詰まった黒パンを慌ててお茶で流し込んだ。

今度はカンザスさんが先頭に立って森のはずれを歩いて行く。低木ばかりで、見通しは良いし、足を取られる事も無い。結構な速度で歩く事が出来る。

大きな石が前方に見えてきた。

石のところから、森に入る。今度は薄暗く、途端に見通しが悪くなる。周囲の小さな音にも気を取られ思わず振り返ることを繰り返しながら歩いて行く。

しばらく進むと、小さな流れがあった。

リリック釣りをした流れに比べ、遙かに小さい流れではあるが、小川には違いない。

小川に沿って先に進む。

「この流れは森に入る前にあつた橋の小川から森の中で別れてるんだ。この流れに沿って進めば森から必ず出られるんだ。」

サラミスが教えてくれた。

俺達が歩いている所も、昨日歩いた所と違って少し踏み固められている。森の中で採取や討伐を行ったハンターが使ってるみたいだ。

少し進んで一休み。そして、更に進むと、この流れの本流とわかる小川があった。少し広くなった川原とその上に張り出した大きな木に洞が空いている。その周りには立木もなくポツリと独立して立っているのが印象的だ。

カンザスさんは此処で立止まって、俺達の方に振り向いた。

「今夜の野宿場所だ。ここは、森の中でも野宿の一等地だと思っている。普段なら襲われる可能性は殆ど無い。しかし、今が普段ではない事は昨夜のことで判ってる筈だ。」

俺達は早速昨晚の分担で作業を始めた。

薪の束を俺が持ち帰ったところには、サラミストグレイさんとはとくに帰ってきていた。

まだ日が高く、夕暮れにも間があることから、真直ぐな枝ぶりの木を切ると早速釣りを始める。

「此処でも釣りをするのか？・・・目標は8匹だ。頑張れよ！」

グレイさんの励ましとミアちゃんの監視の下で、小川の流れがゆるい所に仕掛けを投げ込んだ。

2、3匹釣れると、ミアちゃんが焚火に持っていく。

興味を持ったカンザスさんとサラミスが後でパイプをふかしながら見物してるのが気になるけど・・・

「しかし、簡単に釣ってるな。リリックは高級魚だぞ。これ専門に暮せるぞ！」

「おれにも、ちょっと貸してくれ！」

カンザスさんは関心してるし、サラミスは行動に移した。仕方なく釣竿を貸すと、直ぐに1匹を釣り上げた。

俺専用のものは別にあることだし・・・この仕掛けはサラミスに進呈することにした。

「ホントに貰って良いんだな。これで、家族にも食べさせる事が出来る。ありがとう！」

非常に喜んでいたが、釣針さえ出来れば簡単だとおもっただけ。でも、小さな釣針を作るのは以外と難しいのかも知れない。

焚火に戻ると、姉貴が鍋でシチューモドキを作っている。乾燥野菜とビーフジャーキーを千切ってお湯に入れ、焼き締めた黒パンを砕いて混ぜ合わせた物だ。

美味いかどうか非常に気になるが、スプーンで味見してる姿を見る限り、問題なさそうにも思える。

ミーアちゃんは塩をまぶしたリリックの串焼きが気になるようで、グレイさんが火加減を直すために串を移動する度に、その手を追っ
てみている。

サニーさんとマチルダさんも野菜や豆を煮て乾燥肉を入れたスープを作っているようだ。サラミスも自分で同じようなものを作っているが、最後にさつき釣ったばかりのリリックをぶつ切りにして鍋に入れた。

おいしそうな匂いが焚火の周りに立ち込める頃には、もうすっかりあたりは暗くなっていた。

早速、食事をとる。

姉貴が携帯食器に入れてくれたシチューは黒い・黒パンだしなと重いながらスプーンで食べてみると、以外に美味しい。今日はそれに1人1本のリリックの串焼きもある。

ミーアちゃんは一番大きいのを貰って大満足だ。

移動神官と始めての魔法

朝早く野宿した場所を発つて、小川沿いに森の中を進んでいる。この辺は危険な獣は普段からいないらしく、前を歩く皆の表情も明るく感じられる。

段々と先方が明るくなり、木立が疎らになる。どうやら泉の森を抜けたらしい。

低木と繁みが点在する荒地に流れる小川の傍を俺達は歩いて行く。

その歩みが突然止まる。急いで先に進むと・・・そこには沢山のガトルの足跡が残されていた。

「2日前に見つけたヤツだ。此処を渡ったのさ」

グレイさんが教えてくれた。良く見ると、対岸にも足跡が見える。

また歩き始める。そして、今日最初の休憩地点は、俺がリリック釣りをした淵の傍だった。

焚火をせずに、水だけを飲む。それと、1本のタバコだ。もちろん姉貴達はキャンディーを分けて食べている。

ちよつとの休みだが、大分疲れも取れた。

カンザスさんの合図で出発する。更に小川を辿って北に向かい、橋の袂に出る。そして、村への道を辿る。

村に着いたのは昼過ぎだ。早速、身近な宿で昼食を取る。

昼食と言っても、豆に小さな肉の入ったスープと黒パンだ。硬いパンを食べてたせいか、とてもやわらかく感じる。

食事が終わり、お茶を飲みながら長めの休息を取る。

ギルドに着くと、俺達をホールのテーブル席に座らせ、カンザスさんはカウンターの姉さんの所に行き、タグの換金部位を渡してよつた。おねえさんが吃驚してるところを見ると、滅多に見ることが出来ないものなのかも知れない。

更に、2、3お姉さんと話をして俺達のテーブルに戻ってきた。

「皆ご苦労だった。これで、俺からの依頼は終了だ。俺に依頼したのはギルドだが、俺達だけでは不可能と考えお前達を誘った。実際、あのタグを俺達だけで対処することは出来なかったから、この選択は正しいものと考えている。それで、俺への依頼金額とタグの交換部位の金額を合わせて、均等に分割する。ちよつと待っていてくれ。それと、サラミスとアキト達は今の内にレベルを確認しておけ。あれだけのタグを相手にしてるんだ。レベルが上っているはずだ。」

早速、カウンターの姉さんの所へ行くと、もう水晶球を置いて待っていてくれた。先にカンザスさんが手配していたみたいだ。

前と同じように、ギルドカードを渡して、水晶球を両手で持つ・これを4人で行うと、お姉さんが、箱からそろぞれのカードを渡してくれた。

テーブルに戻ってゆっくり見ようとしてたら、グレイさんに横取りされた。

「どれどれ・・・赤5つか・・・上つたな。それで、詳細は・・・体力5、魔法力3、魔法耐性5、敏捷性6、技能7、感性5、特殊技能：サフロナ体質、毒無効・・・なんだこりゃ？」

「何・・・サフロの間違いではないのか？まして毒耐性など聞いた事も無いぞ」

カンザスさんが吃驚している。マチルダさんとサニーさんも同じだ。

グレイさんがミツキに手を出している。カードを見せろってことだよな。

姉貴はしょうがないなと言うような顔で、おずおずとカードをグレイさんの手にのせた。

「こっちは、・・赤5つか・・詳細は・・体力4、魔法力5、魔法耐性5、敏捷性5、技能7、感性4、特殊技能：サフロナ体質、毒無効・・アキト並にとんでもないな。」

もう何も言えないって感じで俺達を皆が見てる。

グレイさんは余り人には見せるなよ。って言いながらカードを返してくれた。

「先ず言っておく。赤のカードで4以上を持つ者は殆どいない。

黒のカードで6以上を持つ者も聞いた事がない。・・しかし、お前達はもうそれを持っている。そして容易に銀に上る事が出来るだろう。さらにだ、お前達に傷薬や毒消しは無用だ。それ程の特殊技能を持っている。だが、慢心することなく確実に進め。俺が言いたい事はそれだけだ。」

カンザスさんが静かに言った。

そんなに凄い事なのか良く判らないけど。

「今まで知らなかったの？」

「文字が読めなかつたんです。ミケランさん達との依頼処理で少しづつ読めるようにはなつたんですが・・」

マチルダさんの問いに姉貴が答える。それを聞いてそんなバカなつて顔をマチルダさんはしてるけど。

「黒い髪・・黒い瞳・・それに私達の肌色と少し違っわね。あなた達、何処から来たの？」

サニーさんが聞いてきた。

姉貴は、俺の顔を見る。俺が頷くのを確認すると、ため息を1つ・

・そして、俺達の身の上話を始めた。

俺達の世界。それは平和で魔法ではなく科学が発達した世界。そんな世界で姉貴が望んだことは、俺と慎ましく暮す事。

何故かその願いを一族の崇拜した神が叶えてくれた。

そして、この世界にやってきた。生活手段を得るために最初の集落で長老が言つてたハンターになった。

ミーアちゃんはその集落で長老に託された。

「そんな事があつたのか。しかし、慎ましくは難しいぞ。お前達ならば何処のギルドでも欲しがるはずだ。」

カンザスさんは心配してくれてるようだ。

「すみませんが、他言無用でお願いします。」

「判つてるつて。サラミスも良いな！」

「判つてるつて。それに、言つても誰も信じないよ。」

そんな話をしていると、お姉さんがテーブルにやってきた。

「カンザスさん。これが今回の依頼報酬とタグの代金です。」

テーブルの上には銀貨が6枚置かれ、次に銀貨23枚が追加された。

「約束通り、均等割りにする一人350Lで残りの100Lはガトル来襲で怪我を負つた連中に与えたいが良いか？」

「ああ、それでいい。」

グレイさんは声に出したが、俺達は頷くことで賛意を表した。

姉貴は俺達の分として、銀貨10枚と少し大きめの銅貨を5枚貰つたようだ。

俺達がギルド出ようとしたら、マチルダさんに呼び止められた。

「ちよっと待って。多分近い内に銀レベルのハンター達がやって

くるわ。その時にもしかしたらだけど・・・移動神官がやってくるかも知れない。来たら知らせるようにギルドに伝えておくから、貴方達、神官から魔法を買いなさい。移動神官は低レベルの魔法のみ販売するけど黒レベルには絶対必要よ。」

「ご忠告、ありがとうございます。なんとか使えるように頑張ってみます。」

魔法って売ってるんだ。というのがその時の感想だった。でも、移動神官って聞きなれない言葉だけど。

何時もの宿に帰り、ひさしぶりの風呂を楽しんだ。

でも、この風呂のお湯をどうやってたら沸かせるかが未だに判らん。排水溝はあるんだけど・・・蛇口は無いんだよな。

次の日はミアちゃんの服を買って、村周辺の薬草採取で1日を過ごす。

今度の服は、薄革のベストんだけど頭に巻いたバンダナにクルキールの羽を差してご機嫌なんだ。

雑貨屋さんでは例の魔法の袋を購入した。一番安い、3倍入って重さ変わらずがうたい文句の袋で、1個の値段は150L。大きさはレジ袋ぐらいだけど、物を入れた後で折りたたむ事もできるみたい。これを3人分購入した。

その夜、3人の分担を決める。姉貴は食料と水の予備。俺は調理用器具と食器。ミアちゃんは採取品や換金部位の一時保管。これに各自が水筒とお弁当を持つ。俺は食器以外にも釣り道具一式を袋に詰めた。

袋にこれらを入れてもかなり余裕がある。腰のバッグに袋を折りたたんで入れると、確かに前より軽く感じる。

2日程経ってギルドに出かけ、何時ものように採取依頼の依頼書

をカウンターに持ち込むと、お姉さんに「ちょっと待ってね。」って言われた。

「移動神官さんが来てるのよ。何年ぶりかしら・・・話は聞いてるわ。呼んでくるから、ホールのテーブルにいてね。」

そう言いながらも、依頼書にでかいハンコをペタンと押してくれた。

テーブル席に3人で座っていると、お姉さんが白いフード付きマントのフードを深く被った女性を連れてやってきた。

「移動神官のスピラニ様です。後はよろしく！」

お姉さんは簡単に紹介して帰ってしまった。

「スピラニです。御用とは、魔法の購入で宜しいのですね。」

姉貴の対面席に座ると、スピラニさんがフードを外した。エルフの女性だ。マチルダさんもエルフだったけど・・・エルフ族ってやはり美人が多いのか。

「出来れば購入したいのですが・・・私達はどんな魔法があつて、どんな魔法があるのか判りません。制約みたいなものは有るのでしょうか？」

「適正はあります。制約は・・・使用回数と考えて良いでしょう。」

適正外の魔法は使用回数が激減しますが、使えないことはありません。先ず、適正を見ましようか。」

スピラニさんは小さな水晶球を取り出した。

「魔法の基本は、土、水、火、風です。これ以外にも光がありますが、使用できる魔法は1つだけです。それでは、あなたから、掌にこの水晶球を乗せてください。」

姉貴は水晶球を受取り掌に載せてみる。すると、段々と水晶球の内側から光が溢れ出てくる。

「白・・・珍しい方ですね。エルフ以外で白を始めて見ました。では次の方。」

姉貴は俺に水晶球をハイ！って手渡してくれた。

掌に載せると、途端に水晶球の重さが増して光りが溢れ始める。

「貴方も白・・・では、お嬢ちゃんも乗せてみてください。」

水晶球は元の重さに戻っている。そつと摘んでミリアちゃんの掌に乗せる。

ミリアちゃんの光りは透き通る様な赤だった。

「白は全ての魔法に適正を持ちます。お嬢ちゃんの赤は火と風の属性です。どのような魔法をご希望ですか？」

「私はメルト。ミリアちゃんにはメル。アキトには敏捷性を上げる魔法が欲しいのですが。それと、夜を明るくする魔法ってありますか？」

「アクセルで敏捷性は向上できます。明かりであれば、光球のシヤインが良いでしょう。洞窟等でも重宝すると聞いています。」

「お値段は・・・」
「1つ150Lです。この金額が高いのか安いのかは判りませんが。」

「では、お願いします。」

姉貴が代金を支払うと、スピラニさんは白い服の袖から透き通るように白い腕を出した。

「1人づつ私の手を握ってください。」

姉貴は恐る恐るその手を握る。そして痺れたように一瞬体を震わせた。

「メルトとシャインの魔法式を体に構築しました。次は貴方ですね。」

痛いのか？と思いつつもその手を握る。スピラニさんが俺に微

笑んだその時、体に電撃が走る。

ウガ！って感じた。でも一瞬でそれは納まった。

「アクセル。確かに構築しました。最後はお嬢ちゃんですね。大丈夫ですよ。一瞬で終わります。」

ミーアちゃんは、かなり怖がっているみたいだ。少しづつ手が伸びていく。でも最後にガシ！って手を握られ、ウギャ！って叫ぶと体がピン！って立った。

「ちよっと、可哀相でしたが、これも必要な事です。確かにメルを構築しました。・・では、これで失礼します。」

スピラニさんはそう言うのと席を立ち、ギルドの2階に上って行った。

俺達は若干放心状態だ。これで、ホントに！って感じなんだけど・

「薬草採取で確かめます！」

姉貴の一言で、それもそうだと俺達は村を出て行った。

泉の森の小川沿い。何時もの薬草採取の場所だ。周りは荒地だし、人気も無い。

ここなら、魔法の練習に最適ということで、早速始める事にした。

「私からいくよ！・・ 【メルト！】」

姉貴の両手の間に30cmくらいの炎の球体が出来上がった。腕を振り上げ投げつける動作で姉貴の手を離れ遠くに飛んでいく。

ドドオン！と爆炎が上がった。マチルダさんより威力があるかもと思うような爆炎だ。

「私も・・ 【メル！】」

ミーアちゃんの右手から炎の球が発射され、20m位先にある藪に当たるとボン！って燃え上がった。

これで、遠距離攻撃もミーアちゃんは可能になったわけだ。一気にレベルを上げられるぞ。

最後は俺の番だけど・・・

【アクセル！】と叫んで見たが、何も起こらない。なんだ？って見てる俺に、姉貴が話しかけてきたが、男の人の声に聞える。プレイヤーの回転数を落として聞いているような感じだ・・・と言う事は、これがアクセルの効果？

少し動いてみる。自分では判らないが、姉貴達の驚いたような表情が見えていて面白い。

止め方を聞いていなかったけど、「解除！」って叫んだら、姉貴達の話声が元に戻った。

ちよっとした加速装置みたいで面白い。これだと片手剣でクルキユルの首を落とすのも可能じゃないかって思ってしまう。

マゲリタ狩りと地上の太陽

ボン！・・・ボン！って後ろの方から音がする。

姉貴の指導の下でミアちゃんが【メル】の練習をしてるんだけど、目標に命中させるのに苦労してるみたいだ。

石投げだって最初からうまく当らないから、練習あるのみ！って姉貴は言ってたけど、どうなることやら・・・

そんなことから、俺一人で依頼を受けたサフロン草20本のノルマをせつせとこなしている。

小川の土手に結構間まとまって生えてるんだけど、こんなに簡単に依頼を達成できていいのだろうか？とつくに20本を越しているような気もするけど・・・

固形燃料でポットにお湯を沸かして、お茶を飲みながら一息入れていると、姉貴達がやってきた。

「手伝えなくて、ご免ね。依頼の方はどんな感じ？」

「ああ、とりあえず終了。そっちの方は？」

「にゃんとか出来るようにやった。当るまで目を離さなければいい。速さも変えられるし、途中で方向も変えられる。」

何かりモコンみたいで面白そうだ。今度魔法を覚える時は是非自分の物にしようと思った。

姉貴達もポットからお茶を入れる。此处で一休みして、今日の仕事は終了だ。

次の日、俺達は早速覚え立ての魔法を使って討伐依頼を行うべくギルドの掲示板とニラメッコをしている。

何を狩ればいいのか問題で、討伐対象名を図鑑で調べながらの作

業となる。

「これは、どうかしら。困ってるみたいだし・・・」

姉貴の広げた図鑑にある獣は「マゲリタ」とある。でも、その姿はどう見てもモグラだ。しかし、体長は子犬程の大きさだけど・・・依頼書には畑のマゲリタ退治とある。期日は3日間、数は3匹以上で討伐確認は尾っぽで行うとある。尾っぽ1つが20L。依頼書の注意事項は、（畑がめっちゃめっちゃ何とかしてくれ!）とあるだけだ。図鑑では、（群れを作り、動きはそれ程でもないが、力は強い。）としか書かれていない。

「何とか成るんじゃないかな。ミアちゃんのレベルアップにも丁度良さそうだし。」

「そうだよな。じゃ、決まり!」

姉貴は、掲示板から依頼書を引剥がしてカウンターに持っていた。

泉の森への道を辿り、十字路を右に曲がってしばらく歩くと目的地に着いた。

思わず、「こりゃ、凄い!」って叫んでしまった。

100m四方の大きな畑が3つ、モコモコと大きなモグラのトンネルが縦横無尽に作られている。モコモコの高さは50cm位だから、子犬程のモグラってことになる。なるほど図鑑は正確だ。

「あつちに、にやにかあるよ!」

ミアちゃんの指差す方向には、大きな堆肥の山がある。森から落葉を集めて堆肥にしているようだけど、その堆肥の山から四方にモコモコが伸びている。

皆で近くよってみると、結構大きな山だ。高さ2m程で10m四方はある。最もこの位ないと畑にバラ撒くことは出来ないのだからうけど。

「マゲリタいるのかな？」

姉貴が槍でブスリって堆肥の山を突刺したけど、特に変わった変化は無いみたいだ。

近くのモコモコを採取鎌で崩してみると30cm位のトンネルが現れた。

早速、ミーアちゃんが堆肥の山に繋がってるトンネル内に、【メル】を打ち込んだけど、ボン！っていうくぐもった音がして堆肥の山から少し煙が出てきた。

それでも、変化が見受けられない。

「オオーイ！・・何やってんだ？」

遠くから聞き覚えのある声がする。

声のした方を見ると小川の方から、サラミスが長い棒を担いでやってきた。

近づいて来た彼の姿をよく見ると、長い棒には糸が付いている。

どうやら、リリック釣りをしていたようだ。背負っている籠の中から、串焼きの良い匂いがしてきた。

モグラ退治の方法に行き詰っていた事もあり、畑の隅で彼を交えて一休み。

彼の方は大漁だったらしく、俺達に気前良くリリックの串焼きを提供してくれた。

早速、小さな焚火を起こし再度炙って、お茶と一緒に頂いた。

「そうか。マゲリタ狩りねえ・・俺もやったことあるけど、姿を見るのが難しいんだ。それに、奴らの行動は夜だぞ。奴らは肉食だから適当に餌を置けばやってくる。そこを狩るんだ。」

「昼間はダメってこと？」

「先ず無理。夜と餌。これが決めてだな。」

目から鱗の話だ。確かにモグラの活動は夜だし・・姉貴に凶鑑を確かめてもらうと、やはり（夜行動する。）って書いてあった。

情報の礼を言うと、「こつちも貰ってるからその位は教えるよ。」って、サラミスは言うと、村に帰っていった。

さて、どうしよう・・夜には、間があるし、餌も無いし・・

「アキト、とりあえず魚をいっぱい釣りなさい。今夜は此処でキャンプです。」

姉貴の宣託が下った。

小川に行つて場所を決めると、とりあえず昼食を取る。例の黒パンサンドを齧りながら、ハムを皆から少しづつ頂戴した。餌に必要だからだ。

釣り道具を取り出して、竿を伸ばしながら仕掛けを付け、ポチャンって仕掛けを投入すると、直ぐに当りが出た。

ミーアちゃんが駆けつける。釣り上げた魚をミーアちゃんに渡すと、岸边に生えていた葦みたいな茎に鰓から口へと差し込んだ。

今日は、リリック以外に鮎みたいなズングリした魚も釣れる。美味しいのかは不明だけど、ミーアちゃんは選別して葦の茎に差ししていた。

20匹位釣れた所で終了だ。今回は炙らずに生のままである。餌だしね。

畑の一角に、ポンチヨを組合わせて、簡単なテントを作った。

テントの前の土を掘り、小さな焚火を作る。ミーアちゃんは姉貴の許可を得て自分だけリリックを炙りだした。猫族だから魚には目が無いのかも・・俺と姉貴は今回は自粛した。

姉貴達に夕食を任せて、獲ってきた魚を畑のあちこちにバラ撒くと同時に数匹の魚には生木の皮で作った紐を枯枝に結び付けた。う

まくいけばガサガサと音を立てうだろう。

夕食の少し黒ずんだシチューモドキを食べながら、作戦を立てる。

「ガサガサって聞こえたら、【シャイン】を使えばいいのね。」

「それでいいと思うよ。たぶん何匹かは地上にいると思うから。」

後は、逃げようとするのを俺が阻止。行き場を失ったマゲリタをミアちゃんが仕留めればOK。」

「【メル】で攻撃すればいいんだよね。」

ミアちゃんはやる気満々だ。

後は、深夜を待つだけとなった俺達は食器を片付けると、テントにもぐってその時をひたすら待つことにした。

どれぐらい待ただるうか、テントの外を窺っていた姉貴が俺をつついた。

「何かいるみたい。ガサって音がした。」

テントの布を少し捲って聞き耳を立てる。何かが枯枝を引き摺っている小さい音が聞こえた。

俺達の気配でミアアちゃんも起きたようだ。両手で、顔をゴシゴシしていたが、ふと気付いたように俺達の間割って入ると、同じように聞き耳を立てて様子を窺う。

「にゃん匹だろ。こっちは近くで、あっちの方は少し遠いよ。」

さすが猫族、しっかりと方向、距離まで把握できる。

「皆準備は良い？」

姉貴は呟くような声で言った。俺は頷いて、テントの布の下を持つ。

「オリヤー！」

掛け声と共に勢い良く、テントを捲り上げる。

「シャイン!!」

姉貴が空に向かって光球を飛ばす。はずだった。いや、飛んだのは飛んだんだけど、デカイ。途轍もなく大きな光球だった。

目の前でいきなり車のヘッドライトを見たような感じの眩しい光が辺りを照らし出す。

畑の上空にいきなり現れた太陽の下では、子犬程の動物が痙攣している。どうやら、光りのショックで麻痺しているらしい。

「ミアちゃん。今だ!」

両手で目を塞いでいたミアちゃんは直ぐに、行動を開始した。

「【メル!】・・・【メル!】・・・」

立て続けに火炎弾を連発する。

俺も、走り出してモコモコのトンネルに逃げようとするマゲリタを採取鎌に引っ掛けて阻止しようとしたが、スタングレネード並の光球の出現で皆ショック状態でその場にこん倒してピクピクしている。

俺に出来るのは、遠くでこん倒してるのを集める位のものだった。

姉貴も途中から合流して一緒にマゲリタ集めをしている。最初はちよつと吃驚したが、結果的には畑に出ていたマゲリタを一網打尽に出来たらしい。

ようやく、ミアちゃんの【メル】攻撃が止んだ。

確か、討伐の印は尻尾だったはず。ということ、尻尾をスコップナイフでチョンって切り取って残りは畑に穴を彫って埋めるところにする。

折りたたみスコップで深い穴を掘っていると、ミーアちゃんが報告してきた。

「全部で27匹分とれたよ！」

「良かったね。レベルが上がると良いね。それと、此処にマゲリタを運んでくれないかな？」

「うん。いいよ。」

3人で手分けしてマゲリタを穴に投げ込む。ちょっと、可哀相な気もするけど、畑の害獣だし仕方が無いのかな。

「オオーイ・・・何やってんだ・・・」

この声は、たしかカンザスさん？

十字路から続く畑の道を2人程走ってくるのが見える。

「ここでーす！」

俺達は手を振って2人に知らせる。

はあ、はあ・・・って息を整えてる2人は、やはりカンザスさんとグレイさんだった。

「お前達か！ いったいあれは何なんだ！！」

グレイさんは上空の光球を指差す。

「あれですか、ちょっと大きい【シャイン】です。・・・ちょっと意気込みが強すぎたのと・・・加減がわからなくて・・・」

2人はシャインだと聞いて吃驚してる。やはり普通はあんなに大きい訳ではないんだ。

「村からもはつきり見えたぞ。いきなり、泉の森の方向に太陽が現れたって言うんで俺達が調査に来たわけだ。」

「それより、何してたんだ。魔法の訓練でもなかるうに？」

「マゲリタ討伐です。ほら、この畑のあちこちにモコモコトンネ

ルが見えるでしょ。」

2人に姉貴がマゲリタ狩りの方法を説明し始めた。

その間に、携帯燃料でポットにお湯を沸かし、人数分のお茶を入れる。

「しかし、そんな方法良く思いついたな。27匹か・俺が知る中では最高記録だ。」

「普通は夜に餌を撒き、匂いで地上近くのトンネルに上がってきた所を棒で突付きながら追い出して仕留めるんだ。強い光で気絶するのか・参考になるな。」

俺は2人にお茶の入ったシエラカップを渡す。ミアちゃんが炊きつけた焚火を囲み、お茶を飲みながらタバコを一服。

「あのう・村の人には穩便に・・・」

「判ってる。だが、マゲリタ狩りの方法は村人には伝えるぞ。一網打尽に出来るなら誰も今日のこと文句を言う奴はおるまい。」

「お前達は、帰らないのか？」

「今夜はここで野宿します。大分遅いので宿も迷惑でしょうから。」

┌

それじゃあ。って2人は帰って行った。

それにしても、黒レベルが様子を見に来るとは・・・つくづくとんでもない光球だったようだ。

俺達も寝ることにしよう。って倒れたテントを直すと3人で潜りこんだ。

外には、まだ光球が輝いてるし、村にも近いことから獣に襲われる恐れはないだろう。そんなことで朝まで3人ともぐっすり眠り込んでしまった。

次の朝、最初にしたことは光球の確認だった。まだあるかもしれないと恐る恐るテントから首を出すと、朝の光だけで光球はもうどこにもなかった。

ミアちゃんのクロスボウ

次の朝、早速テントを畳むと簡単な朝食を取って、村に急いだ。村の東門には、朝早くから門番が立っていた。

「おはよう！」って互いに挨拶を交わして門を通る。小さい村だし、普段からの挨拶は重要なんだ。

でも、その後で、「あまり、吃驚させるなよ。」って言われてしまった。昨夜の太陽が俺達だって知ってるのかな？

ギルドの扉を開けると、お姉さんがカウンターからこっちを見る。

何となく、報告しづらいけど一応依頼は完遂したんだから報告の義務がある。報酬もあるしね。

ホールのテーブル席からも、何人かのハンターがこっちを見てるような気がする。

ちょっと気拙い中を勇気を出して、お姉さんの所に歩いていった。

「マゲリタ退治終了しました。」

姉貴が、簡単に報告すると、ミアちゃんがバツクの中の包みをカウンターに置いた。

お姉さんは、その包みを解くと、ちょっと驚いたみたいだ。何ていつても27匹分の尾っぱだし・・・

「ホントに一晩でこれだけ退治したんですか？」

「はい！ ミアちゃんが丸焼きにしました。」

「カンザスさんから、報告は聞いていますが・・・そんな狩りの仕方があるんですね・・・実はその狩りの仕方です。通常ではマゲリタ狩りは上手くいっても数匹程度が良いところなので、依頼者側も報酬をあまり準備していませんでした。一応、100Lは準備したとのことなので、残り22匹についてはギルドで買

取ります。通常討伐価格の1匹15Lになります。がよろしいでしょうか？」

「元々ミアちゃんのレベルアップが目的ですから、依頼主も農家の人でしょう。全部15Lでかまいません。」

すまなそうに姉貴に説明するお姉さんに、事情を察した姉貴が値引きしている。農家にとつて、マゲリタは厄介だけど畑の収入を越えるような報奨金を払うのは大変だと思う。

おねえさんから405Lを受け取ると、ミアちゃんのレベルを確認する。

赤4つに上がっていた。後少しで目標の5つになる。

最後にお姉さんから、マゲリタ狩りの方法をギルドを通して伝えるって聞いたけど、あのやり方が出来るかどうかは少し疑わしい。大きな光球を作れるかどうかが問題だ。

宿に帰ろうとしたら、姉貴が途中で方向を変える。

「武器屋さんによって欲しいの。ミアちゃんがクロスボーを使えればいいな。って思うのよ。」

そんな訳で、武器屋に行くと、この間のおじさんがカウンターでパイプを煙らせていた。

「あのう・・・こんな形の武器はありますか？」

姉貴が背中のクロスボーを見せると、しばらくジッとおじさんは睨んでいた。

「弓なのか・・・でも見たことが無い武器だ。弓なら色々揃ってるがな。」

おじさんはカウンターを出ると、陳列棚から数種類の弓を取り出した。

「誰が使うんじゃない？」

「この子なんですけど・・・」

「お嬢ちゃんはこの間、片手剣を買ったんじゃないか？」

「そんなんですが、やはり遠くから敵を倒すほうが安全ですから。」

「初心者なら、この辺じゃないかな？」

おじさんの選んだ弓は、なるほどミアちゃんも簡単に引き絞ることが出来る。

でも、姉貴は不服のようだ。

「もつと強いのが良いんですけど・・・」

「だが、お嬢ちゃんが引けなくなるぞ。・・・これの上だところっちなかな。」

今度はミアちゃんが苦勞してる。顔を真っ赤にしてるけど引くことは無理みたいだ。

俺もちよつと引かせてもらった。なるほど、強い。内の洋弓部の連中が使ってるアーチェリーより強いぞ。

「これにします。後は矢を10本と矢を入れるものをください。」

「良いのか？・・・まあ、こっちは売る分には問題ないんだが・・・」

弓と矢それにポシエツトみたいな革製の矢を入れる矢筒を姉貴は購入した。

宿に帰ると、2日程休憩します。つておばさんに宣言すると、早速部屋に入って装備を降ろす。

そして、姉貴は俺の前にさつき武器屋で購入した弓矢を置いた。

「これを材料にクロスボウを作って欲しいんだけど・・・」

やはり、ミアちゃんが片手で引けない辺りから気が付いてはいただけだね。

「やってみるけど、姉さんみたいな物は作れないと思うよ。」

「それでもいいからやってみて。」

「じゃあ、軍資金頂戴！」

姉貴は銀貨3枚を取り出した。全部使うと食事にも事欠きそうなので、2枚だけ受け取ると、部屋を出てカウンターのおばさんのところに行く。

「あのう・・・この辺にテーブルなんかを作る家具屋さんはありませんか？」

「専門のお店は無いけど・・・このテーブル何かはオーダーメイドが作ったものだよ。家はこの先の2件目だよ。腕はいいから皆頼んでるよ。うだね。」

おばさんは直ぐに教えてくれた。お礼を言っただけで早速出かけてみる。家は直ぐに見つかった。家の周りに沢山の板や柱が置いてある。扉を開けると、8畳位の仕事場があり、お爺さんが何やら木を削っている。

俺は、カウンター越しに声をかけることにした。

「こんにちは。木工細工をお願いに来たんですが・・・」

「なんじゃ？ 見かけん顔だな。仕事の依頼か？」

お爺さんは此方をチラって見ながら言いました。

「そうなんです。少し変わったものが欲しくて、宿のおばさんから聞いて尋ねてきました。」

「宿のおばさん・・・メイか。しょうがない奴だ。娘の紹介じゃ断るわけにもいくまい。それで、何を作るんじゃ？」

お爺さんは「どっこいしょ。」って言いながら椅子から立ち上がるとアキトの方にやってきました。

注文を書き留めるメモとペンをカウンターから取り出して俺の対面に立った。

「ちよつと、それを貸してください。」

説明するよりも絵に書こうと思い、筆記用具を借りて、大まかな絵を描く。

「大体こんな感じのものです。この上面はこんな形の溝にしてツルツルに仕上げてください。後は、ここにこれ位の穴とこつちにはこれ位の穴を開けてください。」

「変わった形っじやのう・・・それ程難しい物ではないの。何時までに欲しいのじゃ。」

「早ければ早いほど・・・そうだ、これは、出来るだけ丈夫な木材でお願いします。」

「了解じゃ。明日の朝、取りに来い。」

お爺さんはそう言うと、仕事場を出て行った。材料でも探してるんだろうか・・・

でも、これで台座の目処は着いた。次は、武器屋かな？

武器屋に行つて、金具類を手に入れようとしたけど、「それは雑貨屋だ！」と言われて、雑貨屋に顔を出す。

「こんにちは。・・・釘つてあります？」

「あるぞ。種類は余り無いがな。」

カウンターのおじさんが長さの違う数種類の釘を取り出した。

その時、俺はとんでもない物を見てしまった。木ネジが釘に混ざっていたのだ。

「あのう・・・これの小さいのはありますか？」

木ネジを摘んで聞いてみた。

「これの小さいのだと、これしかないよ。」

丁度いい。その木ネジを数本と管を取付ける薄い金属サドル、針金、細い紐と接着剤を購入した。

後は、トリガ部分だけ・・・等と考えながら宿に戻ると、2人が心配顔で迎えてくれた。

「どうだった？」

「トリガ部分を考えないと・・・」

弦を受止め、引金を引くと弦が離れる。前の世界でも2千年前からあった武器だからそんなに複雑なものではないはずだ。

姉貴のもクロスボーだが改造しすぎている。シンプルに作るには

・
ゴム銃のトリガでいいはずだ。輪ゴムの張力でトリガが引かれており、手前に引けば上が先端の方に倒れていく。となれば、金属を加工できる人に作ってもらえる可能性がある。

姉貴にノートの紙を1枚貰って、ボールペンでトリガの形を書く。S字状の金属の真中に金属棒を突き刺せばいい。

早速、おばさんに鍛冶屋を紹介してもらい、大急ぎで頼み込んだ。これで、すべて材料が揃うはずだ。

次の朝。早速オルデイさんの所に品物を取に行く。帰りは鍛冶屋さんによって宿に戻ると、姉貴達が興味深々で俺を待っていた。

「工具がマルチプライヤーのみだから少し無骨になるよ」

「工具セットならあるわよ！」

姉貴はザックの中から、日曜大工セットを取り出した。小型だけど、中身は充実している。金属加工少しなら出来そうだ。ヤスリが3本入ってる。

先ず、弓の部分だ。真中から切取り、長さを元の3分の2程度にする。これを台座の先端に付けるわけだが、これは配管の取付け金具に接着剤を付け木ネジでしっかりと固定する。

次に、トリガの取付けだ。あらかじめ穴を開けた所に鍛冶屋さんで作ってもらった金具を落とし込む。その上から、貰ってきた木材

を削って接着材で蓋をする。ここは金具を落とさなければ良いので、意外と楽な場所だ。

そして、弦だけど、最初の弦は長すぎるので弓がゆるく張る位に長さを再調整する。次に、台座の先端部分に太い針金を三つ編みにした足踏みを作って、台座にしつかりと固定する。

最後に、接続部分に接着材を塗ると細紐で幾重にも重ね巻きすれば、クロスボウの出来上がりだ。

矢は長さを半分に切って、羽を付け直す。台座の滑走面との相性も良いみたいだ。矢は10本造り、矢筒に入れる。半分の長さだから、落とさないように矢筒の上に布を被せられるようにした。

さて、照準だけど・・・マッチ箱位の木材に鉄板で凸板を鉄板で作って木ネジで取付ける。それを台座のトリガ後部に接着剤と木ネジで取付ける。

凸板は木ネジで仮止だ。試射しながら調整すればいい。

「ミアアちゃん。持ってみて！」

クロスボウを渡すと、姉貴を見てたのかそれなりに構える。

「重くない？」

「軽くはにやいけど・・・大丈夫。」

試射してみよう！って事になったけど、何処ですればいいんだ？姉貴の「ギルドに聞けば判るかも！」の声でギルドに行つて、何時もお姉さんに相談する。

「ギルドの裏にある練習場なら、ハンターなら誰でも利用できますよ！」

おねえさんの指差す方向に扉がある。そこから行けるのだろう。

ギルド裏の練習場・・・そこには大きな的と壊れかけた案山子が立

っていた。

「あの的で練習しようか？」

姉貴の言葉にミアちゃんは頷いた。

その時、ふと感じた視線を追うと、そこにサニーさんが弓を持って立っている。ついさっきまで練習していたようだ。

「すみません。乱入してしまつて。ミアちゃんのクロスボーを作ったものですから、照準の調整に来たんです。」

サニーさんの所に走って行くと、一応断りを入れた。親しき仲にも礼儀有りつて言うし、意外と大事な事だよね。

「照準つて、弓の狙いの事よね。練習と経験で狙うんじゃないの？」

「俺が作ったのは、照準器が付いてるんですよ。簡単なものですけどね。それで、目標を定めて、バシ！つて撃つ訳です。姉貴が使つてるような高級品じゃないから長距離は無理ですけど、50mぐらいなら、10cm以内に当たるはずですよ。」

「50mつて？」

「俺の身長の25倍つてとこ。10cmは掌くらいの大きさですよ。」

「見てていいかしら？」

「良いですよ。」

サニーさんが興味を持ったようにミアちゃんに近づいていく。ミアちゃんもサニーさんに気づいたみたいで姉貴と一緒に軽くお辞儀をしている。

針金で作った環に足を入れて、両手で弦を持ち引つ張る。どうにかトリガまで引くことが出来たようだ。

クロスボーを斜め下に落とし、台座の滑走面に矢を置く。トリガ近くまでスルって滑らせると、トリガの上に張り出したストツパに矢が固定される。これで、発射準備完了だ。

左手を上げて、右手でトリガの金具と台座を軽く握る。

右目で照星が照門に重なるように狙いを定めて・・・トリガを引く・・・
バシ！

ヒュン！って矢が勢い良く滑空して的中心に深く突き立った。

「大体は合ってるみたいね。あと数本撃って確かめて見ようね。」
今度は少し離れて撃つみたいだ。

さっきの動作をミリアちゃんが繰り返すのをジッと姉貴が見ている。

ラッピナ狩り

サニーさんは、次々に的の中心付近にボルトが立っていく様子を驚いて見ている。

「あれ程命中するものなの？」

「弓と違って簡単な照準装置が付いてますから、この距離では中心点を外さないと思いますよ。」

「でも、さつきそれを調整するような事を言ってたわね。」

「はい。でも、よくのを見ると、少し右下に集中してますよね。ミアちゃんは中心を狙ってるはずなんで、照準器を調整して、ボルトが中心に集まるようにするんです。」

「私には、十分すぎるように思えるわ。」

「弓と違って、2の矢はありませんから、急所を狙って一撃必殺が基本です。」

「確かにね。」

ウンシヨ、ウンシヨってミアちゃんが弦を両手で引張るのを見ながらサニーさんが言った。

「アキト。ちょっと直してくれない。」

姉貴の呼ぶ声に、サニーさんと別れて姉貴達の所へ行く。照準器の凹部をちよつと修正して欲しいみたいだ。

仮止めの木ネジを緩めて、少し右下に移動する。

その場で、何本かボルトを発射して修正具合を見てみる。うん。良いみたいだ。

照準器に木ネジを最後までしつかり締めてミアちゃんのクロスボルトは完成だ。

早速、ギルドに向かい適当な依頼を探すことにした。

また図鑑片手に依頼板の依頼書を調べる。

赤5つ前後の依頼って意外と少なく、殆どが泉の森の薬草類の採取依頼だ。

「これは、どうかな？」

姉貴の指差した依頼書と図鑑を交互に見る。

ラツピナを5匹求む。期間3日以内。1匹15Lで買取る。(肉屋)・・・

図鑑を見ると、ウサギモドキだ。ウサギの耳の部分に角があるけど、頭の両側に2本幅広の角があるのでウサギに見えてしまう。

大きさもウサギサイズだし、草食性で臆病って書いてある。活動は昼！これなら問題ない。

「良いんじゃないかな。でも、何処にいるの？」

「聞いてみようか？」

姉貴はカウンターの姉さんのところに言っただけで何やら話し込んでる。

しばらくして帰ってきたが、何を話してたんだ？

「とりあえず場所は解ったわ。北の集落へ行く途中の野原でよく見かける話を聞いた事があるそうよ。そうすると、あの猪を取った辺りが怪しいと思うわ。」

それだけ聞くために15分は話してたぞ！とは言えない・・・

「じゃあ、明日早朝に出かけよう！」

早速宿に戻ると、ラツピナ狩りの話をおばさんにする。ひよつとしたら2晩は帰れなくなるからだ。

「判ったよ。・・・でもね、ラツピナが余分に取れたら、持ち帰ってくれないかい。ラツピナのシチューはとても美味しいんだよ。私もしばらく食べて無いしね。」

美味しい話は、即OK。是が非でも取ってきますって請け負ったのは姉貴だ。姉貴とミアちゃん共に目が輝いている。

次の日の朝早く、宿を出た。

まだ、太陽も昇っていないけれど、宿のおばさんも早起きして食事とお弁当を作ってくれた。ラツピナを頼んだ手前なのかも知れないけど・・・

西側の門を通って北に行く小道を歩いていたら、後ろの方から声がする。

「オオーイ・・・待ってくれ・・・」

振り返ると、サラミスと知らない子供が2人、俺達の後を追い駆けてきた。

歩みを止めて、彼らを待つ。

「今日はこつちなんだ。俺達は今日は薬草取りをこの先でやるんだ。」

「俺達はラツピナ狩りさ。ところで、やったことある？」

「一度請負って罫で取ろうとしたんだが上手くいかなかった。草原にある木に登れば結構見かけるんだが、奴ら警戒心が強くてこれでは無理だ。」

そう言つて、背中の中剣を叩く。

「ところで、後ろの2人は？」

「俺の兄弟さ。片手剣を持つてる奴がサイルト。弓がルーミイだ。・・・オイ。お前ら挨拶しとけ！ こいつらのお蔭でリリックを食べられたんだぞ！」

そんな事で互いに自己紹介。サラミスの弟と妹はサラミスと容姿がそっくりだ。ミーアちゃんよりは大きいかな、中学生程度に見える。

6人で少し上り坂になった小道を進む。どの当りで薬草摘みをするのか聞いてみたら、前に休憩した岩がある辺りだとのこと、そこにはラツピナもいるぞ。って教えて貰った。

大岩に着いたら休憩だ。周りの繁みを適当に切って小さな焚火を作りお茶を沸かす。

朝が早かったから少し早い昼食だ。サラミス達にも黒パンサンドを半分にして分けてあげた。

ミーアちゃんが持っているクロスボウをルーミイちゃんはしきりに気にしているが、どうやって撃つかまでは判らないらしい。

やっとサラミスがルーミイちゃんの視線の先にあるクロスボウに気が付いたようで俺に聞いてきた。

「確か、クロスボウだよな。この辺で手に入らないはずだけど・

」
「あのクロスボウは俺が作ったのさ。色々組み合わせれば作れるんだ。」

「見せて貰っていいかな？」

「いいよ。ミーアちゃん。サラミスに見せてあげて。」

ミーアちゃんからクロスボウを受取ると、縦にしたり、斜めにしたりしてみていたが、俺を見ると一言。

「作ってくれ！」

「200L！」

サラミスがガツクリと首をたれる。

「便利なようだけど、一長一短なんだ。撃つ機会は1回だけ、外れたらお終いだ。弓は最初を外しても次を撃つことが出来るしね。」

「確かに、そうだけど・ルーミイは弓が下手なんだ。」

「サニーさんがこれ見て言ってたぞ。弓は練習と経験だつて。」
俺言葉にルーミイちゃんは、ハツつと何かに気が付いたようだ。

自分の弓をしげしげと眺めている。

クロスボウは作ってあげてもいいけれど、こういうカラクリは自分で試行錯誤しながら作り上げないといいものが出来ないし、壊れても直す事が出来なくなる。

休憩が終わると、サラミス達と別れる。

彼等はこの近くで、俺達はもう少し先まで行く。

少し、坂道を登った所に2本の木が立っている。

ミアちゃんのスルスルって木に登ると周囲を偵察。

その後を姉貴が登っていった。同じように偵察してようだ。

2人であっちこっち見ていたようだが、姉貴が双眼鏡を取り出した。

何か見つけたようだ。ミアちゃんに双眼鏡を渡して意見を聞いている。

スルスルってミアちゃんが木を降りてきた。

姉貴は双眼鏡を持ってまだ木の上だけど・・いいのか？

俺にかまわず、ミアちゃんはクロスボーと矢筒を肩に引っ掛けると、草原に点在する藪から藪に身を低くして移動して行った。

木の上の姉貴は、時たま腕を上げたり、下げたりしてるけど・・姉貴の様子とミアちゃんの様子を見てて納得した。どうやら姉貴の指示に従ってラッピナに近づいているらしい。

俺からはミアちゃんの様子は見えないが姉貴からは良く見えるらしい。色々な動作で合図を送ってるが、何の合図かさっぱり俺には分からない。

そして、腕を振り上げ・・下ろした。今度は万歳を始めたけど・・ひょっとしてミアちゃん仕留めたのかな。

姉貴がヨッコラシヨって木から降りてきた。

「やったよ。1匹目。」

そう言っただツツポーズをしているけど・・

そんなところへ、ミアちゃんが走ってきた。手には胴体にボルトが刺さったままのラッピナを提げている。

「イヤー、アキトにも見せたかったよ。音もなく近寄って一撃！まるで忍者みたい。」

姉貴は舞い上がってるし、ミアちゃんは俺に頭を撫でられて顔を赤くしてる。

でも音もなくなってる、あれだけ離れてるから音は聞えないと思うのは俺だけか・・・

これで、1匹。こんな感じでミアちゃんに頑張ってる貰おう。姉貴のクロスボーでは威力がありすぎるし、俺だと近づくのは無理みたいだ。

しばらくすると、また2人で木に登っていった。そして、ミアちゃんだけ降りてくる。木の上の姉貴が演じる変な踊りが終わってしばらくすると、ミアちゃんがラツピナを提げて帰ってくる。

なんか俺って何もしてないような気がするけど・・・いいのかな？

そんなことが何回か続いた時、姉貴が突然俺を呼んだ。

「アキト。左前方急いで！・・・ガトルがいるの！」

俺は採取鎌を掴むと、姉貴が腕で指す方向に駆け出した。

ミアちゃんは見えない。多分藪に隠れてるためだろう。

200mくらい走ったろうか、ラツピナを取り囲むように少しずつ距離を詰めているガトルを見つけることが出来た。

向うも俺に気付いたらしくガウウ・・・って威嚇してくる。

しかし、ミアちゃんはラツピナ狩りで気付いていない可能性が高い。ガトルには無警戒なはずだ。ここは早めにケリを付ける必要がある。

【アクセル】と小さく呟いてガトルに迫る。

ガトルの唸り声がゴォー！と低くなり、動きが緩慢に見える。

最初のガトルを鎌の先で引っ掛け上空に弾き飛ばす。次のガトルは、鎌の裏で思い切り弾き飛ばした。3匹目も同じように弾き飛ばす。

4匹目はもう逃げていた。追ってまで殺す事はない。【解除】と呟き、体を通常の反応速度に戻す。

確か、右の牙だったよな。ガトルの牙をナイフで抉り姉貴のところに戻ってきた。

「ありがとう。ここは、ラッピナもいるけど、ガトルもいるのよね。失念してたわ。」

少し反省している姉貴がそこにいた。

そしてミアちゃんは7匹目のラッピナを下げて戻ってきた。

スラバ狩りはクラスター爆弾で始まる

色々あったけど、ラッピナ7匹を確保すれば、依頼とおぼさんの頼みは完了ってことで、村に戻る小道をトコトコと歩いてる。

ラッピナの足を1匹づつ紐で縛った後で7匹を纏めてくる。担いでるのは俺だけど、結構重い、次は獲物専用の袋を買ってほしいものだ。

岩の所まできたら一休み。

岩の上から、サラミス達を探してみたが見つからなかった。たぶん、村に帰ってるのだろう。

水筒の水を一口飲んで、ラッピナを担ぐ。村まで、まだ距離があるけど日が傾き始めた。下り坂なのがせめてもの救いだ。

村に入ると、早速肉屋にラッピナを持ち込んだ。75Lを受け取って、依頼書に完了のサインを貰う。

次はギルドでガトルの牙を換金して、3人のレベルを再確認。

俺と姉貴が赤6つ。ミアちゃんも赤5つ。どうやら、グレイさん達が言っていた村を離れる目安まで達したみたいだ。

「皆さん赤5つになると、村を離れる方が多いのですが・・・皆さんも他に移られますか？」

「今のところは、この村に滞在したいと思っておりますが・・・」
お姉さんの問いに、姉貴が答える。

「各町村のギルドはその町村内に所在するハンターを常に把握する必要があります。他に移られるとき、別の町村に入った時は必ずギルドに報告して下さい。」

「了解です。」

そう答えて、ギルドを離れる。後は、宿に帰るだけだ。

宿のおばさんは飛び上がって喜んだ。

「これで、美味しいシチューが作れるよ。今晚の宿代はタダでいいからね。」

何か得した気分。1匹15Lが2匹だから・半額で泊れるって事になるのかな。最も夕食代と朝食は別だから儲けは在るみたいだけど。

結論から言おう・ラツピナシチューは絶品だ。

俺的にはリリックより美味しい気がする。早々と平らげたけど、お代わりは断られてしまった。

仕方がないので、まだ半分位残っているミアちゃんのお皿を見てたら、俺の視線に危険なものを感じたのか、左手で隠されてしまった。

ふと姉貴を見ると、険悪な表情で俺を見てる。いたたまれずに席を立ち、宿の外で一服を始めた。

ガトル暴走の調査の時は半月だった月が、今は満月を通り過ぎてる。最初は2つの月に驚いたけど、もう慣れっこになって月見してる。以外と順応性があるのかも知れない。

「何してんだ。こんな夜に？」

声が出た方向を見てみると、 그레이さんとマチルダさんだ。

「いや・お月見ですよ。」

「月見なんて、老人がするもんだぞ。若い者は「酒」そして「女」だ！」

そう断言した 그레이さんだったが、話の後のほうで、ポカリ！ってマチルダさんに杖で叩かれていた。

「それより、2人ともどうしたんですか？」

「お前達にちょっと相談があつてな。ミツキ達もいるんだろ？」

「ええ。食事中ですけど・・・」

「じゃあ、中に入ろう。話はそれからだ。」

宿に入ると、姉貴達の食事が終わったところだった。2人でお茶を飲んでいる。

俺達にもお茶を貰うと、早速、グレイさんが話を始めた。

「最初に聞きたいんだが・・・この匂いはラツピナのシチューだよな。俺達も、さっき食堂で食べてきたんだが、この宿で匂うということは・・・お前達が仕留めたのか？」

「昨日、ラツピナ5匹を依頼書で探して、今日、7匹仕留めました。仕留めたのはミアちゃんですけど・・・それで、残り2匹を宿のおばさんに届けたんです。お蔭で、今夜の宿代はタダです。」

グレイさんとマチルダさんはタメ息をついた。

「やはり、そうか。・・・普通はラツピナ狩りは罠を使う。一日で取れる量は多くて3匹程度。今回はどうやったんだ？」

「私が木の上からミアちゃんに指示を出して、ミアちゃんはその指示に従って藪を前進。30m位まで近づいたらミアちゃん専用クロスボーで一撃！というようにやりましたけど・・・」

「猫族の隠密性とクロスボーの射撃精度か・・・他にはマネができないな。」

「ところで、今夜の御用は？ラツピナ狩りの話じゃないですよね。」

「そうだった。明日の予定が無ければ、俺の依頼を共同で請負って欲しい。スラバを2匹だ。村の南の畑で目撃された。早急な討伐が必要だ。」

「ちよつと待って下さいね。」

姉貴は素早く、腰の大型ポーチから、図鑑を取出して調べ始めた。

「これか・・・」

ちよつと驚いている。凶鑑を覗きこむと・
蛇だ。・しかも大きい。スラバの絵の隣に描かれている人間の
シルエットと比べると・・3倍はある。6m以上ということだ。胴
周りは30cmはあるだろう。そして驚くべきことに双頭なのだ。
注意書きには、毒を持ち、うごきが素早く敏捷である。って書いてある。

「凶暴なんですか？」

「極めて凶暴だ。目撃は2匹だが、それ以上いる可能性が高い。
生憎、カンザス達は町から来た銀2つと共に、タグの巣穴の調査に
向かつてる。今この村のギルドにいる黒は俺達だけだ。しかし複数
のスラバとなると、ちよつと手が出せない。そこで、黒レベル並み
のお前達に協力してほしいのだ。」

「お話は判りました。でもそれだと、ミアちゃんが危ないよう
な気がします。」

「マチルダと後衛だ。メルが使えると聞いたぞ。そして2人をミ
ヅキが守ってくれば問題ないと思うが。」

「それなら、問題はないかと・・ところで前衛2人で大丈夫なん
ですか？」

「援護しだい・・というところだ。」

「判りました。待合わせ場所と時間は？」

「明日早朝。西の門で待っている。弁当は用意して来い。」

俺達が頷くのを確認して、2人は帰って行った。

それにしてもファンタジーな世界だ。こんなのがいるんだな。つ
て凶鑑を見てみたら、表皮は弾力性に富むって書いてあった。

そうすると、採取鎌では困難ということか・・忍者刀。使ってみ
るか。

俺達はおばさんに明日も早朝発つことと、お弁当をお願いして部
屋に戻った。

次の日、朝早く西の門に出かけると、グレイさん達が俺達を待っていた。

「来たか、出かけるぞ！」

西の門を出て、少し歩くと、南の街道へ繋がる道がある。その道を真っ直ぐ南に歩いて行く。

道の両側は何処までも畑が続いている。途中、何箇所かある十字路は左右の畑に農作業の馬車が行く道だ。

畑には麦みたいな植物が育っている。

グレイさんに聞いたら黒パンの原料だと言ってたから、ライ麦？みたいなものかも知れない。

しばらく長閑な畑の小道を進んで行くと、前方に立木が見えてきた。道には一定距離に立木が立っているみたいだ。この世界の1里塚ってところだろうと思う。

立木を素通りして更に進む。

そして、次の立木がある所で休憩を取る。もっとも、休憩と言っても水筒の水を飲んで少し休む程度だけだ。

また、畑の道を南に歩いていき、幾つかの十字路を過ぎた時、グレイさんは十字路を左に曲がった。

今度の道は、あまり人が歩かないのか草で覆われているが、両側の畑の作物が植えられていないことからどうにか道だと判る。それでも、道幅は荷馬車が通れる位あるから立派なものだ。

草に足をとられないように進んでいくと、遠くに小川が見えてきた。

更に進むと、北からの小川が西からの川に合流している事が判ってきた。

「見えてきたぞ。あの合流地点の葦原がスラバの目撃場所だ。」
グレイさんの指差す場所には確かに葦原がある。かなり大きな葦

原だけど、何処にいるか判らないんじゃないかと心配になってきた。

「ギルドから葦原の焼却許可は得ている。マチルダの【メルト】で焼き払ってスラバの姿を確認したら俺とアキトで仕留める。いいな。」

そして、畑の末端まで来た。なだらかな土手が川の方に続いている。

畑と川の段差は、数m以上ありそうで、天然の堤防みたいだ。

葦原は土手の下から川まで続いており、川の流れに沿って数百mは続いている。

「少し早いが、昼食を取る。その後、スラバ狩りだ。」

土手の藪から枯枝を取り小さな焚火でポットのにお湯を沸かす。

おばさんに作って貰った黒パンサンドをお茶を飲みながら食べていると、 그레이さんが聞いてきた。

「今回は流石に杖みたいな鎌は持ってこなかったな。その曲がった片手剣を使うのか？」

「相手が素早いと聞いてますし・・・皮膚の弾力もありそうなので、今回はこれです。」

俺は背中の忍者刀をポンポンって叩いた。

「前から気にはなってたんだが・・・随分幅の狭い両手剣だな。」

「サラミス達が使うような両刃ではなくて片刃ですからね。」

「使いづらくないか？俺の片手剣でさえ両刃だぞ。」

「でも、俺のグルカナイフは片刃ですよ。慣れもありますし、かえって両刃だとどう使ってもいいか判りませんよ。」

そんな話をしていると、姉貴も加わってきた。

「ところで、葦原を焼いて追い出すんですね。私にやらせてく

れませんか？」

「私は、構わないけど・・・【メルト】を覚えたのよね？」

「そうなんです。実戦で一度使ってみたくて！」

「そうだな。練習で上手く行っても実戦で・・・って事もあるし、焼くだけだ。構わないぞ。」

グレイさんとマチルダさんはOKしてるけど、大丈夫だろうか？そんな俺の心配をよそに話はまとまってしまう、姉貴のメルトによる焼討ちでスラバ狩りが開始されることになった。

食事が済んで、スラバ狩りの開始だ。

俺とグレイさんは葦原を見下ろして立っている。俺達の真ん中に姉貴は立つと右手を高く上げた。

姉貴の後ろで心配そうにミアちゃんが見てるけど、俺だって同じ気分だ。

そして、姉貴は上空に掲げた右手を見上げて【メルト！】と高らかに声を上げる。

姉貴の右掌の上、30cm位にドッジボール程の紅蓮に輝く球体が現れた。1つ・・・2つ・・・3つ。

「何だ（それ）！！！！」

驚いている2人を無視して姉貴は魔法を続ける。

「行っけー！！」

姉貴の右手を振り下ろす動きに合わせて、3つの怪しい球体が左、真ん中、右の方向に飛ん行った。

そして葦原の1m位上で、その球体は突然10個程に分裂すると、葦原に着弾した。

ドドドドドドドドドドドドオン！！

まるで、クラスタ爆弾が爆発するみたいに、葦原全体が一気に炎に包まれてしまった。

俺と、グレイさんはあまりの驚きに顎を落とした。

マチルダさんは顔面蒼白だし、ミアアちゃんはそんなマチルダさんの後ろに隠れている。

「おいおい・・・冗談じゃねえぞ。一体如何したらこんなマネが出るんだ！」

「一気に焼き払おうと思って、（メルト）をいっぱい作れないかな・・・って思ったらこんなことになってしまいました。」

姉貴・・・えへ。って下を出して笑っても俺達の驚きの方が上だと思っよ。

「驚いたわ・・・前に（メルダム）の魔法を一度見たことが歩けど、これほどの範囲で火災は起こせなかったわ・・・でも、一度に沢山は盲点ね。そんな事を考える人はいなかったわ。」

まあ、過程はどうあれ葦原は炎上している。結果的には問題ない。

「今日の魔法は終わりだよ！」って姉貴は後ろに下がったけど、後ろの2人の護衛はよろしくお願いします。と心の中でお願いした。

葦原は、季節的に生い茂っている盛りなので、葦自体に水分が多い。強制的な炎上が無ければ他への延焼はないはずだ。

その葦原の炎がだんだんと下火になってきている。

川の縁まで此処から見通せるな。って思っていたとき、スラバが現れた。

スラバとの死闘

スラバ・それは妖蛇といふべき姿だ。このファンタジーな世界に来て初めて怪物と言ふべき存在に出会った。

長い胴体、そして鎌首を上げた途中で胴体が2つに別れ、その先に頭を個別に持っている。

頭は大きな口が前に突き出し、まるで鰐のようだ。その口から長く伸びる舌は先割れしている。

片方の頭にある目は爛々と輝く蛇の目だが、もう片方の頭には、まるでゴーグルのように一体化した複眼が頭の両側まで伸びている。図鑑では、6m以上って書いてあったが、どう見ても10m以上はある・間違つてはいないけど・もうちょっと書き方があるんじゃないか。って考えてしまう。

白く燃え尽きた葦原に4匹、こちらを見て鎌首をもたげている。奇怪な姿だが、その全身を覆う鱗は美しい虹色だ。あれで、ハンドバックなんか作つたらお母さんなら絶対買つと思つ。

グレイさんが片手剣を引抜く。

「俺は右から行く。アキトは左だ。マチルダ達は中の2匹を牽制してくれ。」

そして、左手でポーチから小さな筒を取出し、蓋を開けて一気に飲んだ。

「目玉つなかりは、歯に毒がある。即効性だ。先に毒消しを飲んで少しでも耐性を上げておけ。」

マチルダさんも飲んでる。姉貴はミアアちゃんに飲ませている。俺と、姉貴は必要ない。

「行くぞ!」

グレイさんは土手を駆け下りて右手に走っていく。

俺も、刀を抜くと左に駆け下りる。

バン！・・バン！

マチルダさんとミアちゃん（メル）で真中の2匹に攻撃を開始した。

俺が土手を降りたときには、もう目の前にスラバが移動していた。3m以上の高さから首を突き出すように大きな顎を開いて俺に向かってくる。

咄嗟に刀で首を落とそうと斜めに斬りおろしたが、スラバは首をヒョイって後にずらして回避する。そして、刀を下ろした僅かな隙について、目玉つなりの頭が斜めから攻撃してきた。

慌てて体を前方に投出して受身を取る。合気道の受身は前方回転に近い形で行なわれる。そして手を使って衝撃を吸収する動作も必要としない。猫の受身に限りなく近い物がありそのまま立つことも可能だ。

スラバに振り向きながら【アクセル】小さく呟くと、途端にスラバの動きが緩慢に・・為らなかつた。

しかし、先の攻撃スピードよりはかなり遅く感じる。ホントに、とんでもない怪物だ。

スラバの攻撃は、2つの頭を連携しての時間差攻撃だ。最初の頭を回避しても、直ぐに次の頭が襲ってくる。

ということは、フェイントで最初の頭をやり過ごし、次の頭を攻撃すれば一撃を与えることは可能かもしれない。

スラバの左の頭々に走りこみ、大上段から刀を振り下ろす。頭は首を使って、ヒョイと後に動き斬撃を避ける。そして俺の振り下ろした隙について、大きな口を開けて俺に襲い掛かってきた。

すかさずジャンプしながら刀を跳ね上げるように襲い掛かってき

た頭を狙う。

頭はヒョイっと首を引っ込める。

俺は空中で半回転しながら、頭上にあつた刀を斜めに振り下ろした。

ズン！という鈍い手応えが腕に伝わる。

俺が、トンと着地すると同時に俺の目の前に、ボタン！とスラバの首が落ちてきた。

そして、斜めに回転しながら場所を変えると、振り向きざまに刀を振り上げる。

ゴリツ！硬いものを斬る手応えとともに、スラバの残った頭の口先が割れていた。

斬り込もうと足を伸ばした時、殺気を感じて後に飛びのく・・目の前を頭の無い首が棍棒を振るように通り返した。

首の棍棒が振りかざされる僅かな隙をついて、スラバに走り寄ると残った頭を首の根元で断ち斬る。

ドスン！と首が落ちて、スラバは尚も最初の首を棍棒のように振り回している。

再び距離を取って対峙しようとした時、スラバの2つの首の根元に、ドン！と音を立ててボルトが深く打ち込まれた。

すると、スラバは2、3度痙攣した後、バタツと倒れ動かなくなつた。

胴体から双頭の首が伸びる場所、そこがスラバの急所らしい。

すかさず、次のスラバに移動する

マチルダさん達が牽制していた2匹の内、1匹は倒されていた。

頭が両方とも（メル）で焼爛れている。そして、首の付根付近から大量の出血の跡が数箇所ある。姉貴にボルトを打ち込まれたようだ。

もう1匹は、短い矢が数本刺さっているが致命傷には至っていないようだ。

姉貴がまだ破壊されていない頭を懸命に槍で牽制している。マチルダさんが懸命に（メル）で火炎弾を飛ばしているが、スラバは上手く回避している。ミーアちゃんはクロスボウの発射準備に忙しいみたいだ。

後から姉貴に対峙しているスラバのもとに駆け寄ると、ジャンプして胴体の首の付根に刀を深く突き刺した。

素早く刀を抜いて距離を取る。

スラバは途端に動きが緩慢になっていく。後は、3人で何とかなるだろう。

俺は、 그레이さんの方に視線を移した。

かなり苦戦しているようだ。いそいで助太刀に行く。

「助太刀に来ました！」

「助かる。（アクセル）で敏捷性を上げてもこの通りだ。俺が牽制する。急所は判るな！」

ハイ！つと答えて、スラバの斜め後方まで移動する。

さすが、黒3つだけのことはある。スラバの両方の頭とその首には無数の傷跡と出血で真っ赤に染まっている。スラバも相当興奮気味で連携が上手く働いていない。

ハァー！つと斬り込む 그레이さんに合わせて、スラバに背後から忍び寄る。

그레이さんの斬撃を回避して、もう片方の頭が襲いかかろうとしたその時、ジャンプして胴体の首の付根に刀を深く差し込む。スラバが痙攣している隙に急いで離れると、緩慢化したスラバの頭は、簡単に 그레이さんが刎ね飛ばした。

全身にスラバの鮮血を浴びたグレイさんが俺の所にやってきた。

「ありがとう助かったよ。他はどうした？」

「どうにかなったみたいです。此処に来る前、姉貴の方のスラバも首の付根を傷めておきましたから何とかなつたでしょう。」

俺達は姉貴達がいる土手の上にゆっくりと歩き出した。

「イヤゝすごかったね。」

これが姉貴の感想だった。俺にとっては死闘以外の何ものでもない。

「わたしも、がんばってクロスボー撃つただけど・・・」

ミアアちゃんは謙虚だった。(メル)の魔法が尽きた後はクロスボーで頑張つたんだろ。スラバの体に何本か刺さっていたボルトを俺は見ている。

「ごめんなさいね。スラバに脳が3つあるのを知らせなくて・・・」

やはり、あの驚異的な敏捷性は3つの脳によるものだったのか。胴体の首の付根、そこに本体と言うべき首の脳を制御するための脳があるみたいだ。確かにそこを差したら急激に動作が緩慢になった。

「まあ、4匹いるとは思わなかったが、結果として討伐できたことには問題ない。体を洗う前に剥ぎ取りだ。そして、武器を良く洗うんだ。スラバの血は錆が早く出る。」

俺達はスラバの剥ぎ取りを行なった。

やはり、スラバの鱗の皮は高く売れるらしい。でも、ご婦人方の装飾品ではなく、王宮の近衛兵の鎧を飾るためだというのがちよつとね。少し皮を貰っておいた。後で作ってみよう。

意外だったのはスラバの肉も食べられるということだった。

でも、これだけの肉を運ぶ事は困難だから、例の袋に入れるだけ

入れて持ち帰る事にした。

皮を剥いたり、肉を切取ったりしながら、姉貴とミアちゃんのボルトも回収する。ミアちゃんのボルトは短く切った矢だけど、姉貴のボルトは特注品だ。無くなったらどうするんだらう。

「ポシエットのボルトは、朝になれば12本になってるはずよ。」
「だったら、探さなくてもいいんじゃないか。って言ったら、勿体無いじゃない。っていったけど・・・少し違うような気がするぞ。」

作業が終わって、川で武器を洗う。グレイさんは体と服まで洗ってた。服が乾くまで待つのかと思ってたら、バツクから袋を出してその中から換えの服をとりだして着替えてる。

「敵の血で汚れることもあるから、何時でも着替えは準備しておくんだぞ。」

まあ、下着は準備してるけど・・・帰ったらその辺の準備もしておこう。

俺達が川から上がると、姉貴達がお茶の準備を終えていた。

暖かいお茶をのみながら、タバコを一服。グレイさんもパイプを楽しんでる。

たっぷり休憩をしたところで、村への帰路に着く。

まだ、日は高いが、村まで結構な距離だ。着くころには夕暮れになるだらう。

村に着くと、肉屋によってスラバの肉をおろす。

珍味ということで売れるみたいで、200Lで引取ってくれた。

次にギルドに行つて、討伐の報告を行なう。そこで、スラバの鱗の皮が討伐証の変わりとなる。

「スラバを4匹ですか・・・まあ良くご無事でなによりです。」
お姉さんはそう言いながら、討伐依頼の報酬とスラバの皮の代金

を渡してくれた。

討伐報酬が500L。スラバの皮が一匹200Lで800Lだ。合計は1500L。グレイさんは俺達に900Lを渡したが、姉貴はお釣りで。って250Lを返した。

「始めに共同でと言ったはずだ。なら山分けが原則だと思うが？」
「チーム共同で、と私は聞きました。だから私達の取分は半分の750Lです。」

「欲が無いな。俺達に異存は無い。・・それと、スラバの討伐レベルは高い。レベルアップしていると思うが確認しておいたほうがいいだろう。じゃあな！」

グレイさんとマチルダさんはそろってギルドを出て行った。

俺達はグレイさんの薦めあることだし、とお姉さんにハンターレベルの確認をしてもらった。

やはり、上がっていた。俺と姉貴が赤の7、ミアちゃんが赤の6だ。

「スラバ討伐は黒3つ以上が標準ですよ。それでも、毎年亡くなる方がいるんです。今回はグレイさんに押し切られたことと、スラバの被害を未然に防ぐことから仕方なく許可したんですけど・・自分で討伐する場合はレベルの2つ上までにしてくださいね。」

注意されてしまった。でも、俺達のことを思っただけだから真摯に受取るっ。

宿に戻って、おばさんにスラバの肉をあげたところ、本日の宿代もタダになった。

なんでも、これだけはお金では買えないとのこと。おばさんでさえ、今までに食べたのは1度きりと言っていた。

たしかに、レベルの高いハンターがいないと獲れないし、あの値段だとこの村に卸さないでどっかの町にでももって行くんだろう。

スラバの肉は串焼きだった。少し鶏肉みたいな感じの淡白なお肉

で、塩とスパイスの利いた焼肉はとても美味しかった。

村を離れる理由

次の日、大金を手にいれた俺達は、早速雑貨屋に出かけ、大型の魔法の袋を購入した。

例の3倍入って重さ変わらずって奴だけど、500Lもするだけあって、俺と姉貴のザックを入れてもまだ余裕がありそうだ。

さらに大小の普通の袋も併せて購入した。ミアちゃんの衣類を入れる袋とか、野宿用品を入れるとか、色々と必要だと姉貴は言うてるけど、俺にはよく判らない。まあ、姉貴が必要だと言っている以上、あまり干渉しないほうがいいことだけは判っている。

その次は、武器屋だ。ミアちゃんのボルトの数がスラバ戦で足りなくなっただので、新たに10本矢を買った。今夜にでも作るつもりだ。

最後にギルドに寄る。いい出物はないか？って依頼板を見ていると、後から声をかけられた。

「しばらくぶりにや。だいぶハンターらしくなってきたにや。」

この声は・・・ミケランさん？

俺達が振返ると、懐かしいミケランさんと初めてみる男の人がいた。

「お久しぶりです。・・・あのう、そちらの方は？」

「俺は、セリウス。ミケランと同郷の者だ。お前達がアキトとその一味なのか？」

「初めまして。チーム(ヨイマチ)のミツキです。こっちがアキト。それに、ミアちゃんです」

姉貴がミケランさんをチラッと見てからセリウスさんに俺達の紹

介をした。

「ミーアちゃんほどの位に上がったにや？」

「赤6つに、にやった。」

ミケランさんはその答えに、ニヤニヤー！！って驚いていた。

「ハンターになつて一月も経たずに赤6つか・驚きの早さだ。すると、お前達は赤7つと言う所だな。ふむ・・どうやって上げたか是非聞きたいものだ。」

そんなわけで、ギルドのホールにあるテーブルに移動し、ミケランさんがこの村を去ってからの経緯を姉貴が説明している。

セリウスさんの風貌は、一言で言えば精悍。金色の大きな瞳は猫のように縦に切れ長だし、唇は薄く、チラツと除く歯並びには小さな牙がのぞいてた。全体にミケランさんより毛深い、時たま見せる表情の変化に親しみが持てる。

背中に2本の片手剣を装備しており、マッチョな体型とマッチしていかにもハンターって感じがする。

「しかし、タグにスラバか・ 그레이の奴め、初心者を潰す気なのか？」

「そんなわけないだろう。しばらくだな、セリウス。」

後からの声に振返ると、 그레이さんがマチルダさんと立っていた。他のテーブルから椅子を持ってくると、俺達の会話に加わる。

「マチルダも一緒か。それにしても、アキト達が退治したのは黒でも手に負えぬものばかりだぞ。正直、俺にも手に負えるかどうかだ。」

「それが、こいつ等の実力だ。俺だって、始めてみた時には自分の目を疑った。俺も素手で腕試しをしたんだが・・あっさりと負け

てしまった。それに、昨日のスラバですら、アキト達がいだからこそ倒せたと思っっている。正直な話、アキトに助太刀されなかつたら俺は此処には居ない。」

「ところで、こんな村に何の用事だ。黒7つ、・村には過ぎた存在だ。」

「タグの巢穴の話は聞いているな。王都から、（銀色の鎧）が派遣された。銀2つが1人、黒8つが2人だ。それに、此処にいたカンザス達も同行した。だが、彼等が帰って来ない。それで、俺達が急遽調査をするために派遣されたのだ。そして昨夜、泉の森でカンザスとサニーを見つけた。酷い傷だった。どうにか夜明け前にこの村に辿りついたが、カンザス達はしばらくはハンターに戻れまい。」

「（銀色の鎧）は全滅か？」

「そうだ。巢穴に入りメルダムを使つたらしいが、戻る途中でタグの群れに遭遇したらしい。咄嗟にカンザス達は近くの立木に登つたらしいが、他の連中は気転が利かずに群れの中に飲み込まれたそうだ。」

「それならカンザス達は無傷じゃないか？」

「その後がある。タグの群れが森の奥にまで移動したらしい。そして彼等の前には・・タグに追われたクルキュルが出た。3匹に取り囲まれやつと逃げ出したところで俺達と出合った。」

「そうか・・後で、見舞いに行こう。」

「それがいい。それとだ、俺達は明日に此処を発つ。1週間を待たずして次の銀が来るだろう。そこでだ、お前達は2週間この村を留守にしろ。最初の銀は貴族の坊ちゃんだ。次は名声を求めるハンター・・そして2週間後に来るのは剣姫だ。彼女を守ってくれ。」

「判った。アキトにカラメルの捕まえ方でも教える事にする。」

「そうしてくれ。」

なんか甘そうな名前だけど・・後で図鑑で調べてみよう。

「堅い話は終わりにや。アキト・・・リリック何とかして欲しいにや。セリウスが信じないにや。」

「今から釣りに出かけますか。川原でリリックを食べながら昼食にしましょう。」

姉貴がそう言つと、ミケランさんは飛び上がって喜んだ。

「お弁当手配するにや。待っててにや。」

ビューンって音を立てるようにミケランさんはギルドから出て行った。

「しかし、ミケランが腹いっぱいリリックを食べたと話してたが本当なのか？確かに、俺達がこの調査に入ったのはミケランが、あの村ではリリックが食べられる。と俺に言った事も理由の1つではあるのだが・・・」

「本当だ。まあ、獲るのは俺ではなくてアキトだがな。・・・どれ出かけるか。」

グレイさんに促されて俺達は、リリック釣りに出かけることになった。

ミケランさんは後から追ってくるから大丈夫。なんてグレイさんは言ってるけど、うらまれないかな。ちょっと心配だ。

泉の森への小道を進み、橋が見える頃になって、ミケランさんが追いついてきた。

「おいて行くなんて酷いにや。」

ミケランさんが文句を言ってるけど、マチルダさんが「早く行かないといっぱい取れないでしょ。」って言ったら納得してしまった。

ミケランさんって単純なのかな。それとも、リリックの呪縛には敵わないのかな。

橋を渡ると、小川に沿って川下に歩いて行く。

しばらく行くと、ミケランさんとリリックを釣った淵にでた。

「ここで釣ります。皆さん準備お願いしますね。」

俺の言葉に、ミケランさんとミアちゃんは早速近くの藪から小枝を集めて小さな焚火を作り始めた

早速、腰のバックから魔法の袋を出して竿とタックルボックスを取り出す。

竿を伸ばしながら仕掛けをつけていると、ミアちゃんがハムの切れ端を持ってきてくれた。

早速、針に千切ったハムをつけて、淵の端に投入する。

待つこともなく、浮きに当たりが出る。ヒョコヒョコと動いてた浮きがスイーって引き込まれたときに手首を返すと、竿にグングンと手応えがくる。

淵から引き離して一気にごぼう抜き、上ったのは25cm位のリリックだった。素早くミケランさんが持ち去った。

続いて、釣り上げたのは30cm位のリリック・・・これは、ミアちゃんが持って行った。

どんとどんと釣り上げるが、常に俺の後に待機している2人の内のどちらかが直ぐに持って行ってしまつので、どれ位釣れたかは分からない。

人の気配で隣を見ると、セリウスさんが吃驚した顔で浮きの動きを見ている。

「実際に見ると余計に驚くな。これほどリリックが獲れるなら、専業にしてもやっていける。」

「俺の場合は趣味ですから。専業となると色々難しいと思いますよ。」

「仕事に楽はない。どんな仕事でも苦労はあるものだ。」

深い・・・やはり黒7つともなれば、こんな事を自然に話せるよう

になるのかな。って思ってしまった。

「おいちゃん。もうそろそろ良いだろうってグレイさんが言った。」

ミーアちゃんが知らせに来た。

どれ位釣ったか分からないけど、人数分は確保しているはずだ。早速竿を畳んでバックに収める。

既にセリウスさんは消えている。ミーアちゃんと皆に所に戻ったのかな。

俺が焚火の所に戻った時には6人が焚火を取り囲んでいた。

焚火には沢山の串に刺したりリックが取り囲んでいる。20匹以上はあるみたいだ。

早速、ミケランさんがお弁当を皆に配り、姉貴とマチルダさんがお茶を配る。そして、リックはミーアちゃんが配ってくれた。

そんな中、グレイさんはお茶とは別のコップをセリウスさんに渡している。

セリウスさんは、そのコップをチビチビと舐めるように飲みながらリックの串焼きを豪快に頭から齧り始めた。

「美味い！・・・2年ぶりか。」

「まだまだ有るにや。食べ放題にや。」

セリウスさんは感動してるみたいだ。ホントに猫族ってリックに目が無いな。ふと、ミーアちゃんを見ると、涙目でリックを齧ってる。

猫族以外の俺達は美味しいことは認めるけど、流石に2本めの串焼きを食べる気はしない。

お弁当を食べながらミケランさん達の食べっぷりを見ているだけで満足だ。

ミケランさん達は、豪快に1本を平らげ、お弁当と一緒にもう1

本を食べて、食後にお茶を飲みながら更に1本を平らげた。さすがにミーアちゃんは2本が限度だったみたいけど・・・

「いやー、食べた食べた。来るまでは半信半疑だったが、これだけ食べられるとは思ってもみなかった。」

セリウスさんは満足しているようだ。

「ミケランさんの頼みならこれぐらいは何でもないです。」

「いや、それでもだ。ミケランはガイドに過ぎない。その後でハンターのレベルを上げたのはお前達の実力だ。ハンターには色々な奴がいる。そしてその中には格下のハンターを使い捨てにする者もいるのだ。先ず貴族出身のハンターは疑え、そしてその話を断れ。次に名のあるハンターには近づくな。もし、どうしても一緒に仕事をせねばならぬ時は、常に離れた場所で見ろ。いいな！」

俺と姉貴はセリウスさんに頷いた。

「そんなに真剣にならなくとも大丈夫だ。少なくとも町や村にそんな奴はいない。事件でも無い限りはな。事件に巻き込まれる前にその地域を離れればいいのさ。」

グレイさんがパイプを煙らせながら言い切った。

「そうだ。だから、この村を2週間程離れて、戻って来い。剣姫は銀3つだが周りにいい仲間がいない。助けてやって欲しい。」

再度、セリウスさんに剣姫を託されたんだけど・・・どんな人？

グレイさんもこの話題にあまり積極的でないし、良く分からないけど2週後には会えると思うと少し期待してしまう。

剣姫っていうぐらいだから、若い綺麗なお姉さんな訳だしね。

そんな訳で、村に帰ると早速村を離れる準備をした。

お昼に残ったリックはミケランさんが「おみやげにや。」って言うって持ち帰ったけど、王都に行くまでに無くなるんじゃないかな。

村に帰って直ぐに雑貨屋に入ると日持ちする食料を買い付ける。硬い黒パンや乾燥させた野菜等だ。

次にギルドに出かけて、村を離れることをお姉さんに告げた。

「また、来てくださいね。次の町に着いたら忘れずにギルドで到着を申請してください。」

って言いながら、大きなノートに記録をつけている。

「明日の朝に西の門だ。待ってるぞ！」
グレイさんはそう言ってギルドを出て行った。

宿に戻ると早速おばさんに村を離れる事を話した。

「寂しくなるね。あんた達が持ってきたお肉で結構人気が出てたんだけどねえ。」

そう言っただけで残念がってくれることも嬉しいかぎりだ。明日のお弁当も作ってくれるって言ってくれたし。

部屋に戻ると、荷造りをしながら忘れ物が無いか確認する。でも、全部魔法の袋に入れておけばとりあえずは問題ないと思うんだけど、姉貴達は袋から全部出して詰め直してる。

結局、2人のザックとミアアちゃんの服等は大型の魔法の袋に入れて、姉貴のレスキューバックに収納した。それでも余裕があるみたいで、食材を小さな魔法の袋に入れて収納してる。おれの腰のバックには調理器具一式と釣り道具等を入れる。ミアアちゃんのバックには直ぐに食べられる食材と大型の水筒を魔法の袋に入れて収納する。

だいぶ気候も暑くなってきたので、俺達の旅装は緑の迷彩Tシャツにグルカシヨーツだ。ミアアちゃん用には緑色の半そでシャツとパンツは俺達に合わせるように膝の上で切取り姉貴が裾の始末をしている。切取った裾下は姉貴が袋に仕舞い込んだ。

そして俺は、ミアちゃん用のポルトを作る。4本は回収出来たから、これで、14本になる。

そんなことで夜は更けて、俺達は次の旅に期待を膨らませながら寝ることにした。

カaramelって何？

日中はだいぶ暑くなってきたが、早朝の今時分は少し肌寒く感じる。何ていつても、俺達の姿がTシャツにグルカシヨーツではね。

その上、迷彩キャップにスポーツサングラス・周囲の人が俺達を避けて門を出入りする理由も何となく判るような気がする。

ミーアちゃんも似たような格好だけど、帽子はツバの狭い麦藁帽子だ。

「オオーイ・・それで恥ずかしくないのか？」

グレイさんが俺達を見つけたようだ。

「こんなもんでしょう。暑くなったら脱ぐよりも最初から脱いでた方が楽です。」

姉貴が言い返してるけど、この世界で姉貴のように生足を出してる女の人は見かけなかったぞ。マチルダさんだって、呆れたような顔をしてるし・・

「まあ、あまりいい事は確かだな。ここマケトマム村の南にあるラサドム村だ。歩いて2日程になる。今夜は野宿になるから、直ぐに出かけるぞ。」

俺達は西の門の門番に挨拶をして、一路南の街道を目指す。

南の街道は、スラバ退治をした時に歩いた道を真直ぐに行った先にあるそうだ。だいたい2Km毎にある立木を数えることで大まかな現在地が分かるそうだ。立木を5本数えたより少し先にこの国を東西に貫く街道があるとグレイさんが言っていた。

スラバ退治をした時に曲がった十字路を過ぎ去り、更に先に進む。途中、4回目に出会った立木の下でちょっとした休憩を取って、

また歩き出す。

そして、街道に出た。

街道は、今まで歩いてきた道と違って石畳である。荷馬車がやつとすれ違う事が出来るくらいの道幅で、轍の痕がしっかりと石に刻まれていた。

グレイさんの話だと、荷馬車のすれ違い用に、一定の距離毎に少し道幅を広くしているそうだ。国の収入の1つが農作物等の交易によるものだから、流通手段の整備と管理は国家により行なわれているらしい。

俺達は、街道と十字に交差した対面の小道をグレイさんの後に歩いて歩いて行く。

街道の両側100m位は、不思議な事に畑が無い。何か事情があるみたいだけど、グレイさんも分からないそう。

街道を渡って最初の立木がある所でお昼にする。

小さな焚火を作ってお茶を沸かし、宿のおばさんから頂いた黒パンサンドを齧る。少しハムをサービスしてくれたみたいで結構美味しく頂いた。

俺とグレイさんがタバコを楽しんでいると、姉貴がバックから凶鑑を取り出してカラメルを調べている。

ミーアちゃんも覗き込んでいたが、やがて2人とも「エッ！」って声をあげた。ひょっとしてまたとんでもない奴なのか？

姉貴が俺に、凶鑑を見せてくれた。どれどれ・

カメだ。・寸法が少し変だけど、この絵は誰が見てもカメと言っただろう。

隣の人間のシルエットと比較すると、同じ位の大きさだ。

注意書きには、肉食で水中での動きに目を瞞るものがある。と極

めて曖昧な表現で書かれていた。

これ獲っても、利用価値があるのだろうか？カメはスープで美味しく食べられるって聞いたことはあるけど・・・

この凶鑑、ウソは無いけど、情報的に少し不足してるような気がする。あまり売れなかったのはそのせいじゃないかと思ってしまう。

そんなことを考えていると、グレイさんの「出発するぞ！」の声で、素早く焚火を消して、食器類を片付けた。

また、小道を南に向かって歩いて行く。

何時の間にか左手の畑が無くなり、小道の右側にだけ畑が続いている。

マチルダさんが川が近くを流れているせいで、左手は荒れ野になっっていると教えてくれた。

そういえば、左手の奥の方には低い灌木の林が続いている。あの向こう側が川なんだろう。

前方に一際大きな林が見えてきた。

「今日の野宿場所だ。マケトマムとラザドムの中間地点と言っわけだ。」

グレイさんが後を振り返って俺達に教えてくれた。

林に着くと、その林が小さな広場を取り囲むように作られているのが分かった。林の出入口は1箇所、丁度荷馬車1台分の横幅を持っていて。広場には10台程度の荷馬車が泊められるような広さを持っている。今夜は俺達だけが使うようだ。

早速、手分けして野宿の準備をする。俺とグレイさんで周りの林から枯れ木を集めてきた。その間に姉貴達は2張の簡易テントを設営していた。俺達のテントはポンチョを2着と迷彩シートを組み合わせて作ってある。これでも3人程度は楽に寝ることができる。

今夜は5人だから俺達の持ってきた鍋で5人分のスープを作る。固く焼かれた黒パンは出来上がる寸前に鍋に入れて蒸らすと結構柔らかくなるんだ。

簡単だけど、結構お腹がいっぱいになる。

食事が終わってポットのお茶を飲みながら、タバコを一服。グレイさんもパイプを楽しんでる。

「グレイさん。カラメルで何ですか？」

今回の目的はマケトマム村から離れることが目的ではあるが、カラメルも何らかの関連があることは確かだ。この世界では今までの俺達の常識はあまり当てにならない。聞いて教えて貰えるならばそれに越したことはない。

「お前達の技量を測ってくれる奴さ。」

何か余計に解らなくなったぞ。

「奴を捕まえるのは簡単だ。子供でも出来る。しかし、問題はその後だ。奴の了承の元に試合を行い、それに勝つこと。これが難しい。俺も、2度挑んだがダメだった。」

「勝つと何か良いことがあるんですか？」

「他のハンターから一目置かれる。ギルドでも特典がある。黒レベルの義務が緩和される。毎年のボランティアを回避できるんだ。同じチームに2名いればチーム全体が免除される。」

それは、少しおいしい話だ。だいたい俺達に後輩ハンターの手助けなんか出来るはずが無い。

「それに、銀4つまでは、ギルドの依頼をこなしていけば上がることは可能だ。しかし、銀5つはカラメルの試練に勝つ必要がある。そして、そのチャンスは3回まで。俺は後1回・・・もう少し腕を磨いてからだな。」

3回のチャンスを逃すと銀5つ以上にはなれないってことだよな。しかし、そんな試練を俺達が挑んでいいのかな。ひよっとして無謀

とかじゃないのか？

「私達にはまだ早すぎるような気がしますが……」
俺達の話に姉貴が入ってきた。

「そんな事はない。現に、俺はアキトに一度敗れている。前回の俺の試練は後少しという所で敗退したんだ。十分に勝算はある。」

「私も、試練に入ってます？」

「勿論だ。アキトから俺より強いと聞いているぞ。」

マズイ……姉貴は乗り気だ。でも、こうなったら、止められないんだよな。

諦めて、1度だけは試練を受けるしかないか……

「まずはラザドムに行つて、カaramelを捕る。奴らを捕まえられるのは、2つの月が両方とも満月になった時に限られる。幸いもう少しで満月だ。大勢集まっているぞ。」

「明日も早い。もう休め。」ってグレイさんはテントにもぐりこんだ。

俺達も、寝ることにするけど……今夜は焚火の番はいらないのかな？

広場を一回りすると、広場の入口に簡単な柵が置いてあった。柵にはベルみたいな鳴子が付いている。

なるほど！って感心しながら俺も、テントにもぐりこんだ。

次の朝。俺がテントを出たら、皆が焚火の周りで朝食を取っている。

姉貴が渡してくれたお茶とミーアちゃんがバックから取出した固焼きの黒パンをボソボソ齧る。

今朝はこれに焼きハムが付いていた。簡単に塩だけの味付けだが黒パンにはよく合うんだ。

宿泊地を出ると、また小道を南に歩く。

ラザドムは海に面した漁村だということだ。

海があるっていうことは、何となく嬉しくなる。ミアちゃんはまた海を見た事が無いって言ってたし、いくら説明しても海の大きさを上手く表現するのは難しい。きつと大きな池位に思ってるに違いない。でも、初めて見る海はきつと感動するに違いない。少し楽しみだ。

何回か立木の目印を過ぎると、突然下り坂になり、目の前に海が姿を現した。

大きい・・・この世界の海も前の世界と同じだ。

ミアちゃんの様子を見ると、姉貴の後ろに隠れてしまった。

あまりにも大きなその姿は想像出来なかったに違いない。

そして、砂浜が湾のように広がった所に100軒以上の家が並んでいる。

それが、俺達の目指すラザドムの村だ。

「もう少しだ。行くぞ！」

そう、言っただけでグレイさんは坂を下りて行く。

姉貴は、まだ後に隠れていたミアちゃんに、「大丈夫よ。」って、手を握り坂を下りて行く。俺も急いで後を追った。

坂を下りると海はもう目の前だ。小道も土から砂地が変わっている。そして、何と言っても海の匂いだ。表現しにくいけど海には匂いがある。それはこの世界でも同じだ。

村に近づくとつれづれ、それに魚の匂いが混ざる。至る所で干物を作っているようだ。まあ、漁村だし・

カルメルの伝説。そしてその正体は？

ラザダム村は海岸線と平行に東西に伸びる道を挟んで、海側と陸側に家並みが連なっている。陸側には裏通りもあり、裏通りに面して更に家並みがある。

俺達はグレイさんに連れられて、道を進んで行く。

村の真ん中辺に、少し大きな建物があった。この村のギルドである。

ギルドの扉を開くと、マケトマムのギルドと同じような造りだ。グレイさんはカウンターまで歩いて行くと、早速この村への到着を報告する。

「マケトマムから来た5人だ。アキトとミツキが試練を受ける。まだ枠はあるよな？」

そう言って、俺達のギルドカードを集め、カウンターのお姉さんに渡した。

「大丈夫です。・・年に4回のお祭りなんですけど、今回は参加者がいなくて困ってた所なんです。村の皆さんも喜ぶと思いますよ。」

「ン！・・今、お祭りって言ったよな。試練ってお祭りのイベントなのか？」

「なら、安心だな。今回は楽しめると思うぞ。」

「・・でも、赤7つですけど・・」

「まあ、それは当日のお楽しみってことで。だが、少しはアキトに賭けておいたほうがいいぞ。」

賭ける？・・カルメルの試練は、お祭りで賭け事なのか？・・余計に疑問が膨らんでいく。

「はい！カードをお返しします。頑張ってくださいね。」

カウンターのお姉さんに応援されてしまった。とりあえず、「どうも・・・」と言っておいた。

「この時期、祭りで何処の宿も満員だ。知合いの家に泊めて貰う。」

ギルドを出ると、グレイさんは裏通りに入ってしまった。狭い路地を少し歩くと、周りの家に比べて少し大きな家があった。

「ここだ。この村の漁師を束ねている一人だ。」

そう言って、扉をドンドンと叩く。

「誰だ！」

家の中から若い男の声が下かと思うと、扉がバンって乱暴に開かれた。

「何だ。グレイさんじゃないか。親父も帰ってきている。さあ、入ってくれ。」

中に入ると、そこは大きな1つの部屋になっていた。ギルドのホール並みにおおきい。真ん中に大きなテーブルがあり10脚位ゴツイ造りの椅子がある。へやの奥には暖炉があるが、今の季節では使われていない。そして、その暖炉の前にゴツイ体格の爺さんが座っていた。

「グレイか。久しぶりじゃの。お前の試練はあと1回・・・今回限りじゃが、挑戦するの？」

「今回は誰もいなかったようだな。」

「そうじゃ。全く、近頃の若い者はだらしが無い。わしが若い時分には我先になって申し込んだものじゃが・・・」

爺さんは残念そうに、目の前のカップを掴んで一飲みした。

「今回は、楽しめるぞ。俺は出ないがこいつ等が出る。赤7つだ。楽しくなるだろ。」

「冗談を言うな。黒3つでも難しいものを・・・」

「だが、こいつは俺より強い。赤6つでスラバを倒している。」
「・・・少しはできるか。泊る場所はわしの家にするがいい。金はいらん。俺と村人そしてカラメル達を楽しませてくれれば十分じゃ。」
「
うん？・・・カラメル達を楽しませるってどういうことだ。」

「ああ、十分に楽しめるはずだ。このアキトと其処にいるミヅキも試練に挑むんだからな。」

「何じゃと！！・・・女で試練に挑むのはここ100年は無かったはずじゃ。・・・取り分は7対3で良いな。」

「10日厄介になれるならそれで良い。」
何か変な感じで、長期間滞在が可能になった。良いような悪いような複雑な気分だ。

「立ってないで、座れ！・・・先ずは酒じゃ。今夜は旨い酒が飲めるぞ！」

俺達は言われるままに席に着くと、さっきの若い男が大きなカップで飲み物を運んできた。表面に泡がいっぱいあるから、ビールの一種みたいだ。

全員に行渡ると早速「乾杯！」で飲み始める。
ビールよりも遥かにアルコール度が少なく甘い飲み物だ。これなら、ミアちゃんでも1杯位ならつき合える。

次に運び込まれたのは大きな海鮮鍋だった。季節的にはどうかと思うけど、食べると結構美味しい。

ワイワイと近状を話しながら鍋を頂いている時に、思い切った疑問を爺さんに投げかけてみた。

「あのう・・・結局、カラメルって何なんですか。今まで色々聞いたんですが、どうも理解できなくて・・・」
爺さんはグレイさんを睨みながらカップをテーブルに置いた。

「この国の伝説が元になったお祭りの余興なんじゃが・・・」

爺さんの話を纏めると、

昔、この辺りを治めていた国が、魔国からの侵略に窮したとき、3人の勇者が現れた。

彼らは懸命に戦ったが勝利を得ることができず、この辺りまで敗退してきた。

此処の浜辺で野宿をすると、次の日食料が無くなっていた。

不思議に思い、付近の村で食料を調達し、誰の仕業かを確かめると・・・

夜、海からカラメルが上陸して食料を持って行った。

次の日、食料を餌にデツカイ籠で、カラメルを捕らえる事ができた。

すると、捕らえたカラメルは言った。

「俺と勝負しよう。もし俺が負けたらお前らに協力する。」

勇者の1人がカラメルに挑んだ。そして、見事勝利した。

そして、勇者に協力したカラメルの働きで魔国の侵略を跳ね返した・・・

「それから、この村ではその伝説を基にカラメル獲りをするようになったんじゃ。」

「だが、カラメル側にも似たような伝説があつての。この勝負に勝利したものはカルメル達の海底王国で高い地位を得ることが出来るようなのじゃ。そして、我々側では高位ハンターの必要条件となるわけじゃ。面白いの・・・それでの。何時しか、その勝負が賭けの対象となつたわけじゃよ。」

要するに、どちらが勝つても、勝利者はメリットがあるのか。伝説はどちらかと言うと後付けのような気がする。でも、その伝説があるからお祭り騒ぎが出来るわけだ。

まあ、全ては明日の晩には判るんだけどね。

猟師を束ねるだけあって部屋は沢山あった。その中の1つに若い男の人（宴席でレニアックと名乗ってた）の案内されて今夜は早々に寝ることにした。

次の日、グレイさんに案内されて祭りの会場に行った。

海に面して、砂浜に校庭位の広場を杭とロープで仕切っている。その周りは、場所取りの椅子やカーペットがぎっしりと並んでいる。そして、貴賓席もある。貴賓席は10脚位の椅子がテーブルの両側に広場に面して並べられている。

海鮮物を炭であぶった串焼きや果物の屋台等が遠巻きに会場を囲んでおり、その一角には何と、今回の勝負の掛け率が表示されている。

ん・・俺は、10倍か。姉貴は20倍の高額配当だ。こんなんで購入う人がいるんだろうか。

広場の真中には、小さなテーブルに皿が載っている。そして大きな籠がその上にかけてあって、棒で倒れ落ちるのを防いでいる。でも、棒に付いてる紐を引くと・・

これって、スズメ獲りの罫じゃないか！　こんなんでカルメル捕れるのか？

「なっ！　この紐を引けばカルメルが獲れるわけだ。簡単だろ。」
グレイさんはそう言うけど、ホントかな？

そして、日が暮れると・・広場は大勢の人で埋まっていた。隣人との話し声、屋台の売声、そして賭けの胴元が張り上げる声で広場全体がざわめきに満ちていた。

広場の中には篝火が何箇所か立てられておりぼんやりとした明か

りに照らされている。

貴賓席には、俺達が世話になつてる爺さん（トレックつて名乗つてたような気がする）達が片側に、そして反対側には・・カメがいた。

なるほど、図鑑通りの姿だ。テーブルのキュウリを食べている。カメはキュウリを食べるのかと言う疑問はこの際無視しとく。

俺と姉貴に此処に残れと言って、 그레이さんはマチルダさんやミアちゃんの待つ貴賓席近くに移動していった。

そして、村を見下ろす坂の上に花火が上がった時、トレックさんが立ち上がり大声を上げた。

「皆よく聞け！・・今回の祭りは2名の挑戦者が名乗りを上げた。

」
「アクトラスのアキトとミヅキじゃ。試練は本来黒レベルの实力を必要とする。しかしアキトは赤の7。しかしじゃ。赤の6つでスラバを狩りおつた。ギルドもそれを保障しておる。カラメルの高老はそれを聞いて納得してくれた。よつて、今回の試練は公式のものじゃー。」

そう、告げると会場は割れるような拍手に包まれた。

「忘れておつた。ミヅキはアキトより強い。そして100年無かつた女性の挑戦者じゃ。」

声の最後は会場のウォー！！つて言う声で消されてしまった。

村の子供達が両手に沢山のキュウリを抱えて中央の籠の下にあるお皿に乗せる。

そして、籠を止めている棒についている紐の先を皆で持っている。しばらく待つと、浪打際に2つの黒い塊が浮んできた。それはだ

んだんと広場に近づいてくる。

パタツ、パタツ・砂浜を広場の中央にやってきたのは2匹の力メだった。

いや、カメではなくてカラメルだったよな。そして中央に設えたテールのお皿の上に載ったキュウリを食べ始めた。

その時！ バサリ！！って籠が落ちる。

ワァー！！と言う声と共に沢山の拍手が広場に満ちた。これが伝説の再現ってやつなんだな。

俺と姉貴は、グレイさんに教えられたとおりに、籠に向かって走る。

そして籠を前に宣言する。

「我と勝負、そして勝利を我の手に！！」

「我ら試練の時！！」

その声と共に箒は天高く飛んでいき、カルメルは俺達の前に後足で立った。

前足が抜けるように腕が現れる。その腕を甲羅の境目あたりに持つていき何やら操作すると甲羅がガタンと下に落ちた。おもむろに後足から足を抜き出す。

そして、最後にカメの頭に手をやると、ズボリ！とヘルメットのように頭を外した。

そこに、現れたのは・カッパだった。

カラメルの試練

篝火の明かりでぼんやりと照らし出された広場で、俺と姉貴の前に2体のカツパが立っている。

身長は2m弱。体重は100kgはあるだろう。肌と同色の全身タイツみたいな衣服を着ている。衣服というよりは薄いウェットスーツに近いものかもしれない。

背中には平べったい甲羅があり、口先は尖った嘴。

そして、彼らの体格は、レスラー並の筋肉であることを薄い衣服の起伏から見て取れる。

おもむろに背中の中身の甲羅を取り、両手を顔に持っていき嘴を取外した。カツパの甲羅と嘴って水中呼吸器だったんだ。

村人が数人出てきて、彼らの取外した装備品をカラメルの長老の前に丁寧に運んでいった。別の村人達が籠やテーブル等も片付けている。

「まずは礼を言う。我ら2人、今回の試練が受けられぬ時は川を上り、スラバと戦う事になっていた。スラバを探すのは困難を極める。ここで済ませられるのは幸いだ。俺の名はグプタ。彼はタペト。・・・さて、どちらが先か？」

「俺、アキトが先になる。赤7つでランクは低いけど、タグとスラバは倒している。実績で評価してほしい。」

俺は、もうカツパの姿ではない彼らに向かって言った。そして、装備ベルトを外して姉貴に渡す。

「十分だ。スラバを単独で狩れる者。それだけで十分驚嘆できる。」

グプタと名乗った元カツパが1歩踏み出した。タペトの方は後ろ

に下がる。姉貴も、後ろに下がったようだ。

波の音だけが聞こえていた広場が、ウオォー！！という歓声に包まれる。

いよいよ、祭りのハイライト。試練が始まるのだ。

俺とグプタは2 m程の距離を開けて対峙しながら、少しずつ広場の中央に向かって横に足を運ぶ。

広場の真ん中付近で、両者の足が止まった時、いきなり俺の顔めがけてグプタの拳が飛んできた。

右足を引いて体を回転させる位は意図しなくとも、体が反応してくれる。そして俺の顔の横すれすれにグプタの拳が通り過ぎていく。だが、これは不自然だ。俺とグプタの距離は相変わらず2 m程度離れている。

カップの両腕は繋がってるって聞いたけど・・・このことか？よく見ると、拳が戻されるにつれ、左腕が伸びている。俺達と体の構造が少し違うのかも知れない。

初撃を避けると、グプタに対して斜めに低く構える。こうすることで彼から見た俺の前方投影面積は最小になるはずだ。

次の右からの攻撃を再度体を半回転させて受け流し、伸びきった左手首を掴み右手でグプタの肘を押すと・・・肘が曲がった！

俺は慌てて、後ろに飛び離れる。

ホントにカップ伝説の通りだ。腕は伸びるし、間接も自由自在に切り離しができる。よくもこんな奴相手にグレイさんが惜しいところまで行ったと感心するけど、今はこれからどうするかを考えねばならない。

そもそも合気とは、体の気と宇宙に満ちる気の統合を図るためのものだ。護身術では断じてない。かといって超能力者でもない。気

の流れに逆らわず、自らの気をその流れに沿って戦うことが本来の姿である。気の流れは時間をも超越する。よって、流れさえ見極めれば戦う前に結果を予測できるのだ。

相手の体力、姿、形に惑わされること無くこの広場に満ちた気を掴むことに専念する。

体の中心丹田に気を集中する。意識して集中させていくと、見えないものも見えてくる。俺の場合はこの広場に流れる気の流れだ。山から海に漂うように流れる中にグプタの姿があり、その周りは彼の発する気によって乱れが生じているのが判る。

この状態では完全に先を読むことができる。たとえフェイントであっても、本筋の攻撃を出す方の乱れが激しいのだ。

両手に集めた気を通す道を意識して気脈を確認して、こちらから攻撃に出る。

グプタの前に素早く進むと、体を回転させながら頭部に回し蹴りを叩き込む。

だが、グプタも体を半回転させて、俺の蹴りをやり過ごした。

そして、正拳突きのような形で俺に反撃してきた。

俺は、小さく身を回すと彼の右横に出た。彼のガラアキになった右横腹に左の掌低を送り込んだ。俺の気脈から一気にグプタの体内に気が流れ込む。

グプタは呻くことも無く崩れ落ちた。

「勝者。アキト!!!」

カルメルの長老が叫ぶと、広場は熱狂して叫ぶ者達で耳を覆いたくなる状況になった。

静かにグプタの首に手を添える。

やはり、脈動は感じられない。慌てて姉貴を呼ぶと、姉貴はグプタを仰向けにして心臓付近を小さく拳で2度殴った。

「グウウ・・・俺はどうなった？」

「アキトに心臓を止められてました。今、私が起動させましたが体に異常はありませんか？」

グプタは寝た状態で四肢を動かして、からだの変調を確かめた。

「異常は無いようだ。・・・攻撃したはずだがその後の意識がない。しかも何処も痛感がないのだ。なぜだ？」

「貴方の脇腹に掌低を当てた時、瞬間的に気を送って心臓の拍動を止めたみたいですね。脳への血流が無くなったためにその後の記憶も無いんです。彼の攻撃は心臓のみを狙ったようですから体に異常がないんです。でも、そのままでしたら確実に死にましたよ。」

「そうか・・・流石はスラバを狩っただけの事はある。まだ俺は未熟なのか・・・」

彼はそう言って、後ろに下がる。

そして、ジツと成り行きを見ていた、タペトが中央にやって来た。次の試練が始まるようだ。俺は姉貴の装備ベルトを受け取り、俺の装備ベルトが置かれている場所まで下がった。

タペトと姉貴もさっきの俺達同様、2m程度距離を開けて対峙した。

俺と同じ技を使うと思っっているのか、容易に姉貴へ攻撃を仕掛けない。

まだ俺には広場の気の流れが見えているが、姉貴の周りには気の乱れが一切無い。まるで姉貴がその場にいないように見える。完全に気の流れと一体化しているのだ。

姉貴がタペタに一步近づいた。途端にタペタを取巻く気が乱れて渦を巻く。

更に姉貴が一步近づいた時、タペタは上空に飛んだ。

垂直ジャンプで3 mは飛んでいる。そして、アンバックをするように姿勢を変えると、姉貴めがけて蹴りを放つ。

姉貴は体を半回転させながらしゃがみ込むように姿勢を低くして、タペタの着地点に全身を回すように低い蹴りを放った。

しかし、タペタはアンバックで僅かな差で攻撃をかわす。

そして、蹴りの遠心力を利用して立ち上がった姉と、再び対峙する。

今度はタペタが攻撃する。グプタと同じように生拳で姉貴を捉えようとしたが、姉貴は俺と同じように半回転しながらこれを避けた。そして、伸びきった腕を掴むとタペタの懐に潜り込み、お辞儀をするような動作でタペタを投げ飛ばすと同時に腕を離す。

2 m程の距離を投げ飛ばされたタペタは回転するように受身を取り立ち上がったが、腹を片手で押さえている。どうやら、姉貴の奴、潜り込んだ時に肘を入れていたようだ。あれって禁じ手じゃなかったか？

姉貴の右手に気が集中していく。俺にはぼんやりと光っているのが見えるが、この広場にそれを見る事ができる者はたぶんいないはずだ。

姉貴は左手を前にしてぼんやりと立っているように見える。自然体だが何処にも隙はない。この姿に何度騙されて道場の床に倒れたか数え切れない。

案の定、タペタは走りぬけるように姉貴に近づき顔を拳で攻撃してきた。

全体重が拳に乗っているのが判る。

姉貴はスィーっと横に移動したかと思うと、伸ばしきった腕に右手刀を振り下ろした。

ポタツ！・・タペタの右腕が落ちる。

更に姉貴は体を回転させると、彼の首筋に手刀をあてた。

「勝負あつた！・勝者ミツキ！！」
カラムルの長老が一際甲高い声で叫ぶ。
そして、広場は爆発したような喚声に包まれた。

ゆっくりと長老が広場の真中に歩いてくる。

でも、カメの姿なんだよな・偉い人みたいだけど、見た目がね・
タペタの所まで歩いていくと、砂地に落ちた腕を取り上げる。そして、青い顔で切断された腕の上部を左手できつく握って止血している彼の右手をくっ付ける。

長老が何か呟くと右手の接合面が光り始めた。なんだか明暗を繰り返すと・彼の右手は何事もなかったように基に戻っていた。

「それにしても・赤7つでエーテルを操るとは恐れ入った。我等カラムル族でさえ200年をかけて覚えられるかどうか・ほれ、勝者の証じゃ。受取るが良い。」

カメは甲羅の中から、真珠で出来た小さなピアスを俺と姉貴の手のひらに載せてくれた。

そして、グプタ達の方に歩いて行く。

「今回は余りにも相手が悪かったようじゃな。だがそれ程落ち込む事はない。アヤツらに奥義を使わせたのじゃ。それを誇るがよい。次は必ず勝者になろう。」

グプタ達はカメに平伏している。やはり偉いカメなんだろうか・

俺は姉貴に装備ベルトを渡すと、2人でグレイさんの所に歩いていった。

「ヨオーシー！！」

何故かしらグレイさんは、天に向かって拳を振り上げてガッツポーズをしている。

「彼ね、全財産を貴方とミツキに賭けたのよ。とんでもない配当金が入るみたいなの。」

呆れた顔でマチルダさんが姉貴に愚痴をこぼしてる。

その後は、ドンチャン騒ぎのお祭りだった。

酒が運ばれ、キュウリが運ばれ・海からはカルメル達が次々に魚を運んでくる。

広場の真中には大きな焚火が焚かれ、魚を炙っては酒を飲む・そんな光景があちこちで始まる。

やがて焚火を中心に輪が出来て、音楽に合わせて踊りが始まる。

やはり、お祭りであることは確かなようだ。

海老を獲ろう

俺達は、長老達の前に作られた宴席で、グプタ達とお祭りの特別料理（でも鍋だった）を頂いた。

「イヤー、驚いた。今までの試練でもあれほど早く結果が出たことはない。」

「決して、グプタ達が劣っているのではないぞ。我らカラメル族が2000年を生きて辛うじて到達できる境地にアキト達がおるのじや。ワシが相手をして互角がいいところじや。」

「いまだに、何故敗れたか判りません・・・」

「アキト達の技の到達点の違いかの。個人と世界の一体化・・・後100年以上生きれば少しは見えてこよう。」

長老の話聞きながら、ふと姉貴を見るとコックリ、コックリと船を漕ぎ出している。

「宴席を抜ける事をお許し下さい。私達もまだ未熟故、気の集中と一体化に精神が疲れます。早く姉を休ませたいのですが・・・」

「その若さではそうじやろう。遠慮は無用、早く休ませることじや。お主も、同じじや、早々に休むが良い。」

それでは、と姉貴を抱えて宴席を抜け出す。

俺達の姿を見つけたミーアちゃんが踊りの輪を抜け出てきた。

「もう、帰るの?」

「うん。ちよっと疲れたし、姉さんもこんなだしね。」

どうやら村人は夜通し騒ぐみたいだ。俺達3人が広場を抜けるのを誰も気にしていない。

宿に帰って、姉貴をベッドに寝かせると、隣のベッドに倒れるようにして眠りに入る。

次の日、ミアちゃんに起こされたのは、夕方近くになった時だった。

「今日は誰も起きにゃいの・・・」

「みんな騒いでたからね。ミアちゃんは何時も通りに起きたの？」

俺の問いに小さく頷いた。

まだ、頭がすっきりしないし、姉貴は夢の中だ。ミアちゃんも、随分と退屈だったに違いない。

「散歩に行こうか？」

俺の言葉にミアちゃんは元気よく頷いた。

装備ベルトを付ければ準備完了。ミアちゃんと手を繋ぎ浜辺の散歩に出かけた。

夕暮れの太陽に海が赤く輝いている。

相手がちよつと小さいけど、デートしてる気分になれる。

「ミアちゃん。この水、舐めてごらん！」

俺の言葉に、ミアちゃんは波に気をつけながら海水に指をつけた。

ペロツって指を舐めて、途端に顔を顰める。

「塩っ辛い！」

「この水を蒸発させると、リリックを焼く時に使う塩が出来るんだよ。」

へ〜って聞いている。知らなかったのかな？海を見るのは初めてだしね。

砂浜には昨夜のお祭りの名残は何処にも無かった。村人がきつと総出で後片付けをしたに違いない。

夕日が落ちると、若い人達が砂浜に集まってきた。驚くことに全員が特定の相手を伴っている。ひょつとして、ミアちゃんの教育

上好ましくない光景が起きるかもしれないので、急いでミーアちゃんを連れて浜辺を離れた。

宿に帰ると、グレイさん達が酒盛りの最中だった。これもこれで教育上よろしくないような気がする。

「オオ！帰ったか。まあ座れ！」

無理やり座らせられると早速ビールモドキが運ばれてきた。

お腹が減っていたので、目の前の魚料理を適当に食べ始める。ミーアちゃんも俺の隣で早速大きな焼き魚と格闘してる。

「さて、お前の取り分だ。俺達の取り分は3分で、1500L。山分けて750Lがお前達の取り分になる。」

「大分稼がせて持ったわい。殆どの者がカラメル側に賭けておったしの。」

爺さんはそう言っただけで豪快に笑い出した。

「ところで、グレイさん。10日と言っていましたが、残り8日はどうするんですか？」

「明日は船を借りて海老を獲る予定だ。磯遊びも兼ねている。．．お前は泳げるよな？」

「一応泳げますけど、ミーアちゃんは．．」

「大丈夫。直ぐに覚えるわ。私もこの海で覚えたくらいだから。」
マチルダさんが言ってるけど、顔には私が教えるんだから．．と書いてある。姉貴と取り合いにならないかちょっと心配だ。

「ところで、ミツキは大丈夫なのか？」

「ええ、疲れてるだけです。体の異常ではありませんから、心配ないですよ。」

「そうなら、いいんだが．．丸一日寝てるぞ。」

「俺だって、夕方近くまで寝てましたよ。」

俺の言葉に安心したのか、 그레이さんはビールをレニアックにお代わりしている。

「ねえ・・・まだ、付けないの？」

一瞬、何のことが判らなかつたが、 マチルダさんが自分の耳を指差しているのを見て合点がいった。

ポケットを探ると、小さなピアスが出てきた。真珠がついたピアスだけど・・・色が少し変だ。普通、真珠はピンクがかつた白だけど・・・この真珠は虹色だ。

これをつけるの？って俺の耳に持つていくと、ピシ！って耳にくっ付いてしまった。ピアス穴も無いのに？って、外そうとしたが外れない。

「虹色真珠って綺麗よね。だいぶ前に王都のハンターが付けてるのを見たけど、アキトよりは色が薄かつたわ。」

「でも、これ取れないんですが・・・」

「絶対に取れないわよ。無理に取れば色が無くなるって聞いたことがあるわ。カラメルの試練でしか得ることが出来ない物。それが虹色真珠よ。」

取れないならば諦めるしかないか・・・姉貴に笑われるかな。

そんなことを考えながらビールを飲んで寝てしまった。

眩しい光りで起された。

ミーアちゃんがゆすつても起きない俺に、窓のカーテンを開けて部屋をあかるくしたらしい。

おはよう。って言ったたら皆起きてる。って言われてしまった。装備ベルトを身につけると、1階に下りていった。

「おはよう。よく寝てるわね。」

姉貴の挨拶だが、昨日一日姉貴は寝てたんだぞ！とは言えないのが辛い所だ。

豆のスープと焼き魚それに黒パンが朝ご飯。モシヤモシヤと食べていると姉貴が俺に水着を手渡した。

俺と同じように方耳に虹色真珠のピアスを付けている。

「今日は海老を獲りに行くんだって。アキトの海パン、持ってきて良かったわ。」

啞然としていた俺の手にメガネまで乗せる。

ひよっとして、潜って捕れ！ってことか？

「私は、ミーアちゃんに泳ぎを教えないといけないからアキトは頑張ってね。」

チラツてマチルダさんをみたら、姉貴を睨んでた。

「アキト・・・潜ってたほうが良いかもしれないぞ。」

グレイさんが俺に小声で呟く。おれも小さく「そうですね。」って同意してしまった。

朝ご飯を終わった所で、海老獲りの準備だ。

水着に着替えて部屋を出る。姉貴は俺を追い出した後で着替えるそつだ。ミーアちゃんの分は昨日マチルダさんが手に入れたって話してくれた。

「部屋の荷物は心配するな。」

グレイさんはそう言っただけで俺に鋸を一本渡してくれた。鋸の長さは2m位だけど鋸先の金属部分は30cm程度ある。返しも付いているけど・・・これで獲る海老ってどの位の大きさなんだろう。

「それと、ナイフだ。足に巻いておけ。」

刃渡り20cm位のナイフを脛に布で巻きつける。包帯みたいにクロスするように巻いておけば落ちらる心配もないだろう。

「お待たせ！」

階段をミアちゃんと下りながら姉貴が俺達に声をかける。

「ピューー！」ってグレイさんが口笛を吹く。

まったく・・何時ビキニなんて手に入れたのか・・困ったもんだ。
「お揃いね！」

今度はマチルダさんだ。うん黒いビキニが似合ってる。姉貴は赤
だけど、黒つてのが何とも・・

で、ミアちゃんは何故かスクール水着・・この世界に何故にある？

ま、そんな感じで俺達5人は浜に出かけた。

俺とグレイさんは銚子を持って、姉貴達はお弁当の入ってる小さな
籠を持って・・

砂浜は、海水浴の客が結構いる。適当に砂浜に布を敷いて寝転ん
でいる。波も遠くの岩礁の方は結構高いけど、湾の内側は静かだ。

「あの船を借りている！」

グレイさんの指差した先には小型のカタマランが浮いていた。

浜辺から20m位沖に浮んでる。姉貴達は早速泳いで行ってしま
ったが、ミアちゃんはどうするんだよ！

結局、俺が肩車してカタマランまで連れてった。結構遠浅で助か
った。船まで来たけど俺の腰まで無かったし・・

俺とグレイさんとで、パドルを漕いで岩場を目指す。海底の岩場
の穴に大物が潜んでいるそうなんだけど・・俺の世界の海老を同じ
なんだろうか・・銚子だつてマグロだつて取れそうなのゴツイ奴だし、
少し心配になってきた。

波が静かな岩場を目指してどんどん漕いでいく。

姉貴達は「風が気持ちいいね。」なんてマチルダさんと話して
るけど、こっちは結構疲れてきた。

そんな俺達の苦勞が報われ、岩が乱立して波静かな岩礁を見つけ

ることが出来た。

早速、メガネをかけると銚子を持って、船から飛び込む。

水の透明度は高く、遠くの魚まで見通せる。水深は10m位だ。素もぐり漁には丁度いい。

俺の傍をグレイさんが潜っていく。早速、海老を探してるみたいだ。

まず、海老が俺の知ってる海老だと確信するまで、俺は水中散歩を楽しむことにした。

頭上を見ると、ばた足で水面が泡立っている。姉貴達がミーアちゃんと遊んでるようだ。姉貴がミーアちゃんに泳ぎを教えられるか・それが問題だ。

ウミウシは牛より大きい

俺の直ぐ脇をグレイさんが慌てて海面目掛けて泳いでいく。息継ぎかな？って思ったが、あれ？少し変だぞ・

俺は、何で息苦しくならないんだ！

まだ、十分潜っていられるような気がする。俺の水中活動時間は約1分程度のはずなんだけど・もう、潜って大分経ってるよな。急に息苦しくなってパニックになって姉貴に笑われるのも癪だと思ひ、一度海面に浮上する事にした。

「プハー・・っと。いやー、何か随分と長く潜れるようになったよ。」

吃驚して俺を姉貴とミアアちゃんが見てる。

羨ましそうに見ているのはマチルダさんだ。

「話には聞いていたけど、虹色真珠って本当なのね。」

どういうこと？って聞いた俺に、話してくれた虹色真珠の効能は、水中等の空気がない場所での活動時間を延ばすというもの。水中に限らず、煙の中や炎の中でも効果があるって話してくれた。

虹色真珠の色の鮮やかさで効果の程度が変わるらしいけど、俺達が貰ったものは極上のもらしい。だから、水中で息苦しくならぬのか・・良い物を貰った気がする。

「凄い物貰っちゃったね。後で私も潜ってみよう！」

姉貴も喜んで。確かにこれさえあれば素潜り漁は楽勝だ。

ザバー！って俺の隣にグレイさんが浮んできた。片手に持っているのは・・海老だ。30cm位の伊勢海老みたいに見える。ひよっとして2m位の奴かな。って思っていたから安心した。

グレイさんは船にポン！って海老を投げ入れた。 ミーアちゃんが棒でツンツンしている。

「あっちの岩の下に結構いるぞ。お前も来い！」
俺はグレイさんの後を付いて潜っていった。

5 m程潜った時、先行していたグレイさんが俺に向かって手で合図する。そして、岩場の1つを指差した。

ゴツゴツした岩が重なり合っている。そこへグレイさんが向かっていくと、岩の割れ目を一箇所づつ丁寧に見ている。そして、やはり片手を割れ目に突っ込むと、一匹の海老を掴んでいた。

俺に向かつてもう片方の手で親指を上げ、どうだい！ってポーズをしながら海面に向かって浮上していく。

俺も、グレイさんに倣って岩場の割れ目をめざして泳いでいく。数箇所程見回ると、いた！・・奥に張付いている。腕を伸ばして甲羅を掴み、バタバタと激しく暴れる海老を掴み、急いで海面に浮上する。

水面に顔を出すと、皆が一斉にこっちを見る。左手で海老を高く上げると、驚いたような顔をしながらも拍手してくれた。

「疲れるでしょ。ちょっと休憩しなさい。」
姉貴の言葉で船に上がることにした。

グレイさんも船に上がって休憩してる。お茶のカップとパイプを手に満足げな表情だ。早速俺にもミーアちゃんがカップを渡してくれる。

海老はどうなったんだろうって船の中を探すと、2艘が平行にくっ付いたカタマランの片方の船にある生簀に入っていた。

「海老を獲るのって大変ですね。」

「いや、漁師達は網で獲るのさ。俺達みたいに一日数匹では商売

にならんだろ。彼らも、この位しか獲れないから俺達の漁に文句を言わないのさ。彼らにしてみれば船を貸して料金も取れるし、取った海老は形が揃っているから大漁ならば買取っても利益がある。そして俺達は楽しめる。両得なんだな。」

確かに、漁師で生活するのは難しそうだけど、この漁村は結構うまくやつてるみたいだ。観光漁村って感じなのかな。

その時、モオオオオ・・・って言う低い響きのような音が水中から聞えてきた。

俺は急いで海中に頭を突っ込んで音源を捜す・・・何も見えない・・・船べりから体を起すと、グレイさんとマチルダさんが俺を見て笑っている。

「そんな顔をするな。あれはウミウシだ。見たこと無いのか？」
見たことならある。だが、前の世界の常識がこの世界に当てはまらない事は今までのことで十分承知もしている。

「ウミウシって、こんな形で、頭に角が出てて、海底を這ってる奴ですよね。」

姉貴がグレイさんに確認してる。少しは慎重になってきたようだ。
「そうだ。形的には気持ちいいものではないけどな。だがウミウシは大食漢で漁場を荒らす。漁村の多くが、カルメル達にウミウシ狩りを定期的に依頼してるんだ。」

グプタ達がカッパの姿でウミウシを獲っているのを想像してしまった。ちよつとおとぎ話の１シーンみたいだ。

「さて、もう少し獲って昼食にするか・・・アキト。行くぞ！」
俺達は船から身を躍らせて海に飛び込んだ。

さっきの岩場を目指して深く潜り、割れ目を探す。
また、グレイさんに先を越された。今度は両手に海老を持っている。
る。

俺も、ようやく海老を掴んで海面に戻ろうとした時だ。

ドドオーン！！という低い響きを立てて、岩が崩れた。たくさん
の海老や魚が飛び出してくる。

そして、崩れた岩場の向うに見えたのは・・・ウミウシだった。

確かにウミウシだ。前の世界で海辺にいた奴にそっくりだ。さっき姉貴がグレイさんにも確かめてたけど・・・でも、大きさが違う。バスよりデカイ・・・電車並かもつてところだ。

良く見ると、体に数本の鉗が刺さっている。そして、体色がめまぐるしく変化している。

そして、俺の横をスイーっと通り抜けた者はカルメルだった。カルメルの狩りの現場に行くわせたみたいだ。

指揮しているカルメルを見ると、甲羅に足の鰭はカメだが手には鰭ではなくて鉗を持っている。

数人でこの大型ウミウシを狩る姿は、野牛相手に狩りをするインディアンみたいに勇壮だ。

1人のカルメルが鉗を手にもウミウシの背中に突き刺そうと近づいた時、ウミウシが体を捻って、カタツムリの足のようなものでカルメルを跳ね飛ばした。

ドン！という岩場に衝突した振動が俺にまで伝わってきた。

俺は、とりあえず海面に浮上する。

「姉さん。ウミウシだ・・・カルメルが1人やられたみたい。手
伝ってくる！」

鉗を掴んでウミウシのところにいそいで潜っていく。

ウミウシの背中には、更に銚が突き立っている。辺りの海水は紫色に少し着色されている。

ウミウシの方は、まるでクリスマスツリーのように体色変化を起しており、少し発光しているようにも見える。

ウミウシの背中が見えるように泳いでいくと、背中の中箇所に銚が集中している。そして、その銚の下には丸いコアみたいなのが見えた。

背中の中約1m程度にあるそのコアまで銚が達していないのが判る。

ということは、あのコアを銚で刺せばいいのか・

そう考えて、素早くおよいで背中に取り付いた。カラメルが刺した銚の柄に足を絡ませ体を安定させると、コア目掛けて銚を突き刺した。・・だが、まだコアまで達していない。更に両手でねじ込むように銚を押し込む。

グオオー！！

ウミウシが叫ぶように水中に振動が伝わる。そして、動きが少し緩慢になった。

すかさずカラメルがもう1つのコアに殺到する。

そして甲羅をぶつけるようにして刺さっている銚をコアに沈めていく。

ウミウシは段々と動きを鈍くすると、海底にぐったりと横たわった。

俺は息苦しくなったので急いで海面を目指した。

海面に出て、プハー！って息継ぎをすると、直ぐにグレイさんが問いかけてきた。

「殺つたのか？」

「止めを刺したのはカラメル達です。俺は助太刀ですよ。」
グレイさんの伸ばしてくれた腕を掴んで船に上がる。

しかし、カルメルって勇敢な種族なんだな。もし地上であれぐらいの奴がでてきたら、俺だったら先ず逃げる。

「どんなウミウシだったの？」

姉貴が興味深そうに聞いてきた。

「クリスマスツリーかエレクトロパレードみたいに体色を変えるんだ。そして形はウミウシだけど・・・電車位あるかな。」

姉貴はギョツとした顔になったけど、確かにあの大きさには驚いたもんな。

昼食にしましょ。ってマチルダさんがお弁当を配り始めた時だ。

船の近くにカラメルが浮んできた。そして俺の方に近づいてくる。

「さつきは世話になった。礼をいう。野生のウミウシは時として巨大になる。今回の狩りには歳若い者達にも良い経験になったろう。これは感謝の印だ。とっておけ。」

カルメルはそう言う俺に手を伸ばして、黒い小さな物を3つくれた。

俺が受取ると、直ぐに潜ってしまった。

何をくれたんだろうと手を広げる。姉貴や、マチルダさんも興味深々の目でそれを見る。

それは、小さくて真っ黒な真珠だった。それが3つという事は・・・

「はい！」って、姉貴とマチルダさんとミーアちゃんに1個づつ渡した。これしかないじゃないか・・・

「これほど黒いのは初めて見るわ。」

マチルダさんはうっとりとして見てる。

「イヤリングに出来ますか？」

「もちろんよ。王都でも王族が持つてるかどうかという位の高級品よ。」

女性達は満足している。もっともミアちゃんは手のひらで転がしてあそんでるけど・・・

昼食を済ませると今度は俺達と入れ替って、姉貴達が潜って行った。

俺は、ミアちゃんに泳ぎを教えるけど・・・みーあちゃん、犬掻きは出来るんだ。でも・・・ミアちゃんって猫族だよ・・・

それでも、波が静かな場所だし、海水は体が浮きやすいことあるので、平泳ぎを覚えるまでに時間は掛からなかった。

姉貴達の獲物！・・・それは海老でも魚でもなかった。

何とでっかいシャコ貝だった。それを3個エンヤコラと2人で船に持ち上げてきた。鋸とナイフでどうやって岩場から引き剥がしたかは教えてくれなかったが、1個50cm位はある。

そして、姉貴の一言。

「これだけ大きいんだから、きっとボール位の真珠があるよ！」

やはり・・・俺とグレイさんは顔を見合わせてため息をついた。

剣姫との出会い

その日の夜の海鮮鍋はシャコ貝の殻が鍋代わりだった。

海老はお刺身でもそのまま焼いても美味しかった。

そして、姉貴達にはこやかな笑顔で鍋を突付いている。それもそのはず、姉貴達が取ってきたシャコ貝の中に小指の先位の真珠が数個入っていたのだ。

宝飾店に買取って貰い、そのお金でカラメルから貰った黒真珠をピアス加工して3人が付けている。残った真珠は姉貴達で1個づつ分けて後は売り払ったみたいだ。

「似合う?」って姉貴が聞いてきたが、左右の真珠の大きさが同じ位で色が虹色と黒では似合うのかどうか俺には判らない。

それでも、「似合うよ!」と言ったら喜んでいたけど・・・

そして、次の日にはカニを釣りに行った。

カニって釣る物だとはこの時、初めて知った。

まず、長い紐の先にアジに似た干物を縛りつけて海にポイ!って投げ込む。

紐をジツと手で持って待っていると、グイグイって引かれる。もしたら、一生懸命に紐を手繰り寄せてカニが海から出たところを、カニの後から回り込んで棍棒で叩いて気絶させる。

これが釣りというかどうか非常に微妙ではあるが、結構面白い。

甲羅が30cm程度あるようなカニを相手にミーアちゃんが綱引きしてると思わず応援したくなる。結構いい勝負なんだ。

こんな海辺の生活を楽しく送っていたある日、 그레이さんが俺達の部屋に飛び込んできた。

「アキト。マケトママに戻るぞ!・・・2人目の銀もやられたらしい。」

そうだった。俺達が此処にいるのは、2番目に来る銀レベルのハンターの徴用を逃れるためだったはずだ。

そして、セリウスさんは3度目に来る剣姫つて人を守ってくれっ
て言っていた。グレイさんが急ぐのは、剣姫が来るのをマケトマムの
ギルドで待たためだ。と理解した俺達は早速旅の用意を始める。

「俺達は外で待つ。用意が出来たら急いで来い！」
グレイさんは慌しく階段を下りて行った。

用意といつてもそれ程必要とするものはない。精々お弁当位だが、
これだって固焼き黒パンが袋に入っている。アルファ米だってまだ
あるし、野宿だって大丈夫だ。

装備ベルトを身に付け、迷彩帽子を被ればそれで終わり。部屋の
片隅に立て掛けた採取釜を杖代わりに持てば準備完了だ。

3人で外に出ると、マチルダさんもグレイさんと一緒に待って
いた。

俺達の様子から何か訳ありと感じたのか、家の奥からトレック爺
さんがやってきた。

俺達は急な旅立ちの非礼を詫びると、また来いよ。って言って送
り出してくれた。

急いでギルドに向かい、村を去ることを告げ、村を離れた。

浜辺の漁村から丘までは急な登り坂で、それを越えると長く続く
緩やかな登り坂だ。道が長いこともあり、ゆっくりと歩いて行く。
坂道は緩やかでも結構足や腰に負担が掛かる。1時間間隔位でち
よつとした休みを取りながら北に歩いて行く。

出発が遅かったせいか、夕暮れになっても大きな林に到達しない。
姉貴が【シャイン】で光球を作り、周囲を照らしながら進む。

やっこの事で大きな林に着くと、入口に柵が置いてあった。先客がいるらしい。

先客は、村を往復している商人だった。5人程が焚火を囲んで食後のお茶を楽しんでいた。

早速、挨拶に行く。

「夜分すまない。俺達5人はハンターだ。怪しい者じゃない。」

「そうですか・・私らは馬車を使って、村を巡る商人です。」

なんでも、マケトマムとラザドムを週に1回往復しているらしい。急ぐならマケトマムに乗せてくれると言っていたが、しっかり料金を請求してくる。1人5Lで25Lだ。早速、グレイさんが支払った。

「助かる。此方からだ、登り坂だ。あまり時間をかけたくない。」

「まあ、歩くよりは早いですが、荷がありますから急がせることは無いですよ。」

グレイさんが商人達と話し込んでる内に、サッサと夕食を作る。簡単にスープに焼き固めた黒パンを浮かべて食べる。一日歩いてきたから結構お腹がすいていたらしく美味しく頂く事が出来た。

次の日の朝早く、林に囲まれた小さな広場を出発する。

グレイさん達は真中の荷馬車に、俺達は一番後ろの荷馬車だ。

荷馬車は牛に似た生き物が引いている。

角が無くて、足が何と6本ある。この足で引くから、大きな荷馬車を引けるんだと納得した。

ガラガラと車輪が回り、ゴトゴトと結構振動が伝わる。結構オシりが痛い。ポンチョを畳みなおして簡単なクッションにしてその上

に座ったけど・・・それでも痛いぞ。ミアちゃんも俺の上着を畳んで敷いてるけど、ガタンって荷馬車が揺れる度に顔をしかめてる。姉貴は・・・もう一枚敷いていた。今度休んだ時に俺も追加しよう。

流石に荷馬車は早い。歩く早さよりも約5割増し位だ。

早速、マケトマム村のギルドに到着を報告する。

「待つてたんですよ。・・・ハンターが5人しかこの村にいないなくなってしまつて。依頼書が貯まるばかりだつたんです。」

お姉さんが涙目で訴える。それでも、俺達の到着を記帳している。実に仕事熱心なお姉さんだ。

「5人のハンターってどんな人なんですか？」

「え」と・・・赤7つのサラミスと兄弟の3人組み。それに赤8つに赤6つの2人組みかな。」

確か、ガトルが襲来した時は十数人いたはずだから、1ヶ月程度で3分の1になってしまったようだ。

「!!!・・・それって・・・まさか・・・ホントですか??」

突然お姉さんが俺と姉貴を見て大きな声を上げた。吃驚してるみたいだけど・・・

「そうだ。カラメルの試練に勝利した。」

「だつて、赤7つですよ。・・・銀でもダメな人が多いって聞きましたよ。」

「それだけ実力があるってことだな。」

へへっってお姉さんが俺達を見てるけど・・・

ギルドを出て、前にお世話になった宿に向かう。

何か有れば、 그레이さんが連絡するって言ってくれたしね。

「「こんにちは!」「」って宿に入ると、おばさんが「お帰り!」

って言ってくれた。

カウンターの後にある小さな棚から2階の部屋の鍵を渡してくれる。

「前と同じ部屋だよ。・ガトルが村に来てからは旅人も少なくなってる。ごらんの通りさ。」

そういえば前の時は俺達以外にも結構いたんだよな。やはり、危険地帯と思われてるのかもしれない。

王国としても危険地帯が国内にあるのは問題なんだろう。銀レベルのハンターは王都から来るってことは、それなりの理由があるってことだしね。

だとすれば、銀レベルのハンターを動かしてるのは国だということか？

グレイさんは黒レベルだし、基本はギルドの依頼をしているんだよな。でも、事件に巻き込まれる可能性があるともセリウスさんは言ってたし・・

次の日姉貴の頼みで、姉貴とミーアちゃんのボルトを作ることになった。

ミーアちゃんのボルトは矢を買って、長さを短くすればいいので簡単なんだが、姉貴のボルトとなると問題だ。ボルトの直径が1・5cmだと矢での代替は出来ない。しょうがないから、鍛冶屋に行つて鍛を特注する。

「こんなの作ったことが無い。」って言ってたけど、無理やり20個程たのみこんだ。ボルト本体はオルディさんに頼んだ。

俺が、宿の部屋でボルトを作っている間、姉貴達はギルドで簡単な依頼を受けてるみたいで、夕食の時その成果をミーアちゃんが得意げに報告してくれた。

「今日は、お姉ちゃんとタルミナを狩りに行ったんだよ。」

シチューを食べながら（タルミナって何だ？）と思っていると、

姉貴が図鑑を取り出して、タルミナを見せてくれた。

「バツタだ。・・・間違いなくバツタだが・・・大きさが、50cm？
畑の害虫らしく大量発生すると、あつという間に畑の作物が一扫
されてしまうらしい。」

「2人で20匹獲ったよ。1匹2Lで40Lにやった。」

稼ぎ的には宿泊代にも満たないけど、村の為になって、ミアちゃ
んの自立にも役立つなら問題ない。

「アキトの方はどうなの？」

「今日はミアちゃんのボルトを10本作った。明日には、姉貴
のボルトを作る材料が出来るから、明日の夜には姉貴用のボルト1
0本が出来る。」

「次の銀レベルの人がどんな人かは判らないけど・・・タグの巣穴
を調査するのに同行するとなれば、ボルトは沢山欲しいわ。」

「出来るだけ沢山作るけど・・・姉さんのは特殊だから、余り量は
期待しないでね。」

そして、次の日。改めて、ミアちゃん用のボルトを10本作り、
姉貴用のボルトを12本作った。それを袋に纏めて、ミアちゃん
と姉貴に渡す。魔法の袋に詰め込んどけば、邪魔にはならないはず
だ。

今日は、3人で依頼を受けよう。ってギルドに出かけ、扉を開け
た途端にホールのテーブルから声をかけられた。

「来たか。・・・こつちだ。」

ホールの奥まったテーブル席に 그레이さん達と知らない女性が2
人・・・。

とりあえず、俺達はテーブルに移動する。

「まあ、座れ。話はそれからだ。」

丸いテーブルには3つの椅子が空いている。 그레이さんは俺達が
来るのを待ってたんだろうか？

椅子に座ると、マチルダさんがお茶を入れてくれる。

「まずは紹介しよう。王都の剣姫とその相棒の魔道師だ。」

「アルテミア・デ・モスレムだ。隣はジュリアナ・ド・カイラム・セリウスからある程度話は聞いておる。単独でスラバを狩る赤6つ・俄かには信じられぬ話だが、虹色真珠を見る限り信じるほがあるまいな。」

なんか、言葉使いが高級というか見下してるというか・いや、そんなことはどうでもいい。

問題は、容姿がミアちゃん並だということだ！！

剣姫っていうからには、偉い人の子供なんだろうけど・これで銀レベルなのか？

俺達の驚きというか疑問が顔に出ていたようだ。

「驚きましたか？・姫の容姿は幼く見えますが、貴方達より年上のはずです。魔物討伐の折、相手の呪いに掛かって・御勞しいことです。」

呪いとは！・この世界にはあるんだ。魔物退治の時は気をつけなければ・

「そんな目で見るでない。何時もこの容姿でいるわけではない。戦いの際には、反呪法で元に戻る。よって、討伐に支障はないのだ。」

色々話を聞いてみると、アルテミアさんは現国王の末っ子らしい。小さいときからお転婆で、何時の間にもやらギルドでハンター登録。その上にハンターとしての才能があったらしく、18歳の時には銀レベルまで登ったとか。

しかし、国境近くの村で一斉召集があり、その時に魔物から呪いを受けたそうだ。

12歳の容姿のままに固定された呪いは、時の魔法と魔道具で一

時的に元の容姿に戻る事ができるそうだが、その時には他の魔法を使えないって言っていた。

それでも、剣の腕は軍隊でも指折りとのことで、付いた2つ名が剣姫らしい。

「私の事を話しても、タグの解決にはならぬ。聞けばお前達も最初の調査に参加したと聞く。闇雲に進むも可能ではあるが、先の調査隊の運命と同じになる公算が高い故、此处で策を練ろうではないか。」

金髪をクルクルと立てロールにして、フリフリのいっぱい付いたゴシッククロリータ姿でそんな難しい言葉を言ってる。

でも、言ってる言葉に間違いはない。群れで行動するタグをその巣穴を含めて退治するには闇雲に巣穴に乗り込むのは危険極まりない。

でも、策ってあるのか？・・・近づくだけで、ワラワラって巣穴から出てくる可能性が高いような気がするけど・・・

タグ退治には準備がいる

「あのう・・・ちよつといいですか？」

控えめに姉貴が質問する。姉貴もまだ剣姫の容姿と言葉のギャップに戸惑ってるみたいだけど・・・

「なんじゃ？」

「タグの調査・・・退治を含めてですけど、過去にも例がありますよね。どんな方法をその時はとったのでしょうか？」

「ふむ。過去を顧みて今回の策に生かすか。ジュリー応えてみよ。」

ジュリアナさんはジュリーなのか。覚えてぞ！

「基本的に2つの方法で対処してきました。1つは水攻め。タグの巣穴に近くの川等から水路を造り巣穴へ大量の水を流します。但し、水量が少ないとタグは水の流れてくる巣穴を閉じてしまいます。」

「2つ目は火攻めです。タグの巣穴に入り、巣穴の深部で油等を大量に散布した後で【メル】にて着火後脱出する方法です。」

どちらも犠牲者が多そうな作戦だ。1つ目は水路造りをタグが黙って見てるとは思えないし、2つ目は自爆覚悟の攻撃じゃないか・・・確かに蟻みたいな生物だから元を断たねばダメだとは思っけど・・・ん！！

今、ちよつと閃いたぞ。タグ「蟻と考えれば、タグにも女王がいるはずだ。その女王を殺れば・・・でも出来るかな？」

「俺から1つ提案が・・・」

「何じゃ。良い策を思いついたか？」

「タグの女王の暗殺です。」

おれの言葉に皆一瞬体をこわばらせた。そして俺を見る。

やはり、相手がどうあれ暗殺は良くないのかな・・・なんて考えていると、剣姫が笑い出した。

「ははは・・・いや、許せ。・・・御主もそう考えたか・・・セリウスが推挙するわけじゃ。」

小さな体を震わせながら笑ってるのは微笑ましいのだが、俺の言葉を肯定してるのか？

「我もそれを考えた。決定的だが愚行でもある。タグの女王の住処は地下深くに設えてあるはず、其処に至るまでのタグの数、女王暗殺後に地上まで復讐に狂ったタグの数・・・考えるだけでもゾクゾクするのう。」

この姫様。剣姫じゃなくて、戦闘狂じゃないのか。

「やはり、そうなりますか・・・貴方達が来る前に、今回の策を練っていたんですが、剣姫が女王を殺ると言い出しまして・・・貴方達の意見を聞くべきだとグレイさんに結論を延ばして貰ったのです。」

「ジュリーさんが諦め顔だ。たぶん何時もこんな感じで目的に一直線なんだろうと思う。」

「方法が決まった所で、役割を決めるぞ。」
そして、剣姫が基本的な役割を話はじめた。

巢穴中に入るのは、剣姫とジュリーそして俺と姉貴だ。グレイさんとマチルダさんそしてミーアちゃんは巢穴近くの大木で待機。

巢穴最深部まで潜り、女王を殺した後は一目散に撤退する。この時のタグの攻撃を火炎魔法で防御すると共に巢穴の破壊も併せて行なう。

地上に達し、大木まで撤退する間は、火炎魔法と爆裂球でグレイさん達が援護する。

タグは女王が死んだ後、2日程度で自滅するらしい。行動に統一

が取れなくなり、場合によってはタグ同士で攻撃しあうとのことだ。その間、マケトマムの方向に来る事が無いよう、小川の橋を破壊することだ。タグは水を嫌う・・2日間は泉の森をタグが彷徨う可能性があるが、それ以降は脅威が無くなる。

「ということ、タグを退治しようと思うが、意見はあるか？」
剣姫はお茶を飲みながら俺達を見渡した。

「2つ、よろしいですか？」
「先ず、ミアちゃんも参加して大丈夫なんでしょうか？・・それと、タグが嫌う薬草等があれば巣穴の調査が楽になると思いますが？」

剣姫は姉貴に微笑んだ。

「先の件は、問題ない。タグは木に登れん。今回の役目は木の上からの援護じゃ。心配する及ばぬ。2つ目は、もう既に手配しておく。サラミスとかいう兄弟にテルナムを集めさせておる。さらにこれも用意した。」

剣姫はゴスロリ服から小瓶を数個取り出した。

「タケルス・・虫族に有効な麻薬じゃ。我等には全く効能がないが虫族に限ってこれの気体を吸い込むと一時的に麻痺を起す。これはお前達に渡しておこう。」

「カンザス達も参加したいと言っていたが、まだ体が十分でない。大木を一時的な避難場所とするのでその設営には協力してもらうつもりだ。サラミス達が薬草を集めるまでは間がある。出発は早くて2日後になる。2日後の朝にここへ集合だ。」

グレイさんが締めくくる。

そうとなれば、早速準備に取り掛からねば。俺達は宿に引き返した。

「巢穴って真っ暗なんだよね。」
部屋に戻って最初の姉貴の言葉である。

「だと思っけど・・姉さんは【シャイン】使えるでしょ。」
「使えるけど、これも持っていったほうがいいかな？」

取り出したのは懐中電灯。高輝度LEDが3つ付いてるヤツだ。
暗闇だから、目くらまし程度には使えるかもしれない。

姉貴は、M36のバレルの上にそれをつけた。装着用にちゃんと
レールが付いてる。俺のは・・無いみたいだ。

まだ、鏃が付いてないボルトを取り出して、剣姫から貰った小瓶
が着けられないか見てみると、ボルトの長さを長くすれば何とかな
りそうだ。

急いで、ミアちゃんにオルデイさんの所へ行ってもらおう。

今回は穴に潜るから今の服装を前の迷彩パンツとシャツに変更す
る。袖をまくれば、そんなに暑くは無いだろう。

姉貴は小さな革手袋を細工している。指先が出るようにしている
みたいだ。ミアちゃんのクロスボーは結構引く力を要するのだ。

さらにミアちゃんのベルトに金属の環を付けている。どうする
の？って聞いたたら、木から落ちないように枝に紐でこれを結ぶの！
って話してくれた。早い話が安全ベルトにするわけだ。

姉貴がそんなことをしている間に武器屋に行って矢筒を2つ購入
してきた。

前と同じように少し筒を切り詰めて、ボルトケースに加工する。
ミアちゃんと姉貴の増えたボルトを入れるためだ。

夜にはミアちゃんが持ってきてくれたボルトの柄に小瓶を取り
付けて接着材で固定する。姉貴のクロスボーで撃てば、当たった所
で簡単に小瓶は割れるはずだ。ミアちゃんのボルトにも少し細工
をした。炸裂弾をボルトの先に付けてある。

俺も、ザックの中から少し大型のポーチを取り出して、装備ベル

トに取り付けた。これには、武器屋で購入した炸裂弾が5個入っている。姉貴達と違って俺には攻撃魔法を持ってないから、これで広範囲の攻撃を行なうつもりだ。

姉貴も大型ポーチを装備ベルトにつけているが何が入っているかは教えてくれなかった。

そして、2日後の朝。食料、水、装備とも万全に整えた俺達はギルドの扉を開いた。

剣姫達は俺達が来るのを待っていたようだ。

2人とも革の上下を着ている。剣姫はその上に長剣を背負っているのだが、・・鞆の先がもう少しで下に付きそうだ。使えるんだろうか？

ジュリーさんは杖を持っている。握りの上に小さな水晶みたいな珠が付いておりいかにも魔道師です。と言う格好だ。

では、出かけようかの！って言いながらマントを羽織る。

「これをお願いします。」って指差した先を見ると、背負い籠が置いてある。

ヨイシヨ！つと背負つと青臭い匂いがする。サラミス達が集めた薬草かもしれない。

ギルドを出ると、サニーさんが待っていた。

「私も、ご一緒します。」

「まだ養生中ではないのか？今無理をすれば後々困る事になるぞ。」

「深手はありません。大木の上で援護いたします。」

そんなわけで、俺達6人は泉の森を目指して歩いて行く。

今夜は森の岩屋で野宿だ。

その夜、俺と姉貴が焚火の番をしていると、剣姫がやってきた。俺の横に座ると焚火を見ながら話を始めた。

「今回のタグ退治じゃが、ギルドの公式記録には我等2人の他に巢穴に潜るのはカンザスとグレイにしたいのじゃ。・・いくら我が剣姫と呼ばれる存在でも、赤7つを同行させたとなれば国王の叱責を受けるのは必定。最悪私の登録を抹消される恐れも濃厚じゃ。そこでじゃ。今回の報酬としてお主達に私の別荘の1つを提供しようと思う。それで許してくれぬか。」

「私達は特に問題はありませんが・・別荘を私達に下さるほうが問題になりませんか？」

「あの別荘は、ギルドでの報酬を使って建てたものじゃ。我が建てたことを知っているのもギルドのみ。問題はない。リオン湖に面したネオサナトラム村にある。これが鍵じゃ。場所はギルドに聞くがよい。」

姉貴は鍵を受取った。取引成立ってことだよな。

確かに家があれば生活は楽になるぞ。食べるだけの収入でいいはずだからね。

次の日、岩屋を発った俺達は、昼過ぎに目的地である森のはずれの大木に着いた。

幹の太さは3m以上ある。10m位の所に大きく張り出した枝があり、その枝を足場にして何本もの丸太で床を作っているようだ。軽く10人以上があの上で暮せるぞ。

そして、縄梯子が数本足場から下りている。

サラミスがその縄梯子を下りてきた。

「すごいだろ。グレイさん達にカンザスさんそれに赤8つのマルトムさん達、あと俺達兄弟で2日掛かりで作ったんだぞ。」

10人に満たない人数でこれだけ作れば十分だ。タグもこの高さでは手も足も出ないだろう。

その夜は、大木の下で野宿することになった。この上でも小さな焚火が出来るとは言っていたが、大鍋で料理するのは難しいようだ。不寝番はマルコムさんとサラミス達が行い俺達はぐっすり寝ることが出来た。

そして、夜が明けると、いよいよタグの巣穴に向かう。

俺達が最後の段取りを話し合っている時、サラミス達は村に帰っていった。途中で小川の橋を破壊すると言っていたから、村に着くのは明日の夜になるだろう。

今回は採取鎌を置いてきた。最初から忍者刀で挑むつもりだ。姉貴は俺が作った槍を持っている。短刀ではタグが大きすぎるし、クロスボーだけでは心もとない。

グレイさんは「持つてるか？」と数個の爆裂球を取り出したが、俺は大型ポーチを叩いて、持っていることを伝えた。

グレイさんとカンザさんは10個以上持ってきたようだ。ここで、俺達の帰り道を援護するにはマチルダさんとミーアちゃんの魔法だけでは足りないと思っっているみたいだ。

ジュリーさんが、俺が担いできた籠から、人数分のマントを取り出して渡してくれた。

「これを着てください。タグが嫌うテルナムを煎じた液にたっぷりと浸してかわかしてあります。」

マントをまとうと微かに草の匂いがする。そして、袋を取り出すと各自に1個づつ渡してくれる。

「テルナムです。辺りに撒き散らせば少しは怯ませることが出来ます。」

貰った袋を装備ベルトに縛りつける。

これで、準備は完了だ。

俺達4人はタグの巣穴がある草原へと足を踏み出した。

巢穴の奥の女王

サニーさん達の話だと、タグの巢穴は大木から東の草原を2 km 程度のところにあるらしい。

此処からではまだ見えないが丘を登ると見えてくるって言うていた。その丘を今登っている。大木を見ると誰かが手を振っている。たぶんミアちゃんだと思う。

別れる時に俺が持っていた小さな望遠鏡を渡したのだ。5倍で海賊が使うような引き伸ばして使う奴だ。おもちゃみたいな望遠鏡だけど、結構良く見える。

俺も振返って手を振ると、足場の上で飛び跳ねながら手を振ってくれた。落ちなければいいんだけど・・

丘を登りきると、それが見えた。

2階建て位の高さがある土のピラミッド・それがタグの巢穴への入口みたいだ。

数百m程度の距離を取って同じようなピラミッドが数個立っている。

「此処で少し休む。後は一気に最深部に行くぞ。」

剣姫がそう言うって草原にペタンっと座り込んだ。

俺達も同じように座ると、ジュリーさんがベルトのポーチから小瓶を取り出して姉貴に渡す。

「魔法の回復薬です。全快まではいきませんが【メルダム】を3回程度なら可能です。」

「でも、私は【メルト】しか出来ませんよ。」

「なら10回以上それを使えます。一応念の為ですよ。」

そして、俺達は立ち上がる。

「ジユリー。頼む！」

「分かりました。【アクセラ！】」

俺達の周りに光が煌きそして、体に吸収される。

「体機能が2割程上昇する。少しはマシに戦えるじゃろう。」

そういいながら剣姫は背中の中重そうな長剣に手をかけた。そして長剣を引抜き始める・・・

すると、剣姫が光りに包まれる。ちょっと眩しいくらいだ。その光りが納まると、そこには・・・剣姫がいた。

剣姫なんだけど、先ほどまでの剣姫ではない。容姿がまるで違うのだ。

金髪立てロールは変わってないけど身長は姉貴と同じ位で、出るべき場所は出て、出なくていい場所はでていない・・・何と羨ましい体型なんだ・・・歳の頃は姉貴より少し上に見える・・・うーん、俺がもうちょっと年を取っていたならば・・・

ゴチン！って姉貴の槍が俺の頭に落ちた・・・

「こら！また変なこと考えてるでしょ！」

お見通しみたいだ。

「まあ、そう怒るでない。私の容姿を憧れの目で見られるのも少しの間じゃ。この魔道具と私の魔力でこの姿を保つ事が出来るのは持って半日・・・それでは行くぞ！」

宝塚から出てきたような姿で颯爽と剣姫が先を急ぐ。その後を姉貴とジユリーさんが続き、最後は俺になる。また殿だ。

タグの造ったピラミッドを剣で土を削りながら足場を作って登ると、頂上に直径3m程の穴が開いていた。

早速、ジユリーさんが【シャイン】で光球を2個作って穴の中を照らし出す。

タグはいないみたいだ。穴の中はシーンと静まっている。

直ぐに剣姫が飛び込む。そして俺達が続いて飛び込む。

その穴はなだらかな傾斜で地下に続いていた。俺の身長より少し

高いところに出口がポツカリと開いている。

ジュリーさんは更にもう1個光球作ると前方に先行させる。

後の2個は俺達の少し前と俺の後で、このトンネルを照らしている。

しばらく進むとトンネルが分かれている。ジュリーさんが腰のポーチから袋を取り出し、俺達が進んできたトンネルに袋の中の粉を振り撒く。

「私の魔法に反応して発光します。これが無いと帰れませんからね。」

別のトンネルには別の袋からテルナムを取り出すと指で磨り潰して投げ入れる。

俺達は下に続くトンネルを選びながら更に地下に下りていった。

俺達はかなり深くまでトンネルを進んだはずだけど、まだタグを1匹も見えていない。テルナムを嫌うつてのはホントみたいだ。

更に下っていくと、光球に照らされたタグの影がトンネルに映し出される。

しかし、俺達のマントの匂いで少し混乱しているみたいだ。

ササーっと剣姫が動き、タグに剣を振るう・素早い剣さばきでタグの頭部がトンネルに転がり落ちる。数匹のタグを瞬殺したみたいだ。

剣の切れ味がいいのか、腕がいいのか迷う所だが、やはり銀3つは伊達では無いということだろう。

そこを通った時にタグを見ると、どれも首を一刀で斬られている。他の場所に傷がない事を見ると狙って斬ったとしか思えない。やはり剣姫と言われることはあるみたいだ。

そんな事が数回続くと少し広い場所に出た。体育館の3倍はある

ような広い空間だ。そして、その中心付近には・・・大きな芋虫が蠢いていた。

「タグの食料庫じゃ。タレットの幼虫じゃな。・・・あそこを見るがよい。」

剣姫の指差す場所には壁が一部黒ずんでいる。

「油と『メルダム』を使ったみたいですね。最初の部隊は此処まで来てますか・・・」

姉貴が俺の腕を掴む。何だろうと振り向いた姉貴の顔は真っ青だった。

姉貴の指差す所を見ると、革鎧の胴体を芋虫がグチヨグチヨと音を立てて食べている。

「幼虫は生かして保存する。その食料はタグが調達する。我々も奴等にとつては食料じゃ。」

俺達は更に下るトンネルを探した。

次に俺達の前に現れたのは、タグの溢れる広場だった。

数十匹はいるだろうか、光球を見上げているが俺達に気付いていないようだ。テルナムのマントは結構効果があるみたいだ。

「帰りに障害とならぬよう、始末する。よいか？」

剣姫の言葉に俺は刀を抜いた。姉貴は後に下がりクロスボーにボルトを乗せる。ジユリーさんは姉貴の後で待機している。

「いけー!!」

剣姫の声で俺は右に走り最初のタグに刀を振り下ろす。ズン！という鈍い音とともに頭部が地面に落ちる。次のタグに走りより刀を振るう・・・

タグの群れに回り込み刀を振るっていると目の前のタグの頭が粉砕する。姉貴の放ったボルトの直撃を受けたみたいだ。

10分程度で広場のタグは全て倒す事ができた。

「フム。虹色真珠は伊達ではないようじゃな。良い剣さばきじゃ。」

剣姫に褒められてしまった。

ちよつと嬉しいけど、姉貴を見ると、プイ！って顔を背けてる。怒ってるのかな？

とりあえず、姉貴のボルトを回収しておく。5本発射したようだけど、回収できたのは2本だけ、後はタグの体内にめり込んでいる。解体しないと場所が分からない。

この広場から下るトンネルは、1カ所だけだった。早速、トンネルを下りて行く。

トンネルの分岐にタグがいる事が多くなってきた。俺達が近づくと遠ざかる。まだ、テルナムを浸したマントの効能は有効みたいだ。タグが退いたトンネルにはテルナムを揉んで放り込んでおく。

また、広場がありタグがいる。先ほどの広場より広くタグの数も多かった。

「ここは、ジュリーに任せる。アキト、瞬殺出来なかったタグを殺るぞ。よいか？」

ジュリーさんは杖を掲げて短い詠唱をするとタグの群れに杖を向ける。

【ヒュール！】その言葉とともに杖の宝玉からヒュン、ヒュンと風がタグに向かって飛びタグの体が切り刻まれる。・・鎌イタチつてやつだ・・

かぜの音が止んだとたんに剣姫がタグに向かっていく。まだギギギ・・と体を動かしているタグの首を次々に刎ねていく。俺も、負けずにまだ動いているタグに止めを刺していく。

この広場も下りるトンネルは1つだった。

タグの女王の部屋が近いのかも知れない。こいつ等は護衛の兵ということなんだとうか。そんなそんなことを考えながらトンネルの

中を歩いていると、先頭を歩いていた剣姫の歩みが突然停止した。俺達に止まれと手で合図を送っている。

「いたぞ。初めて見るが、アヤツがタグの女王と見て間違い有るまい。」

剣姫の傍に行つて様子を見てみる。

俺達のいるトンネルは広大な広場の中段位に位置している。広場の大きさは野球場2面位ある。高さは4階建てのアパート位入りそうだ。このトンネルの出口から広場の床までは緩やかな坂になっている。

そして、この広場一面に太さ1m、長さ2m位の卵が斜めに立っているのだ。その中心に一際大きなタグが、バス位あるお腹を蠕動させながら卵を産んでいる。

大勢のタグが卵を磨いているのが見える。

「さて、問題はアヤツをどうして葬るかじゃ。首を取るにも少し位置が高すぎる。」

タグの女王の頭はどう見ても5m以上の高さにある。

「あのお腹を破壊すればいいような気がしますが・・・」

「大きすぎる。それに、あそこまで行くのは困難じゃろう。」

確かに、女王までの距離は100m近くある。体機能が2割程度上昇しているなら、この世界に移動した時の上昇分とあわせて4割増し程度。

ここから、移動、攻撃、撤退と行動するにはどう考えても30秒は必要だ。

そして、女王が俺達を敵と認識すればこの広場のタグが全て向かってくる可能性もある。それは、攻撃する前にだって可能性がある。そうなれば、女王への攻撃すら出来なくなる。

「剣姫さま。私の案を聞いてくれますか。それと、私とアキトの攻撃方法は見なかった事にして頂けますか？」

「記録にお前達の事は残らん。そして、我とジュリーの口は堅いほうじゃ。」

「安心しました。まず、アキトがこの坂を下りて女王に近づき攻撃します。アキトが攻撃後こちらに走ってくる時、私が攻撃します。これで、女王のお腹は破壊できるでしょう。アキトの後を追いかけて来るタグの群れにジュリーさんは【メルダム】を放って下さい。この広場の卵まで始末するように、出来れば連発をお願いします。その後は急いで巣穴を脱出します。」

「しかし、アキトが女王まで辿りつくことが出来るとは思えんが。」

「距離を半分に出来れば大丈夫です。」

姉貴は、俺に女王の腹をマグナム弾で切裂くつもりのような。確かに距離が50m程度なら、相手が大きいこともあるし全弾命中できると思っけど・・・それだけでOKになるとは思えない。姉貴のクロスボーだつて強力だけど、連射は不可能だ。

「・・・他に方法があるとは思えん。アキトの攻撃は女王まで到達しなくとも可能なのじゃな。それなら、指揮を任せる。」

剣姫の言葉に姉貴は頷くと、クロスボーの台座の先端部をクルクルと回し始めた。先端部に丸い穴が現れる。続いて、台座の一部を押すと力ちつて音がして、横にスライドする。其処にも穴が開いている。

ベルトのポーチから何やら取出してその穴に入れるとスイングさせた部分を元に戻した。続いて、クロスボーの弦を引くとベルトを装着する。

台座の滑走面から金属性の大型サイトを立てると距離を合わせている。

「あのう・・ミス姉さん。それって・・」
「グレネードランチャーよ。こんな事もあるうかなってね。」
こんな事は早々起こって欲しくないけど、少し姉貴の作戦が理解できた。俺が破壊した腹部にダメ押しをする考えみだ。

「準備はいい？」
姉貴の問いに頷くと、タグの女王に向かってゆっくりと坂道を下っていった。

腰のホルスターからM29を引き抜く。こんな時にはダブルアクションがいいんだけど、何故かこのカスタムはシングルだ。狙いがブレないことはいいんだけど・・

女王まで40m程度に近づいた。
女王のバス位に膨らんだ腹部に狙いを付ける。ど真ん中を狙って・

バアン！バアン！バアン！
素早く6連射して皆のところを駆け出す。

ポシュ！って軽い音がすると後ろでドン！と音がする。
グレネードランチャーの発射音はちょっと頼りない。

姉貴はグレネードを発射すると急いでサイトを畳み、クロスボウの狙いをつけてボルトを発射した。

その後は俺に向かって、早く、早くと手で合図している。
もう少しでトンネルに着くという時に、ジュリーさんが杖をかざして紅蓮の球体を作り、俺の頭上越しに広場に投げつけた。

ドゴォーン！と音がして熱風が俺の背中を押す。さらに続けて炎の爆裂が起こる。

振り返って広場を見るとタグの女王は腹部を大きく破られ、頭部の複眼はボルトにより片方が破壊されている。

大勢のタグが炎に炙られ混乱し、卵は次々に高温で破裂していた。それでも、一群のタグがこちらを指して進んでくる。

「逃げるぞ！」

劍姫の言葉に、俺達は後も見ないでトンネルの中を上に向かって走りだした。

巣穴からの脱出

最後尾を走る俺の後ろで、カサカサという音がだんだん大きくなる。

袋からテルナムを取出し適当に手で引き千切り後ろにほうり投げる。すると、少し音が遠ざかる。

何度かテルナムを投げていると、音が増えてきた。牙が噛み合うガチガチと言う音まで混じっている。・・近づくまで待つて、今度は爆裂球を投げる。

爆裂球のドン！という音に気付いた姉貴が俺の頭越しに【メルト】を放つ。ジュリーさんの【メルダム】よりは炸裂音が小さいけど、それでも後ろから熱風が押し寄せてきた。

ジュリーさんは大きな光球を先行させている。そして、分岐トンネルに出るたびに進行方向ではないトンネルにテルナムを投げ込んでいる。

タグの群れがいた広場では新たなタグが俺達を待つていた。

剣姫がタケルスの小瓶を投げる。すると、タグの群れは全身を痙攣させるとその場に転倒してしまった。

タグの脇を素早く通り抜け先を急ぐ。

しばらく進むと、また背後からタグの足音が聞こえてきた。ポーチから爆裂球を取出し後ろに投げる。そしてテルナムを撒き散らす。そんな事を繰り返してやっとのことで巣穴の入口まで辿りついた。

剣姫が出ようとした所を慌ててジュリーが止める。

「待つて下さい。外には何があるか分かりませんよ。出たところを顎で驚掴みにされたらどうするんですか！」

「外を1回、掃除すればいいんですよ。」

そう言つて、姉貴は短い詠唱をした後【メルト】と叫ぶ。

姉貴のかざした両手から青白く輝く球体が3個、巣穴の入口より外に飛び出す。

そして、ドドドドドォーン！とクラスタ爆弾が破裂したような音がトンネルに響いてきた。

「いけ！アキト！！」と姉貴に目で合図を送られた俺は、巣穴の外に飛び出した。

巣穴の頂上から見た光景は戦闘の後のようだった。

半径200mぐらいの範囲でおびただしい数のタグが足を上にもがいている。それでも、巣穴の周りに点在した出入り口から続々とタグが溢れかえるようになってきている。

「急いで！直ぐにタグ達が追いつく！！」

俺はトンネルに向かって叫んだ。

姉貴達がトンネルを抜け出る間に、素早くM29のシリンダーをスイングさせて弾を入替える。どう考えても一々切り結んでいたんじゃない。じゃ間に合わない。

剣姫を戦闘にその後ろを姉貴とジュリーさんが走る。殿はおれの役目だ。

姉貴とジュリーさんが左右から【メルト】を連発して進路を確保。俺は後ろから来るタグ達に爆裂弾を投げて足止めする。

トンネルを出る時に「足りないだろう。」って剣姫から6個程貰ったから、しばらくは持つはずだ。

丘を駆け上がると、ミアちゃんの待つ大木が見えてくる。距離的には500m程あるが、ちよつと安心できる。

「油断するな。最後まで気を抜くな！」

剣姫の叱責が俺達に飛ぶ。俺達は最後の力を振り絞って、草原と疎らにはえた繁みの中を駆け抜ける。

最後の爆裂球を後ろにほうり投げ、タケルスの小瓶を地面に叩きつける。残りの小瓶は2個だけだ。

草原が繁みに変わり灌木が混じる。大木まで後100mとなった時、俺の後ろで爆裂球が弾ける。

大木の上の足場からミアちゃんとサニーさんが、矢の先に爆裂球を付けたものを発射している。マチルダさんも【メルト】で援護してくれる。

大木に着くと、たれさがったロープの先の輪にジュリーさんが足を乗せる。するとジュリーさんの体が大木の上へと昇っていく。枝に架けたロープの端をグレイさんとカンザスさんが一生懸命引いているのが見える。

姉貴が縄梯子を上り初めた時には、ジュリーさんもマチルダさんと共に援護射撃を始めた。

剣姫が周囲に袋に残ったテルナムを撒き散らし、タケルスの小瓶を地面に叩きつける。そして、素早く縄梯子を上り始めた。

俺も、同じようにタケルスの小瓶を割ってロープにしがみ付き、するすると登っていった。

ようやく木の上の足場に着くと、ミアちゃんがお茶の入ったコップを渡してくれた。ゴクゴクと喉を鳴らして飲み込んでやっと一息ついた。

下を見ると、丘の上から此処までタグの亡骸が続いている。そして俺達9人がいる大木の周りには、千を越すタグの群れが取り囲んでいる。

「タグが木に登れないって、ホントかじゃ。？」

「何言ってるんだ。昔からそう聞いて・・・！」

ミアちゃんにそう言ったグレイさんは、ミアちゃんの指差す先を見て、絶句した。

何だろう。って俺もグレイさんの視線の先を見てみると、タグが何匹も足の爪先を木に打ち付けるようにして登ってきている。

「噂は当てにならぬと言うことじゃな。・・・水を嫌うは本当であって欲しいがの。」

その声に戻ると、何時の間にか少女に戻ってゴスロリ姿の剣姫がいた。相変わらず長剣を背中に背負っている。

「あの調子では一辺に此処には来れまい。1匹づつ片付ければいだけさ。」

「【メル】で片付ければ、そんなに魔法力は使わないから、何とかなるんじゃないかな。」

色んな意見があるけど、2日間耐えればタグは自滅することは確かかなようだ。魔法を使える者が此処にはいっぱいいるし、まあ何とかなるんじゃないかな。

とりあえず、タグを木に登らせないようにするため、俺達を3つのグループに分けて監視と攻撃を行なうことにした。

剣姫とジュリーさんとカンザスさん。グレイさんとマチルダさんとサニーさん。それに俺達だ。

最初は、グレイさん達が当番だ。俺達と剣姫さん達は足場の先のほうに移動して休息を取る。

だいぶ日も傾いてきた。何か一日中歩いたり、走ったりしていたようがする。

お腹もだいぶ減ってきた。此処は人数分の雑炊でも作るしかない

だろう。

大鍋に水を適当に入れて、乾燥野菜と乾燥肉を千切って入れる。そして煮立ってきたらアルファ米をシエラカップに3杯程入れる。ダシは味噌でごまかして、塩で味を調える。

足場の上の焚火場所は50cm位の四角に組んだ丸太の中に土を入れたものだ。余り大きな焚火は出来ないから結構時間がかかったけど、何とかそれらしいものが出来た。

適当に5人分盛り付けて食事にする。グレイさん達の方はちゃんと残しておいた。

「ごちそうになってすまん。」

カンザスさんの言葉に剣姫とジュリーさんも頷いた。そして、一口食べると、その味に驚いている。

「野戦食でこの味を出せるのか・・・この白い粒も初めて食するぞ。」

剣姫の言葉にジュリーさんは頷くだけだ。

「私達の地方の料理と捉えてください。確かにここでは見かけませんが、麦の粒を想像していただければ・・・同じようなもので。」

姉貴が説明してるけど、この世界に米はないんじゃないかと思うな。

食後にお茶を飲んでいると剣姫が聞いてきた。

「例の話は、我の心にしまい置く。されど、御主の背中の剣については問題ないはずじゃ。余程の名剣よの。拝見できぬか？」

「いいですよ。」

俺は背中の忍者刀を鞘ごと引抜いて剣姫に差し出した。

両手でうやうやしく受け取ると、早速引抜いて焚火の明かりにかざす。

バランスを見て、刃紋を溜息をつきながら見て、真直ぐにかざし

て見る・・・

「譲らぬか？・・・いや、これほどの業物、我に使いこなせるだろうか・・・」

「それだけは、出来かねます。俺の故郷の思い出ですので・・・」
「そうか。ゆるせ・・・しかし、この波のような刃紋は見たことも無い。美術品を見るようじゃ。それに、あれだけのタグを斬っても刃こぼれ1つ無い。我の剣は王都に戻れば砥ぎに出すしかないのじゃ。」

残念そうに剣姫は刀を鞘に戻して俺に返してくれた。

お茶が終わると一眠り。落ちないように足場の丸太に紐で体を縛っておく。下にはタグがワンサカいるし、こんな所で落ちたらしゃれにもならない。

ぐっすり寝ているとグレイさんに起された。どうやら俺達の番らしい。鍋に料理が残っている事を告げて、姉貴とミアちゃんを起して見張り番に着いた。

下では、カサカサ、ガチガチとタグが動く音がする。ジュリーさんが作った2個の光球が太い幹の左右を照らしているので、登ってくるタグがいれば直ぐに見つけることができる。

早速、1匹登ってきたが、ミアちゃんの【メル！】で燃え上がりながら下に落ちていった。

次に登ってきたタグは姉貴がクロスボウで仕留めた。俺の番になって、M29をズドン！って撃つたら、全員が目を覚ました。

確かに、この音は大きいからね。全員のひんしゆくくの目に耐えられず、俺は2人の保険みたいに後で待機することになった。

明け方近くまでに20匹近く幹から落としたようだ。空が白んできたので、剣姫達と交代して、眠りに着く。

目を覚ました時は昼過ぎだった。相変わらずタグの大軍が大木の周りを囲んでいる。幹の下のほうにはおびただしい数のタグが死んでいる。

ちよつと気になるのは、その数が多いことから数mの高さに積み重なっている事だ。俺達を襲うのに格好の足場になりかねない。

どうしたものか・・・と考えてると後ろから、姉貴が声をかけてきた。

「やはり、問題よね。・・・吹き飛ばすしかないと思うんだけど・・・」

「吹き飛ばす？・・・確かにそうだけど、俺達には爆裂球と【メルト】、【メルダム】しかないわけで・・・そういえば姉貴にグレネードがあるが距離が近すぎるし、俺の持つてる手榴弾も数匹位しか吹き飛ばせないぞ・・・」

「お前達も、そう思っているのか。確かにそれしかあるまい・・・ジユリー頼む！」

「分かりました。【ブースト】、【フューイ！】」

大木の根元に荒れ狂う竜巻が発生し、たちまちタグの死骸を吹き飛ばす。ついでに俺達を囲んでいるタグ達も巻き込んで、ひさしぶりに地面を見ることが出来たが、たちまち他のタグが大木を取り囲んだ。

「後、1日じゃな。これだけの数に囲まれては、待つことしかできぬ。」

夜を迎え、また俺達の見張りの番だ。

カサカサと音を立てて登ってくるタグが昨夜よりだいぶ少ないように思える。

しかし、大木の下ではタグが騒ぐ音が潮騒のように遠く近くに聞

えてくる。

そして、夜が明け周りが見通せるようになった時、タグは一匹もいなくなっていた。

急いで全員を叩き起す。

皆で周囲を確認すると、ミアちゃんが俺の服を引っ張る。そして、望遠鏡を俺に渡して、ずっと先にある灌木を指差した。

望遠鏡の焦点を合わせて灌木をのぞくと、灌木の陰で、2匹のタグが戦っている。

「どうやら、文献の通りじゃな。女王亡き後2日程度でタグの統制は取れなくなる・正しくその通りじゃ。じゃが、まだ油断は出来ぬ。ここは、もう一日待つべきじゃろう。」

姉貴の双眼鏡のぞきながら剣姫が言った。

確かに、自滅するとは言ってたけど、あれだけの数が一斉に自滅するわけではないだろう。段々と数を減らす。そう考えるべきだ。

俺達は大木の上で、世間話をしながら一日を過ごし、次の日村への帰路に着いた。

大変だったのは、サラミス達が橋を破壊したのでガトル襲撃の時にガトルが渡った浅瀬を渡る羽目になったことだ。皆ずぶ濡れで村についたのは2日後の夕刻だった。

新たな村へ、別荘へ

久しぶりに宿で暖かい食事と柔らかいベッドで休む。前の世界よりも寝心地がいいとはいえないけれど、それでも丸太足場の上よりは遙かに安らぐ。

俺達が起きだしたのは昼近くになってからだった。

ギルドに行くと、グレイさん達がテーブル席について俺達を待っていた。

おいでおいでと手を振るので俺達はテーブルに行って開いている席に座る。

「剣姫達は朝早く王都に帰ったが・・・お前達はあれでよかったのか？」

「俺達は巢穴には行っていない。しかし、剣姫は俺達が同行したと報告すると言っていた。」

2人はいぶかしげに俺達を見る。

「良いんです。剣姫から報酬は別払いで頂きました。あくまで、報告は剣姫の都合上その方が報告しやすいとの判断です。」

姉貴が、剣姫との取引だと話す。

「それなら、お前達は納得しているんだな。ならいいが・・・そうだ。これを預かっている。」

カンザスさんが銀貨6枚と書状を1枚俺達の前に出した。

「今回の報酬だそうだ。あくまで、タグ巢穴の調査への協力金となっている。それと、これは「ネウサナトラム村のギルドに渡せ。」と言っていた。」

協力金ならこんなものかも知れない、それでも多いように思える。書状は例の別荘に係るものだろう。

「ところで、何でネウサナトラムなんだ？」

「剣姫から別荘を買ったんです！」

「・・・剣姫の別荘ならその地方一番の場所に作ってある筈だ。金貨10枚の価値はあるぞ！」

姉貴の答えにグレイさん達は吃驚したようだ。

「それでは、行くのか？」

「はい。適当にギルドの依頼をこなしながら生活していきます。」

「さびしくなるわね。たまにはこちらに遊びに来なさいね。」

マチルダさんがそう言つてミアちゃんの頭を撫でる。

俺達を惜しんでくれる人がいるのはありがたい。ちょっと嬉しくなる。

俺達は、席を立つと改めて別れの挨拶をする。そして、カウンターの姉さんにマケトマム村を去ることを告げた。

お姉さんの薦めで、ランクを確認した。姉貴が黒2つ。俺が黒1つ。そしてミアちゃんが赤7つに上がっていた。

まあ、あれだけ派手にタグを殺戮していたからかもしれないけど、ミアちゃんまで結構上がっているのに驚いてしまった。

「それでは、また。」とお姉さんに挨拶してギルドを出る。後は、長旅の備えに雑貨屋に寄れば今日の外出は終わりになる。

宿に戻って、おばさんに別れを告げると、残念そうに「寂しくなるね。」と言われてしまった。

部屋に戻って、忘れ物が無いかを再度確認する。もっとも、この部屋に置きっぱなしにしていたものは無かったし、明日出かける時に杖代わりの採取鎌さえ持っていけば俺はOKだ。姉貴も槍を忘れなければ問題ないだろう。ミアちゃんの杖は部屋に置きっぱなしだったけど、これも忘れる心配はないと思う。

次の日、俺達は装備を整え、帽子を被り杖を持って1階に下りていく。

おばさんの食事も今日限りだと思いいゅっくり味わっていたら、おばさんが俺達のところまでやってきた。

「これは私からだよ。体を大事にするんだよ。」って、お弁当の包みを渡してくれた。

ありがたく頂戴して、ミアちゃんに預ける。

「お世話になりました！」

そう言っただけで宿を出ると、おばさんは宿の外まで見送りに出てくれた。俺達が道の角を曲がる時後ろを振り返ってみると、まだ俺達を見送ってくれている。

俺と姉貴は丁寧にお辞儀をして今度こそ、後ろを見ずに西の門に歩いていった。

西の門から街道までは 그레이さん達と一度出かけたことがあり俺達も不安は無いが、

いざ、街道まで来て街道を西に向かって歩き始めると、少し不安になる。

荷馬車2台が通れる程の石畳の街道は、俺達の前にも、後ろにも人の気配がなくて、俺達だけが歩いているのだ。

街道には定期的に数本の立木と荷馬車を休める広場が設けられている。ちよつとした一里塚ってことになるのかな。

街道に出て2つ目のそんな広場に俺達は立寄り、昼食を取った。お茶を飲んでいると、ガラガラという車輪の音がする。

そして、俺達が休息している広場に荷馬車が5台ほど入ってきた。

壮年の男が荷馬車を降りるなり俺達のところにくる。

「ほこりを立ててしまい申し訳ありません。私は、王都に向かう

商人でレイトと申します。・・・どうでしょう。荷馬車をご利用されるなら何とかいたしますが？」

「急ぐ旅ではありませんから、代金にもよりますね。」

「代金は要りませんよ。サナトラムの町まではもう1日かかりません。お見受けしたところ、ハンターですよ。その間の護衛をしていただければ問題ありません。」

話をよく聞いてみると、街道に行く商隊を狙う盗賊は結構いるみたいだ。彼らもそれなりの武装はしているみたいだけど、ハンターがいれば心強いみたいだ。保険みたいなものだろう。それにお金は掛からないしね。

「判りました。私達はネウサナトラムの村へ行きますので、次の町までになりますけど・・・」

「十分です。次の町で正式にギルドに依頼するつもりですから。では、出発の時にまた来ますので・・・」

そう言ってレイトさんは10人程の商人達の囲む焚火に歩いていった。

そして、ガタガタと揺れる荷馬車に俺達は厄介になることができた。

姉貴達は女性達が操る荷馬車に荷台に乗り、俺は先頭のレイトさんの馬車の御者台に乗る。

レイトさんと世間話をしていると、街道の治安がある程度判ってきた。

盗賊はそれなりにいるらしく、街道の要所には兵隊達も滞在しているようだけど、それで全てをカバーできていないようだ。

近頃は、油断しやすい町や村近くの野宿箇所等が襲われやすい、というのが商人仲間の話だそうだ。

そんな時、俺達を見つけたのは渡りに船だったに違いない。高額

の依頼金を払わずに守って貰えるかもしれない。交渉せずにはいられなかったようだ。

でも結局、何事も起こらず俺達は町に着くことができた。通常なら3日は掛かるって、グレイさんが言ってたから馬車はやはり移動が便利だ。

サナトラムのギルドに向かい早速報告をする。でも、俺達は明日はネウサナトラムに向かうから通過申請に近いけど、万が一今夜、何かある時は俺達も招集されることになる。

緊張した一夜を過ごした後は、いよいよネウサナトラム村へ出発だ。

アクトラス山脈を越えてノーランド地方に向かう街道は、この町が起点になる。

町の北側にある立派な門をくぐると、街道をひたすら北上する。この街道も王都への街道と同じく荷馬車2台がすれ違える立派なものだ。当然、道は石畳となっている。

町を出て、街道の左右に広がる畑が尽きると、最初の一里塚があった。そこからは少し緩やかな坂道となる。見渡す限り草原が広がっているが、所々に開墾のあとが見える。少しづつ畑が広がっているのだろうか。

そして、2番目の一里塚で、本日最初の休憩を取る。

この街道もまた人通りが少ない。15分程休憩しても街道を通る人は見かけなかった。

最も、それも理由があるようで、レイトさんの説明では今は季節外れとのことだ。荷馬車や人の移動は季節性があるようで、春と秋が最も多く、夏と冬はすくないらしい。今は夏の終わり。こうやって歩いてると汗が噴き出す。これでは、余程のことが無い限り旅に出る人はいないはずだ。

そう考えると、俺達だってもう少し涼しくなってから良かった

ような気がする。

昔から姉貴は、決めたら即実行だからな。・・暑いけど、あきらめるしかなさそうだ。

また、街道を北にむかつて歩き出す。だんだんと草原に灌木が混じり始めた。アクトラス山脈の山裾に近づいてきたみたいだ。

山の森の外れに小さな広場があった。今日は、此处で野宿だ。

次の日、俺達は森の中の街道を進む。鬱蒼とした周囲の森は遠くまで見通す事が出来ない。山賊なんて人達が住んでるような気もするけど・・

辺りをうかがいながら歩いていると、水の流れる音がする。急流が立てる水の音だ。そして段々と近づいてきた。

それは、街道にある石橋の下を流れる川の音だった。結構急流だ。この流れがやがて泉の森の小川と合流するのだろう。

ちよつと、橋の下に下りて、みんなで足を流れに浸して休憩した。ヒンヤリした水が熱を帯びた足に気持ちがいい。

橋を渡ってしばらく進むと道しるべが立っていた。この先を左でネウサナトラム村。真直ぐで峠の関所。もう直ぐだな。

街道の分岐を左に進む。街道を外れたので、道は踏み固めた道で、荷馬車を通れるくらいの横幅だ。

道は尾根を回り込むように西に向かって続いている。そして大きな曲り角を過ぎたとたんに、それが見えた。

青々とした夏空を水面に写した大きな湖とその南側に広がる家並み。俺達が目指すネウサナトラム村だ。

俺達は歩みを速めると、休み無しで村に向かった。

ネウサナトラム村はマケトマム村よりも少し規模が小さい村だった。村の入口で門番に止められたが、俺達がハンターだと分かると

すんなり通してくれた。

早速、村のギルドに向かう。

この村の家並みが道に沿って左右に綺麗に2列に並んでいる。その中の大きな建物がギルドだった。

早速中に入ると、カウンターに向かう。

「こんにちは、チーム【ヨイマチ】のミツキ、アキト、ミアです。」

姉貴はそう言って、俺達のカードを受付のお姉さんに渡す。

「ようこそ、ネイサナトラムへ。・確認しました。黒2つ、黒1つ、赤7つのチームですね。このギルドには現在、黒レベルのハンターはおりません。助かります。・それと、その虹色真珠は本物ですよ。期待してます。」

お姉さんは俺と姉貴のピアスを見て興奮しているみたいだ。

「あと・・・この書状を預かってきました。確認してください。」
姉貴が剣姫に貰った書状をお姉さんに渡す。お姉さんはその書状を読んでびっくりしたみたいだ。

「ちよっと、お待ちください・・・マスターをお呼びします。」

しばらくして、奥から老人が出てきた。

「御主達か、この書状を持参したのは？」

「はい。ある任務を請け負って、その報酬として剣姫から頂きました。」

「確かに剣姫の直筆じゃ。問題なかるう。鍵は持っておろうな？」

「持っています。」

「では、ワシが案内しよう。」

俺達はお爺さんの後を付いて村の通りを進む。そして通りに面して林が茂る場所にきた。通りに面して1体の石の武人像が立っている。

「ここじゃ。鍵をその石像の口に入れなさい。」

姉貴は言われるままに鍵を石像の口に差し込む。

すると、林が割れて、石畳の小道が現れた。

「この先にある。留守にする時は再度石像に鍵を入れるのじゃ。

黒2つで試練をこなすとは・・・この村の力になって欲しいものじゃ。

」

「私達もここで暮らしたいと思っています。色々と相談に乗ってください。」

「ああいいとも・・・」

お爺さんはそう言うつとギルドに戻っていった。

俺達も、別荘への道を進む。大きく曲がった道を30m程進むと、小さな石造りの山小屋が見えてきた。屋根には石を積み上げた煙突が立っている。

ドアを開いて中に入る。

そこは大きな広間になっていて正面には暖炉がある。その前には6人用のテーブルがあり、左右に部屋がある。そして、入口ドアの脇にはロフトに上る梯子がある。

早速探検して、これからの暮らしに必要なものを確認することにした。

キャサリンさんの故郷

この別荘は、8畳程の部屋が2つと16畳程のリビング・ダイニングそれと10畳程のロフトで出来ている。それに風呂とトイレだ。大きな暖炉はリビングのアクセントだし、テーブルの背中には簡単な流し台があった。

料理は暖炉の横に小さな釜戸が付いている。目障りにならないように暖炉のレンガで前面からは巧妙に隠されている。

「アキト。どうだった？」

「申し分なし、ロフトにフトンを敷いて皆で寝られるよ。でもフトンが無い・・・」

「外に井戸があつたわ。とつても素敵なところよ。外に行つて御覧なさい。」

姉貴の薦めで外に出て別荘の裏に回る・・・そこは、湖だった。

此処の土地は湖に張り出した土地みたいだ。其処を30m四方に石積を行い造成してこの別荘を建てたのだ。だから、3方向が湖で村には南側の林で区切られている。その林だって、魔道を用いたカラクリで入口を閉ざしている。

なるほど、別荘なわけだ。俗世間と隔絶した生活を送ることが出来る。

石積みから水面までは50cm位ある。この地方の気候はまだ良く分らないけど、冬になり雪に閉ざされたら、ゆっくりとポートでも作ってみよう・・・

家に入ると、ミーアちゃんが暖炉に火をいれていた。

その時、ふと気がついた。この部屋はどうして明るいんだ・・・部屋をざっと見渡して、その原因を突き止めた。暖炉の煙突の上の方に左右に丸窓がある。窓には透明な樹脂みたいなものがガラスのようにはめ込まれている。

そういえば、この家って意外に涼しい。湖からの風が流れ込んで
いるみたいだ。

さて、どこから入って来るのか・・・と探すと、部屋の4隅に鉄の
格子が入った小さな扉があった。夏はこの扉を開いて風を入れるの
だろう。そういえばロフトにも同じような扉があったような気がす
る。

ミアちゃん点燃了暖炉の火でお湯を沸かす。暖炉にはスイン
グする鉄の吊り下げ金具がついており、その先のフックにポットを
ぶら下げれば焚火の真上まで移動できる。結構便利な仕掛けだ

シエラカップでお茶を飲みながら、入手すべきものを3人で確認
する。

「え〜と・・・明日そろえるものは、布団とカーペットと食器類で
いいのかな。」

「あと、鉋とオノも欲しいな。暖炉のマキを集めなくちゃならな
いし・・・」

「マキは家の西側に積んであるわ。でも、冬にどれだけ必要か分
からないから集めることは必要ね。」

「カーペットは暖炉の前に厚手のが欲しいな。寝転べるし・・・こ
のテーブルにいるより楽じゃないかと思うんだ。」

「分かった。それにクツションも必要ね・・・ミアちゃんは欲
しいのある?」

「いまは、にやい。」

「じゃあ、明日ギルドに出かけてこの辺の状況を聞きながら、お
店を聞きましょう。」

その後は、皆で食事を造り、夜はロフトで雑魚寝。まだポンチヨ
に包まって寝られるけど、後一ヶ月もしたら、フトン無しではちょ
っときついかも知れない。

次の日の朝、家の外にある井戸からツルベで水を汲み、バシャバシャと顔を洗う。

朝日が湖に当たってキラキラと輝いている。この土地は予想以上に湖に張り出しているみたい北側にしては日当たりもいいみたいだ。

「凄くいいところですよ。」

家に入ると姉貴が自分のことのように言う。

「ああ、気に入ったよ。今日は・・・ギルドからだよね。」

ミーアちゃんが固焼きの黒パンサンドとお茶を出してくれた。

「そうね。この辺りの状況とお店を教えて貰えばいいと思う。依頼をこなすのは、まだ先でいいわ。当面の生活費は確保してるから。」

朝食を済ませて、ギルドに出かける。

家を出て林の中の石畳を歩くと村の通りに出た。姉貴が石像の口に鍵を差し込むと、林が閉じていく。密集した木々は容易に人を寄せ付けない。十分な保安機能だともうけど・・・普通、ここまでするかねえ・・・

通りをギルドまで歩いてると数人の村人にすれ違った。「おはようございます！」って挨拶を交わす。村人と長い付き合いになるんだから、第一印象は大事だと思う。

ギルドに入ると、見たことのあるハンターがホールのテーブルでお茶を飲んでいた。

向うも、此方に気付いたらしく、立ち上がって此方にやってきた。

「お久しぶりですね。もう、忘れたかもしれませんがキャサリンです。」

「ミズキとアキト、それにミーアちゃんです。ほんとにしばらく

ですね。あれから3ヶ月近くになりますか・・・」

「もう、一人前のハンターですね。・・・ところで、それは本物ですよね？」

キャサリンさんが俺達のピアスを確認する。

「ええ、試験に通りました。皆さん驚いてましたけど。」

その答えにキャサリンさんが驚いてる。

「ところで、座って話しませんか。色々教えて欲しいこともありますし・・・」

キャサリンさんが座っていたテーブルに移動すると、姉貴とキャサリンさんが話を始める。

キャサリンさんの話だと、キャサリンさんの実家がこの村ということだ。この村中心に活動していて、マケトマム村には例の黒レベルに課せられた義務で派遣されたとのことである。

村に滞在しているハンターは3人で、キャサリンさん以外に赤8つと赤6つの男女のハンターがいるとのことだ。

「ハンターが少ないということは、あまり問題がないということですか？」

「そんなことはありません。・・・皆、ある程度レベルが上がると町に行ってしまうのです。ここでは私が筆頭ハンターとなってますが、対応できない依頼も多く、ギルドではそれらを町のギルドに送ってますが、距離があることと、報酬が少ないとのこと、依頼を受けてくれる人が少ないんです。」

それは、問題だと思うぞ・・・依頼を出してそれが解決されなければ村人は困ることになる。けど・・・ハンター側にしてみれば、必ずしも人道支援が目的ではない。ハンターとして依頼をこなすその報酬で生活しているわけだ。遠くて、報酬が低ければ、ここまで来て依頼を処理するよりも近場で十分稼げる町のギルドに所属していたほうがいいだろう。

「それに、此処の冬は長くて、その間は依頼もすくなくあります。私のようにこの村に家が無いハンターは暮らしていけないのです。」
「その点、私達は大丈夫よ。この村の家を頂いたの。それで、この辺りの状況と買い物のためのお店を教えて貰いに今朝は来たのよ。」

「ちよつと、待つてください。．．この村に誰も住んでいない家等ありませんよ。」

キャサリンさんは驚いて大声を上げた。

「1軒だけあつたのよ。誰も知らない秘密の場所にね。．．所で、もし暇だつたらお店を案内してくれない？ 帰りに私達の家を案内するわ。」

「何を買うの？」

「お布団3組と、厚手のカーペット、食器類と．．それに斧が欲しいの。」

「難しい注文ね。この村のお店は雑貨屋さんだけだし．．でも無ければ、町に注文することになるわ。それだと、少し時間がかかるかもね。」

そう言つて、キャサリンさんが立ち上がる。俺達も席を立つて雑貨屋に出かけた。

雑貨屋は俺達の家に戻る途中にあつた。マケトマムの村よりも大きな店構えだ。他に店が無いため扱う商品も多くなつてしまつたのだらう。

「今日は何と俺達は店に入る。」

「はい！」って元気な声が奥から聞えて、ミアちゃんよりちよつと年上の女の子がやつてきた。

早速姉貴が欲しい品物を告げると、女の子は首を振り出した。

「待つてください。順番をお願いします。先ずは、お布団とカーペットですけど．．町に注文しなければなりません。そうですね、1週間程掛かると思いますよ。食器は此方にあります。．．それと

「なんでしたっけ？」

「鉈か斧が欲しいんだけど・・・」

「それは、あちらになります。」

「食品類はないのかな？」

「小麦粉と塩はあります。野菜類は1の付く日に村人の市場が開かれますから、そこで購入なされてはどうでしょうか」

「ということで、布団とカーペットを町に依頼して、10日後に取りに来ることになった。食器類と鉈等は新たに背負い籠を購入しその中に入れて俺が背負う。」

食器類の代金と布団の前金を払い終わると、約束通りキャサリンさんを家に招待する。

通りを歩いて林のそばを通り石像の口に鍵を入れる。林が左右に分かれて石畳の道が現れたのを見てキャサリンさんは吃驚していた。曲がった道を進んで石造りの別荘に案内する。ドアを開けて中に招きいれると、早速ミーアちゃんがお茶の準備を始めた。

「素敵な家ですね。私の家はこの先にあるんですけど、此処にこんな家があるなんて思ってもみませんでした。」

「庭に出るともつと驚くわよ。後で見るといいわ。・・・ところで、ギルドで依頼がたくさんあるようなことを言っていたけど・・・私達も直ぐに活動したほうがいいのかしら？」

テーブルに4人で座りながら姉貴はこれからのことを話しました。「出来れば、明日からでもお願いします。それで、厚かましいお願いではあるんですけど・・・私と一緒に依頼を処理する人を1人預けて頂けると助かるんですが・・・」

「キャサリンさんは、どちらかと言えば支援型のハンターなんだよね。」

「はい。他の2人のハンターはレベルに応じた依頼をしていますので問題ありませんが、私1人だとどうしても採取系の依頼に偏ってしまいます。ある程度柔軟に依頼を処理できるチームが2つでき

ると思うのですが・・・」

「期間限定ならいいでしょう。アクト、キャサリンさんと行動しなさい。それと、キャサリンさん。冬前まででいいですよね。」

「十分です。冬はこの村は雪に閉ざされてしまいます。その前に緊急性のあるものから処理したいと思っています。」

「・・・にゃんか、キャサリンさんてギルドの人みたいだね。」
じつと姉貴達の会話を聞いていたミアちゃんが言った。

確かに、ハンターが気にするような話ではない。ハンターは自分にあつた依頼を淡々とこなしていけばいいはずなんだけど・・・

「そうですね。ちよつとギルド側の視点で話してみました。でも、此処は私の故郷なんです。村人は皆顔見知り、そんな村人が困っているなら、やはり力になつてあげたいじゃないですか。・・・それとギルドのカウンターで働いているのは私の妹なんです。色々と困りごとを聞かされてますので、そんな考え方になつてしまったのかもしれないですね。」

キャサリンさんは俯きながら話してくれた。

「でも、それは大事な事だと思いますよ。存分にアクトを使つてください。」

「ありがとうございます。」

キャサリンさんは丁寧に俺達に礼を言つて、この家を後にした。

最も、裏庭からの湖の眺めに、「ウワァー・・・！」と感動してたけど。

「さて、明日からは私とミアちゃん。アクトとキャサリンさんの変則チームで活動するからね。私達はのんびり近場の依頼をこなすことにするけど、アクトはキャサリンさんが選んだ依頼に口出しちゃダメよ。そして、全力でやりなさい。」

テーブルについたとたんに、姉貴に言い聞かされた。

そして、ミアちゃんが食事の支度をしている間に、装備の準備をする。

たぶん、日帰りの依頼が主だろう。シエラカップと携帯燃料、それに予備の食料を少し・念のために、タグ討伐に使った爆裂球をポーチに入れておく。これで、明日の朝に水筒の水を補給すれば準備完了だ。

キャサリンさんのお手伝い

次の朝、朝食を終えて、適当にお弁当包むと、ギルドに出かけることになった。

「やはり、山は少し冷えるよね。こっちに着替えなさい。ミアちゃんもね」

姉貴の出掛けの一言で、俺と姉貴は迷彩パンツに着替える。上着はとりあえずポンチョに丸め込んで、迷彩キャップを被れば準備OKだ。ミアちゃんはインディアガールのスタイルだ。しっかりとバンドナ鉢巻にクルキユルの羽を1本付けている。

「さあ、出かけましょう。」

姉貴の一言で、俺達はギルドに向かって家を出る。

「姉さん達はどんな依頼を受けるの？」

「そうねえ・・・ミアちゃんと協力して出来る依頼がいいな。」

姉貴・・・答えになって無いぞ。

そんな会話をしながらギルドに入ると、キャサリンさんが待っていた。

「今日はよろしくお願ひしますね。」

「こちらこそ、よろしく！」

レベルは同じでも、キャサリンさんのほうが先任だ。ここは、全てをまかせたほうがいいに決まっている。

依頼板を確認する。3人しかハンターがないのに依頼書はいっぱい貼ってある。

姉貴達も探し始めた。時々、図鑑を見ながらミアちゃんと話し合っている。さて、どんな依頼を受けるんだか・・・

「あの・・・この依頼書なんですけど・・・」

1枚の依頼書を依頼板から外してキャサリンさんが持ってきた。

何々・・・フェイズ草15本以上求む。報酬：200L。15本以上については、1本10Lで引取可。・・・

「質問です。フェイズ草って何ですか？採取にあたりどんな危険がありますか？」

「フェイズ草は、風邪の特効薬なんです。冬にこの村では流行しやすいので今の内に確保したいんだと思います。問題は、その薬草がグライトの谷にのみ群生していることなんです。」

「グライトの谷は、カルキュルの営巣地です。・・・クルキュル程大きくはありませんが赤レベルのハンターには危険な相手です。・・・何とかありませんか。」

キャサリンさん・・・そんなお願いモードで俺に頼むのは止めてください・・・でも、姉貴にはキャサリンさんの言うとおりにしなさいって言われてるし・・・

「いいですよ。2人でなら何とかなるでしょう。」

俺達はカウンターに依頼書を持っていく。

カウンターのお姉さんは、依頼書にドデン！ってハンコを押してくれた。これで、依頼成立となる。

「お姉ちゃん頑張つて！」

「任せなさい。今日は、強力な助っ人がいるから！」

ん？・・・キャサリンさんの口調がちよっと変わったぞ・・・そういえばギルドに妹がいるって言ってたな。

姉貴の方を見ると、何か良い依頼を見つけたようだ。ここにこしながらカウンターに近づいてきた。

「結局、今日の依頼は何にしたの？」

「ラツピナ狩りにしたわ。前に経験してるし、ミアちゃんのレベル上げにも丁度良いしね。それに、畑の作物を荒らされて困ってるみたいなの。」

ラツピナといえばシチューだ。宿のおばさんの造ったシチューが頭の中でリフレイン・・・

「アキトの方は？」

「風邪の特効薬採取だ。でも、小型のクルキュルがいるみたいなんだ。」

「油断しない事。そして、躊躇しない事。キャサリンさんもいるんだからね。」

「分かったよ。」

姉貴もカウンターで依頼書にハンコを押して貰って契約成立だ。

4人でギルドを後に、村の通りを歩いてく。

俺達の家を過ぎて少し歩くと、三叉路がある。村を南に下る小道だ。

「じゃあ、私達はこっちに行くから、頑張つてね！」

姉貴とミーアちゃんは俺達に手を振りながら緩やかな坂道を下りていった。

俺達も手を振って姉貴達を見送る。

「ラツピナは罾を使うんですが、ミツキさん達は持ってませんでした。大丈夫なんでしょうか？」

「マケトママではラツピナ狩りの記録を塗り替えてましたよ。大丈夫です。俺達も先を急ぎましょう。」

村の通りをどんどんと西に歩いて行く。

「ここが、私の家です。母と妹の3人暮らしなんですよ。」

キャサリンさんの指差した家は小さなログハウスだった。殆ど村外れに位置している。

そして、村の西の門に到着した。

「キャサリンじゃないか。今日は2人なんだな。トレイル山にグライザムを見たものがあるそうだ。そっちに行くのなら注意しなよ。」

「ありがとうございます。今日はグライトまでですから心配ない

と思います。」

「なら、安心だな。・兄ちゃん。キャサリンを頼んだぞ！」
門番さんにも頼まれてしまった。

とりあえず「任せとけ！」って言ったけど、門番さんは笑ってた。
成り立てのハンターだと思ったらしい。

門を出ると山に向かって緩やかに登る道が続いている。リオン湖の縁を周るように俺達は、山裾の森に入っていた。

2時間程歩き続けて最初の休憩に入る。小道の傍に大岩がポツンとある場所は村人も休憩場所として利用しているみたいで、焚火の跡もある。

家1軒程もある岩の上に登ると、リオン湖とその南側にあるネウサナトラム村が良く見える。俺達の家は見えないかなと探したが、よく分からなかった。

「グライトの谷って、まだ遠いんですか？」

「丁度半分位ですね。この森を抜けて今度は南に尾根を周るようにリオン湖の東に出ると、大きな谷にでます。そこが、昔にグライトさんが見つけた谷、グライトの谷なんです。」

実に簡単な名前の付け方だが、村人がそれで場所を特定できるなら、立派な名前となる。俺もそんな場所を見つければ、アキトの谷って呼ばれることになるんだらうな。・なんて考えながら、先を急ぐことにした。

森を抜けると、ゴツゴツした岩と低い灌木が山の上まで続いている。雪で埋もれる地方だから森は山裾にしかないみたいだ。

キャサリンさんは器用に岩を伝って先を急ぐ、意外と俺より山歩きが慣れてるみたいだ。

山肌に動くものがある。何だろうと思って立止まってみていると、

「サルトムですよ。群れで山肌の岩場に住んでいるんです。サルトムの狩りも依頼にあるのですが、それはアンディ達に任せ手置けば大丈夫です。」

アンディ達とは男女2人組みの赤レベルのハンター達だよな。

「アンディさん達は、ギルドにいませんでしたけど、長期の依頼をしているのですか？」

「そうではないのよ。アンディ達もこの村に家を持っているから、暮らさに困らない程度にしか依頼をこなしてくれないの。」

無理して、ハンター業を行なわなくても暮しに困らないなら、それもありだと思う。ハンターは皆上位レベルを目指すとは限らないし、そんなことを目的としたら命が幾つあっても足りなくなるだろう。

俺達だって、短期にとんでもなくレベルは上がっているけど・・本来の目的は憤ましく暮らす事だ。

そんなことを考えながら歩いていくと、突然に深い谷が見えてきた。

「あれが、グライトの谷です。フェイズ草はあの谷の日当たりの良い斜面に群生してるんです」

そして、谷の入口まで来た。ここから、岩場を伝いながら降りることになるが、フェイズ草ってどんな形なんだ？

キャサリンさんは先行してドンドン下りていく。ロッククライマーより岩場の扱いが上手いんじゃないかな。ホントに後を追いかけるのがやっとな感じなんだ。

「あれがフェイズ草です！」

キャサリンさんが指差したものは・・ネギ??

確かに、ネギは風邪にいいと聞いた事があるけど・・ここまでしてネギを取りに来るのか、この世界では・・だいたいネギなら畑に栽培してるのが普通じゃないのか！

岩場のちよつとした平地に数本のネギが生えている。キャサリンさんは早速、ネギの傍に近づき、ネギの周りをスコップナイフで掘り出した。

どうやら、ネギモドキの球根が目的らしい。ネギには球根がないから、これはネギではない。フェイズ草なのだ。でも生えてるところを見る限りネギだよな。

早速手伝おうとしたら、止められた。

「アキトさんは周囲の警戒をおねがいします。このフェイズ草は傷つけると、その匂いにつられてカルキュルがやってくるが多いんです。カルキュルはこの傾斜面を平地のように歩き回ります。」それは、ヤバイ。早速、近くの岩によじ登ると周囲を警戒する。確か、クルキュルって俺のグルカナイフを跳ね返したんだよな。そんなことをおもいだして、何時でもM29を使用できるように腰のホルスターから銃を取り出して、ベルトの前に差し込んでおく。

キョロキョロと辺りを見回していると、モコモコした奴が近づいてきた。ヒョイと首が持ち上がる。確かに小型のクルキュルだ。1匹だけなのかと周囲をもう一度見てみる。いない。

「キャサリンさん。カルキュルが1匹近づいてますけど・・・」
「ここで、5本取れます。何とかありませんか。」

キャサリンさんは一生懸命土を掘っている。4本目に取り掛かったところみたいだ。

「わかりました。ちよつと大きな音がしますが吃驚して谷に落ちないで下さいね。」

カルキュルはドンドン近づいてくる。ネギが好きなのかな？

そして、キャサリンさんに20m程近づいた時、M29を引抜き慎重に狙いを定める。

「ドゴオン！！」

マグナム弾はカルキュルの胴体を貫通した。「・・・ドオゴオオン・」と発射音が谷に木霊する。

キャサリンさんは吃驚して俺を見上げたが、直ぐに作業を再開した。

岩を下りて射殺したカルキュルを調べてみる。・・・やはりクルキユルと一緒にどう見ても二ワトリなんだよな・・食べられるかもしれないので魔法の袋に入れて腰の大型ポーチに入れといた。

「次に行きましょう!」

キャサリンさんの作業が終わったみたいだ。また、キャサリンさんの先導で谷を下りていく。

そんなことを繰り返していると、だいぶ日が傾いてきた。

「そろそろ、戻りましょう。依頼の数以上手にいれましたから。」

2人で今度は谷を登る。結構急な斜面なんだけど、キャサリンさんはものともしない。

俺の世界だと有名な女流登山家になれる素質十分だ。

森の縁を辿るように山を歩いて最初に登ってきた小道に出る。そこから森をあるいて村に戻ればいい。

「ところで、カルキュルを2匹倒して持ってきてるんですけど・これって、売れるんですか?」

「売れますよ。ギルドにカルキュルの依頼はありませんでしたが、村の肉屋さんが引き取ってくれます。ギルドの途中ですから寄って行きましょう。」

村の西門に着くと、朝いた番人さんと人が代わっている。

「この村は小さいので番人を専門に置けないのです。村人が交代で番をしてるんですよ。」

「俺達も、その内番をすることになるのかな?」

「ハンターは別です。でも何か有れば一斉召集になりますね。」

途中の肉屋に寄ると、カルキュルを引き渡す。1匹は両足を別々に包んでもらった。それでも、残りの肉は50Lで売れたのでちょっと嬉しくなる。

ギルドについてカウンターにフェイズ草の球根を渡すと依頼は終了だ。全部で17個。220Lになる。さっきのカルキュルの代金と合わせると270L。135Lづつ分けて、カルキュルの足も1本づつ分けた。

「カルキュルなんて、ひさしぶりです。」
キャサリンさんが喜んでる。

ボタン！ってギルドの扉が開くと、姉貴とミアちゃんが帰ってきた。

カウンターに行くと、ミアちゃんが袋を出して、ドサドサとラッピナをカウンターに落とす。

カウンターのお姉さんが吃驚してるけど・・・これはミアちゃんのお手柄なんだよな。

「あんなに、沢山ラッピナを取る事が出来るんですか？」

「ミアちゃんがいるからね。気配を消してラッピナに近づき、クロスボで一撃。他の人には出来ないと思うよ。」

どうやら、8匹をギルドに納めるようだ。120Lを貰って姉貴達は喜んでる。

俺達のほうにやってくると、「肉屋さんを教えて！」ってキャサリンさんに聞いている。

姉貴達もラッピナの肉をさばいてほしいみたいだ。

家に帰る途中で肉屋さんに寄ると、2匹渡して、一匹を無償でさばいて貰う。

肉を半分づつに分けて、キャサリンさんにあげると、俺達は家に戻った。

ラッピナシチュウとカルキュルの焼肉はやはり美味しかった。
自制しないとメタボになりそうな気がする。

リッシーは、やっぱりいるみたいだ

キャサリンさんのお手伝いを3日続けて1日休み・そんなことを繰り返す毎日だったが、今日は休みと言う事でゆっくりと朝寝坊を決め込んできると、リビングが騒々しい・何だろうつと思つて、とりあえず起きる事にした。

ゆっくりと階段を下りると、姉貴とミアアちゃんが興奮したように早口でなんか言っている。ドアは開けっ放しだし、どうしたんだろうつ？

「あ！アキト。起きたのね。・・大変なの。居るのよ。リッシーが。・・ねえ、聞いているの？」

聞いてます。でも姉貴の話が突然すぎて良く分かりません・

「ミアアちゃん・何があつたの？」

あたふたしてる姉貴を置いて、ミアアちゃんにたずねることにした。

「朝起きて、顔を洗おうとしたら・・湖の遠くに島が現れたの。」

急いでお姉ちゃんを呼んだら、島の脇から長い首がニョウって・・

あれか？大きな湖によくある怪獣の類なのか・確かにネス湖にはネッシーだし、屈斜路湖にはクッシー・・ここは、リオン湖だから、リッシー？ようやく訳が分かりかけてきた。

俺も見ようと思つて外に出てみたが、そんなものはどこにもいない。

「見間違いだと思つてるでしょう・・でもいたんだからね！」

後から姉貴が叫んでるけど・・ここは異世界。何が出てもおかしくないから、もちろん信じてますよ。

そんな朝の騒動はさておいて、今日は裏庭でのんびりと魚釣りだ。

こんだけ大きな湖だし、何か釣れてもいいはずだ。

俺が釣りを始めると、何時の間にか隣でミアちゃんが観戦している。小さな木桶を持ってるし、なんか期待されているような気がしないでもない・・・

ヒョコヒョコと浮が動き、スイーッと引き込まれる。手首を返すと、グイグイと引きが腕に伝わる。ヨイシヨって一気に釣り上げる・・・マスのような魚だけど・・・何だろう？

続いて、当たりがくる。そして、取り込み・・・こんな感じで数匹釣り上げた。ミアちゃんが大喜びで魚をさばいている。

道具を仕舞って、暖炉にくると香ばしい匂いがする。暖炉の周りに3匹の魚が刺してあった。今日のお昼はこの焼き魚だな・・・

トントンと扉を叩く音がする。

ミアちゃんが扉を開くとそこにはキャサリンさんとギルドのお姉さんがいた。

「今日は。今日はお休みでしたよね。この間のお肉のお礼です。」
そう言ってミアちゃんに小さな籠を渡す。

姉貴は・・・何処にいるんだ？ 急いで姉貴を探す事にする。

「ちよつと、ここで待っていてもらえませんか。姉さん呼んできますので。」

俺は急いで裏庭を目指す。案の定、姉貴はいた。椅子に座って、双眼鏡で湖面を監視している。

「姉さん。キャサリンさん達が来てくれたよ。」

「え！じゃあ、直ぐに行かなきゃ。」

双眼鏡を俺に渡して、タタターって家に飛び込んでいった。

何か、面白い物でもみつけたのかな？俺も、双眼鏡で湖面を見てみたが怪しい物は見つけることが出来なかった。

ちよつと、残念な気持ちで家に入る。

「確かに、この湖には竜神が住むという言い伝えがあります。」

昔は湖で漁をする人もいたんですけど・・・動く島を見たとか、人の胴体程の太さのウナギをみたとか・・・そんな話が広がって、今は漁をする人がいなくなりました。美味しい魚が取れるんですけどね。」
「どうやら、姉貴がリッシーの話を聞いていたようだ。そして、キヤサリンさんの話は姉貴の目撃談を肯定している。となると、やはりリッシーはいることになるのかな。」

人数が増えた分魚を増やしてミアちゃんが焼き上げている。

キヤサリンさんが持ってきてくれたのは、焼いたばかりの黒パンだった。

5人でテーブルに着き俺が釣り上げた魚をおかずに昼食を取る。

キヤサリンさんの妹はシャロンさんって言うそうだ。

「気軽にシャロンで構いませんよ。お姉さんの友人ならなおさらです。」

そんなことを言ってるけど、年長者を呼び捨てには出来ないよな。

もう少したつと、この村の畑の収穫が始まり、その後は冬籠りの準備がはじまるらしい。そして、この村に大勢のハンターがその前に訪れるのだそうだ。

「流石に銀は来ませんが、黒の上位者も結構来られますよ。流石に赤レベルの人は少ないです。」

何のためかというところ、狩猟である。山の動物達が冬籠りのため一番肉付きが良くなる季節だと言うのだ。

大型草食獣をさばくための業者や商人までもが大挙して押し寄せてくるらしい。その時は村に1軒の宿屋では対処できないので、ギルドで村人に斡旋しているのだそうだ。去年キヤサリンさんの家はミケランさんが滞在したらしい。

「もし、空き部屋があれば、提供してもらえませんか。2食付で1人20Lが相場なんですけど・・・」

確かに、宿は足りないだろう・・・でも、せっかく剣姫に貰った家

だし・・・

「条件があります。赤レベルであること。でも、グレイさんや、カンザスさんなら問題ないです。・・・それと、提供できる部屋は1つになりますけど・・・」

「ありがとうございます。去年は、それでも足りなくて農家の納屋なんて人もいたんですよ。」

この日、とんでもないことが判明した。お風呂である。そう・・・お風呂のお湯をどうやって手に入れるか。ずっと考えてたけど分からなかった。

「お風呂のお湯は水魔法でお湯を入れるんですよ。ここもそうだと思いますが、排水はあっても水を入れるものはないはずですよ。お湯を出す魔法【フーター】で必要なだけお湯を入れるんです。」

俺達はどうしてもお風呂に入りたくて、風呂桶に水を張って焼けた石を次々に投入してお湯にしたんだぞ！・・・何で誰も教えてくれなかった！

「あいにく、私達は水魔法を知らないんです。そんな時はどうするんですか？」

「ギルドに契約すればいいのよ。一月で20L・・・それで毎日お風呂に入れるわ。でも、移動神官に会うことがあれば直ぐに覚えたほうがいいわよ。ついでに、【クリーネ】も覚えると、衣服を清浄に出来るわ。」

キヤサリンさんが帰った後、俺達は村の雑貨屋に足を運んだ。

「今日は。」

俺達の声で、奥から若い女の子が出てきた。

「ああ・・・届いてますよ。布団が3組にカーペットの大型と毛深いもの・・・でしたね。ちよっとお待ちください。」

女の子が、ウンコラシヨって運んできたものは、満足のいくものだった。早速運ぶことになったが・・・布団とカーペットで2回に分

けて運ぶことになった。しかも一輪車でだ。

まずは布団を運び、次にカーペットを運ぶ。そして、お店にあった、いかにも手作り感の漂ったクッションを5つ新たに購入した。

布団はロフトに運び上げ、後は姉貴に任せる。俺は、テーブルと椅子を退かして大きいほうのカーペットを敷く。次にテーブルと椅子をやや扉方向に移動して暖炉の前を大きく開ける。此処にフワフワカーペットを敷いて、適当にクッションを置いた。これで、暖炉の前に寝転べるぞ。

姉貴の様子を見にロフトに上がると、ミアちゃんと布団を並べていた。マットレスは無いけど、板の間に寝るよりは遥かにマシだ。

その日は、夕食後に直ぐ布団にもぐりこみ、3人とも直ぐに眠りについた。

次の日の朝。朝食前に裏庭に3人で出かけてリッシーを探したが見つからなかった。

ギルドに行くと、大量の薬草の注文が入っている。強壮薬のジギタ、傷薬のサフロン、毒消しのデルトン。しかも、量に制限が無く、できるだけ沢山っていうものだ。

先にギルドで待っていたキャサリンさんに聞いてみた。

「あれは、もう少して始まる狩猟に備えているんです。無理な狩りを行なつて毎年亡くなる人もいますよ。亡くならないまでも大怪我をする人達は大勢いるんです。」

なるほど、冬越しの資金を稼ぐために無理をするものが大勢いるらしい。そこまですなくとも森に仮小屋を作って冬を越せばいいのにと思っているのは、俺だけだろうか・・

とにかく、この依頼を何とかしなくてはならないようだ。

そんなわけで、今回はまとまって薬草を探す事になった。4人で

交替しながら周りを警戒すれば安全に採取できると考えたのだ。

「じゃあ、出かけるよ！」

姉貴の声で俺達はギルドを出たけど・・・さて、何処に行くの？

村の通りを歩き、三叉路の所に来た。

「南の畑や草原あたりの薬草は村人の任せましょう。私達は森近く斜面を探そうと思うんですけど・・・」

「今日は、キャサリンさんにお任せします。」

キャサリンさんと姉貴の短い会話で、俺達は西の門を出て小道を山の方に進んでいく。

西の門から歩く事1時間余り、森の姿が良く見える距離に近づくと、今度は小道を抜けて森の外れを東に周り込んでいく。すると草原の所々に岩がポツンポツンと点在している場所に出た。此処からはずっと湖の辺まで日当たりのいい斜面が広がっている。

「ここが、私の通う薬草の宝庫なんです。じゃあ、皆さん頑張って採取お願いします。」

「最初の見張りはミアちゃんお願い。次はアキトだからね。」
ミアちゃんが岩の上にスルスルって登ると周りを見張り始めた。俺達はミアちゃんのいる岩を中心に薬草の採取を始める。

しばらく俺達があちこつと移動しながら薬草採取をしていると、「ああ！！」ってみーあちゃんが叫んだ。

驚いて、直ぐにミアちゃんの立っている岩によじ登る。そしてミアちゃんの指差した方向を見ると、そこは湖だった。

鏡のように周辺の山々と青い空を写した湖面をゆっくりと島が動いている・・・

なるほど・・・リッシーがこの湖にはいるんだな。って不思議な光景を肯定している自分に気がついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7642y/>

ユグドラシルの樹の下で

2011年12月31日02時22分発行